

私的日本古代史考

～建国の真相はいかにあったのか?!～
(試作版)

堂 本 彰 夫

2020 年 3 月

目 次

序

1. 倭国（→日本国）の源流～日本人のルーツはいかに？～
 - （1）「縄文」「弥生」の二重構造論（二重構造モデル）
 - （2）三つの？渡来ルートと混住・混血の進行
 - （3）やがて、「渡来系弥生人」が「大きな変動？（大乱）」をもたらした?!
～三つの渡来系倭人による「倭国→日本国」の創出?!～
2. 大まかな建国の流れ?!～何（誰）かの作為のために掴めない真実がある!～
 - （1）「倭国大乱」から始まった? 「建国」の動き
 - （2）（「記紀」が示す）建国の構図
 - （3）何が、どのように問題なのか～何（誰）かの作為が絶対にある?!
3. 真相解明に向けて共通認識されるべきこと①～それは必ず次のステップ（ゴール?）につながる?!～
 - （1）「倭国」と「倭種」の違い及び関係
 - （2）「記紀」における「神武東征」のモチーフ
 - （3）「吉備」と「出雲」の関係・役割
 - （4）「（九州）倭国」と「（近畿大和）倭国→日本国」の関係
 - （5）「応神」「継体」、そして「欽明」の関係
 - （6）「天智」と「天武」の関係
 - （7）『古事記』と『日本書紀』の関係
 - （8）「持統・藤原体制」が目指したもの
4. 真相解明に向けて共通認識されるべきこと②～重要氏族?から見た古代史の真相?!～
 - （1）初期大和王権の中心?! 「物部氏」
 - （2）「物部氏」から出た?、正統主権者蘇我氏?!だが、そこには、とんだからくりも?!
 - （3）謎（陰?）の氏族「秦氏」! 「蘇我氏」「息長氏」、そして何より「鴨族」との関係が?!
 - （4）もう一つの、謎?の氏族「息長氏」! 彼らは、どこから来て、何をしたのか?!
 - （5）改めて、「初期大和王権」のキーマン（主役?）は賀茂氏（族）?!ただし...?!
 - （6）近畿倭国（日本国）を変えた? 「宗像氏」、そして、「水沼（三瀨・水間）君氏」?!
 - （7）やはり「和邇氏（族）」は押さえておかなければならない?! 『古事記』は

こちら?!

(8) いよいよ本命? 「藤原氏」! 果たしてその正体は?! 百済王族の末裔、それとも…?!

5. 真相解明に向けて共通認識されるべきこと③~最後の難関? にいかに立ち向かえばよいか?!

(1) 「藤原氏」と「蘇我氏」の関係?! 「記紀」では「高天原系」と「根の国系」か?!

(2) 「神武」「崇神」「応神(←神功皇后)」の「立体交差?」から見えてくるもの?!

(3) 改めて、「武内宿禰」とは、誰なのか?! そして、そこに隠されているものは何か?!

(4) 再度、熟考! 「神武」「崇神」「応神」に仮託された、倭国(→日本国)の三層螺旋?!

(5) 「畿内古墳群」の変遷から見た「王権(皇統譜)」の移動?! そこに何があるのか?!

(6) 各種文献・伝承等を繋ぎ合わせた「記紀」の物語(ストーリー)?! ある意味、当然?!

(7) ほぼ見えてきた? 古代史の真相?! それは、4人の史実解明? の向こうに見える?!

(8) 「妄想?」と言われるかもしれないが、一応の結論を描いてみると?!

6. 改めて見えてくる重要な真実?!

(1) 「縄文人」の先住と「弥生人(倭人)」の渡来・混住、そして集権化(クニ→国の誕生)

(2) ある時期からの、北部九州(筑紫倭国)と近畿(大和倭国→日本国)の並立

(3) 筑紫倭国と大和倭国(+豊国倭国→日本国)の一元化

(4) かの「一元化」の過程に、新たな? 「旧伽耶・新羅勢力」が入り込んでいる?!

(5) 「倭の五王」(特に、その「爵号/軍号」)に見る、百済、新羅、伽耶(任那?)との関係?!

7. 参考図及び参考文献

序

私が、「日本古代史」に本格的に興味を持ち始めたのは、30年前、ここ沖縄の地に、琉球大学の教員として赴任してからである。もちろん、西洋史も含めて、中・高校生時代から、いわゆる「歴史」が好きで、広島大学（教育学部）に入学してから、専門（中学校保健体育教員）を放棄して（いろんな思いも重なって）、歴史学（西洋史）への道に挑戦しようとしたことも、何らかの由縁はあるであろう。ただし、その挑戦は、結果的には不発に終わったこともあり、それらは、現在の私の興味・関心事から言えば、ある種の思い出だけであり、強いて言えば、ほんの少しだけの、ほろ苦い青春の郷愁でしかない。

そういう意味で、やはり直接のきっかけは、ここ沖縄の地に来たことにあることは間違いない。なかでも、折角ここ沖縄・琉球に来たのだから、この地に関係することを知ろうと思って（沖縄をより深く？理解しなければいけないと思った？）、たまたまこの地の出身者である外間守善氏の書物を読んだことであろうか？確か、沖縄の「海人（うみんちゅ）」と本土「海人_マ族」のつながりを考証したものだったように思う。特に、大分県の国東半島の付け根の部分？（場所はどこだったか失念しているが！）の海人族及び、その地域との類縁性の指摘だったように記憶している。お叱りを受けなければいけないが、タイトル等は定かではないし、そもそもその現物も、今手許にはない。まったくの、ミステリー？である?!

だが、一方で、当時私の出身県である佐賀県で、例の吉野ヶ里遺跡が発見され、同県としては珍しく？全国的フィーバーが起こっていて、件の邪馬台国・卑弥呼論争に、新たな火種をまき散らしていたことも、単なる偶然ではないであろう。ただし、それまでは、その邪馬台国、あるいは卑弥呼論争それ自体には、ほとんど関心はなかったし、今でも、基本的には、そのスタンスは変わらない。

とは言え、ある意味当然の帰結ではあるが、そうした当時の経験や情報の蓄積が、新たな邪馬台国、あるいは卑弥呼論争への興味・関心にもつながっていたことは事実であり、そこからまた、そもそも我が国の成り立ちや時代時代の諸相が、そうしたものと大いに関係してくることが徐々に分かり出し、特に人々（種族や集団等）の動き、しかもそれは、決して今で言う日本国（日本列島）の範囲だけではなく、中国大陆や朝鮮半島とのつながりや人の動きまでも視野に入れた、まさに「日本古代史」全体の真相を探る必要性の意識（使命感？）に、つながってきたとも言えるであろう。

そんな中、とりわけ、徐々にその世界（理論・仮説構造）に引き込まされていた関裕二氏の数々の著作には、大いなる刺激と驚き、そして、何よりも真相解明への可能性を感じてきた。氏の提起する諸論は、単なる断片ではなく、大

胆過ぎるほどの理論・仮説構造の連続ではあったが、我が国の古代の真相を体系的に捉えようとする姿勢、もちろんその理論・仮説構造自体の信憑性も含めて、私の興味・関心は、うなぎ上りに高まっていったのである。

その後、近年の斎藤忠氏や兼川晋氏らの所論も加わり、いわゆる民間あるいは在野の研究者・著作者の、それこそ大作・力作が、それらの理解や視野をさらに広げ、依然として茫漠としている「日本古代史」の全体像が、私の目の前に、厳然と？ちらつき始めているのではないかというところまで、来ているように思えるのである。

ただし、まだまだ鬱蒼とした古代史の森が、私の視界に完全に収まり始めたということでは、決してない。むしろ、入り込めば入り込むほど（読めば読むほど！）、その広大な茫漠さ、疑問の連鎖は深まっていくのである。ある意味うんざりでもある。だが、一定の感触は、そこにはある?!それが、まさに私の、現在の立脚点でもある。

なお、この他にも、森浩一、古田武彦、安本美典、松本清張、黒岩重吾、石渡信一郎、武光誠、大和岩雄、小林恵子等、各氏の所論も、数え上げれば、それこそ切りがない。研究の対象やテーマ、そして、そのアプローチ法、立脚点、指し示す全体像は、もちろんそれぞれ異なるが、いずれも、新たな視点や歴史像を私に提供していることは間違いない。

特に、森浩一氏の、慎重というより、史学者としての研究・造詣の深さと、そして、何より誠実な論証姿勢には、指摘内容はもちろんであるが、敬意を抱かずにはおられない。2013年に亡くなられたようだが、まことに残念である！

とにかく、以上のように、これから述べていこうとすることは、これまでの、大学教員としての職務の傍らに行ってきた私の読書の蓄積を（決して本務を疎かにしてきたわけではない！本当である！）、より体系的・構造的に吐きだしてみ、一方でまた、まだまだ分からない（納得できない？）部分や、その他の人々の論証（真相究明）を重ね合わせながら、それらの整理・統合を行ってみたい、そして、そうしていけば、少しでも真相解明に向けて前進するのではないかという、私にとっての、新たな「日本古代史」探求のステップとしようとするものである。

もとより、この分野の専門家ではない私であるので、これまでの多くの人々の研究・論証に、ほとんど依存する形とはなるが、そのことに対する鳥澁がましさは不問にさせてもらい、少しでも思いを共有する人々とともに（在野であろうがなかろうが！）、上述のような使命？実現を、少しでも進めていければという一念なのである。「非礼千万、浅学無知等、甚だしいにも程がある！」とのご指摘、ご批判等も受けようが、要は、「本当は、どういうことであったのか！」という一点に、合意とエネルギーが集約されることを期待して、やるし

かないと思う私なのである。

ところで、私が、何故このような暴挙？を、今敢えて行いたいと思うのか。改めて、その理由を、ここで提示しておきたい。それは、他でもない！その最大の理由は、私（達）が知っていた（教えられてきた！）事実（情報）、それ自体が、実は間違っていた、否、正確には偽られていた！ということが、徐々に実感されてきたからである。しかもそれは、かなりの確信をもって、分かってきたということでもある。

具体的には、いわゆる「記紀」のストーリー、特に「神代」（神話）における記述内容は、当時の世界各国における文献資料・情報（遣唐使留学生等が中国で鋭意収集したものや、交流等によって、朝鮮半島で得られた、あるいは持ち込まれたものであろう？）を基に、その全体の様相（骨格自体）は、ほぼ事実を語っている、ないしはそれを反映させているにも拘らず、個々の中身（時代ごとの人物や事績あるいは事件等）が、ある意図の下に、適宜創作あるいは捏造、さらには荒唐無稽なデフォルメ？が施されている？！

そして、それが、結果的には、真実としてはよく分からないようにされてしまっているのではないかということである。特に、「正史」としての『日本書紀』には、そうした痕跡・証拠？が、多々存在しているようなのである。いずれにしても、もしそうであるとしたら、そのある意図とは一体何なのか、そしてまた、それは、個別の、あるいは幾つかのまとまった意図なのか、それとも基本的には、ある特定の（重大な、つまり秘密ないしは隠匿したい！）意図なのかであるが、これらを、いかに解き明かしていけるのかということでもある。

ちなみに、いわゆる邪馬台国の所在地はどこか？私は九州説を採るが（私自身が九州出身者だということは、基本的には無関係である！）、近年、畿内説の猛攻？の前に、その九州説の劣勢が気になるころではある。焦り、苛立ちが目立つというようにも表現されているようだが、それは、いわゆるマスコミ等で、必要以上に引き上げられているからでもある？！

とにかく、もう少し冷静に、しかもその論拠を、論理的・全体構造的に示していく必要があるのではないかということでもある。そして今、私がかかなり感触を得始めているのが、ある意味どちらの説も成り立つのではないかということもある。まさに、ここか、あそこかというような、単純な論断では解決できないような状況が、実際あったのではないか？！

さらには、いわゆる一過的な「東征説・東遷説」ではなく、実は、その双方（九州勢力と畿内勢力）の相克と相互作用が、かなりの時期・期間に亘って続けられたのではないかということも、ひょっとしたら成り立つのではないかということである。いわゆる「魏志倭人伝」、そして『宋書』等が、そのことをどれだけ分かっていたかは知る由もないが（当然、どこかの地がそれであるという

ことでは、あったはずであるから）、その双方（九州勢力と畿内勢力）の相克と相互作用の歴史が、古代史の真相でもあったら、「あっちか、こっちか？」というような泥仕合を演じて、あまり生産的ではないということにもなる?!

そこで、もしそうだったとすると、「九州説か畿内説か」というような、単純な二者択一論では説明できないことは当然であるし、その意味では、これまでの諸論争に、ある意味？ピリオドが打てるかもしれないということにもなる。多くの人々の膨大な情報収集と考察、それらが単に反目し合ったり、無視し合ったりの連続であれば、これほど無駄なことはいないし、そもそも、実に悲しい？徒労の世界を創り上げているということにもなる?!

もうそろそろ、互いの情報共有と真相解明に向けての協働作業を、関係者は真摯に行うべきである！小さな違い（枝葉末節？）のつつき合いを続けるのではなく、大きな違いを出し合い、そこから一つ一つ共有（納得）できる一致点を見つけ、それらを重ね合わせていくべきである！そこには、必ず真相解明への道筋が横たわっているはずである！そんな妄想？を、今秘かに、抱き始めている私でもあるのである！

なお、これについては、これまでの基本構図（九州説と畿内説の単純対決？）において、「どちらかの説でないと説明できない及びどちらにおいても説明できる」ということから導き出される3つの仮設観点から、史実（及びそうと思われるもの）を腑分けして、そのどちらかでしか成り立たないものを構造的に浮かび上がらせ、それらがどういうことを意味するのか、何故そうなるのかというような解釈・説明を、お互いが切磋琢磨して、随時積み重ねていく作業が求められよう。つまり、そこから、両者の関わり（あるかないかも含めて）が、鮮明に浮かび上がってくるのではないかということである。

ただし、この前提には、九州勢力と畿内勢力の往来（逃亡・移民・植民あるいは同盟・攻撃・政権篡奪・交代等）があったということがある。しかも、そのプロセスにおいては、中国大陆（特に江南地方）及び朝鮮半島（特に半島南部、後の弁韓→伽耶、馬韓→百濟、辰韓→新羅）の国・勢力との関わり（侵略、植民、移動、王統の相互乗り入れ、特に百濟王統との関係があったということを含む。）も、当然視野に入れなければならない。果たして、結果はどうなるのであろうか?!

ちなみに、この辺の仮説提供については、繰り返しになるが、関裕二氏の所論、そして最近では、兼川晋氏の研究成果に負うところ、大ではある。

追伸：そうこうしている内に、時代は「令和」に移ってしまった！「平成」「令和」、どちらの年号で出せるのか？一時期、まさに悪戦苦闘の只中にあったが、冷静に捉えれば、史実そのものは変わらない、逃げない！どちらになっても、納得できるものであれば、それでよい。そう思っの、「試作版」作成である。なお、作成年は、冷静に？2020年とした！

1. 倭国（→日本国）の源流～日本人のルーツはいかに？～

(1)「縄文」「弥生」の「二重構造論」（二重構造モデル）

そこで、まずは、そうした「日本古代史」を形成していった人々、つまり「最初の日本人」とは、どのような人々であったのか（もちろんその時は、「日本」とか「日本人」とかいうような名称や位置づけなど、どこにもなかった訳であるが！）、彼らは、どのようにして列島に渡来し、住み着き、交わり、そして、国を作っていたのであろうか。まさに、倭国（→日本国）の源流、すなわち、我々日本人のルーツを確認しておく必要があるであろう。

しかしながら、当然これも、「真実」が判明（確定）しているわけではない。とは言え、これについては、後に述べるように、考古学や分子人類学等の発展・寄与によって、かなりの真相解明がなされているようではある。要は、ここについては、かなり「科学的？」ではあるので、むしろ合意形成はなされ易い?!

ということで、まずは、どのような人々が、いつ、どのように、この日本列島にやってきたのか（もちろん、これは、「新人アフリカ誕生説」を大前提としているが、それについては、ほぼ確実とされている!）。正確な時期や渡来地域等の特定は、なかなか出来にくいにしても、その大方については、考古学や、その隣接科学、とりわけ血液型やDNA鑑定等の分子人類学の貢献によって、かなりの知識体系化がなされているのである。ただし、細かい部分での違いや、そもそもの誤認もあるかもしれない?!

しかし、たとえそうであっても、それらが、ほぼ共有化された知識体系として、根本から覆されるものでない限りは、現時点においては、それらを踏まえた、より真実に近い「日本古代史」の源流に、安心して迫ることが出来る?!したがって、後は、そのための知識・情報、あるいはエネルギーの集約が求められるだけなのである。

さて、日本人の原型は、アジア大陸南部に出現した「（古）モンゴロイド」（例の「蒙古斑」で有名?→縄文人）にあり、その後、弥生時代以降に渡来した「新モンゴロイド」（ツングース系?→弥生人）との混住・混血により、現在の日本人が形成されたとされている。つまり、渡来系弥生人（≒倭人）がやってきて、両者が交わり（遺伝的形質は、「弥生」の方が圧倒的に強いが、文化的には「縄文」が基層となって?!）、現代に続く日本人が形成されたということである。これが、「二重構造論」、あるいは「二重構造モデル」と呼ばれるものである!

だが、実際は、そんなに単純ではなさそうであり、例えば、その中で、北海道や東北と沖縄や九州南部には、いわゆる「縄文人」の系統を色濃く受け継ぐ人たちが主に居住しており（北海道に住むアイヌの人々や南西諸島の人々、とりわけ宮古島?の人々は、より強く（古）モンゴロイドの形質を受け継いでいるともされている!）、他方では、北部九州から近畿地方には、水田稲作等を携えた、い

いわゆる「弥生人」の特徴を色濃く持つ人々が多く住んでいるとされている。ただし、「縄文」と「弥生」の、単純な（一括りにした？）混住・混血、あるいは入れ替わりもなかったということでもある?!

しかるに、これについての最新の研究では、「縄文人」の祖先系統（単一の祖先ではない!）は、2万年以上前に大陸集団から分かれていった。約4万年前、ユーラシア大陸のどこかから縄文人の祖先（新人）がやってきた。1万6千年前には、土器生産が始まり（→定住生活の証拠!）、縄文時代に突入した。ただし、人種的な大きな入れ替えはなかった。ここまでの人々が、「第一層ヤポネシア人」（一つには括れないので、このような総称?とされているそうである!）と呼ばれる。

9千年前、揚子江流域で水田稲作始まる。人口増加→沿岸部の「海の民」が圧迫されて海洋（ヤポネシア）へ。約4千5百年前。→「第二層ヤポネシア人」（ただし、「採集狩猟民」であった）。日本語の祖語を話す。したがって、そこで、言語的には置き換わったのかもしれない?!そして、約3千年前、北部九州へ水田稲作が伝わった。→弥生時代の始まり。→「第三層ヤポネシア人」。

遺伝的には、「第二層ヤポネシア人」と近縁。水田稲作は、700年ほどの間に、東北地方を除く、本州・四国・九州に広まっていき、先住者である「縄文系の人々」（第一層ヤポネシア人と第二層ヤポネシア人の混血子孫）と農耕民である「第三層ヤポネシア人」が混血していった?!ちなみに、「縄文」と「弥生」の遺伝的形質の割合は、約1対4とされる?!

以上は、先の、単純な「二重構造モデル」とは、多少違うものとして、「内なる二重構造モデル」と呼ばれるらしい（斎藤成也：斎藤・関野・片山・武光 他『大論争 日本人の起源』宝島社、2019年11月より）。

ところで、ホモ・サピエンス（新人）は、30万年前頃までにはアフリカで誕生し、遅くとも5万年前頃には、ユーラシア大陸各地に散らばったとされる。わが国の「縄文時代（「新石器/磨製石器時代」）は約1万6千年前に始まり、その前の1万6千年前～3万8千年前までは「後期旧石器（打製石器）時代」と呼ばれている。

なお、旧石器時代は「氷河時代（更新世）」であり、寒冷乾燥下にあった。ただし、氷期（寒冷期）と間氷期（温暖期）が交互にあった。そして、「後期旧石器時代」は、「前半期（3万8千年前～3万年前）」と「後半期」（3万年前～1万6千年前）に分けられるということである。

この中で、現在得られている最古の人骨は、「港川人（約1万8千年前前後）」「白保人（2万7千年前以降?）」であり、彼らは、「後期旧石器時代」人ということである?!しかも、彼らが、いわゆる「縄文人」の祖先であったということとは、基本的にはないらしい?!

ちなみに、「前期旧石器時代」もあったわけであるが、それは、「新人」の進出が4万年前ということらしいので、「旧人（ネアンデルタール人）」（→アジアの旧人：デニソア人 or フローレス人）、あるいは、もっと以前の「ジャワ原人」「北京原人」のような、「原人」であった可能性もあるらしい?!いずれにしても、人類?の生活の痕跡を示す証拠は、無数にあるということではある!

(2) 三つの? 渡来ルートと混住・混血の進行

では、そうした変遷の中で、人々の渡来ルートと混住・混血の進行は、具体的には、どのようであったのか? まずは、明らかなように、我々日本人は（本当は、単純な呼称で呼ばれるものではないが!）、いわゆる「新人（ホモ・サピエンス）」である以上、ある時期に（からといった方が正しいか?）、アフリカ大陸から、幾つかのルートを経由して到達したということは間違いのない（ミトコンドリアDNA（女性系統）やY染色体DNA（男性系統）の遺伝学的系統関係からも!）。

しかるに、最初にアフリカを出た「新人」（6万年前）は、5万年前に南アジア経由で東南アジアに到来し、パプアニューギニアやオーストラリアに移動した?!その後遅れて、5万年前?にアフリカを出発した第2陣?は、同じ南アジア経由で、東南アジア・中国南部と、バイカル湖を中心とする北方アジアに進出した（母子伝達のミトコンドリアDNAで言うと、ハプログループMとN!ハプロタイプとは、同じ形質をもつグループのこと。）。

その中で、最初に列島に渡来したのは、その分枝M7aとN9bとされる（前者は「沖縄、関東、北海道」、後者は「東北日本」に多い!）?!まさにこれが、いわゆる「南方系」と「北方系」ということになるだろうが、前者が「(古)モンゴロイド」、後者が「新モンゴロイド」ということになる?!特筆すべきは、これ（後者）と同じDNA配列をもつグループは、北部九州ばかりではなく、朝鮮半島南部にも多く、「少なくとも北部九州と朝鮮半島南部は同じ地域集団であった?」ということである?!

ただし、これは、あくまでも「女性系統」だけを示すものであり、「男性系統」（Y染色体DNA）は、それとはかなり異なったものでもあるらしい（20のハプログループがあるが、列島にやってきたのは、C、D、N、O、Qの5つだけである!）?!C（C1とC3）は、我が国の人口の10%前後を占め、アイヌでやや多いとされるが、東アジア、オセアニア、シベリア、南北アメリカに分布し、その内のC3は、ユーラシア大陸東部を北上し、シベリアで繁栄し（新モンゴロイド化）、一部は西に、一部は東に向かい、後者は、アメリカ大陸へ渡っていった人達であったとされる（イヌイト／エスキモー、アメリカ・インディアン等）!

なお、C3は、約2万年前に、北海道に「細石刃文化」をもたらした人達でもある（アイヌに見られるが、琉球には存在しない!）?!また、C1は、インドネ

シアに多く、東アジアには分布しないそうである（直接黒潮に乗って日本列島に流れ着いた？ごく少数ではあるが、重要なグループ！）?!D（D2）は、縄文人の中心的存在とされ（1万3千年前に分岐し、ユーラシア南部を東に向かい、東南アジアを経由し、華北、モンゴルに至った。その一部が南下し、朝鮮半島経由で、日本列島へ。）、日本人男性の30～40%を占め、しかも、これだけの高密度を示す国・地域は、他にはないとされる！

ちなみに、O（「渡来系弥生人」の祖先？）は、日本人男性の半数を占め（O2bとO3が主で、前者は、朝鮮半島と華北、後者は、華南に多い！）、Nは、新石器時代に流入したが（他より遅い！）、シベリア北西部と北欧に集住（アイヌ、琉球には存在しない！）。Qは、ごく僅かということである！

結論として、「母系では、日本と東アジアは似通っているが、父系では、C、D、Oの三つが9割を占める！」ということが、その特徴であるということである（そこでの「多様性」は、どのように説明されるのであろうか？父系ではそうではない！）?!

すなわち、ミトコンドリアDNA（女性系統）においては、世界では、18の人類集団の「遺伝的近縁関係」があるとされているが、日本人は、そのうちの16種の「母系統集団」があるということであり、男性系統では、ほぼ3つの系統集団しかないということである?!

いずれにしても、ここでの問題は、どういう集団・人々が、いつ、どこから、どのようにして、日本列島に到着し、生活を営んでいたかであるが、もちろん、その遺伝学的系統関係からも、その細かい事実確認が得られるわけではない。とは言え、大まかには、アフリカを出た新人の一群が、中近東を経由して、アジア大陸東部（スンダランド？）に到達し（→モンゴロイド）、一部は南東部に定着し、また一部はバイカル湖周辺まで北上し、そこで寒冷地適応化して（→新モンゴロイド）、そこからまた、その一部が南下してきて、日本列島にも定着してきたということだけは言えそうである。

ただし、その時期、ルート等は、かなり複雑で、しかも、「縄文から弥生へ」は、従来考えられていたものとは違って、狩猟採集（先住縄文人）から稲作農耕（渡来弥生人）へと、単純に、しかも急激に置き換わったものではなく、結果としては、「直線（継続）的」に、しかも「緩やかに」、その時々の人々が、互いに影響を与え合いながら、融合？していったのではないかということである（これを表して、関裕二氏は、「バケツリレー」とされている！）?!

言い換えれば、「新来の」弥生人（≒倭人）が、生産力（稲作）、武力（鉄器・青銅器等）に物を言わせて？、「旧来の」縄文人を、無理矢理？排斥・駆逐していったのではないということであり、そこでは、新旧の生活用品（土器等）、生産物や文化の相互交流・取捨選択が行われ、そのことが、その後の日本人の価

値観や生活様式に、大きな影響を与えているということである！

端的に言えば、「弥生的」なものを適宜取り入れながら、「縄文的」なものが基層となり（語彙も？）、今日の日本（人）が形成されたということである?!なお、この先住の縄文人とは、約1万年に亘って、各地・各様に辿り着いた？幾つかの部族（家族もある？）であり、ある特定の種族集団を指すわけではない！

一方、最近では、いわゆる「ヒトゲノム」の解析からもアプローチがなされており、縄文から弥生を含む、壮大な？日本人の「三段階渡来モデル」（3つの大きな波があるということ！）も示されている?!これについては、先に述べたこととなるが、以下、その概要を紹介すると（括弧書きは、私の加筆！）、

第一段階：約4万4000～4万年前（旧石器時代から縄文時代中期まで）

ユーラシアの様々な地域から、南北のルートを使って渡来（→南方系の縄文人＋北方系の縄文人？）。氷河期には陸続き。メインとなった人達（南方系の縄文人？）は、現在の東ユーラシアに住んでいる人達とは異なる。どこから来たのか？今のところ不明（スンダランド経由？）！1万6千年前、彼らは土器を作り始めた。

第二段階：約4400～3000年前（縄文時代後期と晩期）

列島中央部に、第二波の渡来。ルーツは不明だが、朝鮮半島、遼東半島、山東半島の海の民か、あるいは「園耕民（河の傍で作物を作る人々）」の可能性はある?!（→倭人→安曇族？）

第三段階前半：約3000～1700年前（弥生時代）

朝鮮半島（南部）を中心とした第三波。第二波と遺伝的に近いが、少し異なる。水田稲作技術を持ち込んだ。列島中心部に沿って東に居住域を拡大（→倭人→出雲族？）。東北の人達（北方系の縄文人？）とは混血していない。

第三段階後半：約1700年前～現在（古墳時代以降）

第三波の渡来人と同じ種族（扶余・百済系倭人？）が、継続的にユーラシア大陸から移住してきて、その余波で、第一波の渡来人は、北海道に移住し（→アイヌ人？）、第二波の渡来人（→安曇族、出雲族？）が、東北に居住した?!

ということで、これまで述べてきたこと等を考慮にいれて、その流れを図示したものが、次頁の図1、図2である。まだまだ、正確な人（部族・集団）の動きが描かれてはいないのであるが、こうした流れの中で、我が国（日本）には、「縄文」の魂が脈々と流れているわけでもある?!

ちなみに、その魂とは、換言すれば、自然との調和（畏敬と祭祀）、異なるものとの融和（交流と取捨選択？）ということであるが（ただし、それは「和解」、悪く言えば「妥協」かも？）、例えばそれが、後世になって、聖徳太子（架空？）に、「和を以て尊しとなす！」と言わせたのでもあろうか?!

もちろん、それらは、実際には、ほとんど正当には実現され得ないものであ

ったが（だからこそ？）、その精神（だけ？）は大切にしたいということであり（諍いを避ける？）、それは、「弥生人（文化）」に対する、「縄文人（文化）」の対処の仕方（あり方）を、どこかで？示しているということでもある?!

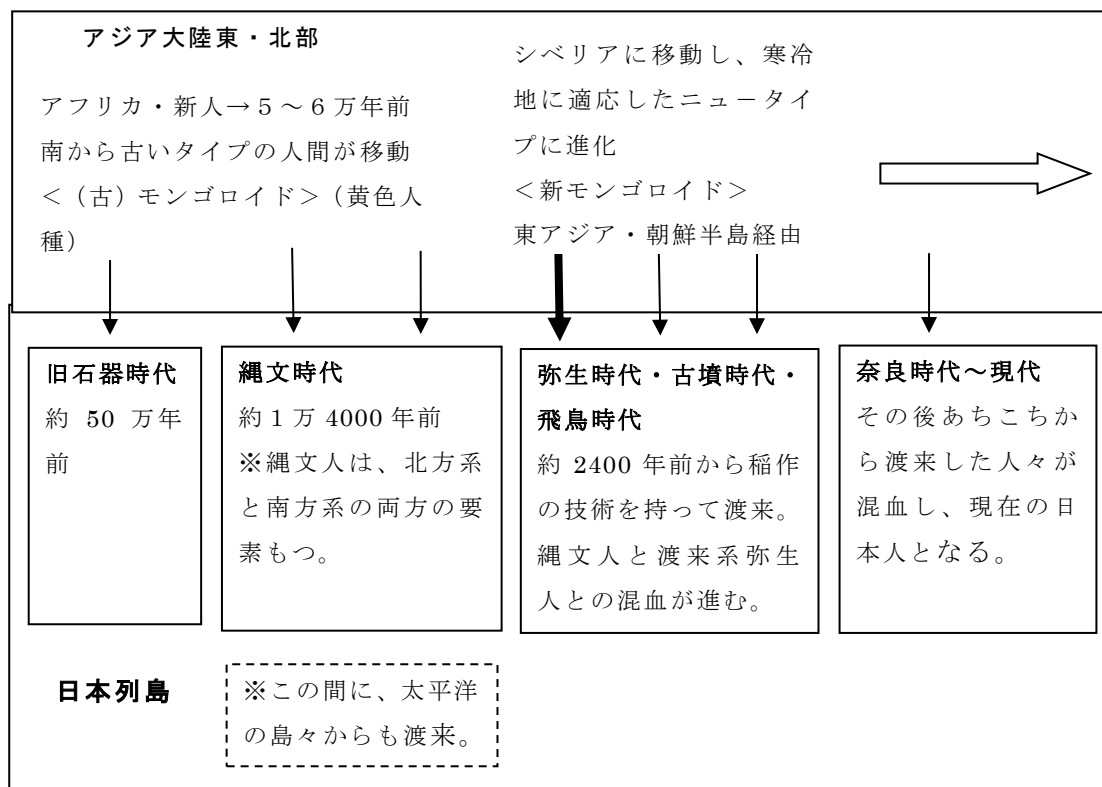


図 1 渡来のプロセスからみた日本人の形成過程

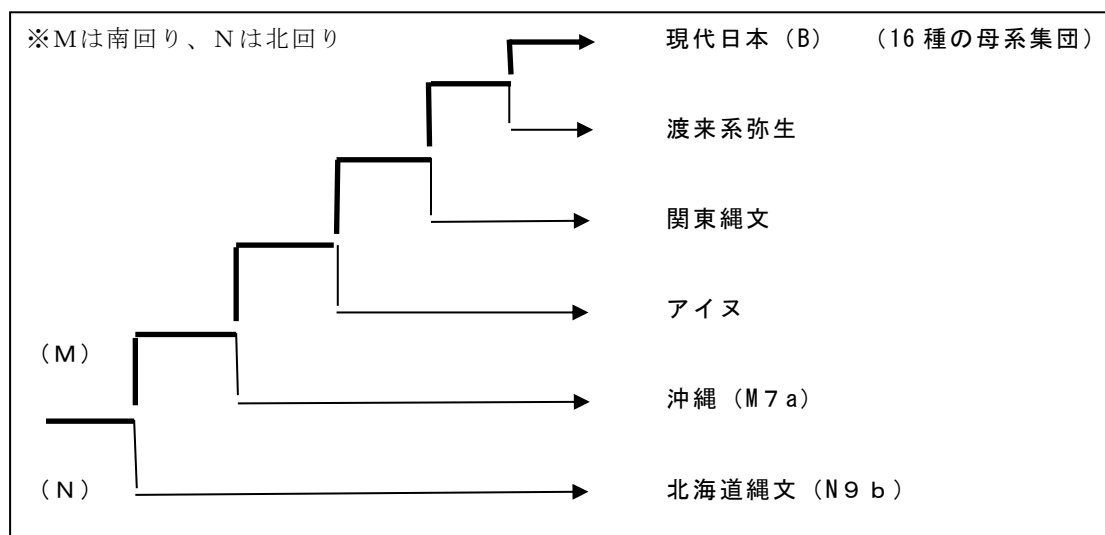


図 2 現代日本人と縄文・弥生人の近縁関係（ミトコンドリア DNA）

接触・交流はするが（せざるを得なかった！）、自分達にとって良いものだけを、慎重に？取捨選択する（自分達のものとして工夫をし、採り入れる！）?! 苦労しながら、やっとの思いで辿り着いた「最果ての地」で、静かに（平和に？）暮らしていきたい！それが、「縄文人」の「思い」であり、「生きる力」「生活の知恵」でもあった?!

参考までに、渡来系形質のひろがり調べたものがある。かなり説得力のあるものもある。具体的には、弥生人・古墳人を統計的に分析し、渡来系形質を縦軸にとり、渡来系形質の起点となる福岡市（旧奴国？）からの距離を横軸にとって、その形質の広がり方をみたものである。結婚などによる普通の形質の広がり方をしたときには、右下がりのカーブを描き、そのカーブが緩やかな場合には、形質の分布範囲が広く、急な場合には狭いということである。

その結果は、（渡来系）弥生人は、西北九州へと向かう海岸ルートは急に落ちていくのに対して、山陰へと向かうルートでは値は落ちない。と言うことは、この時の（渡来系）弥生人、すなわち福岡市周辺の人々と山陰ルートの人々とは、同じ集団（部族→安曇族・出雲族？）である可能性が高いということである?! そこでは、どちらかが、どちらかに移動したということになるが、この場合、時間的な差異が分かれば、真相は判明するであろう！

だが、これからすれば、多分北九州から山陰へと、渡来系弥生人は移動したと考えるのが妥当であろう。そうなれば、九州（奴国→邪馬台国？→筑紫王朝？）と出雲（→豊葦原中つ国・出雲王朝？）は、同族または、ある時期までは同盟国だったのではないかという解釈（真実？）も出てくる?! しかも、そこでは、いわゆる「王権」が移動したこと（皇統の移動）も考えられよう。

おそらくこれは、2世紀後半（180年代？）の「倭国大乱」と関係があり、記紀神話の「アマテラスとスサノオの確執？（誓約^{うけい}等）」「天孫降臨」「出雲の国譲り」等とも関係してくるであろう?!

一方、古墳時代人も、九州を南へと向かうルートは急なカーブを描き、相互の関係はほとんどない。また、豊前の平野部を通して東九州を南下するルートは緩やかなカーブをなしており、これも、相互の関係はあまりないとされる。しかし、弥生人と同様に、東へと向かうルートではカーブをなさず、近畿になると、逆に上昇するという。これは、おそらく、（百済系）倭人の瀬戸内海ルートの確立と河内平野への大量移動等を指しているであろう?!

いずれにしても、これらから、この時期の渡来的形質は、稲作の適地である東側平野部に向かって広がり、山陰や近畿へは普通の広がり方だけでなく、人の移住などを伴って広がった可能性があるということである。ただし、単なる移住（分化・分散）なのか？それとも、ある集団の分裂・離脱等に伴うそれなのか？さらには、王権（皇統）等の移動（篡奪？）も考えられるのではないか（→

「応神」「仁徳」等との関係?!)。

この他にも、渡来的形質とされる顔の高さ、眼窩の高さ、梨状孔（鼻の部分の孔）の細長さを示す示数を軸にとって古墳人をみると、梨状孔は九州内では筑前から離れるほど横広になり、本州では、北部九州と近畿・山陰を細長さの二つのピークとして、中部瀬戸内が谷間のようにになっている。また、関東・東北も同様な値であり、近畿からの流れで理解できるということである。

ところが、顔の高さは、九州内では南九州を除くと、そう大差はない。しかし、本州では梨状孔と同じく、北部九州と近畿・山陰をピークとして、中部瀬戸内が谷間のように低い。逆に、眼窩の高さをみると、九州内では筑前と他の地域に差があり、本州では山陰・近畿が高い値を示すものの、大差はない。また、関東・東北の古墳人は、顔の高さも眼窩も高い値を示しており、北部九州の弥生人・古墳人とほぼ同じであるという。

以上、これらが何を物語っているのかであるが、一方で、渡来系弥生人とよく似た古人骨は、東アジアの各地にも見られるということであり、よく似ているだけで、日本へ渡来した人たちと特定するわけにはいかないとされる。当然のことながら、渡来とともに、「文化の渡来」も伴うからである。

ということで、縄文時代の晩期から弥生時代にかけて、北部九州をはじめとした西日本に文化的影響を与えた地域という、どこであろうか？当然それは、朝鮮半島南部があげられる。しかも、その影響は、稲作農耕、土器、石器、住居に、習俗まで及んでおり、きわめて強いものであった。

そして、この地域には、4世紀以降の例ではあるが、弥生人とよく似た人骨も知られているらしい。文化とあわせて総合的に考えると、弥生系渡来人は朝鮮半島南部から渡ってきたと、考える他ないということのようである。

ただし、そうであったとしても、半島から列島へという、一方向的な渡来の方向性だけで捉えてよいものではない?!まず、時間的な差異が前提となるが（どちらが古いものか!）、往還していたという事実もあるのではないか？あるいはまた、列島から半島へと動いた人、事物もあるのではないか?!そして、これらを検証するものがあるのかどうかである?!

(3) やがて、「渡来系弥生人」が「大きな変動? (大乱)」をもたらした?! ~ 三つの渡来系倭人による「倭国→日本国」の創出?! ~

しかしながら、「縄文人」と「弥生人」の住み分けや緩やかな接触・融合?も、やがて「国くに」同士の衝突や殺戮も行われるようになり（「弥生時代晩期」?）、その後「古墳時代」と呼ばれるような、各地の勢力・氏族達の同族意識の高揚や他勢力への勢威顕示?の状況が顕著となってきた?!

おそらく、そこには、稲作の進展とともに、人口増加や食料増産のための土地争いや、朱（硫化水銀）・銅・鉄等の鉱物資源の採取・加工、それに必要な木

材（船材を含む！）等の伐採・運搬等に絡まる河川・海上輸送ルートの開発・確保等の経済闘争？も激しくなっていた？！それが、広域での争い、同盟・協力のネットワークづくりを促進させ、それこそ倭国全体を巻き込んだ「大きな変動」を惹き起こしていった？！多分？、それが、『魏志（倭人伝）』に示されている「倭国大乱」（2世紀末？）と呼ばれるものであったろう？！

ちなみに、それらの動きを、全体的な視野や利益（有利性）から創り出した勢力・氏族が「鍛冶・製鉄集団」であり、「交易航海民」であった？！そして、彼らのネットワークを、それぞれ支援・拡大させていった（ある意味利用した？）のが、おそらく「伽耶・新羅系の王族？」であり、その後の「百済系の王族？」であったろう？！

ただ、そこには、在来「海人族（江南系？の安曇族・出雲族？）」がいて、彼らを巻き込んだ、複雑な同盟関係・ネットワークが形成された？！その後、「加茂（鴨）族（氏）」「海部族（氏）」、さらには「宗像族（氏）」、「住吉族（→津守氏）」といった、後発？の海人族達（「安曇族」「出雲族」から分岐していった？）が、それぞれの利害関係、ネットワークを遂次（再）構築し、その支配・影響？領域を開拓・拡大していった？！

こうした中で、3世紀後半？三輪山麓（纏向）に、その後の「大和王権」の母体？となる「政治勢力」が結集したことは間違いない！その根拠の一つが、出土土器の状況であるが、東海（49%）、山陰・北陸（17%）、河内（10%）、吉備（7%）、関東（5%）、近江（5%）、西部瀬戸内（3%）、播磨（3%）、紀伊（1%）となっているらしい（全体の3割弱！→残りの7割は地元産？）！

これらからすると、外来系では、「東海」が一番、この動きに連動していることが分かる（→「尾張氏？」の影がちらつく？）？！そして、驚き？は、何と言っても、「東海」と「関東」で半数以上を超すということ、そして、九州系がほとんどない（少しはあるらしい？）ということである（「九州倭国」の一部の人が参画したか？！とは言え、やはり、この時期の「邪馬台国」の東遷自体はない？！）！

これは、おそらく？「(九州) 倭国」（親魏倭王＝邪馬台国連合）に対抗すべく、鉄資源等の確保、新たな開発を目論む新興勢力？が、地の利を生かした「大和纏向」に参集した（その気配・匂いは大いにある？ただし、彼らは、「(九州) 倭国」または九州の別な地域にいて、そこから飛び出していった、例えば「奴国」や「伊都国」、あるいは中・南部九州の勢力であったかもしれない？そして、彼らは、「吉備」を経由した？だから、その勢力・動きが、「神武東征」に擬せられた？）？！

その中心となったのが、「出雲」（「葦原中つ国」）を分断させ？、先に日本海側から近畿（丹波→近江）に乗り込み、「前方後方墳勢力」の中心となっていた「和珥^{わに}に族→多氏？」（「尾張氏」は、本来はその一派？）で、遅れて？瀬戸内側から近畿（河内→大和）に入った「前方後円墳勢力」（「楯突墳丘墓」集団→ニギハヤヒ

→物部氏?)が合流・合体し、まずは三輪王朝(「大物主」政権)を樹立させていたが、その後、その吉備から押し寄せてきた「前方後円墳勢力」が、その主導権を奪った(その象徴が、「箸墓古墳」に葬られたとされる「倭迹迹日百襲姫やまとととびももそひめ命」である?)?!

なお、おそらくその動きと関係している?、北部九州には見られない「高地性集落」の分布は、弥生中期に「中部瀬戸内」と「大阪湾岸」に、弥生後期には「近畿」と「その周辺部」に、ほぼ限定されているということである?!それが、古墳時代前期には、西日本の「広島・鳥取」、北陸の「富山・石川・新潟」に分布するらしい?!

これらの「高地性集落」遺跡の多くは、平地や海を広く展望できる高台にあり、西方からの進入に備えたものとみられている?!多分これが、上記勢力・氏族の移動・衝突の痕跡を示すものであり(順序性も含めて?)、これが、まさに「倭国大乱」の波及状況を示すものでもあろう?!

ということで、改めてこのことは、既に基本的には、多くの人の認識として共有されているのであるが、まずは、この国の建国(「倭国」→「日本国」)が、何(誰)かの意図(作為)はともかく(それについては、後から詳しく展開する!)、大きくは、以下の3つの倭人グループ(集団)の渡来によって為されたであろうことは、これまでの考古学等の成果によっても明らかであろう?!

①江南系倭人(稲作民・海人集団?)

まず、一番早いのが、多分?「江南系倭人」(揚子江下流域)で、黒潮に乗って来た、「南から(南西諸島経由?)」の人達であろう(→黒潮ルート)?!もちろん、直接東シナ海を横断(漂流?)して、九州中南部あるいは北部、そして、周辺の島々に住み始めた人達もいたろう(→直接渡来?)?!彼らは、越人(呉・越→「河姆渡遺跡」等)の一派で、徐々に、その北方の漢民族に追いやられ?、タイ・ビルマ等の山岳地帯に向かったものと、海に出て、日本列島や朝鮮半島周辺に向かったものとに分かれた?!

ただし、この「江南系倭人」は、他の「倭人」と同じように、ある時期シベリアのイルクーツク周辺にまで北上していた「ブリアード人?」(新モンゴロイド)の一派で、揚子江下流域にまで南下していた集団である?!彼らは、雲南発祥の稲作(水田稲作?)を行い、一方で、海上を行き来する「海人集団」でもあった?!そして、彼らは、最後には、北部九州でまとまり(→「奴国」→最初の「倭人国家」?!)、その一派?は、その後日本海回りで、山陰(出雲)にまで到達した(出雲には南方系の要素がある!→例えば「海蛇信仰」)?!

先に見たように、渡来系の形質の特徴からも、それが読み取れるが、おそらく、彼らが、「安曇族」とか「カモ族」、そして「出雲族」とか呼ばれる人達であったろう?!「記紀」では、初代「神武」を、その集団の象徴的な人物とし

て描いているのではないか?!ちなみに、全国各地に作られた「環濠集落」は、おそらく彼らによるものであろう?!

②伽耶・新羅系倭人（交易航海民・鍛冶集団?）

次に渡来したのは（必ずしも順序性があるわけではないが?）、同じ江南系の倭人ではあるが、遼東半島や朝鮮半島にまで北上していた人達で、その地域の実情のため（気候変動、政情不安、異民族の南下?等）、再び南下し、朝鮮半島最南端、そして対馬、壱岐を介して、北部九州等に渡来した集団である?!

彼らの中心は、「伊都国」辺りに上陸し（王墓?「三雲遺跡」等）、その後、遠賀川流域・筑豊、そして吉備を経由して?、近畿・大和に移っていった?!①の集団と区別するために、ここでは、「伽耶・新羅系倭人」と呼んでおきたい。彼らは、基本的には、銅や鉄、朱（硫化水銀）、さらには木材等?を求めて動いた「交易航海民・鍛冶集団」でもあった?!

ちなみに、伽耶と新羅は、異なる国（地域集団?）ではあるが、その前身の弁韓（辰）と辰韓は、種族的には同じと見なされ、後に、伽耶のほとんど?は新羅に糾合され（最終的には、朝鮮半島は「統一新羅」となるが!）、列島に渡来していた人達は、もう一つの「百済」とは違う（そう思われた?）、「新羅」という括り、アイデンティティを有していた?!そのことも含めて、ここでは、彼らを「伽耶・新羅系」とする次第である!

③百済・扶余系倭人（騎馬民族・扶植移住民?）

最後が（時代的にも?）、同じ弥生人（→古墳人）ではあるが、北方騎馬民族系の「百済・扶余系倭人」である!彼らは、朝鮮半島南部（いわゆる「三韓（馬韓・弁韓・辰韓）」と呼ばれた地域）の馬韓（南西部）で、「百済」と呼ばれる国を建国した集団であるが、そこでは、北方騎馬民族系扶余と倭人集団が混合し、その後、高句麗の南下政策等によって、その一派（王族?）が、北九州（筑後地域?）、そして近畿・大和に乗り込んできた?!多分?、彼らが、俗に言う「大和朝廷」の確立を成就した集団であろう?!一応、ここでは、彼らを「騎馬民族・扶植移住民」と呼んでおこう!

ただし、そのことについては、ある意味残念ながら?、「記紀」においては、「仲哀」「神功皇后」「武内宿禰」「応神」、そして「継体」「欽明」等、かなりの創作や捏造が施されている部分でもある?!しかし、一方で、中国史書（『宋書』等）に載る「倭の五王（讃・珍・済・興・武）」の時代は、まさに、この「百済・扶余系倭人」による「倭国→日本国」への移行期でもあった?!

2. 大まかな建国の流れ?!～何（誰）かの作為のために掴めない真実がある!～

(1)「倭国大乱」から始まった?「建国」の動き

ということで、以上の3つの倭人集団の関係（絡み）であるが、改めて、その「大枠（骨格）」について確認しておく、まず、我が列島には、それ以前に、「縄文人」と呼ばれる人達（ただし、方々から来た!そして、様々な種族の人達であった?!）が、基本的には、南の方から移り住んでいたが（一部?北回りもある?!）、その後、「(古) モンゴロイド」から分かれ、北上した極東で寒冷地適応を果たした「新モンゴロイド」と呼ばれる人達が、気候変動等に伴って南下し、日本列島にも押し寄せていた。

その「新モンゴロイド」の人達の一部が「倭人」（中国江南地方からの人々?!ただし、それは、中国側からの呼び名である!）であり、その一部が、西日本や朝鮮半島の南端に住み着いたわけである?!その中で、主として西日本に渡来してきた人々を、あるいはその時代に生きていた人々を、我々は「弥生人」と呼んでいるわけである!

ただし、そうした「縄文人」と「弥生人」は、ある時期完全に入れ替わったわけではなく、むしろ生活及び文化的には融合し合い、その後「倭人国家→倭国」を形成していった?!当初、北部九州、とりわけ博多湾岸の「奴国」や「伊都国」が中心であったが、その後、「倭国大乱」等があり、内陸部の「邪馬台国」を盟主とした「女王国連合」が、その中心となった?!

一方、出雲や近畿にも、倭人集団は進出しており（北部九州の人達と同族?!→海人族/安曇族等）、「女王国連合」と同じ時期に（若干後か?）、別の「倭人国家?」を創り上げていた?!彼らは、日本海沿岸や太平洋沿岸を開拓?して、東海・北陸・関東・東北の地へ、その版図を広げていった（開拓・移住?!）。その後、その出雲や近畿の倭人集団は、大和纏向に祭政都市を築き、その後の大和王権に繋がる一大勢力を形成した。

まさに、これが、その後の「倭国→日本国」という建国の流れを作った動きとなるが、改めて、その「倭国大乱」が、我が国古代史の、最初の画期を作ったことは、おそらく間違いないであろう?!まさに「倭国大乱」が、我が国の建国において大きな鍵を握ったわけであるが、問題は、その大乱が、具体的には、一体どのようなものであったのかということである?!そして、その大乱と「邪馬台国」（卑弥呼・台与）の出現が、どのように関係しているかである?!

これについては、例えば、先に覇権を確立していた「倭（委）奴国」が、後発の?「邪馬台国（連合）」に敗れ、（その一部?が）東方に逃れ（移動・扶植?）、その後、「日本（大和）」を建国した?!その「奴国」の主力が「安曇族」であり、彼らが、全国へ（山陰・出雲・北陸→越→信濃）拡散したということである（『新唐書』→「日本古倭奴也」）?!

したがって、この「倭国大乱」に関わっては、AD57年に「漢委奴国王」の金印を貰った国王（安曇族長？）及び、107年に「倭国王」として遣使した「帥升」（伊都国 or 倭面土国王？）の国に混乱が起き、やがて有明海沿岸部の新興国？「邪馬台国」（卑弥呼）を中心として、倭国が再編されたということか？

この場合、「邪馬台国」は、九州中部（筑後・肥後地域）にできた新しい国と思われるが（これは、57年、107年の倭国の範囲には入っていなかった、新たな国（勢力）ではないか？）、その時期、これが、最終的に倭国を統一したということか？もし、そうだとしたら、何が、統一（共立）の理由（担保）だったのか？

考えられるのは、①倭国内部から、ある勢力が独立して、強くなった。②内部の一部と外部の勢力・国が、同盟 or 協力して権力を掌握した。その場合、外部からの誘い、圧力があって、そうなったか？逆に、そこに支援を求めたかである（→出雲・スサノオ・大国主・宗像との関係？）?!あるいは、④全く新たな勢力・国が、まさに占領・征服して権力を掌握した?!ちなみに、現時点では、②であったと考えている?!

いずれにしても、ここで重要なことは、「邪馬台国（卑弥呼・台与）」は、後の「持統・藤原政権」とっては、直接の先祖ではないということである！何故なら、もしそうであったならば、「記紀」において、そのことを、正しく？喧伝していたはずだからである?!

しかしながら、後からも述べるとは思うが、卑弥呼・台与（『邪馬台国』）の存在については、「魏志倭人伝」に明確に示されていたために、否定や無視はできなかった（隠せなかった!）のであり、逆に、そのために「神功皇后」を虚構し、その存在には、最大限の配慮を示したのである?!したがって、その「神功皇后」の事績とされていることは、「武内宿禰」（住吉大神？）や「仲哀天皇」、そして、他ならぬ「応神天皇」と絡ませた史実の創作？であることは間違いのないということである?!

とにかく、以上のことは、これまでの「記紀」の理解に、かなりの変更をもたらすであろうが、それでは、改めて、何が、どのように問題となるのか？すなわち、何（誰）かの作為のために、掴めない真実があるとすれば、一体、その偽られた真実とは何なのか？そして、それは、どのように偽られているのか？そういうことになるのである?!

もちろん、それらについては、私がそれを指摘するまでもなく、専門の研究者も含めて、過去幾多の人々によって、それこそ150年？以上も前から、連綿として、その真相解明に向けた研究・調査、そして著作が続けられてきている！私は、そうした先人のみなさん達の、それこそ血の滲むような努力は、直接的には分からないし、これもまた当然であるが、それらの内容や成果物についての見識も、ほとんど持ち合わせているわけではない！

だけれども、一つだけ、そうした命題あるいは謎解きに参入させてもらえることができるとしたら、近年、ほぼ定説となってきたと思われる、「記紀」、とりわけ『日本書紀』編纂における、藤原氏（不比等）の介在（陰謀?）、そして、その介在（陰謀?）によってもたらされた、まさに「日本古代史」の真相の捏造、改竄、あるいは発明?が、本当にあったのかどうかということも含めて、そこに示されている史実?の、何が、どのように問題なのかということに対する、多くの研究者・著作者の言質を踏まえた、私なりの考察と、さらなる問題提起ではないかと思っているのである。

厚顔無恥、笑止千万と、無視あるいは嘲笑を受けることになること必定ではあるが、やはりここにきて、一度くらいの挑戦は果たしてみたいという一念なのである。

もちろん、これには、「そもそも、藤原氏（不比等）が、そうした捏造・改竄あるいは発明をしているとしたら、どこが、何故そう言えるのか」という問いと、「もしそうであるとしたら、何故、そのようなことをしたのか」という問いの双方の答えが、多くの人の共通理解とならなければならない。

何故なら、当然そこに共通理解がなければ、いつまでたっても、自家の論証や、それとは直接的には結びつかない、単なる歴史事象の「ピースづくり（ごっこ?）」に終始してしまうからである。ただし、そのこと自体がまったく無意味であるということ、を、吹聴しているわけではない。要は、上の譬えからすれば、共通のパズルの枠組み、少なくとも、その外枠を確定することが必要だということである。

これらのことについては、私が最も依拠している関裕二氏等によって、当時の海外文献も含めて、多種多様な文献・資料を用いて、改竄と創作を加え、現政権の（編纂当時の）正当性・正統性が描かれたということが、随分と解明されてきているように思われる。本論考は、基本的にその枠組みに依拠しながらも、まだまだ納得できない、あるいは不確かな史実ピース?を、他の部分（著作者）からも引き寄せ、さらなる枠組みの確定に向かおうとするものでもある。

ちなみに、『邪馬台国』と『狗奴国』は、どちらも九州にあった!ということを、ここでは付記しておきたい。これは、「魏志倭人伝」にある「北と南で接する!」という関係から（←「背理法的証明」）、しかも、「狗古智彦→菊池彦?」という名の類縁性（同じ?!）から、菊池秀夫氏が推察・解明されているものであるが、ある意味、見事であるとしか言いようがない?!

方位や名前との関係性だけではないかと、つまり、その間違いの可能性もあるのではないかと、反論される向きもあるかもしれないが、そのこと自体が間違っているという反証がない限り、このことは、真実として扱っていいのではないかと?!

そうならば、まさに「邪馬台国」なるものは、決して近畿大和ではあり得ないのであり、そのことを踏まえた、史実解明に向かうべきだということになるのである（例えば「卑弥呼」や「台与」の所在！）。ただし、別の勢力が、そこ（近畿大和）にいたことも間違いない！いわゆる、祭政都市「纏向」の存在である！

こうして、大きくは、九州と近畿に、それぞれ倭人国家？が並立していたことになるが、鉄の所有・支配？の問題等で、九州と近畿の抗争が出来し、最終的には、近畿の方が覇権を握った?!だが、その過程において、百済の王族（百済宗主家→扶余・高句麗系であるが、母方は倭人系！）が、まずは九州に入り（倭の五王時代?! →「倭国」）、やがて近畿にも進出し、倭国全体の覇者となった?!

そして、その後、その継承者？となった「藤原氏」が、倭国（倭国）皇統の正嫡？であった「物部氏」や「蘇我氏」を追い落とし、「魏志倭人伝」等に記されていた史実を活用（逆用？）して、自家に都合よく潤色・捏造し、天照大神（当時の「持統天皇」を昇華！）を祖とする「万世一系」の皇統譜を創り上げた?!

なお、一口に九州と言っても、北部・中部・南部があり（大まかではあるが！）、そしてまた、そこと、出雲や吉備（もちろん、播磨や河内も！）、そして、近江や大和あるいは東海・北陸の関係は、それこそ単純なものではなく、そこに、関係の勢力（氏族）の、まさに多岐多彩に入り乱れた、勢力あるいは姻戚関係があったことは言うまでもない?!

とは言え、大きくは、九州と出雲・近畿の関係、そしてまた、そこでの出雲と吉備、さらには近畿（大和・近江・越・東海）の関係、それらをどのように解き明かしていくかが、我が国古代史の中核であろうことは間違いない?!

ついでながら、大和（纏向）を、「魏志倭人伝」の「邪馬台国」とし、「箸墓古墳」を「卑弥呼」の墓とする、いわゆる「邪馬台国畿内説」であるが、そこには、「楼観や城柵（防御施設）がない?!」という（しかし、『魏志』にはある！）！しかも、この地は、突然に現れた、「政治と宗教に特化された人工都市」でもあるらしい（これだけをもってしても、「邪馬台国畿内説」は成立しない?!）！

そこで、「邪馬台国」が、「直接、東遷したのでもない！」「近畿にもない！」とすれば、改めてそれを、どのように受け止めればよいのか?!考えられるのは、二つの、別々な政治勢力の存在である（ただし、それらは、九州勢力の移動や近畿勢力の九州移動によって？、いつの頃からか緊密に結びつくものとなり、ある種の「二朝並立」となった?!→百済の「檐魯制」？これ自体は、例の「倭の五王」の時か？）?!

そして、それが、701年（「大宝律令」制定年）に統一（併呑）され、「（九州）倭国＋（近畿）日本国→（九州＋近畿）日本国」となった?!そして、これらを、「倭国＝日本国」という形で、「記紀」（「九州倭国」の末裔である？持統・藤原政権）は、我が国の歴史とした（創り上げた？）?!そういうことでなかったか?!

ちなみに、縄文と弥生の時代区分は、それなりにあるようであるが（近年は、

弥生時代がかなり遡るようである！→紀元前 10 世紀頃まで？）、こと私の関心事は、「倭国→日本国」の建国史（日本古代史）であるので、いわゆる「倭（人 or 種）」と呼ばれる「弥生人」（そんなに単純には括れないようであるが？）の建国？の歴史、とりわけ、その「黎明期？（2～8 世紀？）」の歴史が、その視野にあることは言うまでもない！

何故、そこなのかということについては、端的に、その部分が、通説とはかなり違う、否、何（誰）かの作為によって量されている（隠されている？）ということにあるが、本論考の直接の目的は、それについて、誰が、何のために、どのように量して（偽って）いるのか？私なりの解明（類推？）に挑戦してみたいということなのである！

繰り返しになるが（かなり？鳥辭がましくもあるが）、自らの祖先、自らの国のルーツが如何にあったのかということは、これからの時代、国が如何にあればよいのかということと同様に、今、そこに生きる人間の一人として、知っておかなければいけないことだと考えるからである！もっと突っ込んで言えば、「分からない」のではなく、「分からなくされている？」ということに、かなりの憤り（情けなさ？）を覚えるとともに、では、一体、真実はどうなっていたのかという、私なりの問題意識があるということである。

要するに、諸般の事情で「分からない」のは（学問的な理由も含めて！）、ある意味当然であり（何せ古い時代のことであり、しかも、それについての、100%明確な文字史料もないわけであるので！）、それはそれで仕方がないのであるが（ただ、それは、徐々に解明されればよいだけのことでもある！）、何（誰）かの意図（作為）で、「分からなくされている？」ということであれば、やはりそれは、そのこと自体が問題だということなのでもある！

しかも、ある意味そこを解決？しなければ、いつまでたっても、史実には届かない？そして、いたずらに（無駄に？）時間や労力を費やしてしまうということでもある（その代表的なものが、「邪馬台国所在地論争（九州説対近畿大和説）」であり、「九州（倭国）王朝対近畿大和（日本国）王朝論争」である！）?!それは、単なる学問研究の問題ではなく、自国の歴史を正しく認識するという時の、言わば出発点とならなければならないものなのである！

しかるに、それを最初に（公的に？）示したものが、まさに「記紀」、とりわけ『日本書紀』（720 年）ということになっているわけであるが、その『日本書紀』、それ自体が、本当に正しく、それまでの我が国の歴史を記しているのかと言えば、答えは、「否」なのである?!

すなわち、彼ら（記紀編纂者達）が、本当によく分からなかったので、史実が不分明ということであれば（もちろん、そういう部分も多々あるであろうが?!）、それはそれでよいのであるが、逆に、意図的（作為的）に、事実を曲げたり、量

したり、あるいは創作？したりしているのであれば、そこを正しく？問わなければならないのである！

(2) (「記紀」が示す) 建国の構図

①「記紀」(主として『日本書紀』)の編纂方針と、そこにおける藤原氏(不比等)の作為

ということで、以上、縄文から弥生にかけての人々の動き(移動・移住→混住・混血)と、その後の倭国(→日本国)建国の流れを、私なりに提示してきたが、改めての問題は、そのような建国の源流、そして、その具体的な建国への歩みを、「記紀」(直接的には『日本書紀』)が、どのように表しているのかである！その大まかな骨子を確認すると、以下のようであろう?!

まず、「神話を創作し、長い歴史を有する国とする！ただし、少なくとも現(編纂当時)政権の発生時期や具体的な状況は、事実に基づくものとはする！」ということである。そこに導入されたのが、いわゆる「讖緯(辛酉革命)説」であるが、そこからはじき出されたのが、「B C 660 年」という数字である！しかも、問われるのは、そもそも、何故それを、「推古天皇」即位年？から起算したのかということである。

推古天皇は架空の存在とも言われるが、彼女を最初の「女帝」とし、その後の皇極・斉明、そして、持統・元明の正当性・正統性を、その虚偽の作為から主張する意図があったのではないか?!すなわち、それを、他でもない「辛酉」年にもってきたのである(たまたま、推古天皇の即位年？が辛酉年であった？あるいは、そのようにした?!ちなみに、天智の即位も、辛酉年 661 年であった?!).

しかし、そもそも現政権(藤原氏)は、どこかに後ろめたさがあった。例えば、その政権(勢力)は、篡奪(乗っ取り)者あるいは傍流であったということである。したがって、できるだけ真実を隠し、ごまかし、偽造しようとしたということでもある。そのための嘘や捏造の部分は神話(神代)の形とし、都合の悪いところ(本当のこと・知られたくないこと等)は量したり、はぐらかしたり、変質させたり、時期等をずらしたりするということである。

具体的には、例えば、先住・先在の出雲勢力や九州倭国(邪馬台国を含む)の存在、そして、それらとの関係である。高天原(神生み・国生み)神話、三貴子誕生、スサノオ放逐、大国主による出雲の国づくり及び国譲り、天孫降臨、海幸山幸物語(日向神話)等が、まさにそれである。初代天皇を神武=始馭天下之天皇(ハツクニシラススメラミコト)としているが、これは、3 世紀前半頃の纏向遺跡／箸墓古墳等(祭政都市)が造られていた頃のことを示唆している?!

しかるに、そこは、どうしてもはずせなかった！まがりなりにも、現政権(皇統)は、そこから由来していることは揺るぎのない事実であったからである。しかも、そのプロセスは、九州から、吉備を経由しての、大和盆地への移動(神

武東征）＝大和盆地への部族結集（天孫族・天神族の渡来）であったということである。ただし、関係集団、経路や所要年数等は、単一のものではない?!まさに、いろんな集団（の話）の寄せ集めだったということである?!

そこで、次に、「神話（→高天原神話）に、関係の氏族・人物等を投影させ、それらの関係あるいは正当性・正統性等を暗示する!」ということであった?!しかも、そこでは、「いわゆる『大和朝廷』の創始者（部族集団）は、九州（←朝鮮半島?）から渡来したとする!」ということであった?!

とは言え、「記紀」は、いわゆる「大和朝廷」の創始者（部族集団）は、九州（←韓半島?）から渡来したとするが、その神武の東征、あるいは、その後の崇神、応神・神功皇后の大和進出<後発?渡来系弥生人（ではあるが、北方騎馬民族系?）の近畿進出>と、神武の前に降臨していたとされる出雲神（大物主）やニギハヤヒとの関わりをどう考えるかということが、実は重要な視点となる。これについては、当時の遺跡・考古物（纏向遺跡）と突き合わせて、追求していくことができるようである。

まず、その一定程度の集結時期、すなわち纏向地域（祭政都市）への部族結集の確立時期（正式な王権の確立?）をもって、大和朝廷（王権）のスタートとした。そこが、現政権（皇統）の直接的なスタートであったということである?!それを、「記紀」は、第10代の「崇神」（御肇国天皇ハツクニシラススメラミコト）の事績（「四道将軍」の派遣等）とした?!

次に、自家あるいは部族関係の推移を、自家及び友好関係にある部族の後裔等に、一定の配慮をしながら、年代や史実を変えたり、入れ替えたり、あるいは外交等の文献等から移植したりしながら、いわゆる「万世一系」の皇統譜を創り上げているということである?!

すなわち、神話の部分は、『日本書紀』が成立した頃の政権の正統性・正当性を、「高天原神話」という形で造作したということであるが、そのモチーフ（ねらい）は、「天武」の後であった「持統」（あるいは、その後の、妹の「元明?」）を、「天照大神」に見立てて、現政権（皇統）の正統性・正当性（「万世一系」）を、この「天照大神」の時代から賦与されているという虚構までも、仮設しているということである?!

ただし、ここが重要であるが、それも含めて、夫の「天武」の系統が続いたように見せかけて、実は、父親の「天智」の系統に切り替わったことを示しているのではないか?さらに、大胆に言えば、この持統女帝の登場によって、全く新たな王朝がスタートしたことを示そうとしているのではないか?それは、示されている「神々の体系」、「天照大神の位置づけ」等に反映されている?!いみじくも、持統天皇の和風諡号の改変、すなわち、「大日本根子広野姫」から「高天原広野姫」への改変は、そのことを如実に示している?!

しかし、それは、一方で、それまでの盟主的存在であった「出雲（大物主→本物の「天照大神」）」勢力（本来の皇統？）の存在を量し、または神話の世界にデフォルメさせている?!本当は、ここが一番の問題があるところであるが、「スサノオ」「大国主」（「大穴持」等の異称あり）、それから大和の「大物主」（出雲神）等の存在と関係づくりが執拗に述べられ（出雲系神話）、本来の王権（皇統）は、出雲系（勢力）にあったのではないかとさえ思われるのである?!

やはり、それは事実であったので、まったくの無視や抹殺はできなかった!だが、そのことをあからさまにすると、自らの正当性・正統性が主張できなくなるので、そのことは全力で回避した。そして、それは、後々の「蘇我氏」や「物部氏」の存在を隠したり、貶めたりすることにつながっていくのである。つまり、蘇我氏や物部氏は、本来の正当な後継者、政権者の後裔であったということでもある?!

このように、「記紀」は、（「神武東征」から始まる）大和「纏向」を起点とした建国譚を載せ、その「大和朝廷」の創始者（部族集団）は、九州（韓半島?）から渡来したとするのであるが（→「神武東征」）、それでは、改めて、「神話」という形ではあるが、何故、3世紀の大和「纏向」を起点とした建国譚（記紀では、BC660年とされてはいるが!）を入れたのであろうか?「神武東征」が、それ自体としては創作（虚構）であったことは歴然としているにも拘らずである?!

端的に、それは、我が国（倭国）の建国（→「大和王権」の樹立）を、ある意味美化ないしは神秘化?するためのものであったということであり、その動機（目的）は、いっばしの伝統ある独立国?として、その歴史をより古きものにするための、一つの便法（虚飾）であったということである?!

ただし、それが、まったくの絵空事ではなかったことは、多分間違いないであろう?!それは、各地に色濃く?残る関連史跡・伝承の存在からも類推されることではあるが、とにかく、あれだけの移動経路と物語を、まったくのゼロ（無?）から創作するなんていうことは、たとえ空想の天才がいたとしても、事実上は考えられないからである?!

そこで考えられたのが、史実?としては別々の「近畿・大和東進」、つまり、ある氏族（勢力）の西から東への進出・移住譚であったものを、あのような、一つの「神武東征譚」に創り上げた（膨らませた?）ということか、あるいは、複数の、そうした、ある氏族（勢力）の西から東への進出・移住譚を集めて、これもまた、一つの大きな物語に集約（統合）させたものということである?!

もちろん、それらは、それを敢行した関係氏族（勢力）、例えば「カモ族」等の口伝や書き物から構想（取捨選択）され、書き上げられたものではあろう?!したがって、そのことが、例えば、『古事記』と『日本書紀』における、所要年

数の違いや寄港地（での出来事）の違いをも生むのである?!

とは言え、そのことと、そこに描かれている「東征?」自体の有無、あるいは物語としての一致性とは、まったく次元の違う話となってくる?! ということか言うと、「記紀」の共有認識（意図）としては、大和建国のための「神武東征」を、まさに「事実として、あったもの!」として描こうとしているからである?!

すなわち、西（九州）から東（近畿・大和）へと、自らの先祖達が移動（進出）してきたということ自体は自明のことであり、その記憶（認識）は、まさに彼らの脳裏に、しっかりと刻まれていたということである?! 否、そのこと自体を否定（捏造）することは、まさしく遠い先祖への冒瀆であり、背徳ともなると考えていたということでもある?!

しかし、やはり細かい事実それ自体（核心部分?）は、明らかににはしたくなかった?! 否、そこまでは分からなかった?! 何故なら、自らの、直接の先祖は、随分後からそこに参画? してきた（ある意味乗っ取った?!）人達であり、その建国のプロセスを構築したわけではなかったからである?!

いずれにしても、記紀編纂者達には、そこでの多少の異同は、ある意味どうでもよかったのであり（直接の関係氏族・勢力にとっては、譲れないところもあるにはあったであろうが?!）、とにかく自らの遠祖達が、九州から近畿・大和に進出・移動していたという事実? を記せば、それでよかったのである（広い意味では、自らを、彼らの後裔であると位置づけていたということである?）?!

とにかく、「記紀」は、このように、「万世一系の天皇中心国家である」としたのであるが、それは、現在の政権を正統・正当化するものであったことは言うまでもない。すなわち、倭国と日本国の関係や各関係氏族（韓半島・渡来人を含む）の相克を可能な限りぼかし、本来の皇統筋? である蘇我氏・物部氏・尾張氏等を抹殺したということである。

すなわち、その中に、邪馬台国（卑弥呼・壺与）や伽耶系の崇神勢力、そして、百済系の応神勢力? 以降を組み立て、さらには、筑紫倭国と豊国倭国、さらには天智系（温祚系余氏：済・興・武→磐井）と天武系（沸流・仇台系余（牟）氏：昆支・軍君→継体）を組み込んでいったということである?!

②ここから分かること!

そこで、改めて、「ここから分かること!」を整理してみると、まずは、「我が国の建国（倭国→日本国）は、外来の倭人集団（ここでは、最も広い意味であるが!）によってなされた!」ということである! その中心は、いわゆる「（渡来系）弥生人」と呼ばれる人達であったが、その大きな勢力は、朝鮮半島南東部の「伽耶・新羅」系の倭人（これが、「崇神」系統とされた?!）と、その後入り込んで来た「扶余・高句麗・百済」系の倭人（これが、「応神」系統とされた?!）

であった！ただし、それ以前に入植？していたのは、同じ倭人ではあったが、中国江南地方の「呉・越」からの人々であった（これが、「神武」系統とされた?!）！

次が、記紀神話は、「3世紀頃の状況を示すものであり、その後の関係氏族の働きや関連を示すものであった！」ということである！その大きなからくり？が、上山春平氏が解明？した「神々の体系」であり、その体系に嵌め込まれた、「神武」「崇神」「神功皇后」「応神」という、「神」の名を冠した人物群の創出である?!

それらは、記紀編纂者（藤原政権）が、自らの正統性・正当性を虚構するために創り上げた、関係氏族・勢力の先祖物語であるが、その大枠自体は事実であった?!例えば、出雲が先にあり、大和が、それに乗った！皇祖？神武が南九州から来た、というようなことである！ただし、その基点となるべき人物は、「応神」に仮構された百済王族（「兄王」・勝？または倭の五王の「讃」？）であり、その最初の拠点、九州倭国（「倭（大倭）^{たい}国」）であった?!

最期が、通常、「記紀」、とりわけ『日本書紀』は、いわゆる「天武天皇」が詔勅し、まさに天武、そして持続？のために編纂されたということになっているが、実は、まったくそうではないということである?!すなわち、それは、「藤原・持続体制の正当・正統化」ということである！それが指し示す史実？、そしてその後の展開をみれば、火を見るよりも明らかである（まさに、ある種のトリックにはまってしまっている?!）！

例えば、藤原（不比等？）を匂わす？、天照大神を、背後から（事実上？）操る「高皇産霊神（←高木神）or 思兼命」。いわゆる「天孫降臨」の構図→息子ではなく、孫を降臨させる！ということである（持続 or 元明と文武 or 聖武？）！

以上は、私の、かなり大胆な仮説（妄想？）ではあるが、ここでは、他人の考察（多くの人が言及している？）からの援用とはなるが、その物語の可能性と、その素材？となった史実？として、二つの「東征譚」のことを、少し紹介しておきたい（→「鴨着く島」：kamodoku.dee.cc）。ただし、その二つの東征譚の細かい史実？については、まだまだ明確には分かっていない?!

まず、その一つが、『古事記』記載の日向出航（2世紀半ば。倭国大乱の直前）の物語であり、所要年数16年、古日向（曾於）投馬国（「倭人伝」記載国）？からの、王・手研耳^{タギシミミ}、すなわち神武の移動（第一次大和東征）である?!ちなみに、これは、南部九州の「タケツヌミ命」（八咫鳥→賀茂・鴨族）の東進のことと思われる?!

もう一つは、『日本書紀』記載の北九州出航（3世紀半ば、260年頃？）の物語であり、所要年数3年余、北部九州・筑紫の「大倭（倭？）国」盟主辰韓王「御真木入彦^{ミマキイリヒコ}→崇神」の移動（第二次大和東征）である?!彼は、殷王朝由来の「箕子」の末裔であるとされているようであるが、247～8年頃？、「辰王」

である彼が、辰韓の地から糸島地方に移動し、旧奴国系の国々と連合して「大倭国」をなしていたが、南の狗奴国の攻撃に手を焼いていた「女王国」を保護国化し、狗奴国の北進を食い止める役割を担っていた?!

しかし、魏が滅び、晋（司馬氏）の建国となり（265年）、それが、まず辰韓の危機となり、王族達は九州倭国へ移動、そして、さらに近畿大和へ移動した、そういうこととされている?!そして、先に入植していた「第一次大和政権」を駆逐したということである（それが、「武埴安彦・吾田姫」の叛乱、そして丹波に逃げた「クガミミノミカサ」の平定譚?）ということである?!

ただし、これについては、かなり後のことでもあり、この「神武東征」の素材となり得るかという疑問はある?!だが、一つの可能性（素材として採用された?）としては、残しておくべきではあろう?!

もう一つ、「応神」の東征もあるが、それは、やはり上記二つの「東征」とは、直接的には繋がらないであろう?!もちろん、時期的な問題もあるが、「記紀」に示されている「東征」の骨格は、いわゆる「大和纏向」の出現期のことであるからである?!強いて言えば、記紀編纂者達が、言わば遠祖達の、二度の東征を追認する形で（もちろん、移動したことは間違いなし!）、その正統性?を投影させたということであろうか?!

なお、念のために、人（勢力）や文化の移動が、すべて、こうした西から東へということではないことは、ここで、改めて確認はしておきたい?!例えば、2世紀末の「倭国大乱」後?の、「手焙型土器（前方後方墳?）勢力」の、一部?西への進攻である（神武の長子「神八井耳」の後裔→多氏の進出があったことは間違いなし!）?!

(3) 何が、どのように問題なのか～何（誰）かの作為が絶対にある?!～

① どこが、何故、そう言えるのか?いくつかの明確な根拠・証拠?!

そこで、ここで、「どこが、何故、そう言えるのか?いくつかの明確な根拠・証拠?！」ということで、それらを整理すると、以下のものであろう?!

- ・ 重要な場面、段階で、藤原氏と関係する人物（神）が、しかも秘かに忍び込まされている!すなわち、高産魂尊、天兒屋命、思兼神、→中臣（藤原）鎌足、そして何より、藤原不比等がそれに投影されている!
- ・ 「伊勢神宮」は、皇祖「天照大神」を祀っているわけだが、持統天皇が行幸した後、明治天皇になるまでは、歴代の天皇が参詣していないという事実があるらしい!→自分達の皇祖ではない?!→あるいはまた、そこに行けない何らかの理由がある?→怨霊、後ろめたさ?
- ・ しかも、（当時の）天皇の菩提寺である「泉涌寺^{せんにゅうじ}」の事実→天智系の天皇しか祀っていない（→天武系が無視されている）!→それは、なぜか?!→天智系しか、正当・正統と認めていない!→改めて、それはどのような系統

(皇統) なのか？

②「神話」「神々の体系」に糊塗（粉飾？）された建国の真相?!

・「天照大神」は、「卑弥呼」or「台与」を意識した（多分？台与！）、後の「持統天皇」or「元明天皇」の虚像である！

次が、『天照大神』は、『卑弥呼』or『台与』を意識とした（多分？台与！）、後の『持統天皇』or『元明天皇』の虚像である」ということである。これは、関裕二氏も含めて、かなり多くの人が指摘していることでもあると思われるが、その一つの証拠？としては、「持統天皇」の和風諡号の改変、すなわち「大日本根子広野姫」→「高天原広野姫」がある！

いずれにしても、九州にあった「邪馬台国」の女王「卑弥呼」or「台与」が、万世一系の皇統譜の祖とされた「天照大神」のモデルであり、しかも、それが、後の「持統天皇 or 元明天皇」の虚像（昇華）であるということになれば、「記紀」が描く古代史（とりわけ神話として！）には、かなりの創作？が施されていると見なさなければならず、そこでの史実解明とともに、何故、「記紀」（藤原政権）が、そのような創作を行ったかの事由が、追究されなければならない！

これは、かなりの人が見過ごしている（誤認している?!）、天武天皇と持統天皇（夫婦ではあるが！）の関係断絶？を暗示しているということでもある！

③「和珥・多氏」「海部・尾張・紀伊氏」、そして「物部・蘇我氏」の滅却?!

最期が、多分？史実としてはそうであったろうが、他の有力な氏族・勢力、例えば、「和珥・多氏」「海部・尾張・紀伊氏」、そして、「物部・蘇我氏」等の存在を隠し、偽り、彼らを、可能な限り滅却しようとしたということである?!それらの氏族・勢力は、いわゆる、その時々の王権を確立していた氏族・勢力（→皇別・神別）であり、持統・藤原政権にとっては、まさに目障りであり、とても「正史」の中で、真実を述べることはできなかったのである?!

というのも、彼らは、まさに最後に到着した「渡来氏族」であり、その政権獲得のプロセスは、あまり正当なものではなかったからである?!とりわけ、「物部氏」や「蘇我氏」に対しては、かなりの悪逆な手段で、その地位を奪取したということである（その最大の罪？が、いわゆる「乙巳の変」と呼ばれる、時の大王？「蘇我入鹿」の弑逆事件である?!）！

3. 真相解明に向けて共通認識されるべきこと～それは必ず新たなステップ（ゴール？）につながる?!～

(1)「倭国」と「倭種」の違い及び関係

①一つの事柄（倭国）が、二か所（以上？）にあることはない！でも、そうなっている?!まずは、そこから始めよう！

ということで、ここからは、これまで述べてきたことの具体ということになるが、まずは、「我が国の建国史（古代史）」を繙く際に、最初に、単純に言えば、「一つの事柄（倭国）が、二か所（以上？）にあることはない！」ということであり、そのことに対する共通理解が必要となるということである（実際には、理解・解釈が、まさにそうなっているのである?!）！

では、そもそも何故、その共通理解が得られないのか?!まずは、その原因の究明、そこから始めなければいけない！これが、今の私の「私的日本古代史考」の原点、つまり出発点となるわけである！

とは言え、私の、その判断（解釈）が、まったくの恣意あるいは妄想であれば、それはそれで、それこそ話にならないものとはなる?!しかしながら、既に、少なくとも何人かの先達・研究者の主張（研究成果）と、以下に示すような視点（事実?）からすれば、かなりの妥当性があるのではないかと思うものでもある！多少、順不同、整理不足ではあるが、それらを挙げると、

①「魏志」における「倭国（女王国）」「倭国大乱（2世紀末）」の記述（渡航ルート・関係諸国の位置関係・地勢等）→この時の「倭国（女王国）」は九州にあったが、「倭国大乱（2世紀末）」自体は、そこを含む、言わば「西日本全体（東海・関東を含む）」の争乱であった！

②「記紀」における「神武東征」のモチーフとその内容（九州・日向からの東遷?）→近畿・大和だけに關わる話ではない！事実?、九州から向かっている！

③奴国・伊都国の古墳（王墓等）の存在→そこは、後の「大和政権」のシンボル「三種の神器」の源郷かもしれない?→いずれにしても、明らかに、ある勢力の移動がそこにはある！

④「日田」（小迫辻原遺跡）の存在（出雲勢力の駐屯?）→ひょっとしたら、「壺与」の時代の「邪馬台国」?→その当時の出雲勢力は、九州にも、近畿大和にも、関わりをもっていた！

⑤貴（木・基肆）国／神籠石・朝鮮式山城／神功皇后・武内宿禰／応神の生誕（不彌国?）／高良大社等の存在→これらは、明らかに「（河内の?）応神王朝」と関わりがある！

⑥遠賀川流域の「物部集団」（大人物「饒速日命」の末裔）の蟠踞→近畿（河内）・大和への進出?→こちらも、双方に関わっている！

⑦磐井の乱（筑紫君磐井の存在）→その戦後の顛末（その子葛子による「（糟屋）屯

倉」だけの譲渡)→『旧唐書』の怪?!→そこには、明らかに「倭国」と「日本国」の双方がある！

⑧白村江の戦い(主戦国・筑紫倭国?／敗戦の責任者・筑紫君薩夜馬?)の虚実→筑紫倭国の事柄であるが、その関係者である「中大兄皇子(天智)」は、近畿(近江)に移動していた(遷都)！

⑨(九州)倭国年号の存在と近江京(遷都)・天智の(九州)倭国年号の使用の事実

⑩太宰府(都督府)／遠朝廷^{とおのみかど}→(九州)倭国の首都?→701年までは、少なくとも存在！

以上、他にも多々あるのであるが、ここでは、まずは、「魏志倭人伝」が示す「倭国」と「倭種(人)」の関係読み取りから、「二つの倭国」の存在可能性の解明を始めることとしたいということである。

②最初の手掛かりは、「倭国」と「倭種(倭人)」の関係読み取りにある?!

さて、具体的に何をしたいのかというと、上記①に関わることであるが、「倭国→日本国」という形で推移してきたと考えられる我が国の建国プロセスにおいて、当初、同じ「倭(人)」(と見なされていた人達)ではあるが、「魏志」に示されている「倭国=「親魏倭王」の統率する?国」は、その内の一部?であり、その国以外にも、まさに「倭人(種)」がいたということである！

それは、「魏志」の中の、「不彌国の東の海を渡れば、そこにはまた『倭種』がいる！」ということでもあるが(ちなみに、このことからだけでも、「邪馬台国」が九州内にあったことは明らかなのであるが?!)、要は、倭種(人)の国は、九州(「邪馬台国連合」?)以外にも、多々(少なくとも一つ以上は?)あったということである?!

しかも、そのどちらかに「邪馬台国」があったことは間違いないであろうが(もちろん、その用字や読み自体の適否は分からないが?)、その「倭種(人)」の国が、それ以降、紆余曲折を経ながらも、多分? 701年に(おそらく真実?)、近畿大和に、正式な「倭国→日本国」を樹立した(名乗った!)ことは事実であろう?!

そうなれば、少なくとも二つの国が、(時を経て)自らを「倭国」と名乗る条件・関係(伝統→王統?)を備えていたことは、大いにあり得るし、そこにあった二つ?の倭国(人・種)の関係を、件の邪馬台国時代にまで遡って捉えることは、ごく自然であり、その関係が、単に「あっちか?こっちか?」というような二者択一の関係ではなかったというようなことも、かなりの信憑性をもって捉えられるのではないかということである?!

蛇足ながら、当時の「魏(→晋)」は、半島最南端部(「狗邪韓国」と北部九州の倭人諸国を併せて、(当時の)「倭国」(30余国の連合国家?)と認識していたと

いうことである！そして、その盟主国を、「邪馬台国」、もしくは「女王国」と受け止めていたということである（あるいは、その「倭国」全体を「女王国」と呼んだ？）！

だが、いずれにしても、女王卑弥呼・台与の後（3世紀末）、その「邪馬台国（女王国？）」、あるいは「倭国」（「邪馬台国連合」）それ自体が、どのように推移していったのか？少なくとも、文献史料によっては、まったくその消息、手掛かりが掴めないのである?!つまり、その後の「空白の4世紀」、そして「謎の5世紀」とも呼ばれる時代に、その「倭国」、そして、それ以外の「倭種（人）」の国?の動きが、まったく分からないのである！

もちろん、その時々、言わば個別の事象については、発掘物や、特定の関係史料等によって、それなりの解釈、史実解明は得られるのであるが（古墳の発生や、その年代や形、そこにおける出土品の状況等）、まさしく全体を通した、倭国（→日本国）の推移や、その実態が定かではないのである?!

しかしながら、部分的、あるいはぼやけてはいる?が、その手掛かりとなる?のが、やはり「記紀」の記述である?!何故なら、その記述内容は、まったくの空想や絵空事を創作したものではなく、自らの言い分や正当性・正統性を示しながらではあるが、それなりの?史実を書き記したものであるからである（逆に、そうでなければ、あのような物語は描けない?）！実際、そういうことであつたような事実・根拠も、数多く見出されてきている（例えば、度重なる、出雲地域での重要な考古学的発見→神庭荒神谷遺跡、加茂岩倉遺跡等）！

ただし、「記紀」でも、『古事記』と『日本書紀』では、大筋では同じことを書いているようではあるが、細かいところや、肝心な部分では、それぞれ違う内容を記載しているようであり（その理由は、編纂の目的、編纂者の立場や思惑が異なる?）、ましてや、それぞれが、本当に誠実に?、その知るところ（真実?）を書き記しているのかと言えば、やはりそれは、少し?怪しいのではある！とりわけ、『日本書紀』は、意図的に（強引に?）、そこにある真実?を捻じ曲げているようなものでもある（時の政権「藤原氏」の策謀による?!）！

③しかし、改めて（視点を変えれば?）、その手掛かりとなる?「記紀」の記述ではある?!

ところで、多くの先人、研究者達は、その不十分（不誠実?）な「記紀」の記述と、その他の関係史料等によって、それぞれが、一通り筋の通る解釈・説明を企てられているのであるが、繰り返すように、「倭国」「邪馬台国」等の解釈・説明の違いもあって、なかなか、万人が納得できるものがないのが実情なのである?!

その最大の原因は、最初にも述べたように、まさに「邪馬台国所在地論争」に見られるように、「あっちか?こっちか?」という見方に終始しているところ

ろにあると思っているが(マスコミ等は、暗に?「近畿大和説」を支持しているが?)、一度そのスタンスを崩して、どちらも重要な「倭国(倭人・倭種の国)」の実体であることを受け入れて、その際、どのような関係や状況が見出されるのか、そこに知恵(情報)とエネルギーを注いで欲しいと願うわけである。

翻って、私は、当時の「倭国」「倭種(人)」の実体(全体像?)は、例の「倭国大乱」から見えてくるといふ思いを抱いている!それは、「魏志」が書いている、2世紀末(180年代?)の内乱?のことであるが、当初私は、「魏志」に書いてあるので、私の立場(九州説!)からすると、まさに北部九州内の動乱のことであろうと考えていた!

しかし、例えば、鳥取県の「青谷上寺地遺跡」の戦闘形跡、瀬戸内海沿岸部の「高地性集落」の出現状況、そして、何より、藤井耕一郎氏による、吉備から出た「前方後方墳(手焙型土器)」勢力及び「前方後円墳」勢力の、全国各地の「環濠集落」勢力への攻撃・駆逐の足跡の情報を得るにつけ、この大乱は、まさに西日本全体(一部東海・関東を含む!)での動乱のことではないかと受け止めたのである?!

というのも、他ならぬ「卑弥呼」の出現が、まさにこの「大乱」の後(2世紀末)であり、西暦57年(「漢倭奴国王」)、そして107年(倭面土?国王「帥升」)の中国(「後漢」)への遣使という、当時の「倭国」の実情が(たとえ何らかの事情(事件?)があったとしても、そことつながりはあるかもしれないが)、新たな「邪馬台国」を盟主とする国(「邪馬台国連合」?→倭国)が出現しているという状況にあるものなのであれば、まさにそれは、西日本全体(一部東海・関東を含む!)での動乱の結果なのではないかと考えたのである!

なお、当初130か国あった国が、30余国になったということであれば、それぞれの勢力・部族間の衝突・和合等があったということも、十分に考えられよう?!その決定的な証拠(感触?)は、藤井氏の本にあった、吉野ヶ里遺跡(当時の最大級の環濠集落)の衰亡であり、最終的に、そこには(も)「前方後方墳」が立てられたということである(これは、前方後方墳・手焙型土器勢力が、征服の証しとして、当該地に立てるものであったということである!)?!

事実、吉野ヶ里勢力は、その時期を境にして埋滅(→他地への逃散?)しているという!ただし、その前方後方墳(手焙型土器)勢力の、環濠集落勢力(稲作、銅鐸・巴形銅器所有)への攻撃・駆逐は、吉備から始まり、近畿河内、そして、その後東海・関東及び九州へと分かれていったということである?!

もしも、これらが史実であれば、それは、ある意味大変な発見(指摘)であり、「記紀」に示された、膨大な神話の核の部分の指しているのかもしれない?!私は、そのように思っているのでもある!とにかく、このことと、「魏志」に示されている「倭国」「邪馬台国」の実情と、その直前の「倭国大乱」による、全

国各地の部族・勢力の争いが、一つの連続した出来事であったとするならば、まさしく古代史の出発点においても、「二つの倭国」という、大きな共通認識の枠組みが得られるのではないかということである?!

(2)「記紀」における「神武東征」のモチーフ

①「神武」に託された建国のストーリー?!そこにあったモチーフ(動機)とは?!

次に、改めて、一体何故、邪馬台国大和近畿説の人々は、「邪馬台国(連合)」が、九州ではなく、近畿にあったとするのか?!そしてまた、「神武東征」が、「記紀」が示すように、BC 660年頃のことであったと言うのか??本当に、その時期に、近畿大和に、あつたことが起きるような、部族・勢力間の関係があつたというのであろうか?

しかも、それ以前に降臨していたとされる「饒速日(物部氏の始祖?)」集団、そして、それを迎え入れたという「長脰彦」集団がいたということになるが、そのような人々・集団の痕跡が、その時期(BC 660年以前?→これは、時代的には「弥生初期」あるいは「縄文晩期」?)の、その地にあるのか?少なくとも、考古学的には、まったくそういう事態は考えられない?!しかも、一方で、その時期?出雲神・大物主神も、大和に来て、そこを造成したというではないか?!

改めて、その「神武」に託された建国の時期とその実相を示すと、「応神」のすり替わりとして創出された神武?!、そのモデル(影?!)となった人物の、いわゆる「東征」の出発地、日向、すなわち(少なくとも論理的には?)南九州へと目を向ける必要性を提示する?!

その人物は、「魏志倭人伝」にある、倭国の一つ「投馬国」(後の日向国?)の王族かもしれない?!いずれにしても、そういった類いの人物で、おそらく有力なのが?、「タケツヌミ(ノミコト)」なのではないか(彼は、「八咫鳥」とも呼ばれ、神武の東征に助力し、後に「賀茂族」の頭領となり、近江・丹波・越等との関係も無視できない人物!)?!だとしたら、これまで多くの人を悩ませてきた、ある種永遠の不可思議も、それこそ氷解する?!

とは言え、一方で、近畿・大和から遠く離れた南九州、しかもその幽遠の地(→「高千穂峰」!ただし、不思議と?、その候補地が二つある!)に、何故皇孫(ニギノミコト)が降臨しなければならなかったのか(だが、このこと自体は、「神の降臨」という、特別な舞台仕掛けの要素も加味する必要がある?!)?!同じ創出ならば、そしてまた、「神話」という形であればなおさらのこと?、どこでもよかったわけだし、地理的には申し分のない?(確からしさを感じさせる!)近畿・大和のどこかの霊山?に、その降臨の地を選べばよかったのである?!では、何故、そうしなかったのか?!

要は、「応神」に擬される(すり替えられた!)人物は、ある意味誰でもよかったわけであるが、条件としては、同じく創出した「神功皇后」の摂政期の時

代(つまり、卑弥呼・台与時代?)にあって、それに相当する(モデルとなり得る!)人物でなければならなかった?!言い換えれば、必ずは、そこは押さえておかなければ、たとえ神話としてではあっても、まったくの空想(絵空事)となり、その嘘も、簡単に見破られることになるからである?!それこそ(実在の人物)が、南九州出身の「タケツヌミ(ノミコト)」、その人だったということである?!

ちなみに、京都在の上賀茂・下鴨の両社、あるいは大和葛城周辺に蟠集する「カモ族」(→4大「賀茂神社」の存在!)、そして、「吉備」を始め?として、全国各地に散在する「賀茂」という名の地名は(使用漢字は異なっている)、この人物(部族)の存在の大きさ(偉大さ→本当の皇統譜?!)を感じさせるには十分過ぎる?!

そこで、改めて問題となるのは、その「タケツヌミ(ノミコト)」が、本当に南部九州出身だったかどうかであるが、その、他ならぬ「タケツヌミ(ノミコト)」の出身地であるが、「記紀」とは異なる立場や内容が盛り込まれているとされる『風土記』、その一つである『山城国風土記』(逸文)には、それを実証する?記述があるという?!

それが、「可茂と称うるは、日向の曾の峯に天下りましし神、賀茂建角身命(カモタケツヌミノミコト)、神倭石余比古(カムヤマトイワレヒコ)の御前に立たして、大倭の葛木山の峯に宿りまし、そこより漸くに遷りて、山代の国の岡田の賀茂に至り給い、山代河(木津川)に随いて下りまして、葛野川(桂川)と賀茂河と会うところに至りて、賀茂川を見晴かして言い給う。」である!

すなわち、「日向の曾の峯に天下りましし神」が、まさしくそうであり、「日向」とは、今日の宮崎・鹿児島、しかも「曾」とは、その大隅地方に当たる?!彼が、いつ、何故、そのように移動したのかは分からないが(鉄、丹生等の鉱物資源を求めて?!)、もしそれが真実であれば、この私の閃きは、単なる妄想ではなく、見事に?!、「記紀」の永遠の謎を説明できるものになる?!

ただし、「神武」の東征の出発地は、南部九州ではなく、北部九州(福岡)の日向(ひなた)地方ではないかという説もある?!もちろん、その説も、今のところはありだとは思われるが、その「曾」という記述、そして、一方での「応神」のからくり(すり替え?)と、ここでのタケツヌミの話とを整合させるならば、やはり、その出立地は南部九州であると言えるであろう?!

なお、もしもそうであったとしても、北部九州からの人(王権?)の移動がなかったということではなく(前にも述べたように、それは確かな事実ではある!)、あくまでも「応神」の系譜造作のために創出された、邪馬台国時代の、まさに「神武」に相当する人物が、「応神」のモデル(すり替わり)として選び出され、そのモデルの出身地が、南部九州であったがために、天孫降臨の地も、そこに

措定されたということである?!

だが、もちろん、そのモデルが北部九州出身であっても、系譜の造作上南部九州出身にされても、「記紀」のストーリー自体は、それはそれで、十分成り立つ?!とにかく、その創出された人物こそが、倭国・日本国の創始者でなければいけなかったものであり、その血筋も（これも創出されたものではあるが!）、神（天照大神）の子孫でなければならなかったのである!それが、「神武」という名の尊称であり、「ハツクニシラススメラミコト」の意味なのでもある?!

とは言え、一方で、「神武」と「応神」は同一人物で、二つの時代に分けられて描かれているというような指摘もある（他ならぬ関裕二氏も、この説の提唱者!）!しかしながら、逆にこれは、この私の閃き（妄想?!）からすれば、ある意味当然の帰結にもなる!何故なら、二人は、ある種の虚像（表）と実像（裏）の関係なのだから?!

したがって、このように、「神武」と「応神」の関係を、そうした視点で捉え直すと、思いも寄らない事実が見えてくるのであるが、重要なのは、改めて、ここからである?!どういうことか言うと、そうすることによって、他ならぬ「応神」の血統や位置づけが、神代の昔から保証されることになるということである!それによって、いわゆる「万世一系」の一員にもなれるのである?!

他方で、「神功皇后」摂政期は、まさにそのためにも創られた物語ということにもなるが、それもまた、そこに投影されている人物や時代があるはずである?!それが、本当の「応神」こと、百済王（「兄王」）、ないしは「天日矛」（ツマガアラシト?!）として描かれている人物であり、彼らが活躍した時代なのでもある?!私は、現在、そのように考えている!

②何故、「九州・日向」からの東遷?を、最初にもってきたのか?!

改めて、次に、「記紀」は、何故、「神武」の「九州・日向」からの「東征（東遷?）」を、「人代」の最初にもってきたのかということについてである!それは、ある意味事実であったからであり、また、そうしなければ、想定している史実?全体の辻褄が合わなくなってしまうからでもある?!

ただし、たとえそのことが、ある時期にあったとしても、誰も（当時の編纂者達でさえも?）、BC 660 年の頃のことであったとは思っていない?!だから、一方で、「神武東遷」は創作であり、「神武」も、そして、その後の第 2 代（「綏靖」）から 9 代（「開化」）までは、「欠史八代」（示される史実がない?→存在しなかった?）とされ、実際の天皇は、第 10 代の「崇神」から始まったという、一種の合理化?がなされているわけである?!

しかも、挙句の果てには?、その「崇神」と、初代の「神武」とを同一人物、あるいは同時代人としたり（二人とも、表記は違うが、「ハツクニシラススメラミコト」とされていることもあり?）、さらには、何と?第 15 代の「応神」を、「神武」

と同一人物としたりして（関裕二氏）、辻褄？を合わせようとする人達もいるのである？！

要は、B C 660 年頃とするのは、もちろん嘘？であり、それらの事実？は、3 世紀後半？の、まさに「崇神」の治世の頃とされるのである（尤も、これも、「記紀」の記述からではない！→その時期と見なされる？「纏向遺跡」からの推断による？）？！

しかし、いずれにしても、私は（も？）、「神武」「崇神」、そして「応神」は、それ自体は実在の人物とは考えていないので（だが、当然、モデルや想定された人物はいる！）、時期の齟齬や人物の重なりや引き離しは、ある意味編纂者側の恣意に委ねられているので、あくまでも類推を逞しくする他はないと考えている！

問題は、「魏志」等書かれている客観的事実？を取り込んで（編纂者側は絶対に読んでいる！だから、まったくの嘘はつけない?!）、それらの事実？と可能な限り辻褄を併せようとしている、まさしく「記紀」編纂の「目的」（意図）と「裏事情」を、いかに読み取ることができるのかということである？！

その「目的」（意図）と「裏事情」であるが、これまでも何度も確認したことであるが、まずは、正式な「国史」とするためには、自国が、それ相当の古い（歴史のある！）国であること、そして、現政権が、それに相応しい正統性・正当性を有していること、それを開示（証明？）する必要があった！これは、ある意味当然のことではあるが、一方で、そのことを成就するためには、事実を捏造したり、創作したりする必要があった！

何故なら、その正統性・正当性が、直接はなかったからである（むしろ、やましい？部分があった?!）！だから、「神話」の形で暈したり、史実を捻じ曲げたりする他なかった（そうであれば、空想の中で処理される？）！特に、編纂者（政権）側にとっての触れて欲しくない部分は、極力そうした！だから、結果としては、全体が見えない、そして、ある意味「チグハグなもの」にもなった（たとえ「万世一系」の皇統譜を創ったとしても？）？！

しかしながら、編纂者（現政権）側にしてみれば、それで良かったのであり、しかも、その創作物（物語）を、新たな自らの歴史として後世に残していければ（それが、改めて「真実」となる！→「日本紀講義」）、それはそれで万々歳だったのである！だから、それを否定したり、非難したりする人物・書誌を抹殺したり（いわゆる「焚書坑儒」？）、懐柔したりしたのである（「恩赦」等？）！

③文人・鬼才？「淡海三船」の暗示?!そこに示されている建国のプロセス?!

ところで、「神武」（という名前）を始め、「記紀」に示されている、いわゆる各天皇の漢風諡号（死後の贈り名）は、8 世紀の中頃？、天智天皇の玄孫「淡海三船」の考案によるものとされている！彼が、どういう思い（意図）で、その

ような作為をしたのかは、よく分からないが、ある意味「文人」らしく、歴史を客観的（冷静？）に受け止めていたのかもしれない？！

何故なら、天智系であれば、当時の藤原氏の意向を積極的に汲み取り、彼らの策謀（陰謀？）が露呈するような表記はしなかったはずであるが、逆に、そのことが、ある意味「分かる人には分かるような」配慮（意図）がなされているようにも思えるのである？！

すなわち、個々の名前（諡号）については、多分「漢籍」からの借用・応用ではあろうが、名づけられた諡号には、それぞれの歴史的役割？が、それとなく賦与されており、しかも、重要な役割を果たした人物には（もちろん、結果的にではあるが？）、明確に、そのことの意味を含ませているということである？！

その代表的なもの（証拠？）が、いわゆる「神」の使用であり、しかも、それぞれの「神」が、どのような関係にあるのかを暗示させていることである？！それが、まさに「神武」「崇神」「応神」、そして「神功皇后」である！

多分、最初期の「記紀」には、そのような表記はなかったのであるから、三船が、それぞれの人物の歴史的役割を、あたかも俯瞰していたということでもある？！しかも、彼ら3（4）人は、いずれも初代王？であるが（ある血統の創始者？）、一方では、「神」は崇る王であり、怖い天皇でもある（関裕二氏）？！要は、彼らは、正當に扱われていないということでもあろう（どこかで裏切られた？あるいは、真実が隠蔽されている？→安らかには眠っていない？）？！

それと、一方で、改めて力説しておきたいことは、「推古」（初の「女性天皇」！）である！これだけを見れば、例えば「古を推す」ということで、「過去を考える？」というようなところまでしか、考えは及ばないが、それがもし、初代の「神武」の頃を指すものであれば、さらに、その意味合いは深長となる？！

と言うのも、神武元年が、B C 660 年とされているが、実は、推古の即位は、592 年とされ、問題の 600 年において（もちろん治世中！）、その差は、何と 1260 年！実は、これは、「識緯思想」で言えば「21 節ぼう」、すなわち、1260 年に一度、その年の「辛酉」において革命が起きるとされる年なのである（辛酉革命説）！偶々そうであったとするのが「記紀」であろうが、そんな偶然（都合のいいこと？）があろうはずがない？！いずれにしても、三船は、そのことを「推古」という表記で匂わせたのである？！ちなみに、『古事記』は、この推古期までしか記載していない！

ただし、私は、そうした大事件？は、むしろ「推古」の時代にあったと考えており（もし、そうであれば、ほとんどの人がそう思うであろう？）、それを起点として、「神武」の即位を、1260 年前、すなわち B C 660 年にしたということである（とにかく、編纂者側は、ある程度の昔であれば良かった？！たとえ、神話としてであっても？）？！

では、改めて、「この年」とは、どういう年（状況）であったのか？そう、あの「日出処天子（アメタラシヒコ）」が隋に遣使した、そして、時の煬帝を怒らせたという西暦 600 年ということになる！だが、そのことは、不思議にも「記紀」には載っていないし、もし、その時の倭国（倭国？）が、近畿大和のそれであったならば、その「日出処天子（アメタラシヒコ）」は、実は女帝であったことになり、徳川時代の「大奥」みたいなものの存在の記述が、まことにおかしな（実は、あり得ない？）ものとなり、まったく辻褄が合わないことになるのである（そのため、聖徳太子の天皇代行？論まで、飛び交う始末である！）？！

それはそれで、大変な問題なのではあるが、一方で、こちらは、これまであまり話題（疑問？）にされなかったことであるが、その「推古」の存在自体が、実は怪しいのでもある（もちろん、こちらも何らかのモデルはいる！）？！それは、ひょっとしたら、「持統」と「神武」（もちろん、他の「三つの神」との関係が前提であるが！）、すなわち「皇祖神・天照大神」と「初代天皇・神武」の関係を作り出すために創出された「女帝」（ダミー？）だったのではないかということである？！

すなわち、私の掴んでいる史実？としては（←兼川晋氏）、「推古」は、その即位の真偽も含めて、かなり怪しい存在なのであるが、その時期に、倭国（この場合は「九州倭国」！）が、大きな変動の時期を迎えていたことは確かであり（多分、倭国皇統の一部、すなわち、「上宮王家→蘇我氏」が、九州から大和飛鳥へ移動していた？！）、そして、後の「持統」（女性天皇？）の「天照大神」への昇華の布石として、「記紀」での「推古期」が創作？され、挿入されたということである？！

そして、そのことを、件の「淡海三船」は熟知しており、そのために「推古」という諡号を贈った？！まさに、そういうことである？！

(3)「吉備」と「出雲」の関係・役割

①見逃せない！「吉備」と「出雲」の関係・役割？！彼らを、一つの先行勢力？として見てみると？！

次が、「二つの倭国」における（結果的に結びついているということではあるが？）、「吉備」と「出雲」の存在・役割についてである！もちろん、これまでの両地域（勢力）の存在や役割については、「記紀」においても、それなりの扱いは受けている（「素戔鳴命」の出雲追放・降臨、「八岐大蛇退治」、「大国主命」の国づくり、そして「国譲り」、一方、「吉備津彦」の派遣・鬼退治、その後の「吉備氏の反乱・分裂？」等）？！

確かに、そうたとえば、そうなのであるが、結局は、何故か、双方は、いわゆる「大和政権」の支配・統治下に組み込まれていくような形になっている？！しかし、それらは、あくまでも、記紀編纂時の「大和政権」側から見た視点（事績？）であり、決して両地域（勢力）から見た視点（事績？）ではないのではな

いか?!

ちなみに、「出雲」については、有名な『出雲国風土記』（出雲国造・廣島による?!）が、言わば「その地域独自の視点から見た歴史」を伝えている（「国引き神話等」）。また、「延喜式」（905年、「律令」の施行細則）にあるという「出雲国造神賀詞^{かむよごと}」も、「記紀」にはない？事実を多く載せている?!

とは言え、それらにもまして、例えば「出雲（杵築）大社」や、そこに祀られている「大国主命」に関わる、ある種奇妙な？説話・伝承、そして、他ならぬ、そこを司祭する「出雲国造家^{こくそうけ}→千家・北島家」だけの、今日までの存続（特別扱い?）である（「国造制」は、はるか昔に廃止されているではないか!）?!そこに、何か古い因縁、原因?があることぐらひは、まともに?考えれば、すぐに分かることである?!

さらに、一方で、近年、主として考古学的な成果からではあるが、「実証的」に、双方の地域（勢力）が、記紀神話や伝説を超えて、れっきとした強国?であり、そちらの強国?の方が、むしろ「近畿・大和の諸国?」よりも古く（先行している?）、しかも、そちらから、「近畿大和?」が立ち上がって（移動して?）いくようにも見えるのである（「三輪山麓」の都市・纏向の出現→「出雲神三輪大神・大物主神」の大和造成譚、「箸墓古墳」における、吉備の「楯築墳丘墓」の直接的影響等←「前方後円墳」の築造要素）!

そして、前者の出雲地域からは、「神話の世界」をはるかに飛び越えさせる数々の発見（四隅突出型墳丘墓・西谷古墳群等／神庭荒神谷遺跡／加茂岩倉遺跡等）があり、これまでの近畿・大和中心の歴史では、とても説明が出来ないような状況也大いに迎えている?!

そうなると、それらの発見、両地域（勢力）の歴史的再考は、「記紀」が描く「万世一系の皇統譜」に基づく、そして、近畿大和を中心とする「倭国→日本国」の建国（とされた?）において、「出雲」と「吉備」が大いに関わりを有しているということ（本当は、北部九州、さらには、近江、越、丹波、そして伊勢、尾張もそうなのであるが!）、誠実に?促すものであり、我々は、そうした視点で、我が国の建国の歴史を再構築しなければならないというところまで、実は?来ているのではないかということになる?!

ただし、まずは、それらが、具体的にどのようなもの（関係?）であったのかを、ここでは整理しておく必要がある!

②「高天原」と「葦原中つ国」に昇華?されている「吉備」と「出雲」?!位置関係から、それが分かる?!

さて、「記紀」では、「高天原」とか、「葦原中つ国」とかという国?が登場する!それによると、前者は、天上界にあって（「天上の国」）、「天浮橋」を通して、例の「瓊瓊杵尊」が地上に降りてきた所であり（「天孫降臨」）、後

者は、彼が降臨した地、すなわち「地上の国」ということであるが、構図（物語）としては、後者は、前者によって、予め統治されるべき地であったという、誠に滑稽な（都合のよい？）関係にあったということである?!

それに対応した、「天津神（天神）」と「国津神（地祇）」という言い方もあるが、それらは、どう見ても、前者が、後者の場所へ、一方的に（善意の押し売り？）進出していったということになる?!

尤も、それは、神話の世界の話であるので、我々の眼前にある「天と地」の、ある意味「ファンタジーな関係？」と捉えれば、それこそ他愛もない、可愛いらしい？話と考へてもよいのであるが（天上人が「神」、地上人が「人間」?!）、実は、それが、ある国（地域・勢力）とある国（地域・勢力）の関係を暗示（比喻）？しているものであれば、そうした捉え方は、俄かにおかしく（恐ろしく？）なってくる?!そして、そうであれば、何とも不遜な？物言い、物語ともなってくる?!

要するに、当然ではあるが（物理的には考えられない!）、「高天原」（天津神）が、「葦原中つ国」（国津神）へ、本当は「移動、進攻してきた!」、そして「占領、征服した!」ということである?!

ならば、問題は、その「高天原（降臨→進攻元）」が、一体、どこにあったのかということになる?!通常は、海を渡って来た（いわゆる「弥生人」の渡来の事実が、一方であるので?）、そのことを指した、言わば「柔らかくて、神々しい?」イメージ・捉え方がなされるようであるが（もちろん、「原モチーフ?」は、そこにあるのかもしれない?）、もし、それが、ある特定の国・地域と、また別のそれであれば、様相はまったく違ってくる（→建国の具体的な事実が判明する?）?!

ということで、そこを、朝鮮半島（南部の伽耶地方）と措定される人もいるようであるが（私も、最初、そのように捉えていた!）、それを、「吉備」あるいは「吉備勢力（集団）」、回りまわって（拝借されて?）「持統・藤原体制」とすると、かなりの謎?が解けてくるのではないか?!実は、そのようにも考えられるのである?!

要は、「高天原」とは、政権を有した（征服した?）側の、言わば「観念の世界（勝者の論理?）」であり、そうであれば、「葦原中つ国」とは、必然的に?、そこ（吉備勢力）に滅ぼされた「出雲」だということになる（ただし、狭い限定的な「出雲」ではない!）?!もし、そのように見るならば、「記紀神話」や、そこにおける「神々」の体系や行動は、そうした関係（経緯）を示す、言わば「写し絵」だとも言える?!

政権を有した（征服した?）側は、そうした祖先の偉大な事績を、ある意味「空想的、だが具体的な?」イメージとして、つまり、まったくの絵空事ではない形で残したのである?!とは言え、やはり本当のことは書けなかった（どこ

かでやましいことがあった？知られては困ることがあった？）?!だから、あのような超自然的な降臨話、不自然な降臨地を選んだのでもある（朝鮮半島でもなく、中国山地でもなく、ましてや近畿大和でもない!）?!

ということで、現実の「高天原」、そして「天孫降臨」が、まさに「吉備（「吉備勢力」）→出雲」であったとしたら、例えば、「素戔鳴命」の、「高天原からの出雲への追放」、「八岐大蛇退治」、「大国主命」の国づくり、そして「国譲り」といった「記紀」の物語？が、考古学的にも、そして、何より「地理・物理的」にも、説明（解釈？）可能なものとなってくる?!そう、明らかに吉備と出雲（中心地）は、まさに中国山地を挟んで隣合わせの位置にあり、現に、その双方の関係を伝える遺物や伝承等も、沢山あるのでもある！

とにかく、吉備（高天原）が、何らかの理由で（銅や鉄等の鉱物資源を求めて？）、出雲（葦原中つ国）に進出し、一部は当地に同化したものの、残りの勢力・部族は懐柔や攻撃をしかけ、ついには？、出雲（葦原中つ国）を解体させ？、その王権をも乗っ取った?!そして、その最後の（近畿大和での？）仕上げが、大和纏向を舞台とした、大物主神（勢力）からの政権奪取である?!多分？、それが、第10代の「崇神天皇」の治績とされた（「記紀」的には、もっと古い時期となるが?!）?!

ちなみに、「高天原神話」については、戦前はともかく（すべてが「史実」とされていた?!）、戦後においても、単に「国の始まりを古くて、高貴な？ものにするため」の、まったくの「作り話」であり、文学？作品としては、大いに面白い（価値がある？）ものの、当然史実を伝えるものではない、つまり「非科学的！」であると、一笑に付されてもきた（事実、ある時期までは、そうした解釈が主流であった!）?!

③ 最終的には、「（後の）大和王権→藤原政権」に刈り取られ？、一地方の豪族とされた?!ただし、「出雲」だけは、何故か、特別扱いされた?!

ところで、「記紀」は、「崇神」の治世（実際は3世紀頃？）以前に、例の「神武東征」、そして、その後の「大和政権？」の成立過程（→「欠史八代」とはされるが？）を描いているのであるが、それらは、ある意味では当然ではあるが、時代的にも引き離され、まったく別な時期、別な物語（ストーリー）とされている?!

しかし、そうはされていても、奇妙にも？神武以前に降臨したとされる「饒速日（集団）」、そして、それを迎え入れたとされる「長脛彦（集団）」、そのような人々（集団）が、近畿大和にいたともしている!しかも、一方で、その時期（それ以降?）、出雲神大物主神も大和に来て、そこを造成した（司祭者となった?）ともいうのではないか?!もちろん、それらが、B C 660年頃（そして、それ以前）であるとは到底考えられないが、一体それらは、「崇神」の治績と、どのように関係してくるのであるのか?!

そこで考えられるのは、時期や場所、そして事績等は、かなりの捏造(変形?)がなされてはいるが、「記紀」は、吉備(伽耶勢力)と出雲(強いて言えば新羅勢力?)の関係、そして、その吉備と出雲の動きを、神武東征以降の大和での関係・動き?として描いているということになる?!

つまり、その吉備・出雲の勢力・動きを、一応評価し(史実であったから?)、その象徴?としての「崇神」を、事実上の初代天皇とし(形式上は、第10代ではあるが!)、いきさつ(カラクリ?)上、一方で、「神武」を初代天皇としたのである(これによって、二人の「ハツクニシラススメラミコト」の謎?も氷解する?)?!

ただし、そうは言っても、「記紀」編纂者達(持統・藤原体制)は、明らかに?後から(4世紀中頃?)九州から来た「百済勢力(王族?)」の後裔であり、彼らが、直接には自らの祖先ではなかったこともあり、双方を「神話の世界」(人代「神武」以降の「人の歴史」としてではあるが?)に封じ込めた?!

そして、その自らの直接の祖先であった第15代「応神」の治世とそれらを、可能な限り接合させ(もちろん、その百済勢力も、その後、かなりの紆余曲折があったが?)、そして、そこを起点?として、まさに「卑弥呼 or 台与→神功皇后→天照大神」(本来は、「大物主神」?)を頂点とした「万世一系の皇統譜」を創り上げたのである?!

しかしながら、その接合の部分は、一方で、『魏志』や『宋書』等の事実?記載があり(加えて、「百済系文書」も?)、しかも、その造史?には、自らの正当性・正統性がなかったこともあり、かなりの無理?、支離滅裂?が露呈しているのでもある?!

なかでも、一番の頭痛の種?は「蘇我氏」や「物部氏」であり、彼らの正当性・正統性を保有させる「吉備」や「出雲」、さらには、そこには、他ならぬ「天日矛」「武内宿禰」「神功皇后」、そして、おそらく?「住吉大神」(大和天国魂神←事代主神←塩土翁←珍彦・椎根津彦・棹根津彦?)の存在(影?)であった!とにかく、吉備(原物部氏?)と出雲(原蘇我氏?)は、「(後の)大和王権→藤原政権」に刈り取られ?、一地方の豪族とされた?!ただし、「出雲」だけは、何故か、特別扱いされたということである?!

ちなみに、「吉備」は、本来は、「神武東征」の水先案内人「珍彦」(→大伴・久米氏?)の後裔の「道臣→上道臣/下道臣」(5世紀頃の築造とされる「造山古墳」「作山古墳」は彼らのもの?!)の土地であったが(その北辺に「加茂」「建部」の地名あり!)、その後、大和政権(雄略天皇?)に攻められたようである(それを暗示するように?、例の「新撰姓氏録」(815年)によれば、彼らは、「皇別」とされている!)?!

なお、例の「桃太郎伝説」で有名な「(大)吉備津彦」を祀る「吉備津神社/吉備津彦神社」があるが、その「鳴釜神事」(土地の豪族?「温羅^{うら}」との攻防

→鬼退治伝説?)や、近くの朝鮮式山城(鬼ノ城:7世紀後半?)や「賀陽^{かや}」という地名は、朝鮮半島「伽耶」を大いに連想させるものであるが、大和政権との関わりは、かなり複雑なようである?!

最後になるが、今のところ、それらは、まだまだ混沌?の森の中にはあるが、そこには、私の、これまでの推察?によれば、九州北東部に蟄集していた秦氏・息長氏(もともとは、半島南部「辰韓」/「月氏国」→「秦王国」)が、北西部の新興国・貴(木・基肆・紀?)国(百済宗主家沸流系兄王・藤→「応神」のモデル?)と組んで、「宇佐」を拠点として、近畿大和に向かい、河内、そして近江、越、丹波等に勢力を張っていった(「倭の五王」時代?)?!

その後、その百済の王統が支配した?九州倭国(温祇系)と近畿倭国(沸流系→仇台系)は、相応の関係(「檀魯制国家」)を維持したが、「継体」(実は、この人物自体はフェイク?)の時に分裂し(「磐井の乱」)、その主勢力であった息長氏・秦氏は、近畿(近江)に大挙移動し(→近畿倭国)、その後、九州倭国(兄筋?)の東遷?によって、それらを飲み込んだ、新たな「日本国」となった?!そういうところまでは、何とか見えそうである?!

(4)「(九州)倭国」と「(近畿)倭国→日本国」の関係

①やっと出た?、「邪馬台国九州説」の強力な情報・証拠?!しかも、「東遷?」の可能性も?!

そんな中、先日、ある意味大変な事実?を知った!それは、BS(TBS)の番組「所説あり!」からの情報であったが、例の「魏志倭人伝」を、3人の中国(一人は台湾)人、すなわち漢字文化の老家?に読んでもらい、その意見・アドバイスをもらうという趣向であった!

尤も、テレビ番組であるので、しかも民放でもあるので、情報の信憑性(取り扱い)には慎重な受け止めが必要であるが?、今回のものは、意外にも?、かなりの信用がもてるものではないかと、秘かに思いながらの視聴であった!

その中で、「距離(里・日数)については、あまり信用しない方がよい(方位・方角については信じてよい)!」、「『邪馬台国』の「邪馬→ヤマ→山?」は、九州のような地形を指す言葉である!」、「『伊都国』と『邪馬台国』は、関係上(「一大率いちだいそつ」の設置等)、(九州と近畿大和の間のような)遠絶の距離にはない!」、「生活風景の描写、例えば『黥面文身(入墨?)』等の記述は、九州(熊襲・隼人)である!」等々、ある意味、私が、これまで確認(主張?)してきたことであるが(本当である!）、それらを根拠として、彼らは全員、邪馬台国は、(北部)九州にあったと断言したのである!

ちなみに、「邪馬台」の「ヤマ(バ?)」の音韻については、現在も「耶馬^{やば}溪」(大分県)というような言い方で残っている?!もちろん、「やまと or やまとう」は、山門(山の入り口・麓?)のことであろう(古代発音上、例の「甲音」「乙

音」の問題はあるが?)?!

ということで、九州説の私は、意図的な?最近の近畿説の優位?を、大いに危惧(立腹?)もしていたので、それなりの留飲も下がったのであるが、その事実?(の論議?)は、これから一体、どのように波及して(扱われて?)いくのであろうか?!折角の情報(努力・発見?)であるので、単なるテレビ文化の為せる業だと軽くあしらわれなくて、正当に、しかも真摯に対処されて欲しいものである(特に、我が国の専門家諸氏へ!)!

ただし、もう一人の中国人(骨董屋さん?)が、魏から卑弥呼が貰ったとされる、例の「三角縁神獣鏡」を所有しているという事実もあった(これまで、その鏡は、中国本土では一枚も出土していなかったもので、それは、「邪馬台国の卑弥呼がもらったものではない→近畿地方に大量に出土しているその鏡は、卑弥呼の鏡ではない→邪馬台国は、近畿にはない!」ということであった?)!確かに、それはそれなりに、かなりの衝撃ではあったが、そのこと自体はともかく(必ずしも、件の鏡が、当時の魏で製作されたものかどうかは分からない?)、それだけで、ぞろ近畿説の巻き返しが興ってくると、再び?厄介なことになるのかなとも思った?!

とにかく、断片的な情報(の変化)だけで、「ああでもない?、こうでもない?」と甲論乙駁する議論は、私(達)には、直接的には無縁であるので、ここでは、今回の情報(事実?)と、これまでの諸論争?のタネが、どのような関係となり、そして、どのような次なるステップをもたらすのかを、私なりに考察してみたいと思う!もちろん、私の関心は、「九州(倭国)」と「近畿大和(倭国→日本国)」の相互関係の追求であるので、その観点からの整理?ということになる?!

まず、もし、「邪馬台国」が、(北部)九州にあったということになれば(ただ、これだけでは、特定の地域は割り出せないが!),件の「邪馬台国」は、末盧国ないしは伊都国といった玄海灘沿岸のどこかから、まさに「水行10日陸行1月」の距離及び地勢にあったことになるが、それは、おそらく「有明海沿岸部」(または、その内陸部?筑後川流域?)にあったということになる?!距離、日数的なものは当てにはならないにしても(しかし、何らかの情報、根拠としてはあった?)、まさにそういうことになる?!

なお、従来、「水行10日陸行1月」の解釈は、「水行10日+陸行1月」か、「水行(すれば)10日、陸行(すれば)1月」という、二通りの解釈がなされていた(基本的には、前者?だが、字の書き間違い等の解釈も、当然あった!)!

そこで、伊都国からの旅程と考えれば(一応、そこが起点であったから!),もしかしたら、玄海灘沿岸を西、そして南に回りながら、海路(水行)、有明海沿岸部に到達する所とも考えられる(旅程的にも妥当?)?!ただし、この場合は、解釈としては、「水行(すれば)10日、陸行(すれば)1月」ということが、俄

然クローズアップされてくる（つまり、地理的にみれば、双方のコースは、ともに、その条件に合致しているようにも思われる?!）！

ただ、『魏志』の陳寿が、そのことを正確に把握していたかどうかは、また、別の問題である?!つまり、そこに至るまでの道情報が、少なくとも二つあったということも考えられるということである?!もちろん、途次の川を渡り継ぎ（水行?この場合は、かなりの日数がかかる?）、双方の日程の和で、彼の地に辿り着いたとも考えられよう?!

②「邪馬台国」の東遷か?北部九州と大和の「同一地名」の謎?しかし、考えてみると、謎ではない?!

ところで、今回のテレビ放送で、別な意味で興味深かったのは（「してやったり」の感あり!）、最後の方での、中国人学者（古代史?）の指摘である!彼は、「邪馬台国は東遷した?」と言い、その根拠を、地名の相似?に当てていた（→三輪・朝倉・笠置山・住吉大社 等）!だが、実は、私は、それについても、以前同じことを確認していた（これについては、本・名前等は失念しているが、誰かが、そのことを指摘していたことは確かである!しかも、その人は、驚くなかれ?、南九州の都城周辺にも同じことがあるとしていた?!）！

したがって、そのこと自体は、さほど驚くことではなかったが（むしろ、「邪馬台国の東遷」に関わって、そのことを指摘したことに対しての驚き?はあった!）、「九州（倭国）」と「近畿大和（倭国→日本国）」の相互関係の追求にとっては、まさに好都合な（援護射撃となる?）言質であったことは言うまでもない!地名等の関係（つながり）は、当然、そこに住む人々の交流、移動（基本的にはこちらの方か?）が前提としてあるからである?!

とは言え、その文脈では、彼の指摘は、至極正当なのであるが、しかし、それを、単純に「邪馬台国の東遷」という流れ（関係）で捉えてよいものかという、かなりの疑問符が付くことになる?!何故なら、邪馬台国＝倭国ではないし、そもそも、彼が指摘した「邪馬台国の東遷」は、実は、倭国（の一部）の東遷（進?）であって、しかも、それに伴って、（九州）倭国全体が、近畿大和に移動したわけではないからである?!

ただし、それが、いつの、どの氏族・勢力の移動によるものかは、まだまだ分からないということでもあるが、もし、今回の指摘を、より積極的に採り入れるとするならば、そこで提示されていた「地名の相似」、すなわち、筑後川流域の「三輪（甘木?）・朝倉」周辺の氏族・勢力が、それに関わっていたということにはなる?!

であれば、当然?大和の三輪山周辺の初期大和政権（大物主勢力→大神^{おおみわ}神社）、そしてまた、そこにおける「（龍）蛇」の信仰・伝説も、重要な考察材料となることになる?!だが、そのことに関しては、「巨勢（木瀬?）」「平群」「葛

城（木）」、そして「曾我（佐嘉?）」等も、同じように大和にある！これらを、いかに整合させるかでもあることになる?!

③改めて見えてくる？九州勢力の東への移動?!ただし、事は、そんなに単純ではない?!

翻って、そうなると、一方では、出雲・吉備との関係はどうなるのかという、新たな、しかも大きな疑問も生じてくる?!したがって、この辺については、さらなる考察に委ねられなければいけないが、ここでは、少しだけ？触れておくと、「地名の相似」については、神武東征、その後の即位譚に示されている、大和での出雲勢力（「加茂（鴨）族」も?!）との接触・合流、とりわけ三輪山の大物主（→事代主）勢力との婚姻等のことが思い起こされる（それらは、個々の氏族・勢力の名前群?として示されてもいる!）?!

しかし、多分それらは、吉備（3世紀半ば頃?の崇神勢力?）の進攻以前の話となとも思われるので、年代的には、それよりも古い時期のものとなる?!とは言え、それらは、年代幅的にも、かなり広範囲な移動（交流）の足跡でもあろうから、そこへの所要年数や互いの意思疎通等の関係で、当該の時期としては、かなり遅い時代のものになったということもある?!

そして、さらに、その場合は、ある特定の氏族・勢力のリーダーシップ（統率力）が必要であったであろうし、当地での定着（定住）には、それなりの力、影響力を行使できる氏族・勢力がいたことになる（一番考えられるのは、やはり「三輪氏」か?）?!尤も、それらは、ある意味結果的にそうなったとも考えられるので、やはり時期的なものは、もう少し慎重な考察が求められることにはなる?!

なお、そこに、例の「箸墓古墳」の主で、知る人には有名な「倭迹迹日百襲姫^{ヤマトトトリモソヒメ}」が登場するが（例の邪馬台国畿内説の「卑弥呼」比定の所為で、彼女自身の本来の名前は、ほとんど知られていない?）、彼女が、三輪山の「大物主神」（実は、太陽神であり、龍蛇神?!）の（神）妻なのである（その後、奇妙な死亡譚があるが、その名の由来が古墳名ともなっている!）！

しかも、この時期の三輪山勢力と同盟?したのは、おそらく吉備勢力だと考えられるので（ちなみに、彼女は、吉備と関係のある?「孝靈天皇」の娘であり、他にもない「吉備津彦」の妹ともされている!）、彼女は吉備の出身だったと考えられる?!だから、いわゆる（「魏志」の）「卑弥呼」ではないのでもある?!

ということで、邪馬台国近畿大和説の人は、「卑弥呼」を、そこの女王だとし、箸墓古墳は、彼女の墓だと言い張る?のであるが、実は大和には、れっきとした?、別の「ヒミコ→ヒメミコ（巫女^{ひるめ}→太陽神の妻）」がいたのであり、彼女こそが、それであったのである?!つまり、この時代、我が国（倭国）には「ひこ（日子→彦）・ひめ（日女→姫）制」があり、どこの国にも、そうしたカ

ップル？はいたということである?!余談？ではあるが、例の「天照大神(女性)」が、最初は「大日靈貴オオヒルメノムチ (巫女)」と呼ばれていたという事実も、実は、そこにある?!

それと、もう一つ考えられるのが、「白村江の戦い」(663年)前後の、九州倭国からの大量移住?である?!これについては、あまり取り沙汰されないが(当然、「記紀」でも隠されている?)、「太宰府」の危機と、それに伴う人と文物の移動・移築である(有名なのは?、当地の「観世音寺」の、「法隆寺」への移築?)?!

しかるに、唐・新羅連合軍に攻められた(そして、敗れた)九州倭国王族達、つまり斉明(←?皇極)・中大兄皇子達(百済温祇系!多分?「磐井」の後裔の一部?)は、唐の進攻・属国化を恐れて、近畿に移動していた?!

そして、その後、近江に遷都したと考えられるが(→近江京)、その時、都(太宰府)を棄てて?筑紫を離れたので、懐かしいのと、そこで新たな生活を始める決意で、故郷筑紫の土地名を、まとめて移築したのではないかということである(その証拠かもしれないが、中大兄皇子や斉明は、まさに九州「朝倉」の地に陣を取っていた!)?!

さらに、これも、百済系王族の関わりと考えられるが、逸早く近畿大和(飛鳥!)に移動していた?、いわゆる「蘇我系」の人々(多分?その先着は、「欽明(物部目連→蘇我稻目?)」であり、そこから生じた「上宮王家」並びに「(新?)蘇我氏」(「推古」は、その類族の一人?)であろう?!ただし、それらは、おそらく「葛城」「巨勢」「平群」「曾我」等の、いわゆる「葛城(蘇我)系」の名前移築であろう(→ひょっとしたら、例の「倭の五王」達の後裔?)?!

いずれにしても、九州と近畿(大和)は、互いの関係を、土地名からも分かるように分有?していたのであり、単に、ある時期に、一方的に、西から東へ移動していったわけではないのである?!

例えば、3世紀中頃?、逆に東から西へと、ある氏族・勢力(神八井耳命→多氏)が移動したことも分かっている?!それが、「前方後方墳(手焙型土器)勢力」の、全国への移動・進出(「環濠集落勢力」への攻撃?)であるが、このように、単純な「東遷」「東進(征)」の経緯だけでは、我が国の建国史は語れないのである?!とは言え、徐々に、その全貌?は見え始めているのでもある?!

(5)「応神」「継体」、そして「欽明」の関係?!

①やはり一番の難題?何が、どのように問題なのか?実は、そこに百済王族の倭国入り込みがある?!

さて、「九州倭国」と「近畿倭国→日本国」の相互関係について、幸運にも?あるテレビ番組の情報を得て、それなりの自信?を得たのであるが、実は、それについては、もう一つ大きな壁(謎?)があるのである?!それが、標記の『「応神」』『「継体」』『「欽明」』の本当の関係?!ということであるが、「記紀」が示す、我

が国の建国史を明らかにするに当たって、ある意味？一番の難題であり、どうしてもそこを突破しなければ、「二つの倭国」の存在と、その相互関係が（もちろん大枠としては、事実なのであるが！）、うまく描けないのである？！

すなわち、第15代天皇「応神」（彼自体は創作上の人物？）を始祖？とする百済系勢力が、どのように近畿大和に進出し（多分4世紀後半？→「河内王朝」？）、そしてそれが、どのように、「応神」5世孫の「継体」に受け継がれ、そして、最後に、「継体」の嫡子？とされる「欽明」につながっていったのか？そこが分から（共通認識化され）なければ、いつまで経っても、「真実？の解明」には行き着かないということである？！

百済の文物や土木技術が、その時期から河内や大和に入り込んでいることは、紛れもない事実なのであるが（巨大灌漑施設や、古市・百舌鳥の巨大古墳群の築造等は、おそらく彼らによることは間違いない?!）、それが、政権（王朝）の推移に、どのように関係しているのかは、本当のところは、まだ分かっていないということである？！

しかるに、これまでの通説では（「記紀」の示すままによれば？）、崇神（第10代）王朝の「仲哀」（第14代）と、新参の？息長氏の「神功皇后（息長帯姫）」との子の「応神」が、最強の忠臣？「武内宿禰」に支えられ、九州から近畿大和に攻め上り、仲哀の別妻（「大仲津媛」）の子「香坂^{かごさ}か王」「忍熊^{おしくま}王」を破り（入京に当たって、彼らの抵抗を受けたとされる！）、新たな？王朝（「河内王朝」？）を樹立させた？！

しかしながら、その後、同王朝の嫡系が途絶え（最後が「武烈天皇（第25代）」！）、そのために、越（三国）の、応神5世孫の「継体（第26代）」（男大迹^{おほど}王・彦太尊）が、当時の実力者？大伴金村・物部麁鹿火の誘い？で、大和に連れて来られたということであるが（しかも、周辺部を転々として！）、ここには、かなりの謎（無理？）があるように思われるのである！

と言うのも、「武烈」の異常なまでの暴君ぶり（の描出）、九州貴（基肆・木？）国の存在、あり得ない長寿？で、しかも怪しげな？存在の「武内宿禰」と、彼の後裔だとされる蘇我・葛城・巨勢・紀氏等の活躍と没落？、「仲哀」の、遠征地？九州における不可解な死、さらに「継体」という名の不可思議（九州年号の創始年号と同じ！）等々？！

さらにまた、「（近畿の）継体」は、大和に進出する前に、尾張の「目子媛」と結ばれ（尾張氏の支援を受ける？あるいは、取り入る？）、後の「安閑」「宣化」が生まれていたとする！しかし、それでは、前王朝の継承者としては血統的に薄いと思われ、前王朝の血も引き継ぐべく、「手白髪^{たしろか}皇女」（「仁賢」の娘）と結婚し、目出度く？嫡子「欽明」が生まれたとするが、これもまた、かなり出来すぎた？ストーリーのような気もする？！

翻って、一方で、「九州王朝説」によれば、筑紫倭国の分国（「檐魯国」？）豊国倭国に入質していた、百済仇台系王族男弟王・軍君^{こにきし}が、豊国倭国を引き継ぎ、本家筑紫倭国を「磐井の乱」（528→515年？）で破り、宗主の座を奪ったとされる（倭国王を宣言し、「（九州）年号」を創出！彼については、和歌山県橋本市在・「隅田^{すだ}八幡神社」所蔵の「人物画像鏡」の「男弟王」と比定される？）？！

その後、その「（九州の）継体」が近畿河内に移動し、「記紀」の言う「継体」につながっていれば、一応話の筋は通るのであるが、どうもその彼は、豊国倭国で死んだらしい？！加えて、一方の「（近畿の）継体」は、父親・母親共に、既に近畿（琵琶湖湾岸）に居住していたわけであるので、九州からの移動は、彼自体には考えられない（それ以前に、その氏族・勢力が移動していた？）！

つまり、ここで二人の「継体」を持ち出さなければ、全体として、話の辻褄が合わなくなってしまうのである（兼川晋氏）？！まさに、このことを匂わせているのが、「淡海三船」による漢風諡号「継体」の命名でもあるのである？！

②「応神」の出自？百済宗家兄王（^藤？）？彼が、「応神」のモデル？！では、「仁徳」は？！

ところで、もちろん、双方の説を、無理矢理合体させる必要はないのであるが、例えば「神功皇后、武内宿禰、住吉大神の絡み」、「『武烈』という天皇のあり得なさ」、「5世孫という際どい関係」、「嫡子『欽明』の出生の怪しさ」、「上宮王家・蘇我氏の扱いの不可思議さ」等々、そして何より、『宋書』等にみられる「倭の五王（^{讃・珍・済・興・武}）」との齟齬（それに対応する天皇の比定の困難さ！）は、限りなく？、そこにある真実が隠されている証拠？であり、これまでの通説では、その辺のことが、まったく説明できないのである（するつもりもない？）？！

とにかく、「継体」亡き後、「安閑」「宣化」の流れと「欽明」の流れが分岐し（二朝並立？）、最後には、「欽明」が、その異母兄（「安閑」「宣化」）を滅ぼし（クーデター→531年「辛亥の変」？）、そこから、まさに百済よりの政策・文物の導入が図られたことは紛れもない事実であり、それがまた、天智・持統・藤原体制へとつながっていることは明らかであろう（途中「天武」の時代が入ったが！）？！

ということで、本当はどういう経緯を辿ったかということなのであるが、やはりここでは、その起点と考えられる「応神」（「胎中天皇」ともされ、ある意味始祖王？であることは間違いない！）の出自？を、改めて吟味する必要が出て来るということになる？！

そこでまずは、九州で生まれたとされる彼が、本当に、「応神」として近畿大和に行ったのかどうか（虚構ではないのか？あるいは、その人物は、次の「仁徳」に仮託されているのではないか？）、そこがポイントとなるわけであるが、これに

関わって思い出されるのが、例の、「宋」に向けた「武の上表文」(478年。ただし文面は、百済の資料を拝借したものとの説もある?)のことである!

それによれば、彼の先祖達は、東に、西に、そして北(朝鮮半島)に、甲冑を纏い(闘い!),版図を広げていった旨が示されているが、それを、具体的には(東に向けた動きでは)、応神または仁徳の動きと関連づけるならば、彼ら(百済)の勢力(の一部)が、河内を拠点として、近畿大和に進出していったことが説明できることになる?!もちろん、「記紀」は、そのことを隠匿しているわけであり、逆に「仁徳」(→大仙古墳)を、あたかも「近畿大和の聖君子」というような形で?煙に巻いているわけでもある?!

他方、もう一つ気になるのは、九州から上がってきた「応神」が、「武内宿禰」に連れられて「敦賀」に行き、そこの「氣比大神」(ツヌガアラシト←天日矛?)と名前を交換したということについてである!

これが、一体どういうことを意味するのかということであるが、名前を交換したということは、常識的には?その人に成り代わったということであろうから、ここでは、その人(神)が有している神威(権威→皇統?)を譲り?受けたということかもしれない?!すなわち、「氣比大神」が有していた正統性を、「応神」が譲り受けた(乗っ取った?)ということである?!何とも奇怪な話ではあるが、それにより、「応神」の名は、「去来紗別いざさわけ神」から「誉田別ほむた(ち)わけ尊」になったということである!

なお今回、よくよく考えてみると、その名前、実は、かなり意味深なものでもある?!何故なら、先に挙げた百済仇台系王族「男弟王・軍君こにきし」の兄で、弟と一緒に入質していた「昆支コンキ/コムキ→(旨王?)」が、もしホムチ(ワケ)→ホムタ(ワケ)→「誉田ほむた」という音韻の変化で、その人物だということになれば、まさにある時期に、百済王族(仇台系)が倭国に入り込み、それ相応の立場・権力を有していたということになる?!

しかも、驚くなかれ?他ならぬ「応神」は、「誉田(品陀)ほむた天皇」とも呼ばれていたのである?!

③「応神」「継体」の兄弟説?百済王族三系統(沸流・温祇・仇台)の生き残り、倭国(日本)上陸?!そして?!

翻って、これに関わって、改めて気になってくるのが、「応神」「継体」の兄弟説である!すなわち、これは、上で述べた百済王族(仇台系)の「昆支」と「軍君」のことであるが、彼らが近畿河内に移動?して、例の「誉田山御廟古墳(「応神」)」と「大仙陵古墳(「継体」)」の被葬者となったという説である(石渡信一郎氏)?!

しかし、これは、高句麗の攻撃による「百済」の崩壊?(392年頃)、そして、宗主沸流系王子(兄王)の筑紫上陸(逃亡?)、貴国(神功皇后・武内宿禰)への

侵入、そして倭国の統合（「大倭＝倭？」→倭の五王）と同じ文脈と考えられ、「軍君（→継体？）」については、同一人物とされるが、兄の「昆支」の方の同定が、うまくいかないのである？！

双方の説における「九州」と「近畿大和」の違いは、ある意味仕方がないのであるが？、片方は、百済に戻り、そこで死んだ？！もう一方は、兄弟で近畿に上り、兄が「応神」、弟が「継体」となったということである？！

私としては、何とも歯痒い（悔しい？）解釈であるが、少なくとも、この時期の百済王族の倭国渡来（入質）は歴然たる事実なのであり、単に百済から渡来人が来て、我が国の技術、文物に大きな影響を与えたというような、これまでのような（無難な？）解釈は、本質的に？変更を余儀なくされなければならない？！

さらに、筑後の高良大社／大善寺・玉垂宮（高良大明神・大菩薩／藤（藤）大臣／武内宿禰、玉垂命／神功皇后）にまつわる『吉山旧記』によれば（「吉山家」は、大善寺・玉垂宮の初期の宮司家？）、そこに関係する人々、つまり「藤（藤）大臣・武内宿禰・神功皇后」らが、そこに拠点を作り、「貴（木・基肆）国」を営んだことが推測される？！

なかでも、その「藤（藤）大臣→百済残国兄王？」が重要であり（多分？彼は「応神」のモデルであり、彼はまた、「武内宿禰」に比定される人物なのかもしれない？）、後の「倭の五王」が、宋に対して「百済諸軍事権」までも主張し続けた理由（根拠？）も、実は、そこにあると考えられるのである（通説では、「百済諸軍事権」の主張は考えられない？）？！

だが、いずれにしても、上記のことは、「近畿大和説」ではまったくの埒外にあり、「九州説」においても、「筑紫倭国」と「豊国倭国」との関係の中では、あまり整合性のない話となっているようにも思える？！「豊国倭国」が、後の「近畿倭国」（→日本国）につながっているのが、その理由であろうが（意図的にそうしている？）、但馬（出石）や播磨、越、そして紀（木）等にも連なっているその話は、どちらかの説だけでは到底説明できないことは、繰り返し述べるまでもないであろう？！

参考までに、我が国では、「百済」と書いて、何故「クダラ」と呼ぶのか？これについては、面白い指摘がある。クダラとは、「旧多羅^{くだら}」のことで、百済を最初に認識したのは、「六伽耶（金官/金海・阿羅・多羅・星山/高麗・大伽耶・小伽耶）」の一つ「多羅伽耶」から渡来した人達（タラシヒコ・タラシヒメ→景行・成務・仲哀・神功皇后？）で、彼らは、自らのことを「多羅から来た男・女/彦・姫→タラシヒコ・ヒメ」等と名乗り、百済のことを、自分達より古い多羅、すなわち「旧多羅^{くだら}」と呼んだということである（兼川晋氏）？！

ちなみに、そういうことであれば、百済は、多羅の人達の旧土（出身地）な

のか？ということにもなるが、それについては、今のところ確証はない（彼らは、同じ忽本「扶余」から、先に朝鮮半島に来た人達らしい？）？！

ただし、これは、崇神王朝期と大いに関係するであろうが、この「伽耶」が、我が国の建国に大いに関わっていることは間違いないのであるが、その「六伽耶」の、個々の国との関係（人の移動・交流）を、もう少し詳細に見ていくことが、もう一方で必要だということではある？！特に、「多羅」は怪しい？！太良町、多良岳、安達太良山等々、「たら」の名前は、「たらし（多羅からの）」のことも考慮すれば、そのことを十分に証明している？！

(6)「天智」と「天武」の関係

①「天智」と「天武」は、絶対に、実の兄と弟ではない？！そして、「父親」も違う？！

これもまた、巷では？よく指摘されているようであるが、実は、「天智（葛城皇子／中大兄皇子）」と「天武（大海人皇子）」は、共に「皇極（→斉明？）」の子であり（皇極の夫は、第34代「舒明」！）、「天智」が兄、「天武」が弟とされるが、これが、やはり怪しいということである？！

有名な「壬申の乱」（672年。大海人皇子・天武と天智の子・大友皇子→弘文天皇？の政権争い？）は、そのことを如実に示す事件であると考えられるが、彼らの兄弟関係については、特に、年齢の不整合があり、中世文書等ではかなりの混乱があったようである？！

実際、実の弟？に、自らの娘4人（内一人が鸕野讃良^{うののさらら}→後の持統！）を嫁がす（言い含める？）はずもない（例え1人であっても？！）？さらに、「中臣（藤原）鎌足」が「天武」に、自らの娘2人を嫁がせているようでもある？！とにかく、考えてみると、何という？「兄弟関係」（政略結婚！→人質策？）なのであるか？！

もし、そういうことがあったとすれば、常識的？には、まったくの他人か、せめて（いくつか説があるように）、二人が異父兄弟であった（しかも、天武の方が年上？）としか考えられないのである（この場合、「天武」として一番可能性があるのは、母親の前夫で、蘇我系の「用明天皇」の孫の「高向王^{たかむこのおおきみ}」との間の子「漢^{あや}皇子」であるらしい？）？！

では、どうして、そのようなことになっているのか（されたのか）？単純に言えば、そうしなければ、天智→天武→持統と続いてきた？、その後の持統・藤原政権が、その正統性・正当性を主張できないからであろう？！言わば、天智と天武が実の兄弟であればこそ、正当な万世一系の天皇家として、そこの部分が描けるからである？！

逆に言えば、「天武政権」は、持統・藤原政権にとっては、あってはいけない（認めてはいけない？）政権だったのである？！そのことを、実に大胆に暗示して

いるのが、持統の「天照大神」への昇華（昇格？）であり、その孫（「輕皇子」→「瓊杵尊」？）の、天皇への着位（→文武天皇）」という神話（→「天孫降臨」）の創出なのである？！

ところで、これもよく言われるように、「記紀」（ここでは『日本書紀』）は、「天武天皇」の意思により発願され、そして、彼のために編まれたものという指摘がなされるが（表面的には、そのように書かれているようである？）、実際は（本音は？）、彼の立場や、その血統の人物達は（たとえ「天皇」であったとしても！）、持統・藤原体制から遠ざけられ（疎まれ？）ている？！このことは、案外見過ごされているようであるが、実は大変なことなのである（1300 年経った今でも、その術中にはまっている？！ということで、騙されてはいけない！）？！

しかしながら、こうした指摘（解釈）は、当然？とんでもない（不遜極まりない？）指摘（解釈）となるかもしれないので、賢い？多くの人は、声を大にして言えないということにもなる？！だが、何度も言うように、真実の受け止めと、その配慮の仕方は、基本的には別問題であり（少なくとも、「今を生きる」に当たっては！）、「そこに、何がある（った）のか」という事実確認と、誰が、何故、そのような造作？を行なったのかという真相解明が、ある意味冷静になされることが必要だということである！

ちなみに、ここで思い出されるのが、（当時の？）天皇家の菩提寺であったとされる「泉涌せんいゆう寺」の事実、すなわち、天智天皇から続く皇統の位牌？に、「天武」から「孝謙（→称徳）」までのそれがないということについてである（←関裕二氏）？！もし、これが、事実であれば、先に挙げた「天智」と「天武」の関係は、想像以上に複雑で、彼らの菩提寺が位牌？を置かないほどの間柄であったということになる？！

もちろん、その事態（状態）が、いつ、誰の時点でのことか分からないので、その真相は分からない？！とにかく、極めて微妙な？話題となるが、史実解明にとっては、まさに重要なものであることは言うまでもない！

②そこに、二つの倭国、つまり「九州倭国」と「近畿倭国」（豊国倭国？→日本国）の並立・相剋がある？！

さて、ここに来て、単純ではあるが、少なくとも応神期以降？、我が国には、二つの倭国、つまり、「九州（筑紫）倭国」と「近畿倭国」（大和政権＋豊国倭国？→日本国）の並立・相剋状態があった（これは、最終的には、「倭の五王」、あるいは「継体」「欽明」の時代の推移の中で生じたものである？！）？！例えば、645 年の「乙巳の変」（大化の改新）、663 年の「白村江の戦い」、そして、672 年の「壬申の乱」は、そうした関係（推移）の中での事件（画期！）であったことを認識する必要性を、改めて我々に提起することになるわけである？！

だが、これについては、改めて中国の文献、すなわち『隋書』（636 年）や『旧

唐書』(945年)によって、その事実？を確かめることが出来る?!つまり、前者の『隋書』からは、近畿大和とは違う(九州である?→一番の決め手は、その地に「阿蘇山あり」とあること!)「倭(倭)国」の存在!

そして、後者の『旧唐書』では、何故か?「倭国伝」と「日本国伝」の二つがあるということであるが、たとえ情報が不確かな?外国のことであったとしても、中華を自負する、大国の「隋(中国)」が、訳もなく、同じ地域(日本)に、別の、二つの国があるということを記載するはずがない?!しかも、そこでは、「日本」(近畿倭国=大和朝廷?)は、元は小国で、「倭国」を併合したものと書かれているのである!

ただし、その後の『新唐書』(1060年)では、改めて「日本伝」として一本化されているので(結果的に?、この記載は極めて重要なのだが?)、そのことは、これまであまり重要視されてこなかった?!要するに、それによって、正しい?「日本国」観(認識)が確立した(訂正された?)ので、それはそれでよい(大した問題ではない?)とされたということである?!

実際、その間に、中国(唐)においては、「倭国→日本国」の変遷(「国名が替わった」こと)が正式に受け入れられたということであろうが(当時の「遣唐使」達が、その弁明?を必死に行った?!)、私(達?)の「二つの倭国説」からすれば(だが、くどいようであるが、どちらか一方説では決してない!)、この認識(事実?)の変更は、まさしく重大な真相を指し示しているということになる?!

つまり、我が国においては、「倭国皇統」(もともとは九州筑紫王朝にあった?)と「日本国皇統」(大和で成立!)が、ある時期まで並立し、そして、次のある時期に(701年?)、それが、「日本国皇統」に一本化された!まさに、そういうことである?!

なお、その事実は、昔からそうであったと考えられるが(「魏志倭人伝」によれば、当時 30 か国が、使訳(通訳)を介して交流していたとする!)、多分、彼らは、それぞれ別々に遣使をしていたということではなく(部分的にはあったかもしれないが?)、「使節団?」というような形で往来していたのではないか?

そのため、「遣隋使?」においても、幾つかの国?の代表が、一緒に向かったものと思われる(詳しく調べると、例の「小野妹子」は、同行はしているが、いわゆる「倭国」の正使ではなかったようである?!おかしな話が、ふんだんにある!本当である!)?!

すなわち、『日本書紀』が、あたかも、彼が正使であったかのように書いているのは、もちろん後の造作によるものと思われるが(「聖徳太子」による派遣という話も!)、そこに、少なくとも二つ以上の国?の遣使があったとすれば、その話は、大枠としては受け入れられる?話となる?!つまり、九州倭国と近畿倭国の合同?遣使である!

したがって、どちらの側からの表現かということで、ストーリー自体は変わってくるということである?!繰り返すように、「記紀」は、近畿倭国(→日本国)の歴史として、我が国の建国史を編んでいるので、隋使派遣、そして、その後来日した返礼使?「裴世清」の動向(受入れ状況を含む)を、そちらの立場(視点)で書き記して(虚飾して?)いるわけである?!そう捉えれば、全体としては矛盾のない話となる?!

③では、実際は、その関係はどうであったのか?!

翻って、天智と天武には、例の「額田王」との三角関係(恋のさや当て?)が、万葉集等で?、ある意味艶めかしく?描かれているのが有名であるが(もちろん、その確執も含めて、彼らの微妙な関係は、多くの場面で描かれている!）、たとえそれが事実であったとしても、そうした個人的な関係をはるかに超えて?、実に大きな歴史的関係が、そこにあったことは、ほぼ間違いないということである?!

問題は、改めて、「九州(筑紫)倭国」と「近畿倭国(豊国倭国?→日本国)」の関係ということになるが、簡単に言えば、天智が、「九州(筑紫)倭国」の政權継承者(「白村江の戦い」の前後?、近畿に移動?そして、近江に遷都して、いわゆる「九州年号」を發布?していた!ただし、彼は、嫡系ではない?)であり、天武が、先に近畿・大和に移動していた「上宮王家」「蘇我氏」(→飛鳥京)の血統であったということではないか?!だから、尾張、越、そして東国との関係も強かった?!もちろん、「大海人」という彼の皇子名からも、それが推測される?!

ということで、「日本国」とは、まさにこの「近畿倭国」のことであるが(天武が、「日本国」を名乗ったともされているのはこのためである?!)、しかしながら、一方で、全体を「百済系倭国」として見れば、「九州倭国」の方が「本家(溫祇系余氏)」であり(したがって、形式上は、「倭国」とは、「日本国」を含む、全体の名称ということになる!）、その関係は、少なくとも、701年の「大宝律令」の制定時まで続いた(その時までは、まがりなりにも、「九州倭国」の命脈は続いていたということである→筑紫君?「薩野馬」の存在)?!

改めて、このように捉えるならば、中国史書(『隋書』『旧唐書』等)に見られる異常さ(矛盾?)も、了解されるものと思われる?!そうなれば、具体的には、その「九州倭国」と「近畿倭国(日本国)」の関係が、いつ、どのようにして成立したのかということになるが、最初にも述べたように、現時点では、4世期末からの百済系勢力の進出以降ということではある(「記紀」上では応神期から?)?!

だが、当然、それ以前はどうであったのかということにもなり、まだまだその全貌は分からない?!遅くとも、「継体期」以降については、おおよその見当はつくのであるが、応神、神功皇后、武内宿禰、あるいは住吉大神等の件は、

まだまだ霧の中なのである?!

だから、通説は通説として尊重されるべきではあるが、この点については、たとえ九州説、あるいは近畿大和説であっても、もう少し（一度?）、この辺りを虚心坦懐に解明していく努力（誠意?）が求められるのである?!繰り返すが、どちらか片方のみでは、決してその真相は見えてこないのである?!

とは言え、先に近畿・大和に移動していた、「天武」の先人達が、上に挙げた人物達と関わりのあった人達であれば（直接の関係かもしれない?）、ある意味近畿・大和では、それこそ天武が、正統・正当な後継者であったのかもしれない（特に、「蘇我氏」との関係では?!）?!多分、それは間違いないであろう?!だから、彼は、「壬申の乱」で勝利したものとも考えられる（当初劣勢であったが、東国勢力、とりわけ「尾張氏」の支援が大きな力であったことは、つとに有名である!）?!

末尾になるが、今回、改めて確信?したことは（少し忘れていた?）、天智は、確かに筑紫倭国の皇統ではあるが、その嫡系ではなく、「白村江の戦い」を機に、近畿に逃げ延び、その後ろめたさから?、むしろ筑紫倭国の首都?（太宰府）を攻撃しようとしていたという事実である?!すなわち、従来、祖国?防衛のために、太宰府周辺に、彼が築造させたという「水城」や「大野城」「基肄城」は、逆に、彼が見捨てた（裏切った?）筑紫倭国（太宰府政権）を、封じ込めるためのものであったということである?!

というのも、「太宰府」は、ある時期（「白村江の戦い」の後?）から、「唐」の封国（属国?）となっていた、あるいは、それに相当する対応をしていたからである?!（吉留路樹『倭国ここにあり 文献に隠された真実・二つの国があった日本列島』葦書房、1991年）?!天武もそうであるが、天智は、それ以上に、その行動自体が複雑なのである（もちろん出自も?）?!

(7)『古事記』と『日本書紀』の関係?!

①『古事記』と『日本書紀』の関係及びその異同に、その突破口がある?!

ということで、次に、これも、論旨はこれまでと同じであるが、まさに『古事記』と『日本書紀』の関係、そして、その異同（の解釈）に、ある種の結論?を出す時期が来ているということである!

すなわち、いつまでも、「『古事記』ではこう書かれている、『日本書紀』ではこう書かれている」、あるいは、これについては、「『古事記』では書かれている、『日本書紀』では書かれていない」、逆に、「『古事記』では書かれていないが、『日本書紀』では書かれている」とか、そういったことの指摘は、その箇所の文脈においては、それなりに意味はあるのであろうが、全体としての関係、そして、その異同のもつ意味が、なかなか指し示されることがないということである?!

しかも、あったとしても、その関係、異同ないし、その意味の解釈は、ほと

んど著者の恣意？に委ねられているようでもある？！

何故、そうなるのか？要は、私もそうであるが、「記紀」と総称して、あたかもそれが、同じ？、我が国の歴史（正史？）を記しているという前提が、そこにはあるように思われる？！

しかし、考えて見れば分かるように、作成者が違う二つの史料（書物）が、同じ歴史（正史？）を記しているように見えても、事象の取り上げ方や、その取り上げた内容（価値や真偽も含めて？）が違うのが、ある意味自然なのではないか？！

ましてや、一方が、もう一方の「正史？」に、不満や失望等を有している？勢力・人物のものであっては、可能な限り（ここがミソだが？）、真実や、自家の正統性・正当性？を書き記そうとすることは、容易に推測され得ることである？！

したがって、基本的には我が国の建国史を描いてはいる『古事記』と『日本書紀』の関係と、その異同の中身（性格？）を精査していけば（もちろん、それだけでは十分ではないが！）、大きな理解の枠組みが、さらに得られるのではないかということである？！

多分？そこでは、「二つの倭国」が相互に関係し合いながら、「日本国」が生まれたことが分かるということであり、その意味で、さらなる理解の突破口？となるということである（ただし、『古事記』は、6世紀末の「推古期」までしか描いていないので、その限りにおける可能性ということにはなる？）？！

なお、よく調べてみると、『日本書紀』については、その書名や編纂の経過等、まだまだ確定されているわけではなく、一方の『古事記』においても、同じような不明点もあり、「偽書説」等も含め、その取り扱いには、かなりの慎重さが求められることは言うまでもない？！

とは言え、我々は今あるもの（現在使用されているテキスト）で考察を行ってきているのであり（たとえ原本？ではないにしても）、そこに記載されている史実？の検討ということで、話を進める他はない！そして、極論すれば、双方ともに、ある事柄・事件等については、潤色や捏造を施しているものであっても、全体的な真相、意味合いを見失わなければ、それでよいのである（そういうことが分かれば、それはそれで、適切に対処すればよいということである！）？！

そこで、まず、双方の関係を整理（確認）しておくと、『日本書紀』と『古事記』は、明らかに公式の関係ではない？！しかも、「補完説」や「天の書・地の書」、あるいは「国外向け・国内向け」というような説もあるようであるが、決してそうではない（結果的に、そういう関係、そういう性格を帯びることにはなった？）？！

そのことが分かるのは、いわゆる「正史」と呼ばれるものに（ここでは、『日

本書紀』『続日本紀』『日本後記』）、『古事記』（作成）のことが一切触れられていないということである。つまり、何らかの公式な関係があるものであれば、そうした無掲載（無視？）はあり得ない?!

しかも、先にも触れたように、『古事記』は、6世紀末の「推古期」まで、一方の『日本書紀』は、7世期末の「持統期」までということであるので、限りなく、その関係にはないと言える?!

ちなみに、『日本書紀』は、「新羅」への憎悪に満ちているという指摘もあるが、当時の編纂政権が、「百済」、あるいはそれに由縁のある「伽耶」出身の人々であったならば、それはそれで、大いに首肯できることである（彼らは、自国を滅ぼした「新羅」を憎んでいる!）?!

②編纂者（集団）と、その編纂の動機・目的、そして、その背景?!

そこで、改めて、双方の編纂者（集団）と、その編纂の動機・目的、そして、その背景を整理（確認）すると、まず、『日本書紀』は、我が国最初の「国史」ということであるが（その目的で作成されたということ!）、その編纂の中心人物が、持統・元明・舎人親王という表向きの顔ぶれであるが、裏（陰?）の遂行（指示?）者は、「藤原不比等」とされている（それを否定する人もいるが、多くの証拠?から、そのことは明らかである?!）!

なお、この「国史」の編纂は、7世期末の「天武」期に企図されていたが、紆余曲折を経て、完成をみたのは720年である! 要は、対外的に（特に、当時の国際中心国家「唐」に対して）、正式な国家として認めてもらうために（「国史」をもたない国は、成熟した（正式な?）国ではない?）、それを編纂したということであるが、後の「淳仁」「桓武」期において、この、「元明」・「元正」期において完成をみた『日本紀?』（このことを記した『続日本紀』では、この表記であった!）を改作して、最終的に、これを編んだ（完遂させた）ということである?!

ただし、この『日本紀?』は、「天武」期において、かなり仕上がっていたであろう草稿を基に、それを受け継いだ? 「持統・藤原政権」（日本国?）が、言わば「革命（乗っ取り?）政権?」としての思惑に則って、修正を施したものとされる（→「持統天皇」を「天照大神」に昇華させ、それに基づく「万世一系の皇統譜」を作成した!）?!

しかも、その底本であった『原日本紀?』（多分、上宮王家ないし蘇我氏が保有していたとされる『天皇記』『国記』のこと?!）は、例の「乙巳の変」の際に遺失（焼失?）されたとするが、それは、果たしてどうであろうか?!

一方の『古事記』であるが、その成立経緯については、その「序文」に書いてあり、「天武天皇」の命により、「稗田阿礼」が誦習していたものを、「太安万侶」が撰録し、712年に、「元明天皇」に奏上したものとされる。

基本的には、『日本書紀』の記述を肯定する氏族（の一人？）が、自家（氏族）の立場や多少の主張を、藤原体制の機嫌を損なわない程度で（政権から放逐されると困るので、あからさまな政権批判は行わない。ただし、書かれていないことも含めて、言いたいことは言わせてもらおうというスタンス?!）、誰かが、私的に書き記したのではないか?!

要は、『日本書紀』の内容に不満や言いたいことがある人達・勢力が、「自分達の正統性や貢献を示したい。本当は、真の貢献者・後継者は自分達である。」、そういうことを、ある意味秘かに著していたのが『古事記』なのではないかということであるが、その作成（仕上げ?）の中心人物は、おそらく「多氏」の末裔で、「太安万侶」の子孫の「多人長」とされるようである?!

そこには、そのことを直接には公けには出来ない「原古事記?」のようなものがあって、それを加除修正?したものと考えられるが（ただし、「序文」は、その時に書き加えられたものとも推測されるらしい?「多人長」によるものか?）、長い間、公式には発表されていない、まさしく私書的なものでもあった（偽書説もあるが、「序文」のみというものもある!私は、これを支持!）?!

ちなみに、『古事記』が「推古期」までしか記していないのは、一応そこまでで、自らの言い分（史実?）は事足れり?とするもので、正史の『日本書紀』の、その後の記述は、基本的にはそれでよい（認める?）ということであったということになる?!つまり、それ以前のこと（真実?）は、言わせてもらおうということであった?!

③二人の、意外な?人物から見てくる「記紀」の真相?!

ところで、双方の書について、面白い?指摘がある!『日本書紀』は、「倭国（九州）系の文字文化に依拠している」が、『古事記』は、「東国（大和）の文字文化に依拠しており、東国人向けの内容となっている」ということである?!細かいところでは、「やまと」の漢字表記が、前者では「日本」、後者では「倭」、また、神名に対する尊称では、前者では「命」「尊」（みこと）、後者では「神」（かみ）となっているということである!

参考までに、人（神）名表記では、例えば、『日本書紀』では、「大山祇おおやまつみ」「少童わたつみ命」「天照大神」「高魂尊」、『古事記』では、同じ人（神）名を、「大山咋く（別名「山末之大主」）」「綿津見神」「天照大御神」「高木神（九州系?）」としている。また、例えば、瓊瓊杵にぎ尊の妻を、『日本書紀』では「栲幡千々たくはたちぢ姫」、『古事記』では「萬幡豊秋津師よろずはたとよあきつし比売」としている。

さらには、『日本書紀』では、「武烈」の暴虐記事があるが、『古事記』にはない!『日本書紀』の「雄略」は、かなり乱暴なことやっているが、『古事記』の方では、穏やかな行動となっている!

そんな中、これまでこのように書いてきて、ここで、それまではほとんど重要視していなかった？、現実的な動きとしては、かなりの怪しさ？が感じられる、少なくとも二人の人物の名前が脳裏を過る！

改めて、一人は「淡海三船」であり、もう一人は「多人長」である！前者は、以前にも述べたが、天智天皇の玄孫（大友皇子 → 弘文天皇の曾孫）で、当時の文人とされるが、それまでの歴代天皇に、いわゆる「漢風諡号」を与えた（考案した）人物である。

後者は、最初に天皇家？から枝分かれした「多氏」（「神八井耳命」の子孫）の末裔で、『古事記』の編纂者である（ように見える？）「太安万侶」の子孫とされる人物である！しかも、後者は、何故か？完成した『日本書紀』の講釈（「書紀講筈」→説明会？）の中心人物とされている文人である！

改めて、「淡海三船」は、藤原政権の身内？であったはずであるが、「書紀」が描く建国史を、ある意味俯瞰し、そこにおける各天皇の役割・位置づけ？を冷静に見極め、それぞれに相応しい？「漢風諡号」を与えたのである（なお、それらが採用されていることは、まさに身内として扱われていたということである？）！その嚆矢？が、例の「神」の賦与であり（「神武」「崇神」「神功（皇后）」「応神）、「推古」や「仲哀」といった、その人物の妙名の賦与であろう？！

要するに、それによって、それぞれの天皇が果たした役割・位置づけが、暗示されているのではないかということであるが（実在であったかどうかはともかく？）、もし、そうであれば、「書紀」の真実（虚偽も？）も見透かされてしまう？だが、それにも関わらず、彼は、文人としての誠実さ（矜持？）を示しているということである？！

もう一人の「多人長」は、名門「多（大、太、意富、大生等）氏」の一員であるが、役職（仕事）は、『日本書紀』の講釈（「書紀講筈」）のリーダーである（多分、それなりの生き方を強いられた？）！公式（表面的？）には「書紀」に忠実に振る舞う傍ら、非公式には（裏では？）、自らの氏族の正統性、あるいは、それこそ栄光を後世に伝えるべく、先祖（太安万侶？）が秘かに用意していた『古事記』（本来は、書名も違った？そして、多分「序文」もなかった？）を、世に出したものだと思われる（それでも、かなりの間、それは日の目を見ることはなかった！）？！

なお、多氏が名門であったことは明らかであるが（「神武」の、大和での長子「神八井耳命」の子孫？！おそらく彼らは、大和政権の、一方の立役者・前方後方墳勢力？であった？）、その影響力が、徐々に少なくなっていたことは、周知の通りである？！

ということで、本当は、「記紀」と、安易に括ってはいけないのかもしれないが（一つより、二つの記載の方が、より信頼性が高まるということもあり？）、厳密に言えば、それぞれは、別個に受け止められる必要があるということ、ここ

では再確認はしておきたいと思う。

ただし、双方の元となるもの（たたき台？原資料？）は同一のものであり、それが、ある種の「歴史のいたずら？」で、別々の運命を辿ったものと言えるのかもしれない？！

(8)「持続・藤原体制」が目指したもの？！

①いかにしたら、真の事実解明に至れるのか？！幾つかの「倭人（弥生人？）集団」の渡来と融合・建国？！

さて、ここでは、一応の結びとなるが、前項号(7)との関連で言えば、『日本書紀』は、その編纂時の「持続・藤原政権」のためのものであり（ということは、当時の最終勝利者？ということになる？）、そして、本来的には「九州倭国」（百済温祇系←沸流系）のもの、一方の『古事記』は、結果的には、その勢力（同族ではあるが？）に逆転された？「（豊国倭国）→近畿倭国→日本国」（百済仇台系←沸流系）のものと言うことが出来る？！

ただし、何度も言うように、その「九州倭国」（百済温祇系←沸流系）と「（豊国倭国）→近畿倭国→日本国」（百済仇台系←沸流系）の関係は、単なる「二朝並立」的なものではなく（→「檐魯国家」？）、言わば一つの国（百済系？「九州倭国」）から、派生していったものということでもある？！

だから、双方は、かなりのものを共有しているということであり、その意味では、その総体は、「一つの倭国史？」というように見ることも出来るのである？！だが、その関係、その経緯は、甚だ複雑である？！

改めて、「（九州）倭国」は、当初「安曇族」等の、いわゆる「江南系倭人（海人族）」の連合国家として（稲作・交易、環濠集落、巴形青銅器・銅鐸等→「倭奴国」が盟主！）、北部九州（朝鮮半島南端を含む！）で形成された？！

しかし、その後、（伽耶・新羅系の？）吉備・出雲の勢力が、近畿（播磨・河内・近江・丹波等）に進出し、まずは「前方後方墳勢力（日本海ルート？）」を形成し、一方の「円墳勢力（瀬戸内海ルート？）」（物部氏？）と大同団結し（鉄等の資源の分配・支配等の関係で？）、大和纏向に「前方後円墳体制」（「大和王権」？）を築き上げた？！

ただし、その間（それ以前に？）、「前方後方墳勢力」は、近江を中心として（「伊勢遺跡」？）、全国の環濠集落（巴形青銅器・銅鐸）勢力を駆逐し、全国に、その版図を広げていった？！その結果、九州では、「邪馬台国」が、その中心となり、「卑弥呼」（→「親魏倭王」）を女王とする、新たな連合国家が出現した！

ちなみに、その時に、「環濠集落勢力」の一大拠点であった？「吉野ヶ里勢力」も崩壊してしまった？！これらは、珍しく？、当時（3世紀前後？）の「東から西への動き」を示すものであるが（間違いなくあった！）、その中心勢力は、おそらく「神八井耳命」の一族であったろう？！

その「神八井耳命」は、例の「多氏」の先祖とされるが（本当である！）、九州関係では、「筑紫の君」「火（肥）の君」「阿蘇の君」「大分の君」等は、すべて、その関係の支族とされている？！

しかし、他方、その過程で、「(九州)倭国」の盟主的存在であった「奴国」や「伊都国」(の一部?)の人々は、九州南部や朝鮮半島南部も含めて、かなり広範囲に、全国に散らばって(逃げて?)いった?!「記紀」の「神武東征」の逸話は、多分この頃の話なのかもしれない？

そして、ひょっとしたら、彼らが、近畿での「日神（太陽信仰）」の勢力であり、九州邪馬台国勢力に対抗するために、(吉備・出雲の)「火神（龍神信仰）」の勢力と、近畿大和で合流したのかもしれない?!ここに、最初の「二国並立」的な状況（構図）が出来してくるのである？！

しかしながら、「記紀」は、その後から（4世紀後半?）渡来してきた「百済系勢力」の末裔による編纂なので、自らの来歴を、その「倭国前史?」にいかに関わり込み、その後の展開を、いかに示すかということが、その最大の目的となり、また、それが、最大の課題でもあった?!

その苦心の成果?が、まずは北部九州に渡来してきた百済本宗家沸流系（残国?）兄王（藤?→「応神」のモデル?）の出生と、その後の活躍の描写（神功皇后・応神期）であった（ただし、当然そこが、一番理解に苦しむところともなっている?）?!

すなわち、そこには、幾多のごたごた?があったものの、それを、「応神」、「仁徳」、さらには「雄略」、「武烈」、そして、「継体」、「欽明」といった、架空の天皇群を創り出し（もちろん、それに想定される人物はいる!）、一方で、中国史書に載っている、同時代の、おそらく（否、間違いない!）「九州倭国」の「倭の五王」や「天足彦あまたらしひこ（→「日出処天子」）」（決して「聖徳太子」ではない!）等の存在をはぐらかし、まさに、畿内における?「万世一系の皇統譜」の中で、それらが、連綿と続いてきたことを記しているのである?!

なお、「応神」の位置づけや役割（からくり?）については、例の「淡海三船」の漢風諡号に関わって、実質的な「(「百済系」の)始祖王」とされていることは明らかである?!

②「持統」の「天照大神」への昇華と藤原体制の永久化?!このモチーフこそ、「記紀」の原点?!

ということで、つまるところ、私（達?）の、我が国古代史（建国史）の解明においては、最終的には、「記紀」、そして、そのほとんどは『日本書紀』（のスタンス）をどう理解（解釈）するのかということに帰趨していくことになると思うが、やはりそのところを、まさに決断・突破?していかなければ、「邪馬台国所在地論争」も「倭国二朝並立論争」も、これ以上は、大きく前進させる

ことは出来ない?!

したがって、真の事実解明には至れないということである?!改めて、これが、現時点での、私（達?）の結論（覚悟?）ということになるが、要は、九州（倭国）と近畿（倭国→日本国）の関係（実態）を、いかに正確に解明するかということである!

ちなみに、この論の立て方は、最初にも述べたように、一方で、すべて近畿（大和朝廷?）中心の解釈の仕方が、事実と反しており、数多くの矛盾・不明点?が現出しているということである（だが、残念ながら、そのことは、ほとんど無視され、まだまだ通説（仮説?）であるにも関わらず、それらが、既に不動の事実のように扱われている→マスコミもそれに乗じている?!）?!

他方で、その怒り（恨み?）もあってか、その矛盾・不明点?、あらゆる事実?を、すべて自説・自前で説明（解釈）しようとする強引さ（意地?）が九州説にはあること（心情的にはよく分かるが!）、その二つを、いかに受け止め（止揚し?）、いかに整合的に解釈するかということである!

ただし、もちろん、これは、双方の主張を尊重する（形式的には受け入れる?）、日本人特有?の「事なかれ主義（まあまあ主義?）」のなせる業では決してない! 真実は、その双方の説の整合の果てにあると思われるからである!

そこで、ここで、そのための起点（共通認識の柱）を定めるべく、私は思い切って?、小見出しの、『持統』の『天照大神』への昇華と藤原体制の永久化?! このモチーフこそ、『記紀』の原点?!」ということを確認し、今後の展望と課題について、可能な限り述べておきたいと思う!

だが、これも、繰り返すように、単なる思いつきや、暴走でもない?!何故なら、これまで解明してきたような証拠?が、そこかしこにあるからであり、一方で、「記紀」に施された創作・捏造（「からくり?」）が、かなり鮮明に（構図的に!）見え始めているからである?!

例えば、直接の始祖?「応神（第15代）」（もちろん創作?）の皇統譜入籍?のための、初代「神武」の創出（讖緯思想／辛酉革命説に基づく、推古9年（601年）の辛酉の年を起点とした、橿原宮での即位→B C 660年辛酉年）、その母とされる「神功皇后」（息長帯比売）の創出?と「卑弥呼 or 台与」への投影、そして、「持統」の「天照大神」への昇華（→女神化）と、それに基づく「万世一系の皇統譜」作成 等々ということである?!

③最後の課題（謎解き?）は何か?!やはり、それは、「藤原氏」と「蘇我氏」の素性と、その関係の解明?!

とにかく、以上、「記紀」が描く、我が国古代史の輪郭（史実あり、からくりあり?）を炙り出してきた?のであるが、最後の課題（謎解き?）は、そこに横たわる「蘇我氏と藤原氏の素性と、その関係」の解明であろう?!

何故なら、それが、記紀編纂前後の史実？を形成していることは、誰の目にも明らかであり、その作成の目的・動機も、まさにそれと直結していることは、誰が考えても、疑いようのない事実だからである？！

それは、具体的には、「乙巳の変」（645年の「蘇我入鹿」暗殺）で、事実上の勝利？を収めた「中大兄皇子・中臣鎌足」の勢力（後の「持統・藤原政権」）が、着々と？その政権奪取（奪還？）を成就していく一方で、片や異常な？までに、「蘇我氏ないし前蘇我政権？」への攻撃、さらには抹消・抹殺を行っているという理由からである！

そこには、とにかく、それ相当の動機（「憎悪」「怨念」「不安（怯え？）」等）がなければ、とてもじゃないが、実行出来ないような所業が、幾つも指摘され得るのである（一言で言えば、「怨霊封じと罪滅ぼし」?!）！

なお、この辺のことについては、例の「関裕二氏」が、数々の関係本を出されており、そこで膨大な証拠の提示をされている（ある意味？驚異的でさえある?!）！例えば、先日、テレビ（NHK？）でも取り上げられた、「蘇我馬子」の墓（と言われる？「石舞台古墳」）の破壊（剥き出しの石棺）の事実は、尋常ならぬ「藤原体制？」の所業を示すものである？！

しかも、それは、「悪人蘇我氏」の見直し論（本当は、彼らは「政権主権者？」であり、「律令体制」を築きあげようとしていた！さらには、「入鹿」の父親とされる「蝦夷」が「八佾舞やつらのまい」を行い（天子にだけ許される！）、邸宅を「宮門みかど」と呼ばせていた、等々）からも言えることである？！

すなわち、反対派（守旧派？）の「中大兄皇子／中臣鎌足」らが、蘇我氏主導の「律令体制」への動きを阻止しようとした。だから、その首領（「大王」？）であった「蘇我入鹿」を弑逆したということである？！

そして、一方で、人々の「飛鳥（京）」（蘇我氏の拠点？）への思慕、「首塚」（「蘇我入鹿」の慰霊石？）への、現在までの献花、それから、聖徳太子創建とされる「法隆寺」の謎、例えば「夢殿」に祀られている「太子等身像救世観音」の怪？（実物大の聖徳太子像、実は蘇我入鹿？とされるが、その光背が直接後頭部に打ち付けられている！像は、布でぐるぐる巻きにされていた！）！

また、「中門」の謎？もあり（門の中央に柱があり、怨霊を閉じ込めている？）、それらは、すべて「蘇我の怨霊封じ」とされる（別に、「七不思議」と呼ばれるものもある！）?!

翻って、蘇我氏については、「天日矛（→神功皇后）」or「武内宿禰」、そして「住吉大神」との関係もある！そこでは、おそらく？「息長氏・秦氏」の暗躍？が考えられるが、その詳細については、ほとんど解明されていない?!しかも、とりわけここら辺りが、一番「記紀」でも量し、はぐらかし？がある?!逆に、それだからこそ、一番怪しいということではあるが、ここら辺りを、いか

に解明していけるかである?!

さらには、蘇我氏と物部氏の関係の究明もある! 本当は血族?であったが、藤原氏(政権)が、双方を分断した?!「記紀」では、敵・ライバルであったように記されるが(親仏・麿仏)、「入鹿」の母親(鎌姫?)が物部氏であり、物部氏は、早くから九州(北東部)と近畿(河内)に、その拠点を持っていた!

現在の考察(推察)では、双方は、九州倭国の皇統(「物部尾輿」と「蘇我稲目」?彼らは兄弟?!)で、稲目(「欽明」?)の血統が「上宮王家」となり、その一族が大和に移動してきた(「推古期」?「近畿倭国」の発生?→飛鳥京)と捉えている?!

ということで、これからの課題と展望としては、改めて、上に挙げた謎(史実?)を、さらに究明し、そこにおける具体的な変遷を、いかに整合的に描けるかである?!その流れは、(崇神→)応神(←神功皇后)→継体→欽明→天智・天武、そして持統と続く、ある意味では「百済系王族」の動きと関係を、より整合的に描いていくことであろう?!

しかし、これも何度も繰り返すように、そのプロセスは、異民族?としての「百済(←扶余系)」が、途中から「日本」を篡奪し、一方的に政権を打ち立てたということではなく、それまでに形成されていた「縄文」、そして「弥生」からの伝統、価値観(「言葉」も?)、さらには、生活の基盤・枠組みをも受け入れ、新たな「倭→日本(人)」を創り上げていった?!それが、今の、我々「日本(人)」であるということでもある?!

4. 真相解明に向けて共通認識されるべきこと②～重要氏族？から見た古代史の真相?!～

(1) 初期大和王権の中核?!「正統性」の淵源は、吉備から来た?「物部氏」にあった?!

① 吉備勢力中心の「初期大和王権」であったが、その中核は「物部氏」であった?!しかし、その出自は?!

さて、ここから、さらに新たな課題に突入していくことにする!題して、「重要氏族？から見た古代史の真相?!」とするが、ここでは、これまで述べてきた（類推してきた?）我が国古代史の真相を、改めて、重要な氏族（勢力）を俎上に載せ（部分的には、これまでに示してきたが!）、そこから、さらなる（新たな?）真相（真実?）を究明したいということである!

ただし、そうした重要氏族のことについては、これまでに、実に多くの先達者達が、多種多様に、その成果を披露されてはいる!ネット上のそれに加えると、それこそ膨大なものである（もちろん私が知っている、あるいは手許に入手したもの以外でも、それこそ無数にあるであろう?!）!

そんな状況の中で、どうして私が、そのような無謀（失礼?）な企てをしようと思うのかであるが、一つは、1. で述べたような、DNA（ハプログループ）レベルでの人の移動・関係が、かなり鮮明に?分かってきた、そして、その中で、どの系統の氏族（勢力）が、そのタイプ（グループ）に該当するかが、言わば「科学的に?」解明され得るのではないかと思われるからである?!

そして、さらにもう一つが、今回遅ればせながら（大変申し訳ないが!）、壮大な研究成果を発表されている（そのように見える!）宝賀寿夫氏の本を手にして（すべてが真実かどうかは、今の私には分かるはずもないが?）、そこでの知見・情報（それぞれの氏族・勢力の出自・人物関係等が、それこそ東アジア全体の土俵の上で解明されている?!）が、（不遜ではあるが!）かなり使えるという感触を私に与えるからである?!

ちなみに、その宝賀氏の本であるが、『古代氏族の研究⑬天皇氏族一天孫族の来た道』（青垣出版、2018年）というものである!たまたま本屋で見つけて、面白そうだということで、買って帰り、今ざっと目を通して、本当にとんでもない情報（真実?）が、本全体に散りばめられている（真偽はともかく?、一人の人間が、どうしてこのような膨大な情報を入手し、分析出来るのか?そのこと自体でも、まずは仰天である!）!

今回の本は、氏の「古代氏族の研究」の、ある意味集大成でもあるようであるが、とにかくすごいのである（そう言えば、以前ネット上で、彼の研究成果の一部が引用されていたことを思い出した!）!

余談であるが、氏のプロフィールを見ると、T大法学部卒、大蔵省を経て、

弁護士とある！私より、6つ年上でもあるようであるが、これまで、どんな生活を送られてきたのであろうか?!敬意もさることながら、驚嘆としか、言いようがない私でもある?!本当に、凄い人がいるものである！つくづくそう思う！

参考までに、過去 12 冊のシリーズ本のタイトル名を挙げると、①和珥氏－中国江南から来た海神族の流れ②葛城氏－武内宿祢後裔の宗族③阿倍氏－四道將軍の後裔達④大伴氏－列島原住民の流れを汲む名流武門⑤中臣氏－ト占を担った古代占部の後裔⑥息長氏－大王を輩出した鍛冶氏族⑦三輪氏－大物主神の祭祀者⑧物部氏－劍神奉斎の軍事大族⑨吉備氏－桃太郎伝承をもつ地方大族⑩紀氏・平群氏－韓地・蝦夷で活躍の大族⑪秦氏・漢氏－渡来系の二大雄族⑫尾張氏－后妃輩出の伝承をもつ東海の雄族、とある！

多少？首を傾げるものもあるが、興味津々のラインナップであることは言うまでもない！ただし、それらを、すべて買って読むかどうかは、また別の問題ではある?!

② 改めて、「物部氏」とは、いかなる氏族（勢力）であったのか?!直接の出発地は「吉備」？それにしても、あまりにも古く、そして広域に過ぎる?!

それはともかく、以下、早速、その重要氏族を見ていくことにしたい！最初は、やはり（宝賀氏とは違うが!）「物部氏」を取り上げてみたい。何故なら、物部氏は、絶対に? 「初期大和王権の中心」だと思われるからである?!

と言うのも、「記紀」によれば物部氏の始祖とされる「饒速日命」（以下、ニギハヤヒ）は、天皇家（←神武）よりも先にヤマトに舞い降り、そこを統治していたとされるからである！そして、これまでの考察からも明らかなように、「初期大和王権」の中心となったのは「吉備（勢力）」であった（→纏向祭政都市）！そうなれば、それは、ニギハヤヒの「物部氏」であったということになる（→関裕二氏説。ちなみに、神武（一行）もまた、吉備経由で来たとされる!）?!

とは言え、物部氏は、あまりにも古く、そして巨大過ぎる?!我々は、それらを一括りにして「物部氏」と呼んでいるわけであろうが、本当に、それでいいのか?!例えば、「内_{うち}物部」「外_{そと}物部」というような呼称や、その氏族（達?）の全国分布があるようであるが、これらは、改めてどういうことを意味しているのであろうか?!

なお、その「内物部」「外物部」とは、どの時点での呼称なのか、今のところ定かではない?!王権の内部で活躍する（と関係している?）氏族が「内物部」、王権に敵対する（大和から遠ざかった?具体的には東国）氏族が「外物部」と呼ばれているようであるが、これは、「初期大和王権」の分裂?を意味するのか?!

だが、それともかく、「物部氏」は、直接の先祖は、上にも述べた、「神武」より先に大和に降臨（渡来）していたとされる「ニギハヤヒ」と、いわゆる「神武東征?」に最後まで徹底抗戦したとされる、大和の土着?の「長髓彦」（以下、

ナガスネヒコ)の妹・三炊屋^{みかしき}や媛との間の子の「可美真手(宇摩志麻治)命」(以下、ウマシマデ)であるとされる?!そして、その「ウマシマデ」は、尾張氏の祖「天香具山(以下、カグヤマ)」と共に尾張・美濃・越を巡り、その後は一人で、播磨、丹波を経て、石見国に入ったとされる!

ちなみに、「ナガスネヒコ」(勢力)を殺した(滅ぼした?)のは、実は息子の彼で、最後は石見の「物部神社」に逼塞したということでもあるが、これは、ウマシマデの物部氏(内物部?)と、その他の物部氏(外物部?)が袂を分かつているということか?!

翻って、「物部氏」の系譜は、周知のように、『先代旧事本記』(平安時代初期に成立?物部氏伝承記?偽書説もある?)の「天神本記」に示されている?!それによれば、「神武東征」より以前に、河内河上^{たけるがみね}哮峯に「天磐船」に乗って降臨した「物部氏」の始祖の「ニギハヤヒ」は、船長:「跡部首」等の祖・天津羽原/梶取:「阿刀造」等の祖・天津麻良/船子:「倭鍛師^{やまとかぬち}」等の祖・天津真浦/「笠縫」等の祖・天津麻占(忌部氏?)/「曾曾笠縫」等の祖・天都赤麻良/「為奈部」等の祖・天都赤星を乗組員として、いづこからともなく(直接は「吉備」からであろうが?)現れたという?!

なお、『先代旧事本記』は、ニギハヤヒから続く物部氏と尾張氏の系譜や業績を詳しく述べている歴史書ということだが、出雲神素戔鳴命の神(後)裔である「大神氏」らの系譜も併記しているらしい!

③「記紀」から見た「物部氏」の立場・役割?!皇統譜的には、一番厄介な?氏族であった?!

ところで、上記の乗組員(船長・梶取ら)は、別に?「物部造」等の祖・天津麻良/「笠縫部」等の祖・天曾蘇/「為奈部」等の祖・天津赤占/「十市部首」等の祖・富富侶^{ほほろ}/「筑紫弦田物部」等の祖・天都赤星とされ(彼らは、「五伴緒いつとものお」「五部人」とも呼ばれる→物部氏系幹部?)、多少違った顔触れも紹介されている?!

とにかく、彼らは、「二十五部の天物部(内物部?)」とともに、主として、近畿(河内)と北東部九州(遠賀川流域)に勢力を築いていたと思われるが、最後の「天都赤星」は、「天津甕^{みか}星・天香香背男^{かかせお}」とも呼ばれ、確か「大和王権」にとっては、かなり厄介な存在であったらしい(九州系と思われるが、途中で袂を分かつ?!→疎まれる?!)?!

しかしながら、彼らは、「記紀」における、有名な?「五大夫^{まへつきみ}」(「阿倍臣」の遠祖:武渟川別/「和珥臣」の遠祖:彦国葺/「中臣連」の遠祖:大鹿嶋/「物部連」の遠祖:十千根/「大伴連」の遠祖:武日→とされる!)のモデルかもしれない?!すなわち、これらの「阿倍氏」「和珥氏」「中臣氏」「物部氏」「大伴氏」が、いずれも「初期?大和王権」の、有力メンバーであったように描かれていると

いうことである?!多分、「記紀」の思惑（主張）が、そこには投影されているのであろう?!だからこそ?、彼らは、「天孫降臨神話」において、皇孫「瓊瓊杵尊ににぎのみこと」の降臨に従った五神、すなわち、「天児屋命あまのこやねのみこと」「太玉命ふとだまのみこと」「天鈿女命あめのうずめのみこと」「石凝姥命いしりどめのみこと」「玉祖命たまのおやのみこと」と、それぞれ関連させられているわけでもある?!

そこで、改めて、「記紀」は、「物部氏」の立場・役割をどのように描いているのか?!そこに、物部氏の真の姿が投影されている?!結論からすれば、皇統譜的には、一番丁重に扱わなければならない氏族であったということになる?!例えば、『日本書紀』によると、葦原中国へ派遣された「天稚彦あめわかひこ」の死後（誅滅された?）、「高皇産霊たかみむすび尊」が諸神を集めて、次に遣わすべき神を決めようとした時（「国譲り」の顕在化）、選ばれたのが「経津主ふつぬし神」（物部氏）であった（→最初に王権を奪取したのは、「物部氏」であるということ?）!

すると、「燭速日ひはやひ神」（「甕速日みかはやひ神」の子）の息子「武甕槌たけみかづち神」（尾張氏?）が進み出て、「経津主神だけが大夫ますらお（雄々しく立派な男）で、私は大夫ではないというのか?」と抗議した。こうして、経津主神（物部氏）に武甕槌神（尾張氏?）を副えて、葦原中国を平定させることにした（→協力したのが「尾張氏?」であるということ!）。まさに、これは、物部氏と尾張氏が協力して、出雲を攻略したということ物語っている?!

一方、『出雲国造神賀詞』（「出雲国造氏」による）では、「高御魂たかみむすび命」が「皇御孫命」に地上の支配権を与えた時（「国譲り」が成就した?）、出雲臣（国造氏）の遠祖「天穗比あめのほひ命」が国土を観察し、再び天に戻って地上の様子を報告して、自分の子の「天夷鳥ひなとり命」を、「布都怒志命」（経津主神）を副えて派遣したとされている。

他方、『古事記』（「神八井耳命」の後裔の「多氏」による?）では、「経津主神」が登場せず（物部氏・ウマシマデ?を認めていない?）、「思金おもいかね神」が、「天尾羽張おはばり神」もしくは、その子の「建御雷たけみかづち神」（尾張氏）を送るべきだと、「天照大御神」に進言する。天尾羽張神が、建御雷神の方が適任だと答えたため、建御雷神が、「天鳥船とりふね神」を副えて、葦原中国へ天降ったとする?!

いずれにしても、ここには、初期大和王権（高天原?）の、「出雲」からの政権奪取の経緯が透けて見えるというものである?!ただし、これが、大和政権樹立前後の話（経緯）なのか、その後の大和政権の推移を示すものなのかは定かではない（おそらくは後者?）?!とにかく、「物部氏」が「大和政権」の樹立者で、「尾張氏?」がその協力者であったということ、を、「国譲り神話」の中で描いているということだけは間違いない?!

ここでは最後に、物部氏は、「剣神奉斎の軍事大族（もののふ→武士?）」（「神

劍フツノミタマ」を「石上神宮」に奉斎）だとは言われるが（宝賀寿夫氏）、徐々に祭祀者になっていくプロセスがあり（→「神班物者^{カミノモノアカツヒト}＝神に捧げるものを分ける人」）、物部氏と宮中行事は、あらゆる場面で結びついていく（→「物部神道」）！

そして、その後、物部氏は、「蘇我氏」と手を結んでいる（「入鹿」の母または妻？は物部氏！）！「蘇我馬子」と「物部守屋」が仏教導入を巡って争った、そして、それを機に守屋（本宗家）が滅んだという通説（俗説？）は、本当は間違っている（「記紀」のウソ？）?!その証拠に、左大臣「石上（物部）麻呂」は、藤原京までは活躍している（その後、失脚はしているが！→物部氏の最終没落？）！

だが、途中？の、（九州時代？の）「麈鹿火^{あらかい}」と「尾輿^{おこし}」の関係や、尾輿の弟の「目連」（稲目？）との関係等、まだまだ不分明なところが多すぎる?!さらなる究明が、改めて必要となってくる?!ちなみに、それにしても、繰り返すように、北東部九州（遠賀川流域）にも、その「物部氏」の分派？が蟠集しており、あたかも近畿（特に河内）と九州を、（瀬戸内海を挟んで？）支配しているようにも見える?!

どちらの物部氏族が、時代的に早いかということが分かれば、この物部氏族の移動のルートや支配の構図が見えてくるのかもしれないが、私自身は、北東部九州（遠賀川流域）の物部氏族が先にあったと考えている（確か、かの、故森浩一氏も、そのように指摘されていた?!朝鮮半島南部・伽耶→糸島半島？に逢着した部族の一つ？と考えれば、そのようになる?!）?!果たして、実際はどのようなのであろうか（考古学的な知見は、その辺はどうなっているのだろうか？）?!

一方、大和は、最初？「大物主」が造成したとされるが、その時期は、改めて、一体いつのことであったのか?!もちろん、神武（東征）の前であったわけであるが、要は、件のニギハヤヒの降臨と、どちらが先にあったかということである?!尤も、それは、ニギハヤヒの降臨の一要素（場面？）であったかもしれない?!あるいはまた、それは、「出雲系」の「大物主」勢力の大和進出のこと、それ自体であったのかもしれない?!

つまり、それは、別々の事績（事件？）ではなく、ある見方からすれば（例えば、「物部氏側」からとか、「三輪氏側」からとか?）、どちらかの事績（事件？）として描かれているということである?!これを、「前方後円墳」勢力と「前方後方墳」勢力とに、置き換えてみることも出来るかもしれない?!

(2)「物部氏」から出た？、正統主権者「蘇我氏」?!だが、そこには、とんだからくりも?!

①「乙巳の変（645年）」とは、何だったのか?!九州から（大和）飛鳥に移っていた「上宮王家」?!

改めて、記紀編纂者側（藤原氏）が、一番隠しておきたかったこと、それは、

「蘇我氏」のことであり、「蘇我氏の正統性」であったことは、例の（蘇我氏の怨霊を恐れた？）「聖徳太子」の捏造？からも明らかであるが（「聖人」と描くことによって、彼の子・「山背大兄皇子」を絶滅させたとする「蘇我氏」の悪？を、循環遡及的に糾弾することができる?!）、その「上宮王家（聖徳太子家系?）」の顔触れや実体からも、容易に分かる?!

何故なら、この「上宮王家」が、他ならぬ「(大和) 飛鳥」の地に、(九州倭国の?) 新たな都を築いていたと推測されるからである(遷都? 592 年?)?! 実際、そう捉えると、同じ九州倭国(出身 or 移動?) の「天智」の怪しげな行動が(彼は、近江に遷都し、いわゆる「(九州) 倭国年号」を使用していた!）、改めてはつきりしてくる(ただし、ここでは、そのことは、詳しくは繰り返さない!)?!

それでは、改めて、一体何故、九州倭国(の一部!) が、近畿に移動したのかということであるが、大きくは、二つの契機(実は3つ?) があったのではないのか?! 一つは、例の「白村江の戦い(663 年)」で、唐・新羅連合軍に敗れて、九州倭国が、一時期占領されそうになった時(実際、そうなった?)。もう一つは、それに遡って、「応神」(本当は、百済本宗家沸流系余氏・「残国」兄王こと藤?) または、その後裔が、近畿(河内)に進出した時期である?! いわゆる「倭の五王」の時代で、彼らは、「応神(藤)」の後裔である(→「古市・百舌鳥古墳群」)?!

なお、百済本宗家沸流系余氏は、392 年、当時の高句麗によって滅亡させられた! その後復興された百済(熊津)は、実は温祚系余氏(沸流系余氏の弟筋?) で、筑紫倭国(百済檐魯国? 血筋は、本来は、百済本宗家沸流系余氏であった?) は、「倭の五王」の「済」の時、沸流系余氏から温祚系余氏へと、血統が移っていた?! しかしながら、これも、百済王族(仇台系余→牟氏) 軍君_{男弟王}が、その後の百済王家筋(温祚系余氏) の(筑紫)倭国の磐井(武?) を、物部麤鹿(火)と共に滅ぼした(528→515 年? 「磐井の乱」)?!

ちなみに、百済は、上記の、もう一つの王統(仇台系)があるが、その血統を汲む「継体」こと「軍君・男弟王」が、(筑紫)倭国の檐魯国「豊国倭国」の王統を取得し(494 年?)、その後「磐井の乱」において、筑紫倭国を凌駕したということである(517 年から建元?)?! ただし、筑紫倭国(温祚系余氏)は、そのまま存続したが、件の「白村江の戦い」で、唐・新羅連合軍に敗れて、一時期唐に占領されて?、その後(701 年)、国としては名実共に消滅したということである(「日本国」への併呑!)?!

一方で、その後、「豊国倭国」の一部(仇台系百済+息長氏・秦氏?)は、近畿(近江・越)に移動し、「日本国」を樹立させた?! その中心が「上宮王家→蘇我氏」(「稲目」、実は「欽明」から?)であり、したがって、645 年の「乙巳の変」とは、さしずめ、筑紫倭国(温祚系余氏)の皇統を引き継いでいた「中大兄皇子(天智)」(勢力)が、先に移動していた「豊国倭国」の王統(沸流系→仇台系百

済+息長氏・秦氏?)から出た「上宮王家→蘇我氏」を滅ぼし、本来の筑紫倭国(温祚系余氏)を再興?した事件と言えるのかもしれない?!

ただし、以上のような理解は、まだまだ広くはなっていないであろう?!現時点では、まさしく「珍説・奇説」の類いとされるかもしれない?!しかしながら、そのように理解すると、まさに「二つの倭国」の相互関係が鮮明に見えてくるのであり、現実の「(九州)倭国」と「(近畿)日本国」の同時存在が、一つの線(面?)で捉えられるのである?!いかがであろうか?!

② 改めて、「蘇我氏」とは、いかなる勢力・氏族(部族)であったのか?!出自は、意外にも「物部氏」にある?!

とは言え、以上、このように見てくると、少なくとも二つの、新たな(別の?)疑問が生じてくる?!つまり、一つは、「武内宿禰」の後裔氏族とされる「葛城氏」や「蘇我氏」等の扱いである?「蘇我氏(上宮王家)」が、「欽明(物部目連?→蘇我稲目?)」からスタートしたとするならば、それ以前の「蘇我氏」、引いては、「武内宿禰」後裔氏族全体(の出自)がまったく分からなくなるのである?!そしてまた、それに関わっては、「記紀」が示す、近江・越からの「継体」(彦太尊)の出現(素性)も、説明出来なくなるのである?!

もう一つは、その「蘇我氏」と「物部氏」の関係である?!例えば、「蘇我氏」と「物部氏」は、実際は同族であり、「欽明(物部目連?→蘇我稲目?)」以降の「蘇我氏」が、百済系氏族(王族?)であれば、その兄とされる「物部尾輿」も、当然百済系氏族(王族?)となる(もちろん「鹿火」も?)?!

それでは、あの古代重要氏族の最筆頭である「物部氏」は、一体、どのように理解されればよいのかということである?ある意味、困ったものなのである?!ただし、そこに、何かの「からくり?」があれば、それはそれで解決できることとなる?!

そこで考えられるのが、おそらく「藤原氏」が行ったであろう、「中臣氏」への入籍(そこに系譜をつなげる or 創るということ!)?と同じ手法で(これは、かなりの確度で言えることである!)?、「蘇我氏」、厳密に言えば「欽明(物部目連?→蘇我稲目?)」?が、「葛城諸族」?への入籍を行ったということである?!そしてまた、初発の皇統?を有する「物部氏」と、何らかの関係を結んでいたということである?!だから、彼らは、「上宮王家」を名乗ることが出来たのである(事実、「入鹿」の母は、物部氏であった!)?!

そして、それは、まったくの作り話ではなく、何らかの結びつき、血縁関係が出来ていたからこそ、可能となったということである?!また、ここで言う「物部氏」(九州倭国の方?)も、そういう関係であったということである?!いずれにしても、新たな(創られた?)「蘇我(我、蘇り?)氏」が、そこで生まれたということである?!

具体的に言う（類推する？）と、「葛城諸族」とは、4世紀？に西北部九州に突如出現した「貴国（木／基肆国）の勢力？で、その後（逆かもしれないが？）「葛城地方」に蝟集していた諸族で（「紀ノ川」沿いを往来していた？）、まさに「武内宿禰」後裔としてまとめられた？氏族達であった？！例えば、「葛城襲津彦」も、その中の一人であったろう？！だが、彼らは、実在の諸族であったことは言うまでもない？！そうでなければ、系譜をつなげることが出来ないからである！

では、実際の、その諸族とはどういう氏族であったのか？現時点では、おそらく「ツヌガアラシト（氣比大神）」ないし「天日矛」（二人は同一人物？）の末裔達であり（大加羅／新羅からの渡来とされる！）、その諸族たちは、第8代「孝元天皇」（第10代「崇神」の祖父？）から枝分かれしたとされた？！

だから、「神功皇后」や「応神」の物語は、そことの関わりで生まれたのである？！事実、近畿・大和では、彼ら諸族の政権？が動いていた（「葛城王朝」？）？！そこに、「豊国倭国」の王統（沸流系→仇台系百済＋息長氏・秦氏？）が進出してきたのである？！要するに、「記紀」で言うところの「継体」政権である？！ただし、それは、「九州継体」を「近畿継体」に被せる（継体する！）ことで、一つの線にされたのである？！

ということで、ここでは、例の「欽明」から、本当の？「蘇我氏」が始まるということであるが、その蘇我氏達の先祖とされた（創られた？）「武内宿禰」氏族群は、どのような皇統？であったのであろうか？！だが、当然？それが見破られないように、蘇我氏自体は、「（武内宿禰）→蘇賀石河宿禰→満智宿禰→韓子宿禰→馬背（or 高麗）宿禰→稲目宿禰」というような系譜を与えられている（これについては、『古事記』は触れているが、『日本書紀』は触れていない！なお、ここでの表記は、平安時代初期の『紀氏家牒』によるものである！）？！

ちなみに、このことについては、「稲目」以前の人物は、実在していないというのが通説のようでもある？！ただ、「満智」については、渡来した百済高官の「木満致もくまち／木昴もくら満致」と同一人物ではないかともされている？！とは言え、年代の相違によって、別人とされているようでもある？！しかし、私は、（記紀の）年代の相違はあまり当てにならないとも思うので、それは、本当のことではないかとも思っている？！

③ 「記紀」から見た「蘇我氏」の立場・役割？！一番隠しておきたかった事実？！

さて、いずれにしても、（実際の？）問題は、「稲目」からの「蘇我氏」のあり方（突然の活躍！）であり、しかも、その先祖が、「武内宿禰系」氏族であるとされていることである？！

要は、その「武内宿禰系」氏族と「欽明」以降が、「継体」系統を挟んで一本化されているということであるが、その「武内宿禰系」氏族とは、本当はどういうものであったのか、そこが問われなければいけないということになる？！

しかし、「記紀」は、そのこのところを暈したり、はぐらかしたりしているのである?!であれば、実際は（逆に?）、その「武内宿禰系」氏族に、倭国（倭→大倭?）からの「正統性」が備わっているということにもなる?!

ということで、最初に予期?していたが、実は、この「武内宿禰系」氏族の倭国（倭→大倭_{たい}?）の真相が、「記紀」では消されている?のであり、そこが、「真実の鍵?」を握っているということでもある?!

だから、「記紀」は、そのことを一番隠しておきたかったのであり、全力を挙げて?「蘇我氏」を悪役に仕立て上げていたのである?!何故なら、その「蘇我氏の全貌?」から、自らの出自や、それまでにしでかして来た、数々の陰謀・術策が、白日の下に晒されるからである?!

ここに至って、「記紀」に隠された、百済系王族の「倭国への入り込み」の陰に、伽耶・新羅系の、つまり先着?諸族の「王権所有」の可能性が浮かび上がってくるのであるが、それは、いわゆる「崇神」に託された、吉備の円墳勢力（→物部氏）ではない?!と言うのも、それは、まさに大和建国期（3世紀頃）の話であるからである!否、「崇神」は、そのためのダミーだったのかもしれない?!

それはともかく（残念ながら、ここでは、これ以上踏み込むことは無理でもある!）、では、それは、一体いつ頃のことなのであろうか?常識的には?、例の4世紀?の、西北部九州に突如出現した「貴国（木ノ基肆国）の勢力?」ということになる?!事実、久留米市の「大善寺」や佐賀県の「武雄市」などには、その「武内宿禰」にまつわる話が多々あるようである?!

しかも、彼は、孝元天皇の子?「屋主忍男武雄心命 or 比古布都押之信命」と、神武一行を導いたとされる「菟道彦 or 珍彦（紀直ノ木国造の遠祖）の娘?・山下「影媛」との間に生まれたとされる?!

これらについては、『古事記』と『日本書紀』では、若干親子関係等が違うようであるが、要は、そこで彼は、大和王権?から、謀反の疑いをかけられたということである?!つまり、九州（倭国?）を我が物にしようとしていることを糾弾されたということである?!しかし、よく考えてみると、実は「謀反」ではなく、正当な?王権を敷こうとしていたということではないか?!

もし、そうであれば、この「武内宿禰系」氏族は、近畿・大和の皇統になっていた可能性があり（ちなみに、「武内宿禰」（天日矛ノツヌガアラシト?）自身の最後の拠点（の一つ?）は、「但馬の出石」にあった?!）、「蘇我氏」が、その皇統を引き継いだということであれば、それこそ「藤原氏」は、その存在と関係をひた隠しにしなければいけない?!

余談?ではあるが、「天日矛」という、「太陽信仰」族にあっては、まさしく最高級の名前を彼が有していることは（渡来人とされている人物であっても!）、

彼が、いかに重要な（高貴な？）存在であったかを、ある意味如実に示すものでもある?!また、「伊弉諾・伊邪那美」が用いた「天沼矛^{ぬぼこ}」は、そこから出て来たのかもしれない?!

(3) 謎（陰？）の氏族「秦氏」！「蘇我氏」「息長氏」、そして何より「鴨族」との関係が?!

① 不思議な名前、伝承物?!どちらかと言えば、裏舞台？（経済・文化の面）で活躍した氏族？何故?!

次が、(2)との関わりが深いと見られる？「秦氏」についてである！だが、これもまた、かなりの難問である?!と言うより、ひょっとしたら？、理解が一番厄介な？氏族なのかも知れない?!

と言うのも、彼らは、渡来人（新羅系、厳密には伽耶系？帰化人？）とはされながらも、早くから？北部九州（豊前→秦王国？）に入植し、その後、瀬戸内海、播磨（明石）、河内、大和、そして京都（山城）へ移動し（ただし、移動経路が、単純にそうであったのかどうかは、まだ確定はできない?）、最終的には、藤原氏（桓武）の平安京遷都（794年）を、その経済力で実現させている?!

したがって、その影響力（発言力？）は、甚大なものであったことが、容易に？推測されるが、もう一つ、そこでは、鴨族（の主力?→「建角身命」→「賀茂県主」＝下鴨神社/上賀茂神社）と繋がったりして（経済的支援?）、政治の表舞台ではなく、どちらかと言えば、裏舞台？（経済・文化の面）で活躍した氏族のように見えるのである！

例えば、「伏見稻荷大社（主祭神は「宇迦之御魂^{うかのみたま}（倉稻魂）神）」、そして、香川の「金刀比羅宮」といった、全国の名立たる「稻荷神社」の創建、あるいは「能楽」等への貢献もある（かの「世阿弥」は、秦氏の末裔とも言われている?）!「羽田、畑、波田等」の名前も、すべて、この「秦氏」の系列（末裔）だともされている！

とにかく、この秦氏は、朝鮮半島からの大量渡来（移民?）、そして、その後の、蘇我氏（聖徳太子?）、あるいは欽明天皇への献身的協力も（なかでも「秦河勝」!）、古代史解明にとっては、避けては通れない氏族なのである?!それ故に?、謎（陰?）もまた多い氏族ということでもあるが、ポイントは、何故、歴史（政権）の表舞台に顔を出していないかということでもある?!そこには、何か、大きな原因（背景）があったのであろうか?!

ところで、その「秦氏」所縁の地で、最も著名なのが、京都の「太秦^{うずまさ}」であろう（本当に奇妙な？読みである!その名前の由来も示されているが、それ自体は噴飯物?である?!）!そこには、例の聖徳太子所縁?の「広隆寺」（上宮王院）があり（「弥勒菩薩半跏思惟像」で有名!蜂岡寺^{はちおかでら}、秦公寺^{はたのきみでら}、太秦寺などの別称がある!）、秦氏の末裔が、聖徳太子（→蘇我入鹿?）信仰の担い手で

あり？、広隆寺は、そのための「鎮魂の寺」ともされている（本尊・聖徳太子三十三歳像？この像に対して、歴代天皇は即位儀礼に用いた服を贈り続けており、あたかも、みずからの即位をはばかり、聖徳太子に即位してもらうかのような不思議な伝統があるらしい←関裕二氏）？！

また、その近くには、「木嶋坐このしまにます天照御魂神社」（「木嶋神社」/「蚕の社」とも呼ばれる！）や「大酒おおさけ神社」もあり、後者は、神仏分離政策に伴って、広隆寺境内から現社地へ遷座されたものとされている。さらには、右京区梅津の「梅宮大社」、西京区嵐山の「松尾まつのお大社」（ともに「酒造の神」）も、この秦氏関係の神社とされている。

なお、「木嶋坐天照御魂神社」は、古くから「祈雨の神」として信仰されており、境内には、珍しい「三柱鳥居みはしらとりい」（三ツ鳥居/三面鳥居/三角鳥居）があることで知られる！これについては、ユダヤ、あるいは中国における「景教（キリスト教ネストリウス派）」の影響があるとも見られているようであるが、これらは、まさしく「秦氏」がもたらしたものであろう？！

さらに、これに関しては、他にも、例えば「伊勢神宮」でも、そうしたユダヤ的、そして、元々はシュメール的な要素が見られるともいう（→16 菊花紋、カゴメ（六芒星/ダビデ）紋 等？）？！そこでは、「消えた、イスラエルの 12 支族」との関連が示唆されるが、まだまだ、その真相は定かではない？！非常に興味をそそられる話であるが、今後の研究（の成果）？に委ねる他ない！

② 改めて、「秦氏」とは、いかなる勢力・氏族であったのか？！九州（秦王国→豊国）から近畿に移動？！

そんな、ある意味とんでもない？秦氏であるが、改めて、彼らは、朝鮮半島経由ではあったが、漢民族系の帰化人で、秦(中国)から、我が国に渡来したともされる（秦の「始皇帝」の末裔？←『新撰姓氏録』）？！

最終的には？、上にも挙げたように、葛野郡（現・京都市右京区南部・西京区あたり）を本拠地とし、養蚕、機織、酒造、治水などの技術をもった部族であったわけであるが、注目されるのは、上記の「木嶋坐天照御魂神社」の祭神である！

その祭神は、「天照国照天火明命」（天火明命）、「天照大神」、「天日神命」などとされているようであるが、いずれにしても、それらは、すべて「太陽神」である（本来は一つか？）？！

ただし、これらの祭神をもつ神社の多くには、現在の祭神が「天火明命」（尾張氏祖神？）とされることに基づき、その神を、特に「尾張氏」の奉斎神とする説もあり、その説の中で、この地には、元々尾張氏系の人々がいて、「天照御魂みむすび神」を奉斎していたが、「秦氏」の進出・開拓とともに、その在地系祭祀が継承されたともされているようである？！ならば、「秦氏」は、その「尾張氏」

を駆逐？したのかということにもなる?!

それはともかく、ここで興味深いのは、その神社境内の「三柱鳥居」の方位が、稲荷山・松尾山の冬至線、比叡山四明岳・愛宕山（賀茂神社）の夏至線に関係すると見られており、そこの境内の「元糺^{もとただす}の池」（現在は涸れているが、かつては湧水が豊富であったといい、現在も、夏の土用の丑の日に、この泉に手足を浸すと、諸病に良いとして、信仰されているという!）に日が差すという構造から、その祭神は、朝鮮半島の「日光感精型」の信仰に基づく、半島系の「太陽神」（日の御子）とする説もあるということである?!

その他、「御魂」という神名から、境内の湧水によって穀物を生成する、「ムスヒの神」とする説もあるとされる?!

さて、改めて、この「元糺の池」の中に、件の「三柱鳥居」が建てられているわけであるが、これは、柱3本を三角形に組み、三方から、中心の神座を拝することを可能とする、珍しい形式の鳥居で、「京都三鳥居」の1つに数えられているということである。

その中央の神座は、円錐形に小石を積み、中心に御幣を立てて依代^{よりしろ}としたものであるということであるが、この鳥居の起源等は、詳らかでなく、秦氏の聖地である双ヶ丘・松尾山（「松尾大社」神体山）・稲荷山（「伏見稲荷大社」神体山）の遥拝方位を表したとする説などがあるらしい?!

だが、実は、「賀茂（県）氏」の下鴨神社の森にも、「糺の森」と呼ばれるものがあり、ここに、「秦氏」と「賀茂氏」の関係が垣間見れるのである?!その証拠として、秦氏の系図を示した「本系帳」には、

「昔々、秦氏の娘が葛野川で洗濯をしていた。すると、上流から矢が一本流れてきた。彼女はそれを持って帰り、戸上に刺しておいた。やがて、娘はひとりでに懐妊。男の子を産んだ。あるとき宴会を開き、秦氏の祖父母が男の子に向かって、父親に酒を飲ませよと言った。すると、男の子は戸上の矢を指差し、これすなわち『雷公』といい、そのまま天井をつきぬけて、天に昇っていった。」

これにより、鴨上社は「別雷神」、鴨下社は「御祖神」と称され、戸上の矢は、「松尾大明神（雷公）」であるとされたということである（この辺りは、ネット情報による!）

多分？これは、「賀茂県主」の男が、「秦氏」の養子（娘婿）になったことを指す逸話であろうが（それが、伏見稲荷社「祭主・秦伊侶具^{いろうぐ}」／松尾稲荷大社「祭主・秦都理^{つり}」となっている?!）、これは、まさしく「秦氏」と「賀茂氏」の関係を示すものである?!つまり、両者は、京都（山城）で、固い縁戚関係？を結んだということである?!

とは言え、よく考えてみたら、この話は、大和？での、「神武」の正后？の「姫蹈鞴五十鈴^{ひめたたらいすず}媛」が、「三嶋溝杭」（大山祇?）の娘（勢夜陀多良比

売せやたらひめ)が、上流から流れてきた「丹塗り矢(大物主神?)」に感精して生んだ子であるとされているが、そのモチーフと、まさに「瓜二つ」であることが分かる?!

そうなると、この「丹塗り矢」伝承は、本来は、「鴨族(賀茂氏)」にあったのではないか?!何故なら、その二つの物語?に関係しているのは、「鴨族(賀茂氏)」であるからである?!しかも、それは、「丹生」(水銀)採掘族の伝承である?!

③「記紀」から見た「秦氏」の立場・役割?!あの「乙巳の変(645年)」に関わっていた?秦河勝?!

ということで、話は面白くなってきた?が、紙幅の都合もあり、ここでは、この辺りで閉じなければいけない!だが、最後に、どうしても、もうひとつ気になってくるのが、遠く離れた九州豊前の「秦王国」の存在である(そこには、「秦氏」が、数多く蟄集していた!)?!

すなわち、この「秦氏」の、改めての謎は、あの「物部氏」と同じように、その根拠地?が、九州(北東部)と近畿(河内)にあるということである?!どちらが先かと言えば、多分前者が先だと思われるが(地勢的に見て?)、ここにも「二つの倭国?」の影?が見え隠れするのでもある?!

翻って、この「秦氏」は、5世紀末(実際は3世紀末?)に、伽耶(多分?辰韓/月氏国?)から、氏の祖「弓月の君」が、120(or127)県の民を率いて大量渡来したことから始まるとされているが、要は、「豊前の秦氏」と「畿内の秦氏」が、一体どのような関係にあったのかということである?!

しかも、「豊前の秦氏」は、多分、北部九州で「息長氏」と合体?したとも考えられる(この「息長氏」との関係は、次で、改めて取り上げたい!)?!

いずれにしても、「記紀」は、「物部氏」や「蘇我氏」、さらには「尾張氏」や「海部氏」もそうであるが、「秦氏」、そして「賀茂氏(族)」の存在、そして、彼らの関係を真正面から披瀝することが出来なかった?!

つまり、隠している?否、彼らに、大いに助力(経済的支援?)をもらったにも拘らず、裏切ったり、尻尾切り?ををしたりして、彼らを歴史の表舞台に登場させることをしなかった?!逆に言えば、彼らの方が、氏族・勢力としての正統性・正当性を有していたのかもしれない(貢献度が高いということ?)?!

ここでは、「秦氏」関係の話題(証拠?)を一つ挙げておくと、かの「秦河勝」について、ある意味恐ろしい?推測(事実?)がある!それは、例の関裕二氏のものであるが、645年の「大化の改新(正確には「乙巳の変」!))」において、「中大兄皇子」と「中臣鎌足」らが、時の実力者「蘇我入鹿」を惨殺?した事件である!実は、その実行犯が、他にもない「秦河勝」であったのではないかということである(ただし、その実行犯が、具体的に誰であったかは示されていない!ただ、「韓人」とだけ示されている!しかし、「秦氏」であれば、当然、そのよう

に表記することが可能である！)?!

すなわち、律令国家づくりに邁進する蘇我氏の動きを(「記紀」では、彼らの「専横」とされてはいるが、近年では、「そうしたものではなかった!」というような評価に変わりつつある!)、時の守旧派勢力(藤原氏、秦氏等?)が阻もうとしたのが、その事件であり、その実行犯が「秦河勝」で、彼は、これを境に、歴史の表舞台から姿を消し、播磨の坂越に身を隠したたのではないかということである?!

秦氏が、経済的権益を大いに得ていたことは間違いないことであるが、ある時「秦河勝」が、それまで支援してきた「蘇我氏(本宗家)」を裏切って、「中大兄皇子」と「中臣鎌足」側についたのではないかということである?!

ちなみに、それをきっかけとして生まれた?「聖徳太子信仰(創出?)」の背景には、そうした経緯(真相?)があり、時の政権側には、かなりの「後ろめたさ」があり、

そして、その社会的非難(「崇り」?)に抗うために、藤原氏や、他ならぬ秦氏が、並々ならぬ努力(懺悔?)を惜しまなかった事例は、他にも数限りなく多い(「法隆寺」等の建設!これもまた、「関裕二氏」の所説に拠るが!)?!

(4) もう一つの、謎?の氏族「息長氏」!彼らは、どこから来て、何をしたのか?!

①「神功皇后(息長帯姫)」と「応神」、そして「継体」を創り出した?「豊前→秦王国?」からの新参勢力?!

前号(3)は、結果的には、極めて不十分に終わった「秦氏」の解明?であったが、ここで取り上げる「息長氏」は、その「秦氏」と密接な関わりを有し(5世紀末?北東部九州?から、一緒に畿内へ進出した?)、同じく、もう一つの、謎?の氏族と目される勢力であることは間違いない?!

すなわち、「息長氏」は、「神功皇后(息長帯姫)」、「応神」、「継体」、そして「欽明」へと続く政権を現出させ?、その縁戚者として(子女を后妃に上げる?)、重要な役割(貢献)を果たしたということである(だから、『新撰姓氏録』では、いわゆる「皇別」とされる!)?!

その意味でも、双方の氏族は、まさにセット(コンビ?)で把握した方がよいということでもあるが、一方で、そのように捉えると、まさに「応神」から「継体」、そして「欽明」、さらには「天智」へと続く「現皇室の系流」が、ある意味スムーズに理解されるということである?!

要は、「秦氏」と「息長氏」が、ある時期からの「大和政権」を、陰(裏?)で支えて(動かして?)きたということであるが、文献的には、関係する記述が少なく、謎の氏族とも言われている次第であるということである?!

さて、現在、この「息長氏」は、近江国(現在の滋賀県)坂田郡(現在の米原

市のほとんどと長浜市の一部）を本拠地とした古代豪族であり（とするのが一般的
な見解？）、「息長古墳群」（5世紀末～6世紀後半）を残した豪族であったことは
確かである！

その居住地（本拠地）は、美濃・越への交通の要衝でもあり、天野川河口に
ある朝妻津により、大津・琵琶湖北岸の塩津とも繋がっていた。ただし、同氏
の末裔が、河内国に、近世まで在住しており、その地が、本拠地であったとい
う説もあり、また、播磨・吉備などにも、「息長」を名に持つ人物がおり、播
磨・吉備が本拠地であった可能性もあるらしい？！

いずれにしても、そうした「息長」姓が、各地に幾つかあるということは、
彼らが、互いの移動の前後はともかく、それらの地に勢力を張っていたことは、
疑いようのない事実だということになる？！

とは言え、やはり私は、その最初の出発点は、北東部九州（豊前）の香春岳
周辺（『隋書』に言う秦王国？）が、一番相応しいと受け止めている！何故なら、
そこには「香春神社」というものがあり、「辛国息長大姫大目からくにおきながおおひめ
おおめ命」という、極めて重要な？祭神（人物→女性？）が祀られているからであ
る（多分彼女が、「神功皇后」のモデルだったのではないか？）？！

しかも、この「息長（息が長い？）」の名称発祥の由来は、上古からの鍛冶に
関する技術から生じたとみられる（実際、香春岳周辺は銅の採掘場でもあっ
た！）？！

だが、そこに、「辛国（韓国）」という名が冠されていることから分かるよ
うに、そこの住民（の先祖）は、朝鮮半島南部（加羅/伽耶）からということでは
ある（ただし、そこは、一般に「新羅系」とされている！伽耶滅亡後、そこが新羅と
なっているからか？）？！

その大いなるヒント（根拠？）が、実は、例の「磐井の乱」（通説では、「525年」
とされているが、実際は「515年」であった？）の際に、息長氏系の「継体」が「物
部麿鹿火」に言ったという、「（勝利後は）、自分は、長門以東を統治する！おま
え（麿鹿火）は、筑紫以西を統治せよ！」という言質である？！

つまり、それは、「継体勢力」（息長氏+秦氏？）が東（近畿）に移り、九州倭
国は、豊国倭国（九州物部氏）が統治するという形になったというように取れる
ということである？！要するに、その「磐井の乱」に前後して？、北東部九州の
「息長氏」や「秦氏」が、後の「継体勢力」として、近畿に移動してきたとい
うことである？！

事実、その頃の近畿（河内）への影響・流入の痕跡（事実？）として、加羅系
から百済系への須恵器の変化、河内平野（潟）の大規模灌漑、そして、古市、
百舌鳥の古墳群（「群集墳」→菅田御廟山陵、大仙陵）の出現等がある？！ここに、
以前にも述べたように、豊国倭国（仇台系百済+息長氏／秦氏）の、筑紫（九州）

倭国からの離脱（乗っ取り？）と近畿（河内・近江）への進出があるということである？！

そしてまた、そこに、「軍君/男弟王→オヲド/彦太尊」への「継体（すり替え？）」（←「継体二人説」）と、一方で、倭国皇統（物部麤鹿火→尾輿→上宮王家→蘇我氏？）の九州（筑紫）残存、そして、近畿移動?!という形が出来上がったということである？！

② 改めて、「息長氏」とは、いかなる勢力・氏族（部族）であったのか？！

ところで、「記紀」によれば、この「息長氏」は、第15代応神天皇の皇子「若野毛二俣王」の子・「意富富杼^{おおほど}王」を祖とするとされている?!ただし、かの「息長帯姫（神功皇后）」や、その父「息長宿禰王」（丹波の「彦坐王」の後裔!）の名からすれば、かなり以前からの氏族（豪族?）であったかもしれない?!

いずれにしても、その「意富富杼王」は、件の「継体（オヲド）」（通常のそれ!）の祖先（曾祖父?）なのであるが、その在地（近江）にある「山津照神社」（境内に「山津照神社古墳」あり）の主祭神が「国常立命」（?←意富富杼王）とされ、いわゆる「万世一系」の中核?ともされているように見える（「記紀」において、著しく配慮されているということか?）?!

また、その姓^{かばね}は、公（または君^{きみ}）であり、同族に、「三国公」（→三国真人）・坂田公（→坂田真人）・酒人公（→酒人真人）などがある!なお、「真人」は、天武天皇の時の「八色^{やくさ}の姓」の中で、氏族の最高位の名称であるとされるが、それが、この「息長氏」関係の氏族に与えられているのである?!

とにかく、「息長氏」は、直接的には、九州からの?「応神天皇」と結びついているのであるが、先にも述べたように、彼らの出身地（本拠地）は、北東部九州（豊前田川）の「香春岳」周辺にあったことは間違いない?!

何故なら、繰り返すが、そこにある「香春神社」（旧社）の祭神として祭られている「辛国息長大姫大目命（豊比売命→神功皇后?）」は、近くの「英彦山」にも祠があったとされる「忍骨^{おしほね}命」の母親ともされており（天孫「瓊瓊杵尊」の長子?「忍穗耳^{おしほみみ}命」を連想させる?）、「記紀」における万世一系のなかに、（自らの意向で?）それとなく組み込まされているようにも思えるからである?!

ちなみに、例の「延喜式神名帳」に記載されている豊前国の神社は六座であるらしいが、その半分の三座が、「香春神社」にあったということである?!この辺りの伝承（痕跡?）も、「息長氏」の存在の大きさを、大いに彷彿とさせるのである?!

なお、残りの三座（「辛国息長大姫大目神社」「忍骨神社」「豊比咩神社」）は、すべて「宇佐神宮」内にあるようであるが、もともと「香春三山」（一ノ岳・二ノ岳・三ノ岳）の山頂に、それぞれあったということである?!

すなわち、和銅2年（709年）に、山頂の三社を現在地に移設したのが、現在の香春神社で、当神社は、古来より「宇佐神宮」と共に、豊前国を代表する大神社だったということである（ここに、改めて「宇佐」との関係も見えてくる?!）！

そして、さらに、平安時代初期における「香春神社」の社格は非常に高くなり、現在豊前国の一宮は、一般的には「宇佐神宮」とされているが、古い資料の中には、「香春神社」を一宮と記しているものもあるということである。

宮司は代々、「赤染氏」「鶴賀氏」が務めているが、その「鶴賀氏」は、越の「角鹿つぬが→敦賀つるが」（→ツヌガアラシト＝氣比大神）と直結している（彼らの主力？が、「越」に移動したことは、これによっても明らかである！）?!

参考までに、その社前には、

「第一座辛国息長大姫大目命は神代に唐土の経営に渡らせ給比、崇神天皇の御代に帰座せられ、豊前国鷹羽郡鹿原郷の第一の岳に鎮まり給ひ、第二座忍骨命は、天津日大御神の御子にて、其の荒魂は第二の岳に現示せらる。第三座豊比売命は、神武天皇の外祖母、住吉大明神の御母にして、第三の岳に鎮まり給ふ、各々三神三峰に鎮座し、香春三所大明神と称し崇め奉りしなり。」

と書かれているらしい。

③ 「記紀」から見た「息長氏」の立場・役割?!彼らが、「応神」と「継体」を結んだ?!

それについては、何とも怪しげな？書きっぷりであるが、やはりここきて、この「息長氏」の立場や役割が、非常に大きなものであり（事実であった?!）、だからこそ?、「記紀」は、それを、どうしても表に出せなかった?その代わり?「神功皇后」という「ビッグパーソン」を創り上げた（もちろん、そのモデルとなる人物はいた!つまり、「辛国息長大姫大目命」→「息長帯姫」→おそらく「邪馬台国」の「卑弥呼」and/or「台与」を連想させる?）?!

そして、嫡系の「仲哀天皇」の皇后という立場で（万世一系の皇統譜に入れ込むため?）、「武内宿禰」や「住吉大神」との関係を示し（それが事実であったため?）、そこに、重要な存在の「応神天皇」を、彼女（と仲哀の?）の子としたのである!まさに、「応神」以降の、「百済王族」による「大和（倭国→日本国）王権」の橋渡しの役割を、他ならぬ「息長氏」が果たした（ということを示している?）ということである?!

ただし、それは、記紀編纂時の政権（持統・藤原政権）が、そのように潤色（捏造?）したということであって、史実（政権の正統性?）は、「息長氏（「神功皇后」）」、そして、「武内宿禰」「住吉大神」の側にあったのかもしれない?!だから、そのこと自体は、秘匿されなければならなかった?!

こうしてみると、「武内宿禰」は、多分?その「息長氏」の頭領?であった「天日矛」（特定の個人ではなかったかもしれない?）であり、その分身?が、（出

雲と関わる?)「事代主」というような形で、「記紀」に組み入れられているのではないか?!もちろん、それが、「住吉大神」というような祭神にも昇華されていったものとも考えられる(→関裕二説?)?!

すなわち、彼らの後裔・関係勢力であった「息長氏」や「秦氏」は、河内・近江・越等に移動し、そこでの同族及び協力者達(大伴金村・巨勢男人等?)と組んで、「オヲド王/彦太尊」を擁立し、河内・近江、そして大和に進出していった?!それが、いわゆる「記紀」が言う「継体天皇」であり、その治世である?!

一方、残った「筑紫(九州)倭国」は、最初「磐井」(「武」?)の子の「葛子」が継いだ、その後、「荒山大連」(「物部鹿火」の類族?あるいは本人?)の子の「尾輿」に移り、さらにその後、その実権は、弟の「目連^{めのむらじ}」(蘇我稻目?→欽明・ワカタケル大王?!)に移り、物部/蘇我による倭国皇統(温祚系百済余氏)が、九州に残った形となった?!

上宮王家と呼ばれる「一族」が出てきたのも、ここからである?!実は、隋に使いを送った(600年)、有名な「日出处天子・天足彦^{あまたらしひこ}」も、この王である(決して「聖徳太子」ではない!)?!ただし、彼らも、後に近畿に移動した?!

末尾ではあるが、捉えようによっては?、誠に驚天動地のような話(情報?)を入手した?!それは、先程の「香春神社」のことであるが、その社前に、「第三座豊比売命は、神武天皇の外祖母、住吉大明神の御母にして」という説明があるそうである?!もし、それが、「記紀」が描く「日向三代」の内実?を示すものであるとしたら、ある意味とんでもない自白?であることになるのである?!

と言うのも、そうすると、「豊比売命」は「豊玉姫」、すなわち「ヒコホホデミ(山幸彦)」の後であり(彼女は、「ワニ族→和爾氏?」であった?!)、そして、彼女が、「住吉大明神の御母」であれば、「住吉大明神(住吉大神)」とは、「ウガヤフキアエズ」ということになる(ちなみに、彼は、「豊玉姫」の妹「玉依姫(叔母)」を妃とした!「神武」等の母である!)?!単純に受け止めれば、これは、まことに不思議な(意味不明な?)こととなるのである?!

何故なら、今のところ、あっても(つまり、何らかの作為があっても?)、住吉大神=事代主=武内宿禰=天日矛(ツヌガアラシト?)としか考えられないのであり、両者(「ウガヤフキアエズ」と「住吉大神」等)は別人である(はずである?)?!したがって、彼らが同一人物であるということになれば、どちらかが、さらに作想的に創作されたこととなるということでもある?!

その場合、誰が、何のために、そうしたかであるが、考えられるのは、「息長氏」あるいは「記紀編纂者側」が、自らの?「息長帯姫(神功皇后)」を、邪馬台国の「卑弥呼」あるいは「台与」(こちらの可能性が大きい?)に同定させるために、そうしたということではある?!

(5) 改めて、「初期大和王権」のキーマン（主役？）は賀茂氏（族）?!ただし…?!

① 「神武（皇祖?）」、そして「三輪氏」「秦氏」と関わる「賀茂氏（族）」?!彼らは、何故そうなっているのか?!

さて、ここまで、私の考える?古代史の重要氏族を追ってきて（またしても、不十分ではあったが?）、改めて、「賀茂氏（族）」は、絶対に押さえておかなければいけない?!「(初期)大和王権」のキーマン的存在（主役?）は、実は、賀茂氏（族）だったのではないかと?!そんな思いが、改めて強く沸き起こっている?!

と言うのも、標記のように、賀茂氏（族）は、「神武（皇祖?）」、そして「三輪／大神_{おおみわ}氏」（大物主勢力）、さらには、謎の?「秦氏」「息長氏」と、強くつながっていると思われるからである?!

ちなみに、以前、私は、「再度?『賀茂（加茂・鴨・迦毛）族』を追う?!もう一つの?『大和建国』の功労者?!」として、「賀茂（加茂・鴨・迦毛）族」は、絶対に「大和建国」に参画している?!でも、その「様相は複雑怪奇?!」として、「(カモ)タケツヌミ」と「アジスキタカヒコネ（迦毛大神）」と「事代主」の関係を見た?!そこでは、「『大和葛城』が、すべてを解き明かす?!」として、そこにおける「製鉄族（山の民?）」と「海人族（海の民?）」の合流・合体、そして分裂?!」があったとして、彼らの関係を探った!

さらに、「続いて、『賀茂（加茂・鴨・迦毛）族』と『秦氏』、そして『息長氏』の関係を追う?!」として、「俄然怪しくなったきた?『賀茂（加茂・鴨・迦毛）族』と『秦氏』、そして『息長氏』?!果たしてその関係は?!」ということで、「藤原氏の、『万世一系』の皇統譜作成（捏造?）」にとって、彼らの存在（活躍）は目障り（不都合）であった?!」

そして、「『筑豊・豊前』に広がる『秦（王国）』の勢力、そして、そこに『新羅（←辰韓）』の影?がちらつく?!」、「『秦氏』『息長氏』、『豊前』→『播磨』『但馬（出石神社）』『越』、そして→『近江』『河内』『磯城』へ?!」、「『乙巳の変』→『聖徳太子信仰』→政治の表舞台に立てなかった?『秦氏』、そして『カモ族』『息長氏』?!」ということになったのである!

要は、「秦氏」「賀茂氏」「息長氏」が、まさに「大和王権」の、真実の鍵を握っているということであり、もちろん、そのことが、ここ（「重要氏族から見た古代史の真相?!」）でも、大きな真相解明の骨格となるのであるが、まだまだ、その具体に迫り着いているわけでは決してない?!否、むしろ新たな疑問（謎）も、出て来ている次第なのである?!

その最大の「新たな疑問（謎）?」が、端的に、「藤原氏」はともかく、その「藤原氏」が、ある意味全力を挙げて?、その存在と関係をもみ消そう（否定しよう?）とした?「物部氏」と「蘇我氏」のことであるが、その両者の素性（役割?）が、この賀茂氏（族）の素性（役割?）からもたらされたのではない

かということである?!

どういふことかと言うと、「物部氏」と「蘇我氏」の両者とも、いわゆる「古代豪族」で、まさに「大和王権」の中心であった（ように示されている?）わけであるが、実は、彼らも、「藤原氏」と同じ「百済系」（百済を経由してきたという意味?も含めて!）であったということである?!

そして、ここがミソであるが、その双方の氏族の祖先を、3世紀以降の、実際の大和王権を樹立・形成してきた、別の氏族・勢力の系統に潜り込ませ（組入れ?）、その双方を、古代から続く名門として位置づけているのではないかということである?!

そして、その、別の氏族・勢力が、他ならぬ賀茂氏（族）なのではないかということである?!

② 改めて、「賀茂氏（族）」とは、いかなる勢力・氏族（部族）であったのか?!

ところで、そうすると、我が国古代史の解明において、「物部氏」と「蘇我氏」は、事実上は、百済からの?後発渡来（→「倭の五王」?）の氏族・勢力ということになり、それ以前の、彼らの存在（活躍?）は、別な角度（氏族・勢力）からの分析・理解を求めるものとなるということになる?!

つまり、それ以前の存在（活躍?）とは、彼らが、その系譜に結び付けた氏族・勢力の存在（活躍?）ということであり、その限りにおける分析・解釈が必要だということである?!

例えば、物部氏の場合は、「饒速日→ウマシマデ（ジ）」から「物部麁鹿火」まで?の系譜と実績、そして、「蘇我氏」の場合は、「蘇我石川宿禰」→「蘇我満智」（「木笏もくら満致」?（←木笏氏））」から「高麗こま」まで?の系譜と実績である?!

しかるに、今のところ、物部氏（「物部麁鹿火」まで?）のそれは、百済本国と北部九州（とりわけ遠賀川流域?）、蘇我氏（「高麗」まで?）のそれは、百済本国と北部九州（とりわけ嘉瀬川流域?）のそれというようにも考えられるが、要は、「欽明期」から、百済系の「物部・蘇我体制」が確立されたということである?!

とにかく、このように捉えることによって、「九州倭国」と「近畿倭国（→「日本国」）」の並立・統合（移動）、そこにおける「物部氏」「蘇我氏」の介在、そして、その関係を、無理なく?理解することができるということである?!

なお、「藤原氏」が、例の「中臣氏」に入り込んだ?ということは、以前に確認したことである?!

とは言え、改めてどうして、まさに、このような大胆な考察（推理?）を為すことが出来るのかと、ある種の失笑?まで買うのかもしれないが、「系譜入籍（捏造?）」については、同じ百済系?の「藤原氏」がそうしているのであれば、「物部氏」や「蘇我氏」だって、そうしているのかもしれないのである?!

彼らも、いわゆる「渡来系」であったことは間違いなく（ただし、古代氏族・勢力は、いずれも、ある意味、何らかのそれであることは言うまでもない!）、その「渡来系」が、自らを、上古より続く、この国における氏族・勢力とするためには、一方では、先來・先住の氏族・勢力に、系譜上乘っかる必要があった?!

もちろん、「継体天皇」のように?、人質→養子縁組・婚姻等によって、正当に（正統に?）その系譜に入り込むこともあった?!

蛇足ながら?、記紀、とりわけ「日本書紀」においては、あまり目立たない（事績の無い?裏を返せば、隠されている、量されている?）「天皇」や「人物」の方が、実際には、逆に?重要な人物であったというようなことは、存外真実なのかもしれない?!

その最たる人物が、「日本書紀」編纂の最大の黒幕であった「藤原不比等」であることは、既に多くの人の指摘するところであろう?!前面に出た「書き物(人物)」は、そういう意味では、かなりの「曲者」なのでもある?!すなわち、いくらでも、改竄・脚色が出来るということである?!

ということで、ここで改めて、「賀茂氏(族)」とは、いかなる氏族・勢力(部族)であったのか?!すなわち、その存在(活躍?)、他の氏族・勢力の、彼らとの関わりが気になってくるであろう!

例えば、その「カモ族」の始祖?とされる「(カモ)建角身タケツヌミ→八咫鳥ヤタガラス」は、南九州の「曾」の出身であるとか、あるいは、彼がそのモデルとなっていると思われる?「神武」の東征先の重要寄港地?「吉備」には、「カモ」の名が群集している?!そしてまた、奈良、京都をはじめ、全国各地に「カモ」の名が残されている?!

さらにまた、祭祀に関わる「日」と「火」の関係から、大和(三輪)・伊勢・丹後、そして出雲の関係が浮かび上がってくるのであるが、実は、吉備の「賀茂西遺跡」が、「手焙型土器」(「火」の祭祀用?)の発祥の地(「カモ族」の出発地?)であった?!

したがって、本来(最初?)の「火」の勢力が、この「カモ族」であった、あるいは、その「カモ族」を中心として、「火」の勢力(→前方後方墳勢力?)が形作られたということであった?!

③ 「記紀」から見た、「賀茂氏(族)」の立場・役割?!

そこで改めて、以前私が想定したように、初代「神武」が、後の「応神」の創作?のために必要とされた仮想の天皇であり、そのモデル(ダミー?)が、「カモタケツヌミ(八咫鳥)」であったとすれば、事実上は、彼(→賀茂氏(族))が、実際の(記紀に示された)「神武」の事績を担ったことになる?!

つまり、(南部)九州から、宇佐→(遠賀)→吉備経由で、「東征(実際は移民?)」してきた「賀茂氏(族)」が、大和「葛城」の地で、まずは「三輪氏族」(「出雲

（大國主／オオナムチ命）」と結びつけられた？「大物主」勢力）と合流・合体し（→葛城王朝？）、そこに、後から乗り込んで来た「饒速日→吉備（物部？）勢力」と、三輪山（纏向／三輪王朝）で大同団結し、それが、まさに「（初期）大和王権」を形づくることになったということである？！

ここでは、その中心（結び役→主役？）となったのが、「賀茂氏（族）」であったということであるが、一方で、その「賀茂氏（族）」は、その後の「大和王権」の推移の中で、協力者？という面（→皇別）と敵対者？という面（→地祇）に分かれた（大きく二つに分かれたということ?!）?!

その理由（原因）は、おそらく、近畿に移動してきた「吉備・饒速日勢力」（物部氏？）の一部（饒速日の子の「ウマシマデ（ジ）」勢力か？）が、他の勢力と組んで、賀茂・三輪政権から離脱した（裏切った?）?!そして、彼らが、纏向に、新たに「前方後円墳勢力」を形成した?!

もちろん、そこには、「ワニ族」（富／多氏→前方後円墳勢力?）から離反した「尾張氏」が合流したということである?!

要するに、この流れは、「記紀」からすれば、「カモ族」は、大和建国に携わった氏族・勢力ではあったが、その後「皇別」、そして、「神別」の「天神系」と「地祇系」に分裂したということになるが、その顛末?が、「（カモ）タケツヌミ」と「アジスキタカヒコネ（迦毛大神）」、そして「事代主神（恵比寿様?）」の関係ということにもなるのである?!

ただし、彼らは、いずれも「カモ族」であったことは間違いないのである?!だが、まだまだ、その詳細は、今一つスッキリとしない?!だから、上手く描けないのでもある?!

とは言え、例えば、「三輪氏族（大物主系）」に属する「地祇系」の賀茂氏（→「葛城系賀茂氏」）は、第10代天皇「崇神」の時に登場してくる「大田田（多直おおただ?）根子」の孫「大鴨積（おおかもつみ）」を始祖とし、奈良盆地の西の大和国葛上郡鴨（現在の奈良県御所市）を本拠地とするとされるが、これは、「三輪氏族」と「カモ族」（の一派?）が、大和葛城で合流・合体?して出来た氏族・勢力ということであろう?!

すなわち、ある時期からそこに蟄集していた「（出雲系?）カモ族」は、先に?、山背（城）に向かっていた「賀茂県主系」（こちらは、後に、「秦氏」や「息長氏」と組んだことは間違いなし→上賀茂神社・下鴨神社!）と、葛城に残った「賀茂君・朝臣系」（→高鴨神社・八重事代主神社等）に分かれた?!

その後、葛城に残った勢力は、「三輪氏（大物主神）」と組んで「大和建国」に参画したが、何らかの理由で、「事代主神」系と「アジスキタカヒコネ」系に分かれた（多分?、「事代主神」系の方が積極的に参画した?!）?!

ちなみに、大和（橿原）で「神武」の皇后となった「媛蹈鞬五十鈴媛（ひめたたら

いすずひめ命」は、三輪山（「大物主神」）を祭る巫女だったと思われるが、その婚姻は、「神武」（賀茂氏（族）？）が、大和の出雲勢力（「大物主神」→「事代主神」系）と合流・合体？したことを物語っている?!そして、その皇后の出身が、製鉄と深い関係がある氏族（出雲族？）だったということになる?!

その意味で、「大和」は、「製鉄族（山の民）」と「海人族（海の民）」の合流・合体の産物であった?!その「海人族（海の民）」が、まさに「賀茂氏（族）」であったということでもある?!

この間、「吉備」の（を經由してきた?）「饒速日」（物部?）勢力（後から来た?「伽耶」勢力?太陽信仰族?→後の「崇神」に投影?!）が、先住の「葛城勢力」（「事代主系」と「アジスキタカヒコネ系」）を分断?させ（逆に、この時点で、両系統が出雲と結びつけられたのかも?）、「饒速日」の子の「ウマシマデ（ジ）」が、「大和王権」（「物部氏族」の政権?）を確立させたということでもある?!

だから、「賀茂県主系」は、山背（城）に向かった（逃げた?）?!

(6) 近畿倭国（日本国）を変えた?「宗像氏」、そして、「水沼（三瀦・水間）君氏」?!

①「宗像氏」、そして、それを支えた?「水沼（三瀦・水間）君氏」?!果たして、その関係は?!

次に挙げるのが、標記の「宗像氏」、そして「三沼（三瀦・水間）君氏」である!だが、こちらは、どういう訳か?、いわゆる「大和建国」、あるいは「大和王権」の伸長・拡大に当たっては、それが、北部九州の、いわゆる地方の一氏族・勢力だということもあってか?、あまり直接には語られない?!

つまり、彼らには、そこでの中心的な役割（関係）はないと思われる?!

ちなみに、「宗像氏」は、例の「宗像大社」の宮司（豪族）であり、その祭神が、いわゆる「宗像三女神（タギリヒメ／タギツヒメ／イチキシマヒメ）」である!周知のように、2017年、「宗像大社」、とりわけ、その「辺津宮」のある「沖ノ島祭祀遺跡」は、『神宿る』島宗像・沖ノ島と関連遺産群」（ユネスコ世界遺産登録）で有名になったところである!

ただし、それ自体については、以前にも取り上げたことがあり（「さらなる真相を求めて～続『古代史の旅』～Part 2」/11.「出雲?・丹波（丹後?）の九州進出と宗像氏の関係?!そして、その先に見えてくるものは?!」）、その重要性については、私なりに押さえていたところではある?!

ところで、改めて、何故私が、ここ「重要氏族?から見た古代史の真相?!」で、この二つの氏族を、しかもセットで取り上げるのかというと、まずは、前者の「宗像氏」については、上記の「三女神」の中の、長女?の「タギ（ゴ）リヒメ」（彼女は、「航海安全の神」でもある!改めて、「沖ノ島祭祀」が思い起こさ

れる!)が、出雲の「大国主命」の後?として、かの「出雲大社」の本殿横に祀られていること(しかも、正妻?の「スセリビメ」よりも丁重に祀られている?)、そしてまた、その子どもが、例の「加茂族」(の一派?)の「味鋤高彦根命」(迦毛大神)と、国譲り先陣役?の「天雅彦」の妻となった「下照姫(伽耶奈留美命)」でもあることである?!

とは言え、ここでは、それよりも何よりも、彼女を含む「三女神」が、「記紀神話」において、「天照大神」と「素戔鳴命」(姉弟→夫婦?)の誓約^{うけい}によって生まれているということ(の意味)である!解釈によっては、その「三女神」は、「天照大神」の子(系統)とも、「素戔鳴命」の子(系統)とも取れるようであるが(通説では、「素戔鳴命」の子とされている?!)、とにかく、「記紀神話」最重要(クライマックス?)の「天照大神」と「素戔鳴命」の子とされていることが、大変注目されるということである!端的に、何故、そうなっているのかである?!

もちろん、「天照大神」と「素戔鳴命」は、神話の中の人物(神?)であり、その意味で架空の人(神?)格ということであるが、問題は、そこに投影されている?、ある氏族や勢力があるということであり、その関係が、我が国建国史において、最も大きな輪郭となっているということである?!

少なくとも、「記紀」は、その両者の勢力(攻防?)関係が、大きな建国の構図となっていることを示したかったということである?!それ故に、単なる空想、作為的なファンタジー?の産物ではないということでもある?!

ただし、それについては、例えば、例の「天武」の時に、「宗像(胸形)君徳善」の娘「尼子姫」が、彼の後?となって親密な関係をもったので(その子が「高市皇子」である!彼は、「持統」の前の「天皇」であったかも?)、神話の世界でも、そのように扱われたという可能性もないわけではない?!

しかし、これも、繰り返すように、件の「沖ノ島祭祀」に関わって、大和ではなく?、まずは?出雲と協力関係を結んでいたということであった?!だから、出雲系を象徴する(ように示されている?)「素戔鳴命」の子となるわけでもある?!

だが、さらに、三女?の「イチキシマヒメ」は、海の鳥居で有名な「厳島神社(安芸の宮島)」の主祭神でもある?!したがって、ある時期以降、「宗像氏」が、大和政権とも、何らかの関係があったことは間違いない?!

多少?短絡的ではあるが、海上輸送・交通の主要ルートが、日本海側から瀬戸内側に移行したということである?!そこに、ひょっとしたら、もう一つの「水沼(三瀧・水間)君氏」が関わっている?!ということである?!

② 改めて、「宗像氏」、あるいは「水沼(三瀧・水間)君氏」とは、いかなる氏族・勢力であったのか?

しかるに、その「水沼君氏」は、筑後川河口に栄えた古代豪族であるが、今回、改めて若干の情報収集もしたが、上記のことと関わって、やはり重要な（臭い？）氏族・勢力であることは確かなようなのである?!つまり、驚くなかれ、彼らは、謎の?「神功皇后」や「武内宿禰」と関係があるのである?!

具体的には、当地の「大善寺玉垂宮」あるいは、それと類縁のある「高良大社」の存在と、そこにおける彼らの介在（活躍?）、そして、その後の「宗像」への進出（「宗像大社」の再建?と庇護）、そうした事績が、改めて注目されるということである?!

まず、その「水沼君（始祖?）」の墓と伝わるのが、「御塚^{おんづか}古墳」（「鬼塚」とも）ということであるが、百二十メートルを超える「帆立貝式前方後円墳」で（西都原古墳群の「男狭穂塚古墳」と同じ!）、辺りには、「権現塚」、「イロハ塚」など、四十基以上の古墳が点在しているという。五世紀後半造営で、武人埴輪も出土したというが、近くには、「鬼夜」という行事で有名な「大善寺玉垂宮」があるわけである。そして、それは、高良山の「高良大社（玉垂宮）」とも深い関係の神社なのである?!

さらに、「景行天皇」の子孫という「国乳別皇子」（「水沼別」）は、筑紫の豪族の始祖といい、この皇子が祀られているのが、塚崎にある町内最古の「弓頭神社」とされる。そして、その皇子の墓と言われる「烏帽子塚古墳」も塚崎にあり、この旧三潯郡が、「水沼君氏」の本拠地だったのである?!

また、『古事記』にも『日本書紀』にも登場しない氏神（「高良玉垂命」?）が、かの偉大な「高木神」（「高皇産靈尊」?）を「高牟礼山」から降ろしたという、そんな逸話も、現地にはあるらしい?!とにかく、訳ありな?氏族・勢力なのである?!

いずれにしても、ここでは、「宗像（氏）」が「出雲」と関わり、その後（五世紀初頭?から）、その「水沼君（氏）」の庇護（進出?）によって、「宗像大社」の存在が大きなものになっていったということであるが、先の「沖ノ島祭祀」が始まった（活発になった?）のも、実は、この時からでもあった?!そして、一方で、「水沼君氏」は、上に挙げた「大善寺玉垂宮」、そして、高良山の「高良大社」の祭神と大いに関わっているのである?!

しかるに、その「高良大社」の祭神は、「玉垂命」（藤大臣^{とうのおとど}、高良大明神とも!藤は「藤?」）、「八幡大神」、「住吉大神」とされ、その「玉垂命」は、「神功皇后」の三韓出兵に大功があるとされ、その両者の関係は深いのである（その意味で、それが、「武内宿禰」に投影されていることになる?!）。

だとしたら、彼らは、まさしく「武内宿禰」や「神功皇后」と、大いに関係のある氏族ということになるわけである?!そして、そこが、件の「貴→木・基肆国→倭・大倭国?」であったのではないか?!故に、もし、それらの繋がりが、

筑紫（筑後）、宗像、出雲、そして、大和（葛城）を繋げるものであれば、その関係は、他でもない？、我が国古代史の大きな秘密を有していることにもなるのである？！

なお、その近辺には、何とも不可思議に？、「記紀」が全力を挙げて量している？「武内宿禰」や「神功皇后」の関係地があり、事実、久留米市の「大善寺町」や佐賀県の「武雄市」などには、その「武内宿禰」にまつわる話が多々あるようなのである？！彼は、孝元天皇の子？「屋主忍男武雄心命 or 比古布都押之信命」と、神武一行を導いたとされる「菟道彦 or 珍彦（紀直／木国造の遠祖）の娘・山下「影媛」との間に生まれたとされる？！

③ 「記紀」から見た「宗像氏」、あるいは「水沼（三潨・水間）君氏」の立場・役割？！

それについては、『古事記』と『日本書紀』では、若干親子関係等が違うようであるが、要はそこで、彼は、大和王権？から謀反の疑いをかけられた（九州（倭国？）を我が物にしようとしていることを糾弾された？）ということであるが、実は「謀反」ではなく、正当な？王権を敷こうとしていたのではないか？！

もし、そうであれば、この「武内宿禰系」氏族が、近畿大和の皇統になっていた可能性があり（彼自身の拠点は、「但馬の出石」であった？→天日矛？）、その後裔氏族の一つ「蘇我氏」が、その皇統を引き継いだということであれば、それこそ「藤原氏」は、その存在と関係をひた隠しにしなければいけなかった？！

すなわち、そこには、いわゆる「邪馬台国」、その後の「筑紫倭国」、そこに乗り込んできた、百済系王族の「貴→木・基肆国→倭・大倭国？」の存在が、大いに関わっているということであり、ここでは、それらの存在と関係が、まさに「宗像」を介して、その後の「（近畿）倭国」へと繋がるということである？！多分？そのことが、宗像大社の祭神「三女神」が、いわゆる「天照大神」と「素戔嗚命」の子とされた理由であろう？！

そこに、何かの古い事績（史実）が投影されているのか、それとも、「天智系」と「天武系」によってもたらされた「百済系倭国」の大きな枠組みを、そのことによって示そうとしたのか？まだまだその具体は分からないが、筑紫（筑後）と宗像、そして、その後の宇佐（応神・神功皇后・比売大神）や出雲との関係が、地勢的にもつながり、それらと、まさに「近畿大和」との関係が、一つの時間的な繋がりにも直結し、私の言う「二つの倭国」が、そこに示されているということにもなるのである？！

したがって、そのどちらであっても、以上のように、「宗像氏」や「三潨君氏」の存在は、想像以上に大きいのである？！しかも、今でも、倭王「旨」に送られたと同じような「七支刀」を捧げ持つ、「百済」の使者（武人）の木像を祀る「こうやの宮」が、大善寺に遠くない山門郡瀬高町（現みやま市）大字太神お

おがにあるという（「こうやの宮」は、「こうらの宮」「高良の宮」であり、その正式名称は「磯上いそのかみ物部神社」とされる！）。先に確認（発見？）したように、「物部尾輿」以降の、新たな？（接続された？）「物部氏」の出発点がここにあるのであれば、それはそれで十分合点のいくことである？！

また、その周辺は、以前にも述べたように、ずばり？「桜井市三輪の大神おおみわ付近」の地名や地形と酷似しており、さらに、筑前町（旧三輪町）弥永には「大己貴神社」（最古の神社のひとつ！）があり、「神功皇后」が新羅討伐の兵士を招集するために創祀し、戦勝を祈願したという言い伝えもあるらしい？！

最後になるが、今回、この「宗像氏」「三沼君氏」のことを述べるに当たって、結果的にではあるが、非常に有益な本を知ることができた！

その本とは、宮島正人氏の『「倭」の神々と邪馬台国 志賀島・宗像・八女』（海鳥社、2018年）であるが、そこには、これまでの「邪馬台国→倭国？北部九州説」の論調とは、いささかトーンが違って（もちろん、著者も「北部九州説」ではあるが、一言で言えば「冷静」?!）、新鮮な北部九州（筑紫国全体）の古代史が解明されているように思えた?!基本は、地元高校の教師（国語?）である！何とも、すごい！

「従来軽視されてきた記紀、神社の祭神や神事、民間伝承の検証を通して古代日本の精神文化という視点から真実に迫る全く新しい邪馬台国論」という「帯」もあるが、私とすれば、「志賀島」は当然であるが（「安曇氏」の本拠地!）、「宗像」と「八女」の存在、そして、その双方の関係が、一番心に残る部分であった！

何故なら、これまで、そういった視点はなかったからであり、実は、その視点が、最も苦慮している？、筑後川流域からの、我が国古代史の解明が、単なる「点」ではなく、「線」ないし「面」として捉えられるからである?!

(7) やはり「和邇氏（族）」は押さえておかなければならない?!『古事記』はこちら?!

① 「初期大和王権？」は、「和邇氏（族）」が中心であった?!その中に、「多氏（神八井耳）」勢力がいた?!

前項（6）では、北部九州、とりわけ有明海沿岸部（筑紫国?）の氏族・勢力についてみてきた！すなわち、そこにおける「三沼君氏」の存在（活躍?）に注目したが、しかし、そこでは、多分?その一郭（南東部?）にあったであろう「邪馬台国」と、その後の「筑紫（筑後）」の関係までは、ほとんど言及できなかった?!

ちなみに、そこで紹介した宮島正人氏は、その「邪馬台国」の後裔氏族が「筑紫君氏」で、その「筑紫君氏」が、「三沼君氏」であったというような前提?であったようにも思われるが、ひょっとしたら、「三沼君氏」は「伽耶系」（「崇神」

のモデル?)で、それが、「百済系」(「沸流系余氏」)の「藤(籐?)大臣」に取って代われ、彼らが、新たな「筑紫君(氏)」となった(→「倭の五王」)?!実は、私は、そのように捉えているのである?!

そこで、その「筑紫君(氏)」の変遷の中で(それ以前に?)、おそらく(確か?)、いわゆる「倭国大乱」と呼ばれる、西日本全体の動乱(2世紀末)の中で、東(近畿)から西に動いた氏族・勢力がいたわけであるが、私は、その氏族・勢力こそが、「多氏」(神八井耳)勢力(の一派?)と捉えているわけである?!

そして、その「多氏」勢力は、ここで言う「和邇氏(族)」の仲間(一部?)であるが(この和邇氏(族)全体が、いわゆる「前方後方墳勢力」、そして「手焙型土器(火)勢力」である?!)、彼らは、近畿(多分?近江)で袂を分かったのではないかと考えているのである(そのことが、神武の(大和での)子、すなわち「神八井耳」と「神沼河耳(第2代綏靖)」の関係話となっている?!)?!

ということで、この「ワニ/和邇(和爾・和珥・丸邇・鰐 等)」という奇妙な名前をもつ「古代氏族」が、「多氏」を初めとして、その存在と活躍が大きかったであろうことは、ある意味よく分かるのであるが、何故か、彼ら(多氏を含めて!)は(も?)、「記紀」(特に『日本書紀』?)においては、歴史の表舞台から遠ざけられているように思われる?!

ここでも、『日本書紀』編纂者達が、何かを隠している?そういうことであるが、だから、その後裔の「多氏(安万呂→人長)」が、『古事記』によって、婉曲ではあるが、その隠された部分を示そうとしている?!今の私には、そのように思えるのでもある(まさに『古事記』は、そうした性格を有するものでもある?)?!

その際、これもまた、ある意味とんでもない?推測(空想?)となるが、上記の「倭国大乱」の時に、近畿から西に動いた(文物の移動を伴って!)氏族・勢力、それが、後の「多氏」の先祖である「神八井耳」の勢力であり、その彼は、例の神武の、大和での長子であったが、何故か、次子の「神沼河耳(第2代綏靖天皇)」に政権を任せ(敗北した?)、大和(政権)を去った?!

そして、その一部の勢力が九州に来て、九州山地沿いを手中に収め、「火(肥)の君」(「阿蘇の君」も!)、「大分の君」等が、九州(とりわけ中南部九州)に勢を張ることになった(多分?このことが、かの「景行天皇」の九州遠征・熊襲征討の話の基となっている?ちなみに、宮崎/日向の「諸県君」牛諸井は、その「景行天皇」の子とされている?!)?!

要は、(九州での)倭国大乱?において、「奴国」を中心とする「倭国連合」を解体させ(中核の、安曇族の「奴国」を追いやり、一方で、力をつけていた、隣の「伊都国」を、「一大卒」の駐在によって睨みを利かし?)、新たな「邪馬台国連合」を出現させたのは、吉備(→出雲経由?)から出て、近畿(近江)で集結した「ワニ族→前方後方墳勢力」であり、「火の勢力」(「手焙型土器」→鬼道?→卑弥呼?)

であったのではないかということである?!

だから、かの強大な「奴国」や「伊都国」も、その傘下に収めることが出来た?!まさに、「邪馬台国連合」とは、そういうものであったということである?!

② 改めて、「和邇氏(族)」とは、いかなる氏族・勢力であったのか?!「前方後方墳勢力」の中心?!

そこで、改めて、その「和邇氏(族)」であるが、彼らは、第5代「孝昭天皇」の長男「天足彦国押人命」(『古事記』では「天押帯日子命」)の流れを汲み(→皇別氏族)、直系の「和邇臣氏」の遠祖は「彦国葺ひこくにぶく」(4代目?)とされ、本拠地は、奈良盆地東部「春日、大和国添上郡和邇(天理市和爾町)」とされている。

他に、その関連地としては、全国に多数あるらしいが、滋賀県滋賀郡志賀町和邇春日が、代表的であるとされる?!朝廷では、埴輪などの祭祀土器製作集団を率いて、山稜の管理、古墳埋葬者の事績の語り部的な役割を持っていたらしいが、元々は、「春日」氏と呼ばれ、その後「和邇」姓となり、第29代「欽明天皇」の頃から、また「春日」姓に改姓されたとも言われている?!

ちなみに、その後、この一族から多くの枝族が発生した。有名なのは、柿本人麿の「柿本氏」、小野妹子、小野小町、小野道風で有名な「小野氏」(こちらは確か?出雲の「日御碕神社」の社家でもある!）、山上憶良の「山上氏」、栗田真人の「栗田氏」、そして、石上神社社家の「布留氏」等、歴史上活躍する氏族・人材を輩出している!

特に、「小野氏」は、鎌倉時代以降、武蔵七党の「横山党」「猪俣党」という武士集団として活躍し、その流れから、江戸時代には、大名家及び武士として残り、現在まで繋がっているとされている。

さらに、例の「息長氏」とは、非常に近い関係にあったとされ、天皇家では、少なくとも第15代「応神天皇」以降は、「和邇腹」と「息長腹」を、特に、血脈維持の上で大切にされた節があるという評価もある?!

なお、その2氏の頂点に立つ人物が、「天日矛」や「神功皇后」、さらには「継体天皇」と関係のある「彦坐王」であるとされ、この謎に包まれた人物群こそ、「記紀」編纂者、すなわち「藤原政権」が、その真実の姿を隠そうとした形跡大と言われているのである?!

このことは、まさに、私の方でも追求している「我が国古代史の闇?」の部分でもあるが、そこに、「和邇氏(族)」との関係も絡まっているのである?!

しかるに、この「和邇氏(族)」は、それ程政治上では活躍していないように思われているが(「葛城氏」「物部氏」「大伴氏」などとは比較しようがないともされる?!)、その「和邇氏(族)」の一人?「難波根子建振熊」だけは、

その活躍が、「記紀」には示されている！そして、第10代「崇神天皇」から第25代「武烈天皇」までの血脈に、最も深く母方として関係しているとされるが、その実体はいかなるものであったのか？

さらに、第30代「敏達天皇」までに、9ないし10名の女性が、「記紀」に、妃として記録されているというが、これらの妃の子が天皇になった事績は、「崇神天皇」以降は全くないということでもある?!これだけ多くの女性を妃として天皇家に出した氏族は、後の「藤原氏」を除けば存在しない?!それは、果たして偶然なのか（第15代「応神天皇」以降、「敏達天皇」までが最盛期のようなのである?）?!

参考までに、関連神社としては、「和爾下神社」（天理市櫟本町、大和郡山市横田町）、「神田神社」（大津市真野町）、「小野神社」（滋賀県志賀町小野）、「柿本神社」（奈良県新庄町柿本）、「浅間あさま神社」（山梨県一宮町）、「富士山本宮浅間せんげん大社」（富士宮市宮町）等が有名である。その中で、富士宮市の「浅間神社」（「和邇部氏」が社家!）の「和邇氏系図」は、最古のものを伝えているという?!

ただし、その富士宮市にある、駿河一宮「浅間大社」は、創建が、山梨県の甲斐一宮である「浅間神社」よりも、少しだけ新しい?!さらに、富士吉田市にある「富士浅間神社」（「大伴氏」社家）は、別系統の浅間神社でもあるらしい?!（以上、ウィキペディアより）

③ 「記紀」から見た「和邇氏（族）」の立場・役割?!

ところで、以前に紹介した藤井耕一郎氏の『タケミカヅチの正体オミ姓氏族対ムラジ姓氏族』（河出書房新社、2017年）によれば、「前方後方墳勢力」（手焙形土器勢力→火（日?）の勢力）によって駆逐された「環濠集落勢力?」のシンボルである「巴形銅器」が、弥生後期に出現し、弥生終末期には消滅したのであるが、古墳時代の前期後半（4世紀頃）に形を変えて復活するというものであった（しかも、「朝鮮半島南部」と「大和」で!ただし、「大和」が中心であった!）?!

改めて、一体これが、何を意味するか?であるが、素直に解釈すれば、その古墳時代の前期後半（4世紀頃）に「大和」を支配したのは、弥生終末期に（2世紀後半）、「前方後方墳勢力」、すなわち「ワニ族」によって駆逐された「奴国系倭人」、すなわち「安曇族集団」であったということである?!

その「安曇族集団」が、「大和」（と朝鮮半島南部）で蘇ったということか?!穿った見方かもしれないが、それが、例の「物部氏」、すなわち、「日神（太陽）信仰」の「饒速日集団」であったのではないか?!そうとも、思われるのである?!

そうなれば、先の藤井氏の指摘、すなわち「『前方後方墳勢力（ワニ族）』

は、同じ吉備出身の『前方後円墳勢力（物部氏？）』によって、言わば『下剋上の』に（同族の『尾張氏』の裏切り？によって?!）、近畿（大和）で主導権を奪われた！」ということが、まさに真実味を帯びてくることにな?!

しかも、元来、「和邇氏（族）」は、「安曇氏」や「海部氏」らと同じく「海人族」とされているようであるので（直接は、「海部氏」と同族？したがって、「尾張氏」も?→それが、「天火明命」関係?!）、私の、これまでの一連の主張とも相俟って来る?!

繰り返しになるが、『古事記』は、ここで言う「和邇氏（族）」の一派である? 「多氏」によって、「正史」である? 『日本書紀』と併行しながら、秘かに? 書き記されたもので（太安万侶→多人長による?）、時の藤原政権に睨まれない程度に?、自らの祖先・勢力の活躍（栄光?）を、言わば私的に? 示したものではないかということであった（これだけは、言わせてもらおうというスタンスで!）?!

故に、「記紀」、とりわけ『日本書紀』においては、この「和邇氏（族）」のことは、あまり重要な扱いはされていないということであり、逆にそれが、実は、甚だ大きな存在・活躍であったことを、陰画的に（多少古い?）示しているということでもある?!

最後に、今はまだ余談（まったくの勘?）とはなるが?、例の「因幡の白（素）兔」に出てくる「ワニまたはサメ?」の話は、ここで見た「和邇氏（族）」の立場・役割を、それこそ「寓話的」に示したもののようにも思われる?! さらにまた、祭神が「木花咲耶姫」（伊予大三島の「大山祇神社」の祭神「大山積（祇）命」の子?）である「富士山本宮浅間せんげん大社」等は、その「和邇氏（族）」の、東方への進出の事績?として、非常に興味があるものとなる!

つまり、その「木花咲耶姫」と天孫「邇邇芸命」の子である「ヒコホホデミ（山幸彦）」が、いわゆる「竜宮城」（海?）で、「海神」の子である「豊玉姫」と結ばれ、神武の父親「ウガヤフキアエズ」が生まれたという「記紀神話（「日向三代」）」の話も、この「和邇氏（族）」を絡ませれば、また面白い史実?が見えてくるということである?!

と言うのも、他ならぬ「豊玉姫」（その妹で、「ウガヤフキアエズ」の後となった「玉依姫」も?）は、まさに「ワニ」であった?! 「ワニ」は、「サメ」か?という議論もあるようであるが、彼らは、おそらく? 中国「江南」から来た? 海人族の流れであることは間違いないであろう?!

まだまだ、このような神話（寓話）は、単なる「お伽話」のようではあるが、かの関裕二氏が喝破しているように、多くの「お伽話」が、古代の真実?を何らかの形で投影させたものであるのならば、一方で（ファンタジーを超えて?）、それが、具体的には、どういうことであったのか? そうしたアプローチも、まんざら悪くもないであろう?! 多少の苦笑?を込めて、強く思う次第である?!

(8) いよいよ本命？「藤原氏」！果たしてその正体は?!百済王族の末裔、それとも…?!

① 本当に、「藤原氏」は、常陸（鹿嶋）の、かの「(大)中臣氏」からの出だったのか?!

さて、いよいよ本命？の「藤原氏」である！まず、その始祖「中臣（藤原）鎌足」は、大和の「高市郡藤原」や「明日香村」の生まれだとしたり（前者は『日本書紀』、後者は『藤氏家伝（「大織冠伝」）』）、常陸（「武甕槌^{たけみかづち}大神」を祀る「鹿島神宮」の地）の「大中臣氏」の出であるとしたりするものもある（『大鏡』）?!

「中臣氏」であれば、常陸出身と捉えた方が妥当なような気もするが、とにかく、彼が、「中大兄皇子(天智)」の時に、まさしく突然姿を現す(活躍を始める!)、謎の人物であることに変わりはない！

ただし、彼については、件の関裕二氏は、百済王族（一応は「温祇系余氏」?）で、当時倭国に人質として送られてきていた「余豊璋」（百済最後期の「義慈王」の子）、その人だとされている！

私も、関氏の考察（説得?）に従って、現時点では、それに立脚した形で捉えているが、いずれにしても、果たして彼らは、一体何者（ルーツはどこに?）であったのだろうか?!そのことに、少しでも近づくための論考が、ここでの使命である！

周知のように、この「藤原氏」が、最終的に「倭国（→日本国）」を牛耳り、とりわけ「桓武」以降の「藤原の世」が、良かれ悪しかれ?、我が国のその後を創り上げていったことは、今更述べるまでもない！そしてまた、今でも、彼らの後裔が残した足跡（栄光?）は、至るところに散りばめられている！

そして、その名残（象徴）が、「藤原」、そして、その「藤」の一文字を持つ、各種の支族・姓氏の全国分布でもある（加藤・斎藤・佐藤 etc.）！だが、改めて、ここで問題とするのは、その「藤原氏」が、当初より我が国（倭国）に居た「氏族」であったのかどうか、そして、本当に、「(大)中臣氏」の系統であったのかどうかということである！

と言うのも、これまで論究してきた「二つの倭国」、そして、その二つの倭国を、最終的には「一つの倭国→日本国」としてきた「百済系」の氏族・勢力、その最終的なリーダー（排他的勢力?）が、まさに「藤原氏」であったのではないかと考えられるからである?!

ちなみに、何故、彼（ら）が、「中臣」としたのかということ、おそらく没落しかけそうになっていた?、あるいは政権中枢にしがみつこうとしていた?「中臣氏」の系統に紛れ込ませた?!そして、中臣氏側も、そのことを了解していた（逆に利用した?）ということではなかったか?!要は、両者の思惑（利害?）が、

一致したということである?!さらに、これは、ひょっとしたら?「蘇我氏」の実祖?「稻目」(実は、「欽明」/倭王「武」?)も、「旧来の蘇我氏?」(武内宿禰の後裔とされる「葛城諸族」)への組み込みであったかもしれない?!

現時点での推測では、まさにそういうことになるのであるが、考えて見れば、そもそも、このようなことは、当時においては珍しいことではなく、いわゆる「氏姓制度(→「新撰姓氏録」?)」とは、多分にそうした側面(各氏族の遠謀術策?)を有していた?!

また、そういう理解(解釈)をすれば、氏族・勢力間の矛盾(齟齬?)もかなり解決出来るということでもある?!要は、渡来系の氏族・勢力は、そうした氏族・勢力間の接合?の中で、自らのアイデンティティを挿入・確立しようとしてきたということである?!

ということで、本当は「藤原氏」も「蘇我氏」も、ある意味信じがたいかもしれないが?、「百済」から渡来してきた氏族(王族?)であったのではないかとということでもあるが、ある時期(5世紀前後?)から、九州倭国(「筑紫国」)に入り込み?、それまでの「物部氏(饒速日勢力?)」が有していた「倭国皇統の枠組み」を活用(篡奪?)して、新たな政権(「新物部・蘇我政権」?)を構築していった?!

したがって、それ以降の正統性・正当性は、多分に?、その「新物部・蘇我氏政権」にあり(最終的には、「新蘇我氏」?)、「藤原氏」は、それを横取りした?、そういう関係ではなかったかということである?!645年の「乙巳の変(蘇我入鹿・蝦夷の討滅?)」とは、まさにそのためのスタートでもあった?!

② 改めて、「藤原氏」とは、いかなる勢力・氏族であったのか?!

ところで、改めて、そういうことになれば、「藤原氏」は、名門豪族の一つ(とされる?)「中臣氏」(多分、「神道」の中心氏族→エブス(エビス?)氏→「占部氏」?)の系統から出たと主張しているが、それは、まったくの捏造(嘘?)ということになる?!

すなわち、先に述べたように、百済王族の「余豊璋」が、人質として来日し、同族?の「中大兄皇子(天智)」を担ぎ上げ(彼も、元を糺せば「百済王族」ではあった!）、当時の利害関係を同じくする「秦氏」と組んで?、「乙巳の変」を企てた?!

そして、「白村江の戦い」を機に、百済系の「筑紫倭国」(沸流系余氏→(倭の五王→倭(大倭)国)→温祇系余氏)を近畿に移動させ(近江遷都)、さらに「壬申の乱」を経て、新たな「倭国→日本国」を構築していったということである(これは、ある意味「関裕二説」と「兼川晋説」の融合?ということになるが?)?!

ただし、もともとの「倭(人の)国」は、半島南部の伽耶地域(まさに、『魏志』にいう「狗邪韓国→金官伽耶国」は、その一つの国であった!）、そして、一部

「百済」地域も含んでいたものであり、後に九州（筑紫・「貴（基肆）国」）に移り住んだ（乗り込んできた？）、百済残国の「兄王＝藤＝藤大臣＝応神（のモデル？）」（本宗家沸流系余氏）も、実は、その「倭（人の）国」の一員であった?!

だから、ある意味「百済」は、（筑紫）倭国にとっては「身内（本家?）」であり、例の「倭の五王」が、当時の中国南朝へ主張した「七国（百済が入っていた!）諸軍事統帥権?」は、単なる絵空事ではなく、それなりの根拠があったというようにも理解されるのである!

しかるに、何故か、「百済」への軍事統帥権?は認められなかった!それは、百済が、別の系統「仇台系」によって（「仇台百済」）、別途認められていたからであるが、実は、その「仇台百済」は、例の「豊国倭国（そこに入質していた「昆支」「軍君」兄弟）→継体王統?」につながってのものである（兼川晋氏）?!

だから、まだまだ、それらについては、さらなる精緻な究明が必要ではあるが、こうした氏族・勢力の、東アジア全体での移動や交流（征服や移民・植民）の全貌から、倭国（→日本国）の歴史を見なければいけないのである!

このように、「百済」は、何とも悩ましい?存在なのであるが、実は、その百済王族自体は、以前にも述べたように、北方の「扶余族（ツングース系）」とされ（高句麗も同じ!）、その名残・要素は、とりわけ「後期古墳時代」には顕著となっているということである（装飾壁画、武具・馬具等の埋葬）!それは、まさにそうした経緯によるものと思われるのである?!

改めて、この百済系王族の末裔と思われる「藤原氏」は、まさに「記紀」編纂の張本人なのであるが、その「百済」自体が、非常に複雑な系統、複雑な経緯を有しており、真にその動きと連動させながら、我が国の建国史を詳らかにしようとするならば、それだけでも、大変な労苦を伴うわけである?!

なお、件の「余豊璋」は、「白村江の戦い」の際に、本国百済に迎えられ、国王?として、「唐・新羅連合軍」に立ち向かうことになっていたが、腹心「鬼室福信」を謀反の疑いで殺し?、結果的に、百済滅亡に拍車を掛けたとされる?!当人は、南へ逃げたとか、北へ逃げたとかという話もあるようであるが、関裕二氏によれば、秘かに倭国に戻り、まさに「中臣鎌足」として、天智朝で活躍したということである?!

③ 「記紀」から見た「藤原氏」の立場・役割?!

翻って、「記紀」のストーリー（直接は「神代」!）は、事実上は?、3世紀後半の大和建国（纏向祭政都市の建設）から始まっていると考えられるが、その時（それ以降?）の各氏族・勢力の同盟・反目・離反の状況を、まさに「神話」の形で書き記したものであることは、以前にも述べたことである?!

つまり、その「神話」の時期は、遙か?紀元前7世紀頃の話となっているわけであるが、それ自体は、大和建国までの歴史（前史?）ということではない

ということである?!あくまでも、そのための「前史?」が欲しかったということである?!

改めて、その中で、藤原氏（不比等?）が全精力（悪知恵?）を注いで創り上げた「万世一系」の皇統譜において注目されるのが、彼らが籍を借りた?「中臣氏」の祖とされる「天児屋根命」であり、その司令塔とされる「高木（城）神→高皇産靈神」（『古事記』では「思兼（金）神」!）であるが、その双方の（神の）関係を捉えてみると、それが、「中臣氏」と「藤原氏」の関係によく似ていることが分かる?!

しかも、その「高木（城）神→高皇産靈神（「思兼（金）神」）」は、最高神の「天照大神」より権威（権力?）が上で、例の「国譲り」や「天孫降臨」の場面では、彼の意向（指示）で、物事が進んでいるようにも思われるのである?!このことは、ほとんどの人達が指摘する、藤原氏（不比等）が、「乙巳の変」以降、そして「天武」亡き後、彼の妻（皇后）「持統」（天照大神?）を抱き込んで、時の趨勢を作り上げていった過程を、ある意味如実に示している?!

すなわち、それが、記紀の「高木（城）神→高皇産靈神＝思兼（金）神」が、例えば「天岩戸隠れ」の際に（「天照大神」が、「素戔鳴命」の狼藉に我慢が出来ず、「天岩戸」に隠れてしまって、世の中が真っ暗になってしまったという事件!）、周囲に相談を呼びかけ（知恵を働かし!）、無事に、天照大神を、岩戸から引っ張り出し、再び、世の中が明るくなったということであるが、その役割が、まさに「藤原氏（鎌足・不比等）」の役割に投影されていると見做されるわけである?!

こうした話を、単なる「寓話」と取るか（まさか真実と受け止める人はいないであろうが?）、やはりそこに、「藤原・持統政権」の権謀術策が働いていると取るのか、ロマンを求める人には申し訳ないが、もちろん後者だと思わないわけにはいかないのである（ある意味「分かり易過ぎ?」）?!

改めて、この場面を、『日本書紀』ではなく、『古事記』で示すと（こちらの方が、冷静に伝えている?）、少々長くなるが、

「八百万の神々が天の安河の川原に集まり、対応を相談した。思兼神（藤原不比等）の案により、さまざまな儀式をおこなった。常世の長鳴鳥（鶏）を集めて鳴かせた。鍛冶師の天津麻羅（物部氏別派?）を探し、伊斯許理度売命（鏡作氏）に、天の安河の川上にある岩と鉾山の鉄とで、八尺鏡を作らせた。玉祖命（玉造氏）に八尺の勾玉の五百箇のみすまるの珠（八尺瓊勾玉）を作らせた。

天児屋命（中臣氏→藤原氏）と布刀玉命（忌部氏）を呼び、雄鹿の肩の骨とははかの木で占（太占）をさせた。賢木を根ごと掘り起こし、枝に八尺瓊勾玉と八尺鏡と布帛をかけ、布刀玉命が御幣として奉げ持った。天児屋命が祝詞を唱え、天手力男神（多氏?）が岩戸の脇に隠れて立った。天宇受賣命（猿女君氏）が岩戸の前に桶を伏せて踏み鳴らし、神憑りして胸をさらけ出し、裳の紐を陰部までおし下げて踊った。

すると、高天原が鳴り轟くように八百万の神が一斉に笑った。これを聞いた天照大御神（持統）は訝しんで天岩戸の扉を少し開け、「自分が岩戸に竈って闇になっているのに、なぜ、天宇受賣命は楽しそうに舞い、八百万の神は笑っているのか」と問うた。天宇受賣命が「貴方様より貴い神が表れたので、喜んでいるのです」というと、天児屋命と布刀玉命が天照大御神に鏡を差し出した。

鏡に写る自分の姿をその貴い神だと思った天照大御神が、その姿をもっとよくみようと岩戸をさらに開けると、隠れていた天手力男神がその手を取って岩戸の外へ引きずり出した。すぐに布刀玉命が注連縄を岩戸の入口に張り、「もうこれより中に入らないで下さい」といった。こうして天照大御神が岩戸の外に出てくると、高天原も葦原中国も明るくなった。」

（「ウィキペディア」より）

最早これは、単なる神話（寓話）ではない?! 見事な?、「藤原氏」のための演出である?!

5. 真相解明に向けて共通認識されるべきこと③～最後の難関？にいかにか立ち向かえばよいか?!～

(1)「藤原氏」と「蘇我氏」の関係?!「記紀」では「高天原系」と「根の国系」か?!

① まずは、直近の、「蘇我氏」と「藤原氏」の関係を明らかにすることから、すべての真相解明が始まる?!

以上、ここまで私は、『私的日本古代史考～建国の真相はいかにあったか?!～』を完成させるべく、「3. 史実解明に当たって共通認識されるべきこと～それは必ず次のステップ（ゴール?）につながる?!～」、そして、「4. 重要氏族?から見た古代史の真相?!」を書き記してきた!

そこでは、そのための基点（共通認識の柱）を、『持統』の、『天照大神』への昇華と『藤原体制』の永久化?!このモチーフこそ、『記紀』（事実上は『日本書紀』）の原点?!と位置づけ、それに関わるトピック的なものを、それなりに抽出し、今後の展望と課題について述べてきた?!そこで、ここでは、次なる課題として、「最後の難関にいかにか立ち向かえばよいか?」と題して、その詰め（最終仕上げ?）に突入していくこととしたい!

そこで、まずその手始めとして、ここでは、「記紀編纂」直近の「藤原氏と蘇我氏の関係」を、いわゆる「高天原系」vs.「根の国系」という観点から捉え直し、結果的には、これまでほとんど解明できていなかった?、「天日矛（→神功皇后）」、「葛城諸族（→武内宿禰）」、さらに、「海人諸族（→住吉大神）」の関係、そして、そこから見えてくる?「息長氏・秦氏」（間違いなく「賀茂氏」も!）との関係、さらには、「蘇我氏と物部氏」の関係を、より精緻に（真実に近く?）究明していきたいと考えている!要するに、そこにある具体的な変遷（史実?）を、いかに整合的に描けるかということである?!

具体的には、「記紀」の大枠は、「蘇我氏（本宗家）」を打倒した「藤原氏（中臣鎌足・藤原不比等親子?）」が、「持統（天智の娘/天武の後）」を担ぎ出し（「天照大神」に昇華させ!）、彼女を始祖とする「万世一系」の皇統譜を創り上げ、そこでの推移・展開を、「倭国→日本国」の歴史（正史）としたということであるが、その創られた?歴史の中に、その都度の（実際の!）王権や勢力（部族・氏族）の存在と関係づけを、「神話」や「伝承」という形で再構成した?!

まさに、そういう構図（からくり?）になっているのではないかということである（その意味では、「改変」あるいは「捏造」?!だが、まったくの嘘でもないということである!）?!

さて、そこで重要な鍵を握っているのが（「記紀」で、最も隠さなければいけなかったもの?）、先の「天日矛（→神功皇后）」、「葛城諸族（→武内宿禰）」、「海人諸族（→住吉大神）」の存在であり、その関係ということであるが、しか

し、それは、あくまでも「自分達の王権・勢力の身内（にした？）?!」であり、「九州倭国」、「出雲」あるいは「吉備」といった、その他の王権・勢力は（実は、こちらの方が、先行の王権・勢力であった？）、「神話」の世界に封じ込めるか、あるいはまったく歴史の闇に葬ったか、そのいずれかである?!

ということで、「記紀」は、その謎（隠された部分）を、二重に有していることになる?!単純に言えば、一つは、直近の?自らの政権の拠って立つところ、そして、もう一つは、それ以前の（直接の結びつきはない?）政権の存在ということに関してである?!

すなわち、前者は、「持統・藤原政権」が、「蘇我氏」あるいは「天武系」の勢力とどのような関係があり、それらを、いかに排斥・駆逐?していったのか、そして、後者は、多分?「崇神」までの政権（朝鮮半島南部「伽耶」勢力）が、どのように推移していったのかということである?!

そして、その物語の軸（基点?）が、「応神」（藤→百済王族→沸流系余氏）であるということである?!何故なら、その「応神」から、「倭の五王」政権（九州「筑紫倭国」）と、「息長氏」や「秦氏」が関わる「継体」政権（九州「豊国倭国」）とが分裂し（「磐井の乱」）、後者が、先に近畿に移動し、前者は、例の「白村江の戦い」に前後して、同じく近畿に移動した?!

その中心が、「（九州）物部氏」と縁戚関係にあった（勝手に入籍した?→「欽明」?）、いわゆる「上宮王家」（ある意味、新生?「蘇我氏」）であった?!そして、その「上宮王家」（蘇我氏）を打倒したのが、同じ九州「筑紫倭国」の「天智」、そして「持統・藤原」政権であったからである?!

ただし、九州「筑紫倭国」は、一応はそのまま残り（武/磐井→葛子→…天足彦→薩夜馬?）、少なくとも701年までは、「倭国」の本流（本家?）として、「太宰府」に存続した?!

要は、この複雑な百済王族系の、倭国への移動・進出・融合・離反のプロセスが、「記紀」が描く、「倭国（→日本）」の内実であったということであるが、分かるようで、やはり分からなかった?のは、まさしく、そうした実情と「からくり?」があったからである?!

②「記紀」（『日本書紀』）が描く「神々の体系」?そこに、関係氏族・勢力の位置・力関係が投影されている?!

ところで、以上のことを踏まえると、改めて「記紀」（厳密には『日本書紀』）は、そこに示された（創作された!）「神々の体系」（「万世一系」の皇統譜）において、関係氏族・勢力の親縁関係（彼らにとっての位置づけ?）を投影させていることが分かるというものである?!ただ、その謎解きが、超難問でもあるわけである?!

と言うのも、そこに放り込まれている史実?の数々は、「万世一系」の皇統

譜を創り上げるための、様々な氏族・勢力の足跡(事績・伝説)の借用(再構成?)であり、そこで創り上げられたストーリーの総体は、多分に「パッチワーク」的なものだからである(その最たる証拠が、「本文」以外に、「一書」として紹介されているものであろうが、それらは、正当な伝説の、誠実な紹介ではなく?、言わば、史実を混乱させるための「しかけ?」ということにもなってくる?!)?!

したがって、それらを、いかに忠実に再現しようとしても、ただそれだけでは、本当に整合性のある解釈は、土台無理な?話だったのかもしれない?!とは言え、「記紀」に示された各氏族・勢力が、改めて、どのような「神」に投影されているのか?その辺りについては、かなり接近してみることは出来るであろう?!

すなわち、「天照大神」が「持統」を、「高皇産霊神」(思兼(金)神)が「藤原不比等」を暗示していることは、ほぼ間違いないところであろう?!そしてまた、例えば「素戔鳴命」、そして、彼と天照大神との「誓約^{うけい}」によって生まれたとされる、いわゆる「五男三女(神)」等もそうであろう?!

その際、ここで、以前にも触れた、上山春平氏の「高天原系と根の国系の神々の相補関係?」について、事前に再吟味しておく、「天御中主」と「神武」の間に、「一対の神々」を4組対応させ、それらの神々の相剋と合一が、我が国(倭国→日本国)の成立過程を示すものであるということであるが、改めて、その部分をどう読み解くかということが、ここでの最大の解?となることは明らかであろう?!

何故なら、勝ち組?の「高天原系」は、負け組?の「根の国系」から、言わば「後付け的、観念的に?」創り出された?「神々の体系」であり、その意味で、一方の「根の国系」の実相?を究明していけば、それらが、一体、どういうことを指し示しているのかが分かるというものである?!そして、それが、「伊弉諾・伊弉冉の神生み」の「舞台じかけ?」でもあるということである?!

しかし、それは、まさに「根の国系」、つまり「出雲(系)」が、どのようなものであったのかということでもある?!別言すれば、「出雲(系)」、すなわち「大国主(オオナムチ)」系が、どのように推移していったのかということでもある(それが、裏の、つまり「表の」真実であった?)?!

③「天照大神」と「素戔鳴命」の「誓約」に見えるもの?!

改めて、そうなると、実際には、「高皇産霊神→伊弉諾→天照大神→(五男神→瓊瓊杵尊/天孫(天神系))と「神産霊神→伊弉冉→素戔鳴命→(三女神→大国主/オオナムチ(地祇系))という関係は、前者に、後者を反(陽?)転させて創作されたものであることになる(途中、「五男神」には「崇神」、「三女神」には「五十猛神」が入っていると考えてもよい?)?!

そこで、誠に大胆な(突拍子もない?)ことを言うことになるが、「天照大神」

が「持統」(が象徴するもの)であるならば、その対(夫?)である「素戔鳴命」は、「天武」(が象徴するもの)ということになり、当然それは、前者が「藤原氏」、後者が「蘇我氏」を指し示すものということになる?!

すなわち、「記紀」は、直近の「藤原氏(天智系)」と「蘇我氏(天武系)」の関係を「高天原神話」に投影させ、「神武」という初代天皇から始まる「万世一系」の皇統譜を、そこに案出したということである?!

ただし、その「蘇我氏(天武系)」の事績が、正当な(正統な?)事績であったことは言うまでもなく、それが、実は、「出雲系(根の国系)」の事績として溶け込まされているということである?!そうすると、例えば、「出雲大社」の本殿真裏の、「素戔鳴命」を祭神とする「素戔^{そが}社」の存在は、誠に理に適った?ものとなる?!

いずれにしても、そうなれば、「天照大神」と「素戔鳴命」の誓約による、片や「(宗像)三女神(←スサノオの物実)」、片や「五男神(←アマテラスの物実)」の関係はどうなるのかということになるが、思い出されるのは、「天武」と「宗像君尼子媛」の関係であり、その子「高市皇子」である!

しかも、「高市皇子」は、天武の死後、天皇に即位していたようなのである(我が国最古の漢詩集『懷風藻』によれば?)?!ならば、そこに、「宗像」との関係が埋め込まれていても、何ら不思議ではないことになる?!もし、そうであれば、ここでも、「記紀」のストーリー設定?は、誠に驚嘆に値するものとなる?!

しかるに、そうすると、残された問題は、もう一方の「五男神」ということになるが、そこには、実際の、大和(倭国→日本国)建国に参画・協力した氏族・勢力を、言わば「兄弟として」集約させていることは間違いない?!

長男?「天押穗耳^{おしほみみ}」(→天皇家)はともかく、「天穗日^{ほひ}」(尾張氏→出雲臣、土師連等。彼らは、出雲に同化した?!、「天津彦根」(木(紀)国造→凡川内^{おおしかふち}直、山代直等?))、「活津彦根」(→?)、そして「熊野櫛樟日^{くすび}」(→熊野諸族?)であるが、残念ながら、まだまだその詳細ははっきりとしない?!

また、その中でも、とりわけ「五男神」の中の「活津彦根命」の後裔氏族が、それ以上に、はっきりとしない?!ただし、八尾市にある「恩智^{おんじ}神社」の祭神である、「天児屋命」の後裔の「御食津臣命」の妻「御食津比売命」と関係があるらしい?!

そして、それが、忍坂と住吉にある「生根神社」の祭神(現在は、「少彦名命」等)や「生國魂^{いくくにたま}神社」の祭神と同神ともされる(この祭神「生島神^{いしまのかみ}」「足島神^{たるしまのかみ}」は、国土の神霊とされ、新天皇の即位儀礼の一つである「八十島祭^{やそしままつり}」の際にも、主神に祀られる重要な神である!)?!ここに、例の「外宮(伊勢神宮)」の「豊受大神」が絡まっているのかもしれない?!

そして、次世代として、「天忍穗耳」の子「瓊瓊杵(天孫)」が降臨すること

になるが、「鹿葦津^{かしつ}媛」(木花開耶姫)との子達が、「三男神」(長男「火闌降^{ほすせり}」(海幸彦→隼人族)／次男「火折^{ほおり}」(山幸彦・火火出見→天孫族)／3男「火明^{ほあかり}」(饒速日系→尾張氏族))である?!

天皇家(天孫族?)は、「火折」の系統(→鵜茅葺不合^{うがやふきあへず}→火火出見・神武)とされているわけであるが、何故、「火闌降」が、大和王権の構成神とされているのか?多分?最初の勢力(安曇族・倭国→海人族)が、南九州の「隼人族」と協力して王権を築いた?!ただ、少なくとも、畿内に連れて来られた?「隼人」は、そうであった(「隼人」とは、船の操舵がうまい(俊敏?→速く漕げる人)という意味?)?!

最後になるが(文脈は別!),"軻遇突智^{かぐつち}"という神がいるが(これを産んだために、「伊弉冉」は黄泉の国へ行った→死んだ!),"火の勢力"(火神信仰→手焙型土器(甕/甕^{みか})→前方後方墳勢力)によって、初期の出雲が衰退したことを示すものか?!その「火の勢力」が、「熊野櫛樟日」(→「熊野大社」)と関係がある?!だが、それらは、まだまだ不明ではある?!

(2)「神武」「崇神」「応神(←神功皇后)」の「立体交差?」から見えてくるもの?!

① 再度、「大和建国」のストーリーを確認してみる!そこには、創られた(「神武」に託された)歴史?がある?!

さて、(1)では、「記紀」(実質は『日本書紀』)の編纂側である「藤原氏」と、その藤原氏によって埋滅させられた「蘇我氏」の関係を、いわゆる「高天原神話」から読み取り、勝ち組?「藤原氏」側が「高天原系」、負け組?「蘇我氏」側が「根の国系」、すなわち「出雲系」とされているのではないか?!そして、その氏族・勢力の、それぞれの象徴が「天照大神」であり、「素戔嗚命」であるのではないかと推察した(本当は、彼ら自体は「百済系」の同族であった?!)?!

そして、その「根の国系(出雲系)」の方が、本来の正当・正統な政権(皇統)であったということであり、「高天原系」側は、それをなぞるような(言わば「反(陽?)転」させた?)形で対応させられ、それらが、全体の「高天原の神々」として仮構されているということであった?!

その一連のストーリーが、いわゆる「国生み・神生み」と呼ばれる部分であろうが、その最後の場面に登場してくるのが、まさに「天照大神」と「素戔嗚命」である(←「三貴子誕生」)!ただし、その二神は、「黄泉の国」から戻った「伊弉諾命」の子(分身)であり(この部分がミソである!）、その二人の誓約^{ちかひ}によって生まれた神々(「五男神」と「三女神」)が、多分?「大和建国」に関わった氏族・勢力ということである?!

ちなみに、「伊弉冉命」が、「伊弉諾命」との最後の?「神生み」で、「軻遇突智(火具土)^{かぐつち}命」という「火の神」を産み、それが原因で、彼女は黄泉の国へ行った(→死んだ!)ということであるが、おそらく?それは、「火の勢力

（火神信仰）→手焙型土器（甕/甕^{みか}）→前方後方墳勢力？」（の主力？）が、「大和建国」の途上で、まさに「前方後円墳勢力（日神信仰）」に敗北？したことを示している?!そして、その「火の神」勢力が、実は、本来の?「出雲」（の熊野系?→「熊野神社」）ではないか?!そのようなにも思われるのである（※前号と、若干違う?）?!

いずれにしても、その辺のことは、これ以上触れられないが、これについては、「三女神」はともかく（宗像氏←三沼君氏←藤（百済系王族・応神?）の流れ?）、どうしても、「五男神」、そして、その中の長子「オシホミミ」の子の「ニニギ」（天皇家）の「三男神」（の関係）が、よく解明できないのである?!

ここでは、その「五男神」及び「三男神」について、さらに突っ込んだ形で考察してみたいのであるが、それは、おそらく?私の考えている『『神武』『崇神』『応神（←神功皇后）』の『クロスオーバー（立体交差?）』』（※以前は、「トライアングル」としていた!）と、密接に関係してくるものであることは言うまでもない?!

そういう中で、現在最も、その後裔氏族がはっきりとしないのが、「活津彦根いくつひこね命」であつた?!八尾市にある「恩智^{おんじ}神社」の祭神である、「天児屋命（中臣氏）」の後裔の「御食津^{みけつ}臣命」の妻「御食津比売命」と関係があるらしいが、忍坂と住吉にある「生根神社」の祭神（「少彦名命」等）や「生國魂^{いくくにたま}神社」の祭神とも関係があるらしい?!

重要な神（勢力?）であろうが、その後裔がはっきりとしない?!何かが隠されているということであろうが、例の「伊勢神宮（外宮）」の「豊受大神」（御食津神?）のことが、脳裏を掠めもする?!

だが、とにかく、「記紀」においては、そうした神々の体系の中から、最後には「神武（人代）」が生まれ（南部九州?からの「東征」によるとされているが!）、そこから生じた（創出された?）「万世一系」の皇統譜によって、我が国（倭国→日本国）が推移してきたことを示せれば、それはそれでよかった?!

それは、ある意味「真実」であつたからでもあるが、別言すれば、「神武」以前の歴史（「神代」）は、後世の人間によって「創出（再構成）」されたものであって、その「創出（再構成）のシナリオ」は、他ならぬ「持統・藤原体制」（事実上は「不比等」?!）によって考案されたものなのである?!それが、「神武」に託された歴史だということでもある?!

② 新たに確信したこと?!とにかく、「偽僭説」は成り立たない?!二つのストーリーを混戦させてはいけない?!

ところで、もう随分前になるが、久し振りに「関裕二氏」の本を読んだ。それも、2冊である!相変わらずの多産家?であるが、その2冊の本（『古代史 不都合な真実 12の古代文書が暴く「日本書紀」の嘘』実業之日本社、2018年1月／

『神武天皇 vs. 卑弥呼 ヤマト建国を推理する』新潮社、2018 年 4 月）は、つくづく、氏の分析・考察の鋭さ・広さ、史実解明へのアプローチの豊かさを感じさせるものであった！

それにしても、何と言う「広範囲」で、「情報量の多さ」なのであろうか！他の専門家諸氏が、どのような評価を下されているのかは、私には知る由もないが、そこに示されている史実？解明の確かさと、それを論証する数々の証拠提供（論証）は、多分、他の追随を許さないのではないか？！

一刻も早く、彼の解明内容が、多くの人の共有物となり、それを踏まえた、より精緻（正確）な古代史解明へと進んでいくことを、切に望む！かなりの羨望？もないわけではないが、それが、ある意味「正しい知の集積」の道であると思うのである！

とは言え、改めて、関氏の論証（の主たる部分）は、具体的には、『日本書紀』の扱い（正体？解明）と、そこに示されている、数々の嘘や造作の全貌解明ということであるが、そこには、少し納得がいかないもの（間違い？）もあるのではないか？！

例えば、今回の本で、「神武天皇 vs. 卑弥呼」というような図式が提示されているのであるが、いわゆる「初期大和王権」と、「魏志倭人伝」に示される「邪馬台国／卑弥呼・台与」との関係究明が、かなり不整合？なのではないかということである？！

彼によると、「卑弥呼」の後を継いだ「台与」は、日本海勢力（丹波／丹後・越）の「神功皇后」（息長帯姫）であり、彼女は、「卑弥呼」を殺し、その宗女と偽って、邪馬台国を継承したということであるが（「偽僭説」）、何故、そのように偽る必要があるのか？

そこには、現地（北部九州）の「田油津姫（→卑弥呼？）」の伝承が介在しているようであるが、氏によると、本当は、既に近畿大和の方が「邪馬台国→倭国？」であったにも拘わらず、その九州の「卑弥呼？」の方が、先に「倭王」を名乗り（偽り）、「魏」から「親魏倭王」を授与されたということである？！

しかし、彼も認めている？ように、もし、『魏志』の言う「邪馬台国」が九州にあった（山門郡？）ということであれば、その、別の「邪馬台国（倭国？）＝日本海勢力？」は、どのような勢力で、それ以前の「倭国大乱？」においては、どのように、そこに居て、「卑弥呼？」の死後、どのように九州に乗り込んできたのかということが、「偽僭説」だけでは説明がつかない？！

しかも、「13 歳？」の女子を連れて来て？「宗女」としなければ、「倭王」とは名乗れなかったということにもなるが、そこに、どのような因果関係があるのか？！邪推かもしれないが、そこに、無意識な？「近畿大和説」が見え隠れしているようにも思える？！

そこで、もう一つ気になるのが、台与＝神功皇后（息長帯姫）だとしたら、「台与」が、3世紀後半の人物であることは間違いないので（『魏志』、「神功皇后（息長帯姫）」も、その時代の人物ということになる！

しかし、彼女は、例の「応神」の母とされている！その「応神」の時期は、どうみても4世紀後半から5世紀前半とみられるので（「百済系」勢力の進出！）、その時代設定そのものがおかしくなる?!逆に、そのころの「記紀」の記事は、120年の時代操作（遡り！）があることも、大方合意されている?!ここのトリックに騙されてはいけない?!

なお、4世紀後半から5世紀前半頃の、百済系勢力の近畿（河内）地方への進出の証拠は、例えば「狭山池（人工池／「狭山ジャンクション」）」の築造にも見られるという（渡来人による土木技術が数多く取り入れられている!）。そこにはまた、四条畷市の「葎屋しとみや北遺跡」等の渡来系遺物も発見されている！

繰り返すように、「古市古墳群」「百舌鳥古墳群」は、その代表的な遺物でもあるわけである?!これらが、「応神」から始まる「百済系」勢力の、畿内進出の証拠なのでもある?!

③「神武」と「応神」のクロスオーバー（立体交差）からなる「虚構の構図」?!

「丹塗り矢」がそれを暴く?!

ということで、3世紀中の「卑弥呼」「台与」（「邪馬台国」）と5世紀前後の「神功皇后（息長帯姫）」「応神」とは、人物的にはまったく無関係なのであり、3世紀以降の、いわゆる「大和建国」のプロセスは、北部九州とは別の（しかし、同じ種族ではある?）、新たな氏族・勢力のそれであるということを、ここに明確に確認しなければいけない（ただし、当然互いの影響・力関係はあり、それ以降も拡大・持続した!）?!

端的に言うと、その限りににおける「神功皇后（息長帯姫）」「応神」の記事は、かなりの造作（虚構?）があるということである?!そうなると、改めて、「記紀」が示そうとした「大和建国」のプロセスは、どのように理解されるのか?!

私の理解では、まずは、（九州からの）「神武」に仮託された氏族・勢力が、河内や熊野を経由して、葛城や磐余、そして、纏向（三輪）に進出（造成?）し、その後「崇神」（伽耶→（北部九州?）→吉備）勢力によってまとめられ、さらには、（百済→）北部九州の「応神」（藤原）勢力（筑紫「倭国」の血統）が、「河内」を本拠地にして、「倭→大倭→大和」を創り上げていった?!

その「応神」（藤原）勢力が、後の「継体」、そして「欽明」政権を生み出し、「天智」と「天武」の相剋を経て、「持統・藤原政権」に到達したということであるが、その大きな節目（転換点→政権交代?）に、「神武」「崇神」「応神」（これらの漢風諡号は後世のもの!）という重要人物を考案し（もちろん、それぞれモデルはいる!）、そのクロスオーバー（立体交差）配置によって、「万世一系」を

構築したということである?!

つまり、まずは「応神」を創出するために、「神武」を創出したということであるが（「崇神」は、それをつなぐダミー?しかし、こちらは本当のこと?）、それは、明らかに虚構?であり、創られた歴史であることは言うまでもない?!したがって、そこには、それによる矛盾や不整合があり、見ようによっては、それを暴く鍵穴?ともなる?!その一つが、実は、「丹塗り矢」伝承なのではないか?!

すなわち、その「丹塗りの矢に姿を変えて女性に近づく」という神婚譚（三輪山の「大物主神」が丹塗矢に変じ、溝を流れて用便中に近づき、のちに美男子に姿を変えて、比売と結ばれた←『古事記』!「玉依^{たまより}日売」が、川を流れ下ってきた矢を床の辺に持ち帰って、「火雷^{ほのいかづち}神」の子・「可茂別雷^{かもわけいかづち}命」を生んだ←『山城国風土記（逸文）』）には、「三輪氏」や「賀茂氏」、さらには「秦氏」の関係が示されている?!

私の解釈（仮説?）では、「神武」は、「鴨（賀茂）族」の祖である「タケツヌミ（八咫鳥←太陽神の使い?）」をモデルとしたものであるので、「神武」（「タケツヌミ」）が、「丹塗り矢」から生まれた、「三嶋溝杭^{みしまのみぞくい}」（大山祇?）の娘（「勢夜陀多良比売」。父親は「事代主神」?）の子（「媛蹈鞰五十鈴媛」）を正妃としたということは、「鴨（賀茂）族」が、「三嶋溝杭」（大山祇?）と縁戚関係を結び、「三輪氏」（大物主神）と協力関係を結んでいたということになる?!

だが、その「丹塗り矢」である「大物主神」（「火雷^{ほのいかづち}神」でもある?）は、「蛇神」としての「神」でもあり、それに関しては、例の「倭迹迹日百襲姫命^{やまとととびももそひめのみこと}」の物語もある（瓜二つ?しかし、結果は逆で、彼女は尻もちをついて死んでいる!これは、「吉備」勢力の終焉?を意味している?）?!

要は、「吉備（崇神?）勢力」が、「賀茂氏」と「三輪氏」と共に創り上げたのが「初期大和王権」であったが、一方の「吉備勢力」は、後に、彼らと袂を分かったということを示している?!つまり、「初期大和王権」は、まずは、「三輪氏」と「賀茂氏」によって成就されたものであるということである（そこに、「尾張氏?」が参画していたことは言うまでもない!）?!

(3) 改めて、「武内宿禰」とは、誰なのか?!そして、そこに隠されているものは何か?!

①「蘇我氏」「葛城氏」等を生んだ怪物?「武内宿禰」!誰か（ある勢力?）に被せられた「巨（?虚）人」?!

次に、やはり、改めて、その究明が急がれるのが、例の「武内宿禰」であろう?!彼は、「記紀」によると、「景行・成務・仲哀・応神・仁徳」の5代（第12代から第16代）の各天皇に仕えたという、まさしく極めて怪しげな?伝説上の忠臣とされている!

普通に考えれば、まったくあり得ないことであり（「神」でもない限り!）、そ

ここに何かがあることぐらひは、容易に察しが付こうというものである！

要は、「その何かは何なのか？」ということであるが、氏族系統的な観点からすれば、「波多・蘇我・木（紀）・巨勢・平群・葛城」等、後の中央有力豪族（葛城諸族？）の祖ともされるので、それらの氏族系統（群）に、その何かは隠されていることは間違いないであろう？！

そこで、そういうことであれば、やはり一番気になってくるのが、「記紀編纂者達（藤原政権）」にとっては最も厄介な（後ろめたい？）存在であった「蘇我氏」のことであろう？！

ただし、その蘇我氏は、私見（暴論？）によれば、実際は、「稲目」の時から作為的に結びつけられたものである（→新生？「蘇我氏」?!）、それ以前の蘇我氏（本来の？「蘇我氏」?!）、あるいはそれに関係する誰かに、巨（？虚）人「武内宿禰」が被せられたのではないか？！

それが、「天日矛（ツヌガアラシト?）」であり、その勢力であった?!そして、例の「神功皇后」や「応神」も、さらには「住吉大神」も、その人物・勢力と大いに関わりがあった?!ひょっとしたら、その「住吉大神」自体が、「天日矛（ツヌガアラシト?）」を顕現しているのかもしれない?!そういうことである?!

ちなみに、その「武内宿禰」は、『日本書紀』では、「屋主忍男武雄心やぬし おしおたけおこころ命」と「菟道うじ彦」（「紀直」の遠祖）の娘の「影媛」との間に生まれたとされる（景行天皇紀）。そして、「孝元天皇」（第8代）の皇子「彦太忍信ひこふつおしのまこと命」が、彼の祖父とされることから、「孝元天皇三世孫」（孝元天皇紀）?!

なお、そこには、弟（母は不明）として、讒言によって兄を貶めようとした「甘美内うましうち宿禰」がいる（応神天皇紀）！

一方、『古事記』では、「孝元天皇」皇子の「比古布都押之信ひこふつおしのまこと命」と「宇豆うず比古」（「木国造」）の妹の「山下影日売」との間の子とされ、「孝元天皇の孫」となっている！

親子関係等に若干の違い？はあるが、「孝元天皇」の系統と「木（紀）氏」の系統が合体した（婚姻した？）ことを示している？！

その「孝元天皇」（大日本根子彦国牽／大倭根子日子国玖琉おおやまとねこひこくにくる）は、第7代の「孝霊天皇」の皇子であるが、母は、皇后で、「磯城県主（または十市県主）大目」の娘の「細媛（比売）命」で、同母兄弟はいないが、異母兄弟に「倭迹迹日百襲姫命・彦五十狭芹彦命（吉備津彦命）・稚武彦命」らがいるとされている。

19才で皇太子となり、翌年の1月に即位。即位4年、軽の「境原宮」に都を移す。「神武」建国の地である「橿原」にほど近い。即位7年、「穗積臣」（物部氏と同族!）の祖の「薨色雄うつししこ命」の妹の「薨色謎うつししこめ命」を皇后

として、「大彦命」、「稚日本根子彦大日日尊」（後の開化天皇）らを得た。

また、「伊香色謎いかかしこめ命」、「埴安はにやす媛」を妃にし、「伊香色謎命」との間に、葛城氏、蘇我氏の祖となる「彦太忍信命」を得た。また、「埴安媛」との間には、「崇神天皇」の代に反乱を起こすことになる「武埴安彦命」を得たとされる。

周知のように、「孝靈」「孝元」等の天皇は、いわゆる「欠史八代」とされ、「神武」（初代。BC 660 年）と「崇神」（第 10 代。3 世紀後半？。ここから実在とされる！）の間を埋めるために？創出された天皇群とされているが、彼らは、まったくの架空（作り話）ではなく、おそらく 3 世紀頃の「初期大和王権」（纏向祭政都市）を作り上げた氏族・勢力を示していると思われる？！

そうすると、「孝靈」から、「孝元」と「吉備系」に分かれ、その「孝元」から、「武内宿禰系（比古布都押之信命）」が分かれ出ていることになる？！

そして、「天皇家？」は、次の「開化」（稚日本根子彦大日日尊）に引き継がれ、そこでさらに、阿倍氏の祖「大彦」（越？）、「少彦男心命」（出雲？）、「倭迹迹姫命」（吉備）、「彦太忍信命」（？肥前？）、「武埴安彦命」（丹波？）が分かれていったということである？！

② それにしても、何故、北部九州（肥前・筑後）に彼の足跡が?!「玉垂命」（藤大臣／高良大明神）との関係は？

いずれにしても、ここら辺りの部分を、すんなりと解明することは、ほぼ不可能であろうが、怪物？「武内宿禰」が、過去の（造作された？）天皇家から出たとする「記紀」の主張は、基本的には認められることではあろう？！

「葛城氏」や「蘇我氏」「木（紀）氏」等が、ある意味「王権」を保有（構成？）していたことは事実であったからであり、そのこと自体は、「記紀」編纂者達も、嫌と言うほど？知っていたであろう？！

では、一体、「武内宿禰」系は、どのように「王権」を保有（構成）していたのであろうか?!問題は、改めてそこである？！

ということで、その謎を、多分？まとめて引き受けているのが、例の「神功皇后（期）」であり、そこに絡まっている「武内宿禰」、そして、「住吉大神」ということになる（尤も、「武内宿禰」と「住吉大神」は、同一人物の可能性もある？）?!

もちろん、「神功皇后」の夫？の「仲哀」や、その子とされる「応神」も、そのことと密接に関係していることは言うまでもない?!だが、繰り返すように、この部分が、最も不分明（不自然？）で、何とも悩ましいのでもある？！

だが、もうそろそろ？、次なるステージに行かないと、そこから先の話がなかなか進まない?!そこで、今、その突破口（手がかり？）として受け止めているのが、彼の、北部九州（肥前・筑後）での足跡であり、そこにおける「（大善寺）玉垂宮」や「高良大社」（久留米市・筑後国一宮）との関係である！

実は、その祭神は、「玉垂命→高良大菩薩？」（藤大臣／高良大明神）とされているが、それが、「武内宿禰」ともされているのである（祭神の「高良玉垂命」が、中世以降に「八幡神」第一の「伴神」とされたことから、応神天皇（「八幡神」と同一視される）に仕えた武内宿禰がこれに比定されているわけである？）！

その結果、「石清水八幡宮」を始めとする全国の八幡宮・八幡社において、境内社のうちに「高良社」として、「武内宿禰」が祀られる例が広く見られるともいう。

ちなみに、彼は、その「高良大社」だけでなく、「気比神宮」（敦賀市・越前国一宮）、「宇倍神社」（鳥取市・因幡国一宮）「伊福部（五百木）氏」が関係！終焉の地？）等の、各地の神社で祀られている。

それはともかく、ここでは、何故、「（大善寺）玉垂宮」や「高良大社」に彼がいるのかである！

ただし、事実として、「記紀」においても、彼が、北部九州に行った（いた？）ことは記されており（いわゆる「神功皇后」の九州遠征／熊襲征討？&新羅親征説話）、その事績、それ自体は何の不思議もない?!問題は、何故、彼が葛城諸族と縁があるのかということであるが、その「葛城」という地名が、北部九州（肥前）にもあるというではないか（←兼川晋氏）?!

それが、例の「基肆→木 or 貴?国」の場所である（現在の佐賀県・福岡県に跨る、大和葛城諸族の出身地?あるいは邪馬台国以後の九州倭国を糾合した「大倭→倭」国）の発祥の地?）?!しかも、その近辺には、例の、大和との地名の類似性があるのである?!

そこで、ここで、新たに問題としたいのは、他でもない?彼が、近畿（大和）から移動（進出）していったのか?それとも、「別のあるところ」から、そこに移動（進出）していて、その後、近畿（大和）に移動（進出）していったのかということである?!

もちろん、その「別のあるところ」というのは、朝鮮半島であり、「多羅（伽耶）」であった?!彼は（神功皇后も?）、「多羅」の出身で、実はそこは、百済との同祖「扶余」からの移民?があつたところともいう（「タラシ」という表現が、それを示している。しかも、当地には、「アレナレ→霰あられ」川（現在は「広川」）というものがあり、「アレナレ」は、扶余系の言葉らしい?←兼川晋氏）?!

③「武内宿禰」が握る?古代の真実?!そして、「神功皇后」あるいは「仲哀天皇」との関係は?!

こうなれば、俄然私自身も、後者の見方を採用せざるを得ないが、そうなる、「武内宿禰」、そして、例の「天日矛（＝ツヌガアラシト?）」の話を経合すれば、「神功皇后（期）」の話は、通説とは違って、かなり、否、まったく違った様相が示されることになる?!

そこに、「応神（期）」が続くのである?!しかも、その「応神（期）」から、現在の「天皇」が続いているとも言えるのである?!その「応神」が、「神功皇后（息長氏）」の子なのでもある（なお、父親は「仲哀」とされるが、他にもない「住吉大神←武内宿禰?←天日矛?」と目される?!）!

ある時期からの「倭国→日本国」は、その「多羅」「百済」からの渡来者（氏族）によって、作り上げられた国であったとも言えるのである?!

しかしながら、そのことが事実であれば、それはそれで、真摯に受け止めればよいだけの話である!現在の隣国関係を、当時のそれに、無理矢理結びつける必要はないということである（「国」の受け止め方が違う?）!敢えて言えば、アフリカを出た現生人類（ホモ・サピエンス）の世界拡散（「グレートジャーニー」）は、今も続いており（これからも!）、例えば、たまたま現在のそれを「グローバルゼーション」と呼んでいるに過ぎない?!

この場面は、ある時期の「東アジア」の一様相（そこに限定してはいけないが?）であり、そういうことを、ある意味絶えず繰り返し、今を迎えているのである（単なる「征服」とか「支配」とかというものではないということ!）!

改めて、「武内宿禰」が握る?古代の真実とは何か?それは、端的に言えば、ある時期（4世紀頃?）、半島からの勢力（多羅伽耶+百済?）が北部九州（肥前・筑後）に進出し（基（肆）国→貴国?）、そこを中心にして「大倭→倭」国を建設し、その後、彼らは近畿に移動し（「河内」→「応神王朝」）、やがて「継体王朝」が、その後を継ぎ（乗っ取り?）、「欽明朝」において再び統合され、「天武期」を経て、「持統・藤原体制」が出来上がった?!

その中で、「応神王朝」を実現させたのは、他にもない「武内宿禰」に束ねられた「葛城諸族?」だということである?!それが、記紀編纂側の藤原氏にとっては、表には出せない事情となっていたということである?!

ちなみに、弟の「甘美内宿禰」が、武内宿禰が「倭国?→大和政権?」を我が物にしようとしているという讒言によって、兄を貶めようとした話は、その反対（抵抗）勢力が、近畿（大和）にいたということである?!それが、「仲哀」に投影されている勢力であったことは、ほぼ間違いないであろう?!

なお、「武内宿禰」の系譜に関しては、彼が、後世（7世紀後半頃?）に創出された人物と見られることや、埼玉県の「稻荷山古墳」出土鉄剣銘からの推論によって（人物称号は「ヒコ → スクネ → ワケ」と変遷するべき?）、本来は、「武内宿禰の位置に葛城襲津彦がいた!」、そういう言説もあるようである?!その可能性は、大いにあるかもしれない（人物像が似ている?）?!

ここでは最後になるが、確か、関裕二氏は、「天日矛」を、越 or 丹波の製鉄氏族で、半島に渡り、そこで財をなした人物、またはその子孫?とされ、説話で、姫（女性）を追って、倭国に来た（戻ってきた?）人物とされている。

その人物と、同一人物と見做される「ツヌガアラシト（大加羅の人）」もいるが、彼が、「気比神宮」の祭神（気比大神）とされ、例の「応神」と、その名を交換したとされる人物でもある！出身が、新羅の王統関係で、「タバナ国」の王族のことが書かれており、その関わりで、半島に出ていた誰か、あるいは、その子孫なのではないか（その説話が、かの有名な「浦島太郎」である?!）?!ということである?!これもまた、捨てがたい話ではある?!

(4)再度、熟考！「神武」「崇神」「応神」に仮託された、倭国（→日本国）の三層螺旋?!

① 改めて、構想（再構成）された倭国（→日本国）の歴史構図（三層螺旋?）のからくりとは?!

私は、今改めて、我が国の建国史（「倭国」→「日本国」）において、「記紀」、直接的には『日本書紀』が、「応神」を起点（「神功皇后」とセット!）として、「神武」「崇神」「応神」の、言わば『神』のトリプルスピン（三層螺旋）?構造（構図）→クロスオーバー（立体交差?）を描いていることを確信しようとしている!

換言すれば、それらは、その、それぞれの「神（天皇）」に仮託された人物（勢力）が、倭国（→日本国）を創出していった軌跡を示しているということである（時代的には不整合な部分はあるが、その順序性自体は真実であった?!）?!

だが、それは、いわゆる「持統・藤原（不比等）体制」によって着想されたものであり（それ以降も、随時、時々の藤原政権によって修正?され、最終的には「桓武」によって完成?させられた?!）、かなりの捏造や潤色が施されていることは言うまでもない?!

したがって、我が国建国史の真実を明らかにするためには、その「構造（構図）→立体交差」に託されている（隠されている?）意味と内容を、まずは一方で誠実に受け止め（見破り?）、他方で、その意味と、個々に示される（明らかとなる）内容⇌事実（考古学等からの発見・情報による!）を照らし合わせ、その総合的な判断に基づく「事実解明」を行っていく必要があるということになる。

もちろん、これは、最も現実的な方法ということでもあるし、これまでも、基本的には、そういうことで進められてきた?!ただし、それが、全体として納得のいく解明になっているのかどうかは、また別の問題ではある?!実際、かなりの齟齬や矛盾がある（そして、難しい人間関係も?）?!

いずれにしても、「持統・藤原（不比等）体制」は、「天武」の皇后（しかも、「天智」の娘）であった「持統」（鸕野讃良^{うのささら}皇女）を、新王朝の始祖たるべく位置づけ（「万世一系」の創始者「天照大神」というイメージで!）、そこからどのようにして、当時の王権（政権）にまで至ったのかを、「神話（「神代」）」と「説話（「人代」）」のセットで、可能な限りの「捏造・潤色」を施して描こうと

したということである?!

まさに、自らの政権（体制）の「正統性」「正当性」、そして「権威性」を誇示しようとしたということである?!その際、幾つかのエポック（時代区分）を想定し、そこに、「神武」「崇神」「応神（+神功皇后）」の時代を、それぞれ架設したのである（ある意味、それは真実であった?そして、それが、「記紀」の原点でもあった?!）?!

言い換えれば、これが、ここで言う、「応神」（+「神功皇后」）を起点とした、「神武」「崇神」の、いわゆる「神」の集合（習合?）体?（トリプルスピン（三層螺旋）構造（構図）→クロスオーバー（立体交差））ということなのであるが、それは、3世紀初頭?の「大和集結・建国」（九州?→吉備・出雲?からの近畿進出＝神武期、纏向・三輪政権＝崇神期）、そして「(新?)王権の確立（篡奪?）・発展」（河内政権＝応神期）」と続いたとするものである?!

繰り返すように、それが、例えば、上山春平氏が「高天原系」と称する「神」（部族・勢力）の動きや関係であり、それを、「(持続・藤原体制)」から位置づけして描いたものが「記紀（神話）」であり、そしてまた、その過程において排斥され、敗北していった?のが、まさに「根の国系」の「神」（部族・勢力）であったということである?!

ただし、その賦与された「神」の名（「漢風諡号（死後の贈り名）」）は、後の、「淡海三船」という人物の創作（傑作?）なので、そのこと自体が、当初から意図されていたわけではなかった?!だが、内容（続き?）的に、そのような作為があったということではある?!

ちなみに、「淡海三船」は、血筋的には、一応藤原体制内派ではあったであろうが（天智の孫 or 玄孫?ただし、彼自身は、いわゆる「臣籍降下」された身分であった!）、一人の文人としての矜持（意地?）からか、「記紀」に示されている思惑?、そして各人物（天皇）に賦与されている役割（実際の事績?）を、漢籍等を用いて、素直に暗示?させたものとも考えられる?!ある意味、凄人である?!

② 各時期における、それぞれの様相?!何故、二人の「始祖王（ハツクニシラスメラミコト）」がいるのか?!

それはともかく、以下、この想定（仮説?）に基づいて、改めて、それぞれの時代の真相をまとめて?みることにしたい!その中で、まだまだはっきりとした説明が出来ていない?、いわゆる「二人の始祖王（ハツクニシラスメラミコト）」のことに、改めて接近出来れば、もう一つの成果ともなる?!

○初代「神武」期～二つの氏族・勢力が「大和」に集結した?!それを、縦（時）系列に配置した?!

まず、初代「神武」の時代であるが、明らかに、「B C 660 年即位」とする「記

紀」の記述は誇張（嘘！）である（考古学的にも、その時代に、そうした物証はまったく得られない！）！では、それは、どういう「設定」で、そのようにしたのか？！

当然？「記紀」は、それが真実であったとは考えておらず、ただ「自分達の先祖（王権）は、それなりに古い時代に始まった（由緒深い！）」ということを示す必要があった（「唐」に対して！）ということである？！

したがって、年代的には、ある意味妥当で、しかもここが重要であるが、特定の「祝福されるべき年」に（「讖緯思想」「辛酉革命説」に則って！）、それが始まったということにした！虚構ではあるが、一つの物語としては、それはそれで良かったということである（中国・唐にしたって、そういった「物語」はあったであろう？）？！

しかし、問題は、単なる虚構では具体的な事績が描けないので、その舞台設定と登場人物？を、どこかの真実の時代に設定する必要はあった！それが、3世紀前後の「倭国」、とりわけ「大和」の状況であった？！何故なら、まさにそこが、現政権の「事実上の出発点？」であった（と見なされる？）からである？！

とは言え、その時代のことを、すべて「神武」時代にスライドさせてしまうと、次に書かなければいけなくなる、本当の、その時代の事績が無くなってしまふので、記紀編纂者達は、同じ時代状況を、「神武」（のモデル→タケツヌミ？）と「崇神」（のモデル→ニギハヤヒ？）の事績に振り分け、先行の「神武」の事績から「崇神」の事績までを、連綿と続く「一系」の物語として、それを紡ぎ直す必要があった（尤も、何か実際の事績が材料としてなければ、たとえ虚構でも、本当らしい物語には出来ない？）？！

具体的には、同時代の「神武」と「崇神」の事績を時系列的に縦に配置し、そして、その間の事績を、実際の大和建国に至る関係氏族・勢力（大きくは「吉備」と「出雲」）の動きから借用？し、それを、「神武」以降の「皇統事績」と位置づけた？！

いわゆる「欠史八代」と呼ばれるものであるが、したがって、それは、決して虚構の産物なのではなく、ある意味真実なのでもあった？！ちなみに、その「神武」と「崇神」の双方によって大和建国がなされたことは事実であったので、結果的にはおかしいことになったが、彼らは共に、「ハツクニシラススメラミコト」という扱いになった（尊意の「称号」が与えられた！）ということである？！

多分、そのことを知っていた「三船」は、「神武」の場合は、第三の「神」、すなわち「応神」にとっては、必要不可欠な存在であったこと（何故なら、それによって、「応神」は、『神武』から連綿と続く『天皇家』の末裔だと言うことが出来る！）のである？！）、そしてまた、「崇神」は、その関係を「崇める？」ために存在としたということを示したかったということである？！

○第10代「崇神」期～ここから、真の「大和王権（「前方後円墳」勢力）がスタートした?!

次に、その「崇神」であるが、こちらが、3世紀頃、最終的に大和（纏向）に王権を樹立した勢力（おそらく「ニギハヤヒ」勢力!）、すなわち「吉備」にいた（移動していた?）「太陽・龍神信仰勢力」、山陰から進出していた「出雲族」、そして、南部九州から来ていた「鴨（賀茂）族」（→葛城王朝?）の合同（同盟）勢力のことである?!

多分、吉備勢力は、当時の、北部九州と近畿勢力（中国江南から来ていた「安曇族」→「環濠集落」勢力）の狭間にあって、何とか、その苦境を脱却しようとした（鉄の入手・保有困難?）?!隣国の「出雲」を抱き込み（進出→「国譲り」!）、最終的には「前方後円墳」勢力（河内経由／大和川水系）として、全国各地に、その覇権を広げていった?!

一方、「出雲族→ワニ（和邇）族?→多氏族?」は、「前方後方墳」勢力（河内経由／淀川・琵琶湖水系／「火神信仰」?）であったが、彼らは、最初は「前方後円墳」勢力と協力関係を結んでいたが（むしろ主力?）、多分?「尾張氏」の離反（造反?）によって、政権中枢から遠ざけられた?!

「（本来の?）天照大神」や「大和大國魂神」を宮中から遠ざけたということ（「共殿共床」の忌避?）や「疫病」の蔓延で、その崇り主「大物主」（先住氏族・勢力／出雲系?）の末裔の「大田田根子」（三輪氏）を大和に呼び寄せたり、そして、何より「四道将軍」の派遣といった実績?の持ち主であるわけであるが、ある意味、それまでの政権とは違った血筋の出であったことは間違いない?!それが、おそらく「記紀」においては、例の「ニギハヤヒ勢力」（→物部氏?）を彷彿とさせるのである?!

核となったのは、多分「吉備勢力」（箸墓古墳←橿築遺跡）であったろうが、彼らは、もともとは「伽耶」出身であったのではないと思われる?!いずれにしても、ここから、真の「大和王権（「前方後円墳」勢力）がスタートしたことは間違いないであろう?!

○第15代「応神」期～直接の祖?!ここで、「邪馬台国／卑弥呼・台与」及び「倭の五王」がつけられた?!～

その後、多羅・百済から進出してきた、北方騎馬民族の血筋を引く「扶余系」の氏族・勢力が九州から進出してきた、それが、「武内宿禰」「神功皇后」、そして「応神」、さらには、それを支えた息長氏・秦氏、すなわち「河内王朝」とも呼ばれる状況が生まれるわけであるが（→古市古墳群／百舌鳥古墳群）、ここで、「邪馬台国／卑弥呼・台与」及び「倭の五王」がつけられた（融合された?）ことは間違いないであろう?!

ただし、そこでの問題は、中国史書に載せられていた、まさに実在（本当）

の、具体的には「邪馬台国／卑弥呼・台与」及び「倭の五王（讃・珍・済・興・武）」の存在、そして、その関係（整合性？）を、いかに描くのかということであった?!

すなわち、「魏志」の「邪馬台国／卑弥呼・台与」を無視することは出来ず、「神功皇后」という架空の存在を構想し、そこに卑弥呼・台与を投影させた！そしてまた、『宋書』等の「倭の五王」との対応性という点では、かなりの曖昧さが残るが、「雄略天皇」等に対応させ（見せかけ？）、それが「大和の倭国？」の王であったことを匂わせた?!実際は、それは、九州倭国（百済系）の事績であった?!

しかも、本当のところは、彼らは、九州に本拠地を残しつつ（→筑紫倭国「倭国」？→筑紫の君→アマタラシヒコ／日出処天子？）、徐々に近畿にも進出し、百済系の技術・文物を波及させていった（→仁徳天皇等）！その近畿（河内）への影響・流入の痕跡が、伽耶系から百済系への須恵器の変化、河内平野（潟）の大規模灌漑、そして「古市」、「百舌鳥」の古墳群の出現等である?!

以上、このような「三層螺旋構造（構図）→クロスオーバー（立体交差）」が想定されるのであるが、やはり一番の問題は、「武内宿禰」系に束ねられた「葛城（伽耶／新羅系）諸族」と「応神」（→「継体」）に委ねられた「百済系諸族」の関係が如何にあったのかということである?!

要は、乗っ取られた？「武内宿禰」系が、「崇神」の系統に取り込まれる形で処理されているわけであるが、本当は、その部分と、一方の「百済系勢力」がどのような関係にあったのか？「謎」の核心は、そこにあるのではないか？現時点では、そのように思う次第である?!だが、やはりまだまだである?!本当に、難しい?!

(5)「畿内古墳群」の変遷から見た「王権（皇統譜）」の移動?!そこに何があるのか?!

① 事実としての「畿内古墳群の変遷」?!その立地・順序性に、「三層螺旋→立体交差」の真相が見える?!

ここで、(4)で述べたストーリー、すなわち『神』の集合（習合？）体？（トリプルスピン（三層螺旋）構造（構図）→クロスオーバー（立体交差）」を浮かび上がらせる？考古学的根拠があれば、それを示す必要がある?!

実際は、類推（後追い？）ということであるが、それが、以下に示す「畿内古墳群の変遷」であろう?!改めて、それこそが、私の、とんでもない仮説（妄想？）に繋がることにもなるのである?!

・「神武期」並びに「崇神期」の事績に示される様相?!

ということで、まずは、最初の「神武期」並びに「崇神期」に示される様相であるが（実際は、同時期の事績であろうが→3世紀代？）、奈良盆地の東南部に

所在し、「初瀬川」右岸に、およそ南北に並んで形成されている「大和おおやまと古墳群」がある！

それは、北から「萱生かよう古墳群（狭義の「大和古墳群」？）」「柳本古墳群」「纏向（「箸中」）古墳群」及び「磯城古墳群」の、4つのグループに分けられるらしいが、「纏向（「箸中」）古墳群」から周辺に広がっていったものとされ、1つの古墳群集団として捉えることができるらしい?!いずれも、「古墳時代前期前半」に営まれたものということである！

この中で、最も著名で、しかも古いのが、「纏向（「箸中」）古墳群」（古墳時代前期初頭）であるが、「三輪山」の西麓に広がり、いわゆる「前方後円墳」の発祥の地とみられている?!

同古墳群は、天理市から桜井市の「山辺の道」沿いに広がる「柳本古墳群」の南、かつての「水垣郷」に位置し、広大な「纏向遺跡」のなかにある（地形的には、珠城たまき山丘陵によって、「柳本古墳群」とは分断されるらしい!）。

盟主墳とされる「箸墓古墳」は、定型化した最初的前方後円墳とみなされ、3世紀後半から4世紀頃に築造された?!ただし、その原型は、「吉備」の「楯築遺跡」にあるとされている！

いずれにしても、以上の古墳群集団は、最初に「大和（奈良盆地）」に集結した、「吉備（勢力）」を中心とする「太陽／龍蛇神信仰族」（前方後円墳勢力＋前方後方墳勢力?）の古墳群の集まりであろう?!

ちなみに、「箸墓古墳」を除く5基の前方後円形の墳墓は「纏向型前方後円墳」と呼ばれ、帆立貝のような形をしているという（なお、宮崎県の「西都原古墳群」の「男狭穂おさほ塚古墳」も、これと同じ形とされる！これは、例の「神武東征」と関係しているのか?）?!

また、その北の「柳本古墳群」は、「和邇氏族（多氏等?）」（「前方後方墳勢力」?）の古墳群と見なされているが（「和邇氏族」の根拠地であった?）、これらを全体としてみれば、「大和」は、まずは「前方後円墳（原形は「円墳」かも?）勢力」と「前方後方墳勢力」の同盟（合体）によって成立したということになる?!

・「応神（前）期」、実は、「神功皇后」や「武内宿禰」の事績に示される様相

次が、「佐紀盾列さきたてなみ古墳群」であるが、この古墳群は、奈良市北西部、奈良丘陵の南西斜面の佐保川西岸・佐紀の地に所在する、「古墳時代前期後葉から中期」にかけて営まれたものとされる。

本古墳群は、佐紀丘陵の南斜面に前期後半から中期、つまり4世紀末から5世紀前半にかけて巨大前方後円墳が営まれた。「大和・柳本古墳群」に続く王墓とみられている（→「大和・柳本古墳群」は、5世紀初頭には衰退!→王権が移動した?）。200メートルを超す巨大古墳が、前期後半には3基、中期には4基

みられるという。

しかし、これも、中期末の、5世紀後半から末葉になると、弱小化してしまうという。

もう一つが、「馬見^{うまみ}古墳群」であるが、この古墳群は、奈良盆地西南部、奈良県北葛城郡河合町、広陵町から大和高田市にかけて広がる馬見丘陵とその周辺に築かれ、北群、中群、南群の3群からなるとされている。4世紀末から6世紀にかけて造営されたと見られる。

古代豪族「葛城氏」の墓域とみる説もあるが、この葛城地域には、古墳時代前期の中頃から有力な古墳の造営が始まり、前期中葉から中期には、墳丘長200メートルを超える規模の古墳が造営されているらしい。最初の勢力群から少し遅れて、(多羅伽耶?→北部九州から?)大和に乗り込んできた「武内宿禰(葛城)系諸族」(→葛城王朝?)の古墳群とみてよい?!

このように、「大和」の王権は、全体として見れば、盆地東部から西部の方に移動したと見られ、しかも、「佐紀盾列古墳群」と「馬見古墳群」が、ほぼ同時期に盛行していたというようにも見える?!これが、謎の「神功皇后(+応神?)」と「武内宿禰」、すなわち「息長氏」と「葛城諸族」の関係を示しているともいえる?!

・「応神(後)期」、実は、「仁徳」以降の事績に示される様相

最後が、奈良盆地を離れた「古市^{ふるいち}古墳群」と「百舌鳥^{もず}古墳群」であるが、前者は、大阪府羽曳野市・藤井寺市にある古墳群で、20基が国の史跡に指定され、27基(重複含む)が、宮内庁により、天皇陵(8基)・皇后陵(2基)・皇族墓(1基)・陵墓参考地(1基)・陵墓陪冢(15基)に治定されているという。

東西約2.5キロ、南北4キロの範囲内に、「誉田御廟山古墳」(伝応神陵)等、墳丘長200メートル以上の大型前方後円墳6基を含む、123基(現存87基)の古墳で構成されるという。いずれも、標高24メートル以上の台地や丘陵上にある。古墳造営には、豪族の「土師氏」等が関与していたとされる。

一方、後者は、「大山陵古墳」(伝仁徳天皇陵)で有名であるが、「ミサンザイ古墳」等、墳丘長200m以上の大型の前方後円墳4基を含んでいる。堺市北西部に位置し、古代の海岸線に近い、「上町台地」に続く台地上に築かれている。

古墳は東西、南北とも、それぞれ約4キロメートルの範囲に分布しているそうであるが、台地の西側の低い背梁部に「上石津ミサンザイ古墳」が営まれ、その北方へ、「大山古墳」等が順次築造されていく一方、「百済川」の東方へ、古墳群が拡大されていったと推測されているようである?!

なお、この二つの古墳群は、おそらく、一番後から近畿に進出してきた「百済系勢力」と考えられるが(「百済川」という名の川もある!）、強いて言えば、「古市古墳群」は、その前半(→応神期?)、「百舌鳥古墳群」は、その後半(→

継体期?)ということになるのか?!

とにかく、双方は、「百済系勢力」の、とりわけ「瀬戸内海航路」を押さえる、新たな根拠地であったことは言うまでもない?!

② 「天皇家」とは何か?

ところで、よく「天皇家(←天孫族)」とか表現されるが、これは、少し吟味が必要かと思われる?!何故なら、それは、最初から(と言うより、「属性」として?)、それとして存在しているわけではなく、結果として、そうなっているということだからである!

もちろん、その時々そのように、実体としての「天皇(大王)家」は存在するのであるが、例えばそれが、『神武』から連綿と続いてきた!という言い方は出来るにしても、それは、あくまでも、「血筋的にはそこに遡ることが出来る」ということであって、「超然的な自覚や、その累積の存在」が、そこにあるということではない!

言い換えれば、それは、その時々「天皇(大王)家(を構成している人々)」の思い(意志)や行動が、その時々「天皇(大王)家」という枠組みにおいて展開されてきたということである!

単純に言えば、その「天皇(大王)家」という枠組みを規定する「血筋や権威、伝統やしきたり」が、その進展(変転)の中で外在化(規範化)され、それらに基づく思い(意志)や行動が、言わば「天皇(大王)家」という括りで束ねられ、存在してきたということである!

要するに、こうしたことは、「天皇(大王)家」であろうとなかろうと、世代の繋がりということ言えば、どこの「家(系)」でも同じであり、取り立てて「天皇(大王)家」だけを、「特別な家系性」という必要はない?!ただし、誤解がないように言っておくと、その時々「天皇(大王)家」のあり様を、他の人々(国民?)がどのように受け止め、それを、どのように畏敬(敬愛?)するかは、また別の問題である!

強いて言えば、「政治」の問題ということになるが(かつて「天皇機関説」というものもあった?)、その「政治」に、他ならぬ「天皇(大王)家」が、必要以上に(「制度」を超えて?)振り回されることは、別な意味で、あってはならないことである?!

ということで、いささか古代史解明の文脈を逸脱したように思えるが、ここで言いたいことは、我が国の歴史(古代史)の解明において、「記紀」等が示す「天皇(大王)家」の存在、関係氏族・勢力の攻防(興亡?)が、そこには幾重にも存在していて、そのプロセスを正確に追い求めることが、その中核をなすということである!

そして、その中で、「天皇(大王)家」という、特別な家系(血筋)が、言わ

ば「アプリオリ（先験的!）」にあり、時代・場所を超えた、超然的（神聖不可侵?）な存在であり続けてきたかのような前提で、それを捉えてはいけないということである！

③ 改めて、そうした「天皇（大王）家」（正確には「王権」!）は、どのように推移していったのか?!

そこで最後に、改めて、そうした「天皇（大王）家」（正確には「王権」!）は、どのように推移していったのかということであるが、少なくとも、この「畿内古墳群」の様相の転移から、大まかには、以下のような事実?が浮かび上がってくるであろう?!

ただし、それについては、これまでも、多くのみなさんが、大方解明はされている?!したがって、ここでは、その再確認（しかも、概略?）ということではある?!

まず、3世紀の中頃?（北部九州の「邪馬台国」の卑弥呼・台与の時代）、奈良盆地東南部の「纏向」（「纏向古墳群」）を中心に、外来の氏族・勢力が集結してきた（→「大和古墳群」）!それらは、「吉備」（「物部氏」「大伴氏」等?）を主体とした、後の「前方後円墳勢力」であった?!

もちろん、そこは「三輪山」の西麓であり、そこには、「三輪氏」（出雲系?「大物主」勢力）もいた!彼らが、そこに、新たな「王権」を確立したことは間違いない（北部九州「倭国（邪馬台国）」に対抗するため、そして、東日本に進出・拡大するため?）?!

次に、そこから、盆地北部に向けて、「柳本古墳群」が構築されているが、ここは、「纏向勢力」と、ある時期まで行動を共にした、おそらく「近江」で出現した「前方後方墳勢力」、いわゆる「ワニ氏族（→和珥氏）」の根拠地であったろう?!一度、「纏向勢力」に押された（負けた?）が、再び実権を取り戻し、そこに「王権」を確立したと考えられる?!

その後、その北東部の「佐紀盾列古墳群」と盆地西部（生駒・金剛山地麓）の「馬見古墳群」に、新たな（別の）氏族・勢力が集まり、それぞれの根拠地とした?!前者が、「宇治→山背（城）」に繋がる勢力、後者が、いわゆる「葛城諸族」である（ちなみに、この中から「尾張氏」も出ている?）?!

最後に、奈良盆地から離れて、河内、瀬戸内海を制することになった「百済系勢力」の「古市」・「百舌鳥」の古墳群が出来たわけであるが、全体として「前方後円墳」築造が基本となっているのは、その古墳の構成要素（墳形・置物等）が、各地・各域の氏族・勢力のシンボリックなものの融合からなっているように、もともとが、「倭（人）」という意味では、一つのまとまり（同族 or 仲間意識）と認識できたということではなかったか?!

それがまた、二つの「倭国」の存在を可能にした（維持することが出来た?）

とも言えるのではないだろうか(もちろん、そのような「疑似的? 関係」を嫌った、拒否した氏族・勢力もあった?!) ?!

(6) 各種文献・伝承等を繋ぎ合わせた「記紀」の物語(ストーリー) ?! ある意味、当然?!

① 古く見せ、「万世一系化」も実現させたが、かなりの無理や齟齬もあった?!
だが、「創り甲斐?」もあった?!

ところで、これは、最近思い始めていることであるが(ある意味必然か?)、
「記紀」(事実上は『日本書紀』)のストーリーに、かなりの無理や齟齬が生じるのは、記紀編纂者達(当時の政権)が、実は、その時までは、自らの、倭国(→日本国)での歴史を、ほとんど有していなかった(直接知らなかった?)からであり、単に隠すためとか、歴史を長くするためだけではなかったのではないか?!

したがって、そこに、ストーリーづくりの難しさ(逆に言えば、「創り甲斐?」)があったことは、容易に察しがつくのではないかということである?! ただし、そうは言っても、ただ闇雲(荒唐無稽?)に想像を逞しくすればよいということではなく、いくつかの前提条件(制約?)があったことは言うまでもない?!

それについて、今現在、少なくともはっきりしているのは、「大枠では、史実であったことを示す!」、そして、「その中で、何を、どのように工夫すれば、現政権の『正統性』『正当性』が示されるのか、そこを外さない!」、そういうことではなかったか?! 様々な制約、背景があったとしても、「記紀」の直接の編纂目的は、まさに「国史(自国の歴史)」の作成(創成)であったからである?!

ちなみに、「創り甲斐?」という点では、『史実の創成(再構成?)』の妙味、そこに流れる『藤原氏(不比等)の意図の顕現』の快感?、そういったものがあつたであろう?!

例えば、「神代」における「高天原神話」及び、そこに登場する「神々の創出・配置」(キャスティング→とりわけ「高皇産霊^{タカミムスビ}尊」の活躍?→それは、「不比等」の意思の反映?)、そして、そこにおける「伊弉諾^{いざなぎ}・伊弉冉^{いざなみ}の神生み」「伊弉冉の死」「(伊弉諾による)三貴子(天照大神・月読命・素戔鳴命)誕生」「天照大神の岩戸隠れ」「スサノオ追放」「出雲の国譲り」「天孫降臨」「海幸山幸」、そして「神武東征」といった、「人代」へと続く「ストーリー展開」が、まさにそれである?!

しかも、それは、創る側だけでなく、読む(まされる?)側にとっても、ある意味? 興味の尽きない(驚愕の連続の?)「読み物(文学性を併せ持った?!)」となったということである?! 「ああ、あのことが、こういう仕立てになっているのか?!」「ああ、あのことを、このように捏造 or 脚色したのか?!」、等々。

しかしながら、もちろんそれらは、ある人達にとっては、この上ない心地よ

さを感じさせるものであったろうが、逆に、恨めしくも、そして、腹立たしくもあるものであったことは言うまでもない?!例えば、神祇界における「中臣氏」の台頭（暗躍?）を苦々しく思っていた「忌部氏（忌部広成）」の『古語拾遺』等は、その最たるものであった（実は、『古事記』自体も、本来は、そういう性格を有したものであった?←「太（多）氏」の言い分?）?!

要は、そのストーリー全体が、記紀編纂者側の言い分、都合によって書き上げられていたということである?!

だが、一方で（これは、別な意味で興味をもたれるところではあるが!）、特に「人代」については、直接の文章執筆者ないしは最終校正者（責任者?）の、捉えようによっては不可思議な（矛盾した?）記載が、ところどころに紛れ込んでいる?のも事実なのである?!

その、最も著名な（本当は重大な?）ものが、例の「継体天皇（第26代）」の死去記事?に関わる場所であるが、その記事の内容を書いた後、最後に、「後に勘校^{かんが}えむ者、知らむ（後の世に、よく調べた者が、真実を発見するであろう!）」という、誠に怪しげなメッセージが残されているのである!

その記載事実?に関わる、良心の呵責から?の最小限の誠実さ、歴史（著述）家としての矜持、あるいは、ある事に対する自家の恨みないしは思い（これだけは、いいなりにはならない!真実?を伝えたい!）、そういったものが、半ば「ないまぜになった」ものとも考えられるが、その意味で、それは、何（誰）かへの「精一杯の抵抗?」であったのかもしれない?!

尤も、そのことが許された（看過された?）ということではあろうから、『日本書紀』の作成（完成）が、実際には、そんなに一枚岩でなされたわけではなかったということかもしれない?!だからこそ、一方で、それに関わる「焚書坑儒」のようなものもあったわけである（あったように記憶している!）?!

② 実際に、どういう文献・伝承等が用いられているか?!そして、「秦氏／鴨族」の伝承は何を意味するのか?

ただし、それはそれとして、ここでは、実際にどういう文献、伝承等が用いられているのかを考証してみたいのであるが、まずは文献的には、多くの人の指摘のように、中国の漢籍が用いられている?!

例えば、『淮南子^{えなんじ}』（ネットでは、「前漢の武帝の頃、淮南王劉安（紀元前179年-紀元前122年）が学者を集めて編纂させた思想書」とある。）のある箇所が、『日本書紀』の冒頭に取り入れられているというようなことである（宇宙の創成→自然神の誕生?）?!

さらには、当時の「遣唐使」等が持ち帰ったものと思われるが、『聖書?』（キリスト教ネストリウス派→景教）の影響（採用?）もあるようである（例の「聖徳太子→厩戸皇子」の誕生譚?）?!

とは言え、ここでは、そういったものを、全て逐一洗い出すことは出来ない
ので（能力的にも！）、それ自体のチャレンジは考えていない！

端的に、当時入手・揃えることが出来た？あらゆる文献・伝承資料を駆使して、「記紀」は作成されたということであるが、その中で、何故か意図的に採り入れられていると思われる？「三輪氏」「鴨族（加茂氏）」、さらには「秦氏」の伝承（「倭迹迹日百襲姫命」関係、「丹塗り矢」関係 等）、さらには、「天孫降臨」の際の、「伽耶」（駕洛国→韓国）の建国譚の影響・取り込み（『駕洛国記』→「金官伽耶国」王権発祥の物語、首露王・久士布流多氣（亀峯岳）くじふるだけ）が、大いに気になる場所であるということである？！

そして、やはり最も気になるのが、百済系文書、とりわけ『百済本紀』の取り込みの多さ、強さ？であるということである？！

結論から言えば、「三輪氏」「鴨族（加茂氏）」、そして、「秦氏」のそれは、おそらく彼らの存在や活躍が厳然とした事実であったこと、しかも、彼らが、当時の「王権」を有していた（左右していた）ということであり、「百済系文書」の採用は、「記紀編纂者」側が、その「百済」の出（もしくは類縁者？）であったからであろう？！

何故なら、「記紀」、とりわけ『日本書紀』は、「百済」の国史（の一端？→この場合は、宗家「沸流系余氏」のそれ?!）でもあるからである?!すなわち、それと、「倭国→日本国」の歴史が一本化されたものが、ある意味「記紀」だとも言えるのである?!とりわけ、「応神期」（もしくは「継体期」？）以降の「歴史？」は、そうとも言える?!

しかるに、そうして一本化された「記紀」において、純粹に？「倭国→日本国」の歴史として書き記されたものが、第 26 代「継体」からのものであるということになるが（意識としては、第 15 代「応神」からかもしれない?）、その意味で、それ以降は、自らが関わってきた事実、それ自体であったとも言えるわけである?!

だが（それだからこそ?）、その「継体」には、別な意味で、「重大な？」からくりがあることは言うまでもない?!

③ 第 26 代「継体」以降は、ある意味真実?!ただし、その「継体」にもからくりがある?!改めて、どんな?!

翻って、このことについては、以前、まとまって考証したことがある！すなわち、「記紀」及び「淡海三船」は、「（九州の?）継体」こと「軍君（男弟王）」を、改めて「（近畿の）継体」として、近江・越の「継体」（「オヲド王/彦太尊」）にすり替えて（「継体」して!）、すべてを近畿天皇家の事績とした！そして、その後の近畿天皇家につなげるものとした！ということである（当然、それは、事実であったからである?!）?!

それを暗に示すのが、「磐井の乱（517年?）」に際した「継体」の言であるが（従来、かなりの謎とされてきた一つである!）、「（勝利後は）、自分は、長門以東を統治する！おまえ（物部麤鹿火）は、筑紫以西を統治せよ！」という、怪しげな？セリフである?!

それが、まさに、「九州倭国」（の実権）が、近畿に移動するということを意味するものであろうが、既に、「近畿（長門以東）」が（も?）彼のものであったのならば、わざわざ、そのことを言う（挿入する）必要がなかったということでもある?!

これについては、当時の百済本国（「温祚系余氏」）の「九州倭国（「倭の五王」）皇統→磐井（武?）」を、本来の百済本宗家「沸流系余氏」の流れを汲む、「豊国倭国（檐魯国）」の「仇台系牟（←余）氏」の「男弟王／軍君」が破った（乗っ取った?）！つまり、「九州（筑紫）倭国王統」を「豊国倭国王統」が継いだということである?！しかも、それは、実質的には、「百済残国」（一度滅亡した「百済本宗家」の残党国?）の「兄王」（「藤」→「応神」に投影?）、そして、その後の「倭の五王」から出現した「応神王統」を、「継体王統」が（「血統的」にも辛うじて?）継いだということでもある?!

ここが、すなわち「倭国」と「百済（の一部）」の合体の契機であり、「継体」という名は、こうした背景の下に生まれた、極めて意味深長な表現?でもあったわけである?！ちなみに、「継体」とされた人物は二人いる（該当者が、二人いる!）ということである?!

すなわち、その「豊国倭国」の支援・関係勢力であった「息長氏」や「秦氏」等が、近畿（近江・越等）に本拠地を移し、そこでの同族及び協力者達（大伴金村・巨勢男人等?）と組んで、「越」の「オヲド王／彦太尊」を擁立し、河内・近江、そして大和に進出していった?!

それが、「記紀」が言う、まさに「継体天皇」であり、その治世であったわけであるが、一方、残った「筑紫（九州）倭国」は、最初「磐井」の子の「葛子」が継いだが、その後、「荒山大連」（「物部麤鹿火」本人または類族?）の子「尾輿」に移り、さらにその後、その実権は、弟の「目連^{めのむらじ}」（蘇我稲目?→欽明・ワカタケル大王?！）に移り、物部／蘇我による倭国皇統（「百済温祚系余氏」）が、九州に残った形となった?!

「上宮王家」と呼ばれる「一族」が出てきたのも、ここからである?！実は、隋に使いを送った（600年）、有名な「日出処天子・天足彦^{あまたらしひこ}」は、この王である（「聖徳太子」ではない!）?!

だが、件の「白村江の戦い」の敗戦（663年）によって、（九州）倭国は衰退していった?！そして、ある意味「二朝並立」状態となっていた倭国は、九州本国がなくなり（唐の「準?属国」となった?）、大和飛鳥に拠点を移した「上宮王家」

と、もともとの檀魯国家「日本国」（「天智」の近江への遷都？）との共存状態？が続いたが（645年の乙巳の変まで！）、徐々に後者に収斂させられていった（「敏達」→「舒明」→「皇極」（→「孝徳」）→「斉明」（重祚）→「天智」）？！

その後、「天武」→「持統」と続いたが、これが、「天智」以後の倭国（→「日本国」）の歩みであった？！なお、「記紀」は、「欽明」を「継体」の正嫡としたが、実は、彼は、九州倭国の「上宮王家」の創始者ではなかったか（「ワカタケル大王」？）？！しかも、異常に？「百済」に関与した「天皇」でもあった？！

最後に、その「百済」との関係であるが、『吉山旧記（薬師寺旧記）』と言われる「史書？」があるらしいが、その「吉山」とは、筑紫大善寺「玉垂宮」の官司家の名前であるということである！

ここで注目されるのは、その「吉山姓」は、元は「誉田^{ほむた}姓」であったということであり、例の「応神」の別名が「誉田別^{ほむた}（ち）わけ」であることである？その「誉田」が、実は、「男弟王／軍君」の兄「昆支^{こんき→こむき→ほむき→ほむち→ほむた}？」と関係があるのではないかとする説もある？！「応神」「継体」といった「河内王朝？」が、「倭の五王」最後の「武」が、「宋」に上表したという「東西・海北への進出（進攻）」の結果（成果？）であるとするならば、通説は、かなりの変更を余儀なくされる？！

しかも、筑後には、その出発点？としての「大善寺（玉垂宮）→高良大社」や「高良（こうや←こうら）の宮」（ここには、「七支刀」をもつ「百済武官像」があるという！）がある！そこが、新たな？「物部氏」の本拠地とも考えられる？！端的に、「武内宿禰」「神功皇后」も含めて、「筑後」は大きな鍵を握っている？！（7）ほぼ見えてきた？古代史の真相？！それは、4人の史実解明？の向こうに見える？！

① やはり、関裕二氏の大枠は間違っていない？！それ故に、問題は、一部？そこにある誤解？をいかに埋めるかである？！

さて、そろそろ、この「最後の難関にいかに立ち向かえばよいか？」も、一定の終わりを迎え始めている？！

それに関わって、もう随分前になるが、再び、「関裕二氏」の本を買って、読んだ（『仕組まれた古代の真実～いっきにわかる！古代史のミカタ』辰巳出版、2019年）！新しく知ったこともあるが、ほとんど、これまでの論証を踏襲されたもので、新たな衝撃？は、実のところあまりなかった？！

ただ、やはり彼の説（体系）は、実に見事で（理路整然としている！）、他の追隨を許すものではないことが、改めて感得された！一言で言えば、「藤原氏」が、いかに政敵「蘇我氏」や「物部氏」、あるいは「大伴氏」や「尾張氏」を抹殺 or 無視し、「記紀」（厳密には『日本書紀』！）によって、その正統性・正当性を、「天照大神」を創始とした「万世一系」の皇統譜の創出によって示そうとし

たかということが、多くの具体例・説得性をもって説明（解説）されているということである！まさに大枠は、その通りであろう？！

だが、そうは言っても、やはり納得がいかない部分も、幾つか（かなり？）あり、改めて、そこをどう埋めていけばよいのかということになる？！そのことについては、私は、以前にも書いたことがあるので、今回は、その再確認（かなりの確信の下？）ということではあるが、一つは、「邪馬台国」の九州存在は、どうやら認めてはおられるようであるが、そこに生じていた「倭国」のその後（九州倭国？）が、まったく彼の視野に入ってきていないのである？

しかるに、その「（九州）倭国」については、やはり「兼川晋氏」の『百済の王統と日本の古代　＜半島＞と＜列島＞の相互越境史』（不知火書房、2009 年）の解明が、重要な情報（理解の枠組み）を提供してくれる？！それは、間違いない？！

すなわち、ある時期からの「筑紫倭国」と「豊国倭国」の存在、そこにおける「百済系勢力ないしは王族」の進出と介在！そして、その「豊国倭国」からの「継体王統」の出現（→近畿への移動）と「（筑紫？）物部氏」の覇権（→新生？「物部氏」／「蘇我氏」→「上宮王家」）といったことである！ちなみに、当然ながら？、これらの観点（視野）は、関氏のそれにはまったくない？！

ただし、兼川氏のそれには、「近畿倭国」の枠組み（への視点）がまったく組み込まれていない？すべてが、九州での話であるという、多少（かなり？）強引な解釈である？！要は、701 年？までの「倭国」の歴史は、すべて「九州倭国」のことであり、「記紀」は、それを借用（盗用？）しているに過ぎないという前提がある（「九州王朝」の存在とその真実主張が目的？）？！

とは言え、「倭国→日本国」という変遷の中で、百済系勢力ないしは百済王族の関わりの解明（とりわけ「倭の五王」！）や「九州年号」の実在に基づく真相解明は、是非とも耳を傾けなければならないことは言うまでもない！

一方、2 世紀末の「倭国大乱」が、その後の「邪馬台国」をはじめ、「初期大和王権」、あるいは「吉備」「出雲」「近江」「越」等の氏族・勢力の活発な接触・攻防、そして移動があったことを示す大事件であったことは、今では容易に受け入れることができるのであるが、それを、「吉備」から出発した「手焙型土器勢力→前方後方墳勢力（龍王・太陽神信仰族？）」の、「環濠集落勢力（江南系海人族集団→安曇族？）」への攻撃・進出という形で捉えた、「藤井耕一郎氏」の『タケミカヅチの正体　オミ姓氏族対ムラジ姓氏族』（河出書房新社、2017 年）も、大きな理解の枠組みを与えてくれるものである？！

例えば、何故「吉備」が、初期大和王権の中心となったのか（「前方後方墳勢力」と「前方後円墳勢力」の関係等を含む！）？！その中で、「出雲」や「近畿（近江）」は、どのような動き、どのような状況になったのか？

その辺りの解明は、例えば、大分県日田市の「小迫辻原遺跡」の謎（出雲・近畿？勢力の駐屯？）、あるいは、文物の移動のほとんどが、いわゆる「西から東へ」のものであったのが、一部、そうでない事実（東からの動き）があったことの理由等を、整合的に説明し得るものともなるのである？！

さらに、もう一つ、「神武」の、南部九州？からの「東征」を彷彿とさせる、「鴨族（加茂氏）」の祖の「タケツヌミ」の近畿移動の物語？があるが、そのことと関係があるのではないかと思わせる（→これは、おそらく、九州中部・東南部グループ、そこにおける「丹生・鉄」採掘集団の近畿大和移動？）、九州圏内の4つの部族・勢力の関係・移動の解明をなされているのが、「菊池秀夫氏」の『邪馬台国と狗奴国と鉄』（溪流社、2010年）である？！

ちなみに、菊池氏の殊勲？（かなり失礼かな？）は、「邪馬台国」の所在地（筑肥山地の北側→筑紫平野）を、「狗奴国」との位置関係（双方の隣接関係）から確定させていることでもある（何故、もっと注目されないのか？）？！

② 関氏以外の、上記3人の本（説）から導き出される重要な視点・真実？！

ということで、改めて今回、「関裕二氏」のまとめ？を再読？するにつけ、上記の、関氏以外の3人の本（論証）のエキス（史実？）をうまく整合させれば、もうほとんど？真実に近い歴史が見えてくるのではないか？！少なくとも、最初の時期（3世紀前後）の実相が明らかとなるのではないか？！

勝手ながら、そう思い始めているということでもあるが、改めてここでは、上記3人の本（論証）のようなことが、残念ながら、関裕二氏の膨大な本（解明）では不十分（未解明？）であり、したがって、その3人によって示された重要な（必要な？）部分＝史実？を、ある意味付加（整合）させれば、かなりの全体像（真実）が示されるのではないかということである！

すなわち、そこでは、誰が何と言おうとも、3世紀半ば頃、我が国には、九州（邪馬台国を盟主とする「倭国」→「親魏倭王」という称号が「卑弥呼」に与えられているわけだから、その版図は「倭国」である！）と近畿（大和・纏向）に、二つの大きな政治集団（→王権）が形成されていたことは間違いない！

ただし、後者は、ある意味忽然とそこに顔を出したわけであるので、それ以前を示す（中国史書による！）「漢倭奴国王」（AD67年）や倭国王「帥升」の存在（AD107年）が示す連続性が、基本的には紡ぎ出せない（地理的にも？）？！その「王」達の国である「奴国」や「伊都国」？は、明らかに九州であるからである！

したがって、「邪馬台国九州説」においては、その比定地が、なかなか特定出来ないという憾み？はあるが、これらを総合すると、やはり、その「邪馬台国（女王国）」は北部九州にあったと考えられ、一方の、「近畿大和（纏向）」には、それとは違った、別の政治勢力・集団の集結地があったことは、これまた間違

いないであろう（こちらについては、ほぼその全容は解明されている?!→「前方後方墳勢力」と「前方後円墳（円墳?）勢力」の集結!）?!

ということで、私自身は、いい加減、相も変わらずの泥仕合（どちらが「邪馬台国」であったかというだけの論争!）を続けるのではなく、その双方の関係とか、その後の「二つの倭国」の出現や進展の推移を明らかにすることが重要だと考え、誠に稚拙（失礼?）ながら、ここまで論を進めてきたわけでもある!

ただし、従来の研究・論争だけでは（いわゆる「魏志倭人伝」の読み込み等）、なかなかその決着はつけづらいわけであるので、新たな観点・方法が求められるとも思い、現在俄かに頭を擡げているのが、「邪馬台国」の人々（少なくとも、その支配層?）が、どのような部族・集団であったのか（どこから来たのか?北の「奴国」や「伊都国」との関係はどうであったのか?等）ということをも、もう少し精緻に考え直してみようということである!

南の「狗奴国」に滅ぼされたのではないかと、（近畿勢力の?）「台与」によって滅ぼされて（乗っ取られて?）しまったとか（関氏）、近畿大和に「東遷」したとか、それなりに考証がなされているが、そもそも、その「邪馬台国」自体が、どのような部族・勢力によって建国?され、そして、どのように、当時の「倭国の覇権」を握ったのかということの方が、それ以降の史実を解明する上でも、結果的にも、有効なのではないか?!そう考えるのでもある?!

③ そこで、改めて、その全体像は?!だが、新たな事実が?!ただし、まだまだその結節点づくりではある?!

そこで、改めて「邪馬台国（倭国）」についてであるが、その「邪馬台国」自体は、例の「倭国大乱後」（2世紀末以降?）に出現した「大国（盟主国）」であることは、もっと注目されてよい?!何故なら、それ以前の盟主国であった「奴国」を押さえ、しかも「伊都国」を世々統属しているのでもある!

基本的には、「海人族」の国と考えられるが（「持衰じさい」という、航海時の「禁忌術?」の風習や「黥面文身げいめんぶんしん」という、顔や体への朱の入れ墨／海の中での魔除け・海獣除け?）、同じ?江南系倭人（航海民族）の「安曇族」（奴国?）、さらには「鴨（加茂）族」との関係がクローズアップされてくる?!

しかも、この「海人族」で、改めて気になる人物（勢力）が、「記紀」に示される「椎根津彦しいねつひこ」または「槁根津日子さおねつひこ」（『日本書紀』、『古事記』では、「倭宿禰やまとすくね」または「珍彦うずひこ」）であるが、ここで注目されるのは、その彼（勢力）が、「国つ神」としてではあるが、「神武東征」において登場する「倭国造（倭直部）」の祖とされていることである!その経緯は、ここでは省略するが、何故、その彼（勢力）が、「倭（国）」名を名乗った（賜った?）かということである?!

周知のように、その人物（勢力）は、「神武東征」の折、「速吸門はやすいのと」と

いう所で（「記紀」においては、その場所が食い違うが？）、神武一行と出会い、その水先案内を買って出たということであるが（多分彼らは、日向灘、あるいは？瀬戸内海の航行を牛耳っていた「海人族」であつたらう?!そう言えば、国東半島下部は、「海部郡」である！）、その人物（勢力）が、「やまと 又はやまと？」という音韻を、近畿大和に運んだというようにも考えられるのである?!「邪馬台国」は、彼らの「故地」、はたまた「類縁の地」なのか?!

さらに、「倭宿禰（珍彦）」は、海人族の雄? 「海部氏」の祖ともされ、その海部氏は、ひょっとしたら「邪馬台国」の関係者だったということも、俄然真実味が出て来る?!最初の頃、「卑弥呼」や「台与」が、「海部氏」及び「尾張氏」の出（「天彦火明命」の末裔）であつた?ということ推察したが、海部氏や尾張氏が、基本、日本海側からの移動・進出と考えられるから（丹後半島の「籠ノ神社」の境内には、亀の背に乗った「倭宿禰」の像があるという。そこの「海部氏系図」（『勘注系図』註文）には、「彦火明命ー建位起命ー宇豆彦うずひこ命」とも、「彦火明命ー彦火火出見命ー建位起命ー倭宿禰」ともあるという。）?!

一方で、瀬戸内海や太平洋側からの移動・進出の氏族・勢力（海人族）も浮かび上がって来る?!それが、「珍彦（倭宿禰）」ともとれる? 「塩土老翁しおつつのおじ→事代主?」（の勢力）であり、それがまた、「墨江（住吉）すみのえ浦嶋子」、つまり「浦島太郎」のモデル?ともされている?!

何とも、怪しげで、複雑な「海人族」の存在なのであるが、彼らが、邪馬台国ないしは「やまと（う）」（という音韻）を、敬慕（懐かしさ?）の念をもって近畿に移した or 運んだ勢力であれば、それはそれで認められることであり、「神武東征」や「邪馬台国東遷」も、まったくの創り話とは言えなくなる?!しかも、その両族は、近畿大和の「葛城」の地で交わっている!そして、実は、その一方が、「鴨（賀茂）族」なのではないか?!

そうなると、改めて「海部氏（+尾張氏）」と「鴨（賀茂）族」の関係が、強くクローズアップされてくる?!そこにまた、最終的に? 「瀬戸内海航路」を掌握していた、例の「大山津見おおやまつみ」（「瓊瓊杵尊」の妻? 「木花咲耶姫」の父親、そして、「素戔鳴命」の妻「奇稻田姫」の両親とされる「手名椎・足名椎」の父親?）も関わってくる?!

(8)「妄想?」と言われるかもしれないが、一応の結論を描いてみると?!

① 最早? 一方の説（近畿説 or 九州説）だけでは、真実（全体像?）は見えてこない?!

さて、一定の終わりを意識した（7）ではあつたが、またしても?かなりの尻切れ状態となったようにも思われる?!要は、黎明期の「倭国」（「記紀」上では「近畿大和」のことになるが!）、そのプロセス（建国?）に、いわゆる「海人族（南方系倭人?→俗に言う、後発の「(渡来系)弥生人」）」の介在（あるいはそれ自

体の王権?)が、絶対にあったのではないかということであるが、例えば、「安曇族(氏)」「鴨族(氏)」、あるいは「海部族(海部氏/尾張氏?)」「住吉族(→津守氏)」等の動きや関係が、まだまだ正確には描けないということである?!そして、それは、多分?それらと直結すると思われる「海神^{わたつみ}(信仰)」と「山祇^{やまつみ}(信仰)」の関係が、よく分かっていないということでもある?!

ちなみに、後者については、「わた(海)」「つ(の)」「み(霊)」と「やま(山)」「つ(の)」「み(霊)」の関係であることは、容易に受け止めることが出来るのであるが、問題は、その双方は、同じ「海人族」の信仰対象であろうが、何が、どう違うのか?!そして、それは、それぞれ、どのような「海人族」が信仰の対象としていたのか?ということである?!

私の貧弱な理解によれば、「やまつみ」は太陽信仰の形であり、太陽の「霊(威?)」が高い山、高い木(依り代)に寄り落ち、そこを聖地にしたり(→「神奈備山」「御嶽」)、それを目印にして、近海航行を行っていたりしていた?!一方、「わたつみ」は、まさに「海上」にあって、自分達の安全や位置を確認することが出来る天空(「星」または「月」)に、その信仰対象を見出していたのではないか?!「^み星(金星)」、「北極星(北辰)」等が、そうである!もちろん、月(月神)でもある!

ただし、これ以上の考察?は、今の私では到底無理であるが、それらの信仰対象をもつ部族・勢力が、例えば「おおわたつみ」あるいは「おおやまつみ」(用字的には多種多様にある!)というような盟主的な人物・勢力の下に、各地に新天地をつくり、それぞれのネットワークを構築し、その枢要地に、新たな根拠地を築いていった?!そこに建てられたのが、現在著名な神社として残っている、各地の神社群であろう?!

例えば、福岡県志賀島の「志賀海神社」、愛媛県大三島の「大山祇神社」、京都府今津市の「籠^{この}神社」、福井県敦賀市の「気比神宮」、大阪市住吉区の「住吉大社」等が、そうであろう?!また、関東の「香取神宮」や「鹿島神宮」等も、そうであろう?!

古くは、貴重な鉱物資源「黒曜石」「瑪瑙」「翡翠」「朱(硫化水銀)」、さらには「銅」「鉄」「木材」等を求めて、一言で言えば、いわゆる「交易」活動において、様々な部族・勢力が、主として船を利用して、全国各地を動き回ったということである?!そして、そこを開拓し、定住したということでもある?!もちろん、多くの場合は、先住の部族・勢力(一般に「縄文人」と呼ばれる人達?)と、ある意味「共存・共栄」しながらということではある?!

ただし、そこでの大きな変容、そしてまた攻防の結果が、例の2世紀末の「倭国大乱」であると思われるが、「九州倭国」のそれはともかく、近畿大和においては、多くの?新たな部族・勢力が結集し、その後、その王権(勢力)と、九

州倭国の王権（勢力）が、様々な関係（攻防？）を経ながら、言わば「二朝並立？状態」で、「倭国→日本国」が創り上げられてきたということである？！

そして、それらの動きや関係を積極的に創り出し、自らもその王権に参画したのが、ここで述べる「海人族」であったということである？！

②「記紀」（事実上は『日本書紀』）は、誰が、何のために作ったのか？！改めて、そこが分かれば（共通理解されれば）？！

しかるに、「記紀」（この場合は「日本書紀」のこと）は、8世紀初頭の「持統・藤原体制」の、渾身の傑作であることは間違いないが、上記のような出来事（推移）を、「神代」と「人代」に分けて描き出し（「創造」と「想像」、悪く言えば「捏造」と「脚色」を組合せ？）、それらを、一本の「歴史（皇統譜）」として完成させたものである？！言わば、それは、最期の渡来者？「百濟（系倭人）」の政権獲得と、その存続・維持のための史書（国史）であり、その「正統性」「正当性」を描いたものであったわけである？！

まずは、そここのところが、まさに共通理解されなければ、「記紀」による史実解明は、これ以上の進展はないということにもなるが？、しかし、この問題は、単に「科学的な歴史解明」の課題を超えて、大きな政治的問題にもつながりかねない要素も、多分に含まれている？！とは言え、やはりそこは乗り越えられなければいけないのであり、「倭国→日本」とは何か、「日本人」とは、いかなる歴史とルーツをもつ人間なのか、正しく受け止められなければならないのである？！

人間（人類）の歴史は、時間的にも、空間的にも、そして、相互の关系的にも、壮大なドラマ？を繰り返してきたのであり、現在のような「国家（意識や制度）」は、言うなれば「つい最近」のことなのでもある！

現実の懸念として、いわゆる「狭い？ナショナリズム」の喧噪が巻き起こるかもしれないが、自国の歴史と他国の歴史、そして、その関係（の推移）を、まずは事実としてはどうであったのか？そのことを真摯に受け止め、そこから、新たな認識や関係を紡ぎ上げていく、そうした努力をたゆまなく続けていく！そのような英知と覚悟が、歴史解明の本当の姿なのではないか？！そしてまた、それが、自国の歴史を受け止める、正しい？姿勢なのではないか？！

浅薄な努力（他人の研究成果の、しかも恣意的、部分的な取捨選択？）しかしていない私が、こんなことを言うのは、誠に烏滸がましく、恥ずかしくもあるのであるが、また、多くの人からの叱責ももらうであろうが、私なりの、一つの「終着点？」として、敢えてこのことを書かせてもらう次第である！

しかるに、その「持統・藤原体制」の、「記紀編纂」の立場や編集方針については、これまでもまとめてきたので、その具体については、ここでは直接触れないが、まだまだ誤解や無理解、そして未知の情報も多々あることではあろ

う?!それはそれで甘受し、発覚すれば、すぐさま訂正や再検討を続けていく他ない!それが、私の精一杯の務めでもあるわけである!

③ 改めての、幾つかの課題?!そこが突破されると、一気に謎は解ける?!

ということで、改めての、幾つかの課題を以下に示し、「妄想?」と言われるかもしれないが、一応の結論として、本シリーズを終わることにしたい!

とにかく、そこが突破されると、一気に謎は解けるのではないかということであるが、後は、考古学等の成果から、真摯にそれを読み取るしかない!もちろん、それは、私自身の努力や能力では限界があるが、それらが、すべて「記紀」と整合する必要はない!「記紀」の真実?は、嘘、捏造・脚色、事実、その混淆にあるからである?!

改めて、そういうことを前提(言い訳?)として、「そこが突破されると、一気に謎は解ける?!」のではないかと、今私が思っていることは、

①『魏志』に書かれている「邪馬台国/卑弥呼・台与」が、どこから来た、どのような勢力・人物であったのか?もちろん、その前提として、いわゆる「北部九州説」と「近畿大和説」の、言わば永遠の?、しかも骨肉を争う?論争があるが(それが、どこにあったのかということであるが)、その一つの答えの在りかとして、その勢力・人物が、いかなるところから出来してきたのかということが、大きな前進につながるのではないかということである?!

要は、どちらが「邪馬台国」であっても、それは、ある時期と場所の一つであって、そこに住む人々が、どういう形で、そこに住んでいたのかということが分かれば、その解明が大いに進むということである?!いずれにしても、考えられるのは、土着勢力の台頭か、もしくは新しく「倭国」に参入してきた勢力(韓半島から or 九州外から?)の出現であろう?!

②次が、「記紀」が必死に隠そうとしている「天日矛(=ツヌガアラシト?!)」の正体である!「新羅(大加羅)」からの渡来者として描かれているわけであるが、単なる渡来者であれば、最高権威?の「天」、そして「日矛」という名が与えられて?いるはずがない?!しかも、彼は、もう一人の重要人物「神功皇后」の、母系の祖であるということではないか!そして、そこに、「武内宿禰」や「住吉大神」が関わっている!

③また、それと関わって、「応神」の正体も、大きな謎を有している?!「神功皇后」と「仲哀天皇」の子とされるが、「住吉大神」との子ともされる?!しかも、彼は、「神武」「崇神」とともに、「神」の称号(諡号)を有している!また、彼は、「新羅」の神の顕現?)としての「八幡神」ともされ、「天皇家」のあり方を左右した「宇佐神宮」の主祭神ともされている!

九州筑後や「宗像」との関係も色濃くあり、近畿(河内)や「越」との関係も見逃せない?!多分?「百済系王族」(「藤」→「藤大臣」?)であろうが、

例の「倭の五王」の祖でもあるようである?!

- ④さらに、その「5世孫」としての「継体」の正体も、②③と関わって、大きな謎を有している?!現在の理解では、「息長氏」や「秦氏」の支援と協力によって、九州から近畿へ移動した?「九州倭国」の檣魯国「豊国倭国」の、百済系の王族と考えられるが、「記紀」では、「近江」ないしは「越」の豪族(息長氏)の出だとされている?!

そこに、断絶?、それこそ「継体」という関係が潜んでいるようであるが、まだまだ真相は闇の中である?!通説による理解では、こうしたところの複雑怪奇な関係が、ほとんど読み取れない?!端的に、「九州倭国」と「近畿倭国」の二朝並立?状態のことであるが、後の「天智系」からの皇統が、現皇室まで続いていることは明らかであり、それはそれで事実かと思われる!

- ⑤最後が、そうした「百済系」の王族・勢力が、「倭国→日本国」を創り上げ(まとめ上げ?)、最終的に、その中心勢力となった(一人勝ちした?)のが「藤原氏」であるが、その藤原氏が、どこにルーツをもつ氏族・勢力なのかは、実は、まだ定かではないのである!

通説?は、その祖「中臣(藤原)鎌足」は、関東常陸の「中臣氏」の出であるというようにも捉えているようであるが、やはり、彼らも「百済系」の王族(関裕二氏は、百済最後?の王「義慈王」の子「余豊璋」とされている!)の流れを汲むもので、さらに、「物部氏」や「蘇我氏」等も、その「百済系」と考えなければ、「倭国→日本国」全体の成り立ちやその推移が説明出来ない?!もちろん、件の「倭の五王」のこともである(比定・対応させられている天皇も、ある意味曖昧模糊としている?)?!

以上のように、改めて、5つの課題(謎?)を挙げたのであるが、他にも、大小を問わず、多くの課題があることであろう?!最新の研究成果については、専門書も含めて、ほとんど見つけていないのが現状であるが、今後は、これらの課題を中心に見据えながら、新たな、私の「古代史の旅」を続けていくことになるだろうが、これまで出来なかった(しなかった?)現地踏査やセミナー等への参加も、可能な限り行わなければ、かなりの手詰まりであることは言うまでもない?!

物理的なハンディはともかく、はっきりしているのは、一人では限界があるということである!だが、そのことが分かっている、元来シャイな私であるので、果たしてどうなることやら?!

6. 改めて見えてくる重要な真実?!

(1)「縄文人」の先住と「弥生人」(倭人)の渡来・融合、そして集権化(クニ→国の誕生)

① やはり、ここから見つめなければ、正しい?建国史は描けない?!

さて、随分時間が経ったが、私の、「私的日本古代史考～建国の真相はいかにあったのか?!～」の「試作版」作成は、一応?終わった?!今の私の努力(能力?)では、もうこれ以上の進展?は見込めないということであるが、後は、それを、可能な限り精緻に推敲し、いかに加除修正していくかということである?!

ただし、私の「古代史の旅」は、それによって終わるわけではない!否、終わってはいけないのである?!何故なら、それは、一応の終着点ではあるが、あくまでも自分自身のための筋立てであり、筆致であるからである?!

すなわち、こうして、一定期間(4年近く?)私なりに書き綴ってきたわけがあるので、それはそれで仕方がないのであるが(寛恕してもらわなければいけない!）、曲がりなりにも、HP上に公開してきたわけでもあるので、それなりの社会的責任の自覚を持たなければいけない(学問として?)?!そうも、思うのである(とは言え、これについては、ほとんど自信はないが!)?!

ただ、自由に(恣意的に?)?書けばよいということではないのであり、そこに、読んでいただけるみなさんと、一応の共有ができる課題設定と、それに基づく内容の展開が必要だということである?!

したがって、そのために、ここでは、そうした装い?をさらに具備させるべく、次なるステージ(最終段階?)に向け、「改めて見えてくる重要な真実?!」と題して、これまでの、種々雑多な?論稿を振り返るとともに、新たに入手した情報、あるいは新たに閃いたアイディアを下に、最後の仕上げ?の作業を行いたいのである!

そして、それを、うまく成就できるかどうかは分からないが、この「私的日本古代史考～建国の真相はいかにあったのか?!～」の「試作版」に、新たに加えていきたいということである!

ということで、結果的には、単なる重複、あるいは屋上屋を重ねることになるのかもしれないが(若干、その懸念はある?)、まずはここでは、これまであまり視野に入れてこなかった(ある意味、前提ではあるので!)「縄文人」の先住と、その次の「弥生人」(≡倭人)の渡来・混住(→混血)(早ければ紀元前1000年頃から?)、そして、その後の「集権化(クニ→国の誕生)」についてのまとまった論考を、ここでは行っていた方がよいであろう!

何故なら、そのことが、その後の「古代史(建国史)」の軸(土台)となっているからである?!ちなみに、最初の「縄文(人)」時代は、いわゆる「新石器時

代」と呼ばれるものであるが、実は、それ以前もあって、それは、「旧石器時代」と呼ばれるが、その旧石器時代も、「前期」と「後期」に分けられる！

ただし、現生人類とされる「新人（ホモ・サピエンス）」が活躍し始めるのは「後期旧石器時代」からで、我が国では、それは、およそ3万8000年前からとされ、それ以前は、「旧人」あるいは「原人」の可能性もあるという?!

なお、これらのことについては、本「試作版」の「1. 倭国（→日本国）の源流～日本人のルーツはいかに?～」で、可能な限りの記述は行っているが、それらのことが、我が国の古代史（建国史）にどのように繋がっていつているのか（事実把握?）が、今一つはっきりしていない?!そのため、ここでは、そのエキシ的なものを、改めて整理しておきたいということである！

② 「二重構造モデル（仮説）」の最新情報?!単純な「二重構造・置換モデル」では説明出来ない事実?!

ところで、上記のような、我々「日本人」の成立については、これまで、いわゆる「二重構造モデル（仮説）」と呼ばれる、先発渡来の「縄文人」の先住と後発渡来の「弥生人」の置換モデルで説明されるとされてきた?!すなわち、「日本人」の祖先（ルーツ）は、最初の「（南方からの）縄文人」であるが、その後の「（北方からの）弥生人」が、その上部に被さり（置き換わり）、現在の「日本人」が形成されてきたという説である！

しかしながら、「縄文（人）」と「弥生（人）」が、ある期間の時代区分だけを示すものということであれば、大方それで説明され得ることであるが、実際は、その渡来状況あるいは渡来ルート等を精査すれば、必ずしも、最初の「縄文（人）」が南から、次の「弥生（人）」が北から、そして、後者が前者に置き換わったということではないようなのである?!

しかも、そこに、大きな渡来の波が、二つあった（「縄文期」と「弥生期」）ということでもなく、正確には、三つあったということでもあるようなのである！端的に、「縄文人」と「弥生人」による「二重構造モデル」という捉え方は、あまりに単純であるということである（斎藤/関野/片山/武光 ほか『大論争 日本人の起源』宝島社、2019年 より）?!

改めて、その証拠は、各地から出土する石器・土器等の生活遺物の輻輳であるが、近年では、人々の遺伝子情報からも、そのことが裏付けされるということである！

例えば、ミトコンドリア遺伝子情報（女性系統が分かる）によると、それは、大きくは、ハプログループ（同じ形質をもつ一つのまとまり）MとNに分かれるが（出アフリカ後、Mが南回り、Nが北回り）、「現代日本（B）」は、16種の母系集団があるとされ（全体では18種!）、「アイヌ」や「関東縄文」、そして「渡来系弥生」は、すべてM系であり、その分枝であるM7aが「沖縄」に、N9bが

「北海道縄文」に、それぞれ分布しているという（渡来ルートは、大きくは3つあった!）?!

これらは、上記のような様々な集団が、言わば「混住・混血」をなし、現在に至っているということになるが、もしそうだと、これまでの「二重構造モデル」（単純に、前者が「縄文人＝南方（古）モンゴロイド、後者が「弥生人＝北方（新）モンゴロイド」と呼ばれる」は、分かり易いが、少し（かなり?）事実とは異なっている?!

つまり、あるM系統の人々が、先に南から直接列島に渡来し、一方で、同じM系統の別な人々が、一度シベリア近辺まで北上し、そこで寒冷地適応を果たし（シベリア・バイカル湖周辺→ブリアート人?）、その後、彼らの一部が南下し、各地へ拡散し、列島にも、改めて?渡来してきて（主として朝鮮半島経由で!）、先住者と置換したということであるが、事は、そんなに単純なストーリーではなかったということである?!

ただし、その遺伝情報の割合（現代日本（人）には、約1対4の割合で、前者の「縄文人」の血（要素）が流れているとされる?）からは、圧倒的に?「北方（新）モンゴロイド」の血（要素）が濃いということは明らかであり、改めて、何故そうなっているのかを解明する必要があることは言うまでもない!

おそらく（間違いなく?）、それは、いわゆる「倭人」と呼ばれる人々の影響（結果）であろうが、そのことはまた、その「倭人」に対する詳細なアプローチを、この「古代史の旅」にも大いに求めることにもなる! 何故なら、本建国史の検討においては、「倭国→日本国」のプロセスを追うことが必至であり、そこでの「倭国」が、いわゆる「倭人（種）」の国のことであるからである!

しかるに、その「倭人（種）」が、ある特定の種族（遺伝的ハプログループ）であるかどうかは疑わしく?（女性系統の多さがそれを裏付けている?）、しかも、それは、ある時期の中国（人）からの命名（蔑称?）であったことは言うまでもない?!

とは言え、そこには共通の容貌?、言語、風俗等があったことは間違いなく（だから、「倭人（種）」と呼ばれた!）、彼らの居住（地）やその関係（移動状況）、そして、そこでの人々の構成（種族）等が明らかになれば、「記紀」等に描かれている「倭国→日本国」の実体が、より具体的に（真実に近く?）見えてくる?!

③ 改めて、何が大事なのか?! 「倭人（種）」の渡来と集権化が、その後の「倭国→日本国」をもたらした?!

ということで、その「倭人（種）」であるが、現在分かっている?ことは、まずは、我が国（西日本）ばかりでなく、朝鮮半島（特に南端部）の沿岸や島嶼部にもいた（移動していた）! 彼らは、先に述べた、寒冷地適応を果たし、改めて南下した「新モンゴロイド」の一派であり、その集積地?は、当初?揚子江の

下流域であったようである（→江南人/呉越人）?!

しかしながら、彼らは、その北方の漢民族（彼らも「新モンゴロイド」!）に圧迫され、紀元前 1000 年頃?から、各地に離散していった（大きくは、北 or 東方と南 or 西方へ）?!その北 or 東方に移動していった倭人が、件の「倭人（種）」と呼ばれる人達であり、彼らは、朝鮮半島（南部）と日本列島（西日本）にまたがって、「倭人（種）」のクニ（→「国」）を作り出していった（100 余国→30 余国?）!

すなわち、それらの「倭人（種）」の人々は、いつの頃からか?「(倭) 奴国」を中心にしてまとめ（→57 年「漢倭奴国王」）、その後、「倭面土?国」（→107 年倭国王「帥升」）から「邪馬台国」（→239 年「倭国」女王=親魏倭王「卑弥呼」）へと、その盟主国を代え?（これには、例の、180 年代の「倭国大乱」が、大いに関わっている?）、その後、多少の?混乱（「狗奴国」との闘いを含む!）を経て、「卑弥呼」の宗女「台与（壺与）」が、それを引き継いだ（この辺りが、例の「魏志倭人伝」に示されている部分である!）!

問題は、その後の、その「倭国」の推移であるが、残念ながら、それについては、文献的には、まったく掴めないのである（「空白の 4 世紀」?）!つまり、5 世紀に入って、「倭の五王」のことが、中国南朝系の史書（「宋書」等）に見え出すのであるが、今のところ「記紀」の苦心?（「万世一系」の創出!）にも拘わらず、この間の推移（事実）は明確とはなっていないのである?!

すなわち、その「倭の五王」が、3 世紀末までの倭国（「邪馬台国」）の、何らかの（直接の?）後裔なのか?それとも、新たな勢力による「政権王」なのか?そしてまた、例の「邪馬台国比定地論争」とも関わってくるが、それが、九州に出現?した政権なのか?あるいは、近畿大和に出現?した政権なのか?そうしたことが、本当は、まだまだ分かっていないのである?!

私自身としては、その「倭の五王」政権は、新たに北部（北西部?）九州に渡来した「百済（王族→残国兄王・藤?）」の政権であり、その本拠地は、北部九州（「大善寺玉垂宮」?）にあったと考えており、彼らが、北部（北西部?）九州を起点として、その後、拠点を近畿（河内→大和）に移し、彼らの後裔達が、当時まで並立していた「二つの倭国?」を、言わば「統合」して、「倭国→日本国」を成就させたと捉えているわけである?!

もちろん、そのプロセスは、そんなに単純なものではなく（「筑紫倭国」と「豊国倭国」の集散離合?!→「磐井の乱」等）、その主力が近畿に移動した後も、「百済系倭国政権」は、その祖系（「温祇系」と「沸流≡仇台系」）の違い等から、双方の主導権争い?を、その後も続けていったとしているわけである（→「天智系」と「天武系」の相剋!）?!

ただし、その「百済系倭国政権」の王族は、いわゆる北方騎馬民族の「扶余

系」だということであり、その「百濟」は、ある時期「馬韓」と呼ばれていた地域の一国であるが、そこは、まさしく「倭人（種）」の国でもあったわけであり、そこに、南方系の要素と北方系の要素が、言わば「混淆」していたわけでもある?!

しかも、それらの関係（要素）は、馬韓（→百濟）と呼ばれた地域だけではなく、「辰韓」や「弁韓（辰）」にも少なからずあり、それらの勢力や文物との関係（交流や渡来）が、件の「倭国→日本国」の成立に大きく関わっていたことは間違いないのである?!だが、その辺が量されていたり、意図的に隠匿されていたりしているのでもある?!

(2)ある時期からの、北部九州（筑紫倭国）と近畿（大和倭国→日本国）の並立 ①やはり、「倭国」は二つあった?!最早?一方の説だけでは、真実は見えてこない?!

次が、改めて、ある時期からの、「北部九州（九州倭国）と近畿（大和倭国→日本国）の並立」についてである!

要は、この論考の出発点でもある「二つの倭国とその相剋の実相」を、より具体的、精緻に整理することが必要であるということであるが、結論は、「最早?一方の説（立場）だけでは、真実は語れない?!」ということでもある!

繰り返すように、後の「国（倭国→日本）」のスタート時と考えられる3世紀初頭の段階から、少なくとも二つの大きな「勢力結集→同盟国家?」が存在していたことは、まさに真実であり（北部九州と近畿大和）、その状態が原形（大杵/土台）となって、その後の「倭国→日本国」が現出してきたということである?!

ちなみに、その3世紀初頭のどちらか（の盟主国）が、例の「邪馬台国」（ただし、用字や読みが完全に確定しているわけではない?!）ということになるが、単に、そこではないかという「遺跡」の状況からだけではなく（この場合は大和「纏向遺跡」のこと!）、その存在を書き記した「魏志倭人伝（俗称）」の客観的・総合的な解釈（地勢関係等）からも、それが分かるということである?!

そして、何より、他の諸文献・考古史料並びに、それに関わる情報（多くの研究成果）による、同時代の状況（事実?）把握からすれば、件の「邪馬台国」が、北部九州にあったことは間違いないのである（57年の「漢倭奴国王」の遣使及び志賀島の金印発見、107年の「倭国（倭面土国?）王帥升」等の遣使、あるいは『隋書』、『(新旧)唐書』等）?!ただし、その国（邪馬台国/女王国）が、北部九州のここだというような、言わばピンポイント的な比定地確定ができていないのが、それなりの弱点?ではある（一応は、筑紫平野の一带ではあろうが?）?!

とは言え、(1)でも述べたように、いわゆる「弥生期」に、かなりの数の（大量という推計もある!）、倭人（種）の渡来があり（→「渡来系倭人」、彼らもまた、列島各地に住み着き、そしてまた、そこそこを拠点に移動し、それと共に、

人口爆発や生活様式の変容をなしていった（ただし、先住の「縄文人」との住み分け、混住、そして「通婚」を重ねながら）?!しかし、そこに、部族・勢力間の諍いや同盟関係化も進行していったことは、想像に難くない?!

そして、その最終局面（臨界期?）が、おそらく 180 年代の「倭国大乱」であり、そのあり様と結果が、「北部九州（九州倭国）と近畿（大和倭国→日本国）の並立」の原形となったということであるが、件の「魏志倭人伝」は、その間の様子（推移）を、朝貢国（冊封国?）の「九州倭国（邪馬台国／女王国）」側から見て（聞いて?）いるものであり、その限りにおける記述内容となっていることは明らかである?!要するに、その全体についての詳しい記述はなさなかったということである?!

しかるに、その「倭国大乱」は、規模（範囲）としては、おそらく「西日本全体」（あるいは「東日本」の半分位を含む?!）に及んでいたと考えられ（それらと関係すると思われる「高地性集落」や殺戮・戦闘行為の痕跡等が、西日本に多くある!さらに、「前方後円墳」に先立つ「前方後方墳」の出現は、それらの証拠でもある?!）、そのような事情（雰囲気?）は、当の「魏志倭人伝」自体からは読み取れないのである?!

だから、ここからも、「漢」/「魏」や「晋」から見た）当時の「倭国」や「邪馬台国」が近畿大和にあったというようなことは、ほとんど考えられないのである?!

②双方の説（立場）が、どうして必要なのか?!その根拠は?!

ならば、どうして双方の説（立場）が必要なのであるが（言い換えれば、「邪馬台国」が、どっちにあったかだけで済まされないのは!）、その後（の建国）の推移が、どちらか一方の推移だけでは到底説明できないからであり、まさに、その全体の推移を「総合的、整合的」に把握しなければ、そこでの真相が見えてこないからである（「邪馬台国」はともかく、北部九州の「奴国」「伊都国」、そして「出雲」や「吉備」、「播磨」や「河内」、さらには「近江」や「丹波」「越」等の諸状況）?!

そして、それらは、「神話」や「伝承」の世界だけではなく、考古学的な史料からも、総合的、整合的な解釈が求められなければいけないのである!要するに、それら全体が、「倭国→日本国」の形成に関係があったということであるが（ちなみに、これらすべてを、最初から近畿大和の勢力が行った、関わったとするのは、絶対に間違いであるということである!）、

これについては、当時の主要部族・勢力の移動・衝突、あるいは集散・離合の複雑な?過程が絡んでくるであろうが（基本的には、「西から東へ」の移動を示す?!これはまた、遺伝子レベルでも裏付けられる?）、なかには、一部?の部族・勢力（「前方後方墳勢力」→「神八井耳」勢力→多氏の一部?）の、「東から西へ」

の動きも見られ、まさに当時の列島は、「東に西に」、各部族・勢力の移動・衝突（シャッフル？）があったとも考えられるのである？！

ただし、後者の「前方後方墳勢力」と「邪馬台国」、さらには、残存していた？「北部九州勢力」との関係については、まだまだ確たる証拠（状況把握）は得られていない？！例えば、そこにおける、「神八井耳」勢力（後裔）のことである？端的に、その後裔であるとされる「肥/火の君」「阿蘇の君」「大分の君」、そして「筑紫の君」等の関係が、まだよく掴めていないということである！

さらには、そこに、「邪馬台国」と仲が悪かったとされている、中南部？九州の「狗奴国」との関係も、さらに精緻にされなければならない？！ちなみに、この「狗奴国」に関わっては、北部九州（主として福岡県）にある「隈」の名を持つ地名が、「狗奴→熊/隈 or 球磨」と関わるのではないかという言説もあるようではある？！

いずれにしても、もしそうであれば、九州全体においても、部族・勢力間にかなりの変動があったことになり、単に北部九州と近畿大和の関係理解だけでは、我が国の古代史全体の真相を、そこにおいても？見誤ることになる？！

皇祖「日向三代」の物語もそうであるが、他ならぬ「神武」自体が、南九州（日向）から東征（移住？）して来たというような話も、例えば「タケツヌミノミコト（「鴨族」の祖/八咫鳥）」が、「日向の曾（襲？）→曾於？」の出だという話？とも絡めれば、中南部九州の動きも、それらと連動して捉えなければいけない？！現に、宮崎県の「川床遺跡」（一ツ瀬川流域／製鉄部族？）との関係が、大和に見られるというような研究成果もある（←菊池秀夫氏）？！

あるいは、同じ「生目遺跡」等（大淀川流域）、そして、何より「西都原古墳群」（時期はかなり広範囲で、その主要部分は、後からのものかもしれないが？）もある！だから、いつまでも、「北部九州」か「近畿大和」か？あるいは、「邪馬台国」は、そのどちらにあったのか？だけの話（論争？）は、いい加減？止めにしなればいけないのである！

③改めて、その双方の説（立場）を接合すると？！

そこで、改めて、その双方の説（立場）を接合すると、以下のような事実（真実？）の解明が、新たに求められるということになる？！

①「魏志倭人伝」に書かれている「邪馬台国／卑弥呼・台与」が、どこから来た、どのような勢力・人物であったのか？もちろん、その前提として、いわゆる「北部九州説」と「近畿大和説」の、まさに永遠の？、しかも骨肉を争う？論争があるわけであるが（それが、どこにあったのかということだけの論争であるが！）、その一つの答えの在りかとして、その勢力・人物が、いかなるところから出来してきたのかということが分かれば、その論争の大きな前進につながるのではないか？！

要は、「邪馬台国」が、どこから出来してきたのかということが分かれば、半ば？決着がつくのではないかということである（考えられるのは、「土着勢力の台頭」or「新しく「倭国」に参入してきた勢力（韓半島から or 九州外の国内から？）の進出」ではある）?!

- ②次が、「記紀」が、とりわけ必死に隠そうとしている「天日矛（＝ツヌガアラシト?!）」の正体である！新羅（or 大加羅）からの渡来者として描かれているわけであるが、単なる渡来者であれば、最高敬意？の「天」、そして「日矛」という名が与えられるはずはない?!

しかも、彼は、もう一人の最重要人物「神功皇后」の、母系の祖であるということではないか！そして、その「神功皇后」には、これまた謎の？「武内宿禰」や「住吉大神」が関わっている！まさに、それらは、「謎中の謎」（逆に言えば、真実の核心？）となっているわけである?!

- ③また、それと関わって、「応神」の正体も、大きな謎なのである！「神功皇后」と「仲哀天皇」の子とされるが、「住吉大神」との子ともされる?!しかも、彼は、「神武」「崇神」と共に、「神」の名（諡号）を有している！さらに、彼は、（「新羅」の神？としての）「八幡神」ともされ、その後の「天皇家」のあり方を左右した「宇佐神宮」の主祭神ともされている！

「筑後」や「宗像」との関係も色濃くあり、近畿（河内）や「越」との関係も見逃せない?!多分？「百済王族」（「藤」→「藤大臣」?）であろうが、例の「倭の五王」の祖でもある?!

- ④さらに、その「5世孫」としての「継体」の正体も、②③と関わって、大きな謎を有している?!現在の理解では、彼は、有力豪族の一つ「息長氏」や、謎？の渡来氏族「秦氏」の支援と協力によって、九州から近畿へ移動した？「九州倭国」の檣魯国「豊国倭国」の、百済系王族の一人と考えられるが、「記紀」では、「近江」ないしは「越」の豪族「息長氏」の出だとされている?!そこに、断絶？、それこそ「継体」という微妙な？関係が潜んでいるようであるが、まだまだ真相は闇の中である?!

通説による理解では、そうしたところの複雑怪奇な？事情や関係が、ほとんど読み取れないが、端的に、そこには、「九州倭国」と「近畿倭国」の二朝並立？状態のことが、その背景としてあることは言うまでもない?!「欽明」を経た、最後の「天智系」からの皇統が、この「継体」から現皇室まで続いていることは明らかであるが、その間の「天智と天武の相剋を挟んで」、その詳細（真実?）は、実は、まだまだ明確ではないということである?!

- ⑤最後が、そうした「百済系」の王族・勢力が、「倭国→日本国」を創り上げ（まとめ上げ?）、最終的に、その中心勢力となった（一人勝ちした?）のが「藤原氏」ということになるが、同氏が、どこにルーツをもつ氏族・勢力なのかは、

これもまた、実は、まだ定かではない?!

通説?では、その祖「中臣(藤原)鎌足」は、関東常陸の「中臣氏」の出であるというようになっているようであるが、やはり、彼も「百済系」の王族の流れを汲むもので(関裕二氏は、百済「義慈王」の子「余豊璋」とされている!)、さらに、彼らによって抹殺された?「物部氏」や「蘇我氏」等も、その「百済系」と考えなければ、「倭国→日本国」全体の成り立ちやその推移が説明出来ない?!もちろん、件の「倭の五王」(比定・対応させられている天皇も、まだまだ曖昧模糊である?)も、そこに組み込まれる?!まさに、そういうことである!

とまあ、以上、改めて5つの謎?(解明課題)を挙げたのであるが、他にも、大小を問わず、多くの謎?(解明課題)があることはあるであろう?!ただし、そのことも含めて、最新の研究成果等については、専門書も含めて、ほとんど見つけていないのが現状である!とは言え、今後も、これらの課題を中心に見据えながら、さらに新たな?私の「古代史の旅」を続けていくことにはなろう?!

だが、一方で、これまで出来なかった(しなかった?)現地踏査やセミナー等への参加も、可能な限り行わなければ、かなりの手詰まりに陥ることは必定である?!物理的なハンディはともかく、はっきりしているのは、一人(今の私だけ!)では限界があるということでもある!

(3) 筑紫倭国と大和倭国(+豊国倭国→日本国)の一元化

① そう捉えれば、かなりの矛盾、不整合は解消される?!それは、一体どういうことなのか?!

ということで、次が、「筑紫倭国と大和倭国(+豊国倭国→日本国)の一元化」ということであるが、これは、言い換えれば、(2)の、「(邪馬台国)」北部九州説と近畿大和説の「接合」課題の、直接的には②③④と関係している部分である?!否、まさに、その問題(課題)そのものとも言える?!

つまり、「筑紫倭国」から派生した「豊国倭国」(「檐魯国」?)が、ある時期(5世紀後半?)から強大となり?、本家(兄筋?)の「筑紫倭国」とのイニシアティブ争い(「筑紫君磐井の乱」517年?)に勝ち、彼らは、全国展開に向けて、近畿大和に大挙移動していった?!

当初は、河内から、淀川沿いに北上し、琵琶湖沿岸や北陸(越)にその地歩を固め、その後、山城や伏見等を押さえ(逆かも知れないが?)、最後には、大和地方に進出していった?!その主力部分の根拠地が、例えば琵琶湖北岸の「米原市付近」(息長氏)であり、京都盆地の「太秦」(秦氏)であった?!

その移動の後半部分が、おそらく「記紀」に描かれた「継体」勢力の動きであろうが、それらは、別な表現をすれば、北部九州の「息長氏」や「秦氏」の東方移動・進出のプロセスでもあった?!となれば、そうした流れ(真実?)の

中での、整合性のある解釈（事実説明）が、改めてなされなければならない、そういうことである?!

ただし、ここで問題となるのは、そのことを示しているであろう?、「記紀」の、「応神」「継体」、そして「欽明」へと続く、その間の「万世一系」の皇統譜が、どのように説明され得るのかということである（かなりの紆余曲折?無理がある?）?!別言すれば、そこでの大きな関門（壁?）は、彼らが、どのように、まずは「北部九州」に居住し、そしてその後、どのように「近畿大和」へ移動していったのかという説明（証明?）が、いかに整合的になされ得るのかということである?!

要は、件の「接合」が必要であるのであれば、彼ら（「息長氏」や「秦氏」）が、前半が北部九州、後半が近畿大和に居住していなければ、そもそも、その可能性（移動の事実）はなくなるということである?!そうすると、私の「二つの倭国並立説?」も、ここで大きな失速となる?!

とは言え、最初の「応神」については、「記紀」からも、彼が、北部九州から近畿大和に移動（進出）していつていることは明らかと思われるので、問題は、その「5世孫」とされる「継体」、そして、その継体の、「最後の?」嫡子とされる「欽明」の所在ということになる?!

ただし、「欽明」は、たとえ彼自身が、近畿大和（飛鳥地方?）に最初から居住していても、それはそれで、辻褄は合う?!何故なら、「世代と親子関係」が、矛盾なくつながっていればよいだけであるからである（ただ、彼については、例の「上宮王家」が、どのように発生し、その後の状況（政権運営?）に、いかに関わってきたのかということが、別の文脈では問われることにはなる?!）!

ということで、結局のところ、その決め手?となるのは、間の「継体」ということになるが、彼は、「記紀」が記しているように?、九州から来た「応神」の子孫ではあるので、彼自身が、北部九州に居住している必要性はない?!その意味で、「応神」から「欽明」へと流れる皇統譜が、まさに「血統的に」矛盾なく説明されればよいのである?!

だが、その「継体」自身が（も?）、どうも北部九州に（も?）居たようなのである（九州（倭国）年号の創始者として?あるいは「筑紫君磐井の乱」の首領者?として?）?!

②「記紀」は、そこで、どのような奇策?を弄しているのでしょうか?!

そこで、もし、「継体」自身が（も?）、北部九州に（も?）居たということであれば、「応神」との関係はともかく（双方が北部九州から移動したということであれば、何ら矛盾はないということも含めて!）、「継体」自体の、双方の地での居住が（再?）確認されなければいけない?!何故なら、彼は、一応は、「一人の人物（のように書かれている?）」であるからである?!最初（or ある時期?）北部九

州にいて、その後、近畿大和に移動して（戻って来て？）いたということであれば、少なくとも「物理的な問題」は、その時点で解消されることとなるわけである?!

しかしながら、まずは、通説の「継体」は、近江の「彦大人王（息長氏系?）」の子で、その母親（振姫）ともども、既に「近畿（近江・越）」にいたわけであるので、「継体」自身が、最初に北部九州に居て、その後、近畿へ移動したというようなことは、今度は「生物学的?」に考えられない?!ならば、「ある時期?」ということになるが、あったとすれば、それは、例の「磐井の乱」の時しか考えられないであろう?!

だが、これは、「近畿大和」を手中に収めた後のことと考えられるので、例えば、「戦の勝利後、長門（山口）から東の方は自らが制か」というような言質は取らない?!すなわち、この言質は、北部九州に長らく所在している人物の言質としか受け取れない?ので、移動の事実以前の話となり、しかも、筑紫自体（「乱」の現場）に、通説の「継体」が出向いていたというようなことも考えられない?!だから、例の「兼川晋氏」は、その矛盾（虚偽?）を解消するために、そこに「二人の継体」がいれば、それが可能だとされたのである（「二人継体説」）?!

しかるに、普通に考えたら、このような奇想天外な?着想は、決して出てこないのであるが、こと、これについては、その可能性は、大だということである?!つまり、双方の実在人物（モデル?）を「継体」させ、あたかもそれを、一人の人物のように描くことはできるということである?!

であれば、この「継体」という天皇名は、文人「淡海三船」の名付けであるが、その（考えてみたら?）奇妙な?「漢風諡号」は、単に5世孫が継いだという「際どい?血縁関係」を指しているだけではなく、その「人物自体」が、まさしく「継体」されているということも、併せて暗示させているものであれば、極めて意味深長な命名であるということもできる?!

いずれにしても、もし、それ（「二人継体説」）が真実だとすれば、改めて、一体何故、「記紀」は、そのような奇策を弄したのであるのか?!

端的に、そこに、それに関わる嘘（捏造）を捻じ込ませているからであろうが、要は、「記紀」の「継体」は、九州（豊国）倭国の「継体」ではなく（多分名前も違う?）、新たに近畿で創出した「継体」（男大迹王／彦太尊←息長氏系?）であり、彼が、九州からの「応神」の5世孫として、辛うじて「万世一系」の皇統譜を受け継いでいるというストーリー（からくり?）を創作?したかったということである?!

ちなみに、そうした、考えも及ばない?大胆な発想を提示したのは、おそらく、もう一つの黒幕?であった（というよりは、圧倒的な経済力を有していた?だ

から、物が言える！指示もできる！）「秦氏」ではなかったかと、現在では考えているところでもある（「藤原不比等」ばかりを注目してきたが、「記紀」の構想には、実は、「秦氏」の思惑・介入も、大いにあり得ると思い始めているということでもある！）?!

③いずれにしても、そこに、どのような真実が浮かび上がってくるのか?!

ところで、これも、以前から繰り返しているように、「筑紫倭国と大和倭国（+豊国倭国→日本国）の一元化」の成就是、701年、かの有名な「大宝律令」の制定の時であると受け止められるが、その「律令」発布の権能が、それを実現させた「持統・藤原政権」に完全に移ったということでもある?!

その元号「大宝」が、果たして、その時の年号であったかどうかは甚だ怪しいが?（→例の「九州年号」によれば、その元号自体は517～522年とされている!）、
「律令制定」という、まさに主権?国家最大の（権能を示す）偉業?が、新たな?「持統・藤原政権」によって、この年になされたということ自体は、おそらく間違いないことであろう?!

しかしながら、問題の出発点（真相解明の糸口?）は、やはり（今のところは?）、ここで扱っている「（筑紫君）磐井の乱（517年?）」の実態にあるであろう?!つまり、（通説の）「継体」が、配下の?「物部麁鹿（火）」に命じて、「磐井」を破ったとされている事件?であるが、これがもし、ここで言う「筑紫倭国」と「豊国倭国」の争いで、それに勝った「豊国倭国（九州「継体」?）」が、「筑紫（九州）倭国」の皇統を奪い?、新たな「王権」を築くべく?、近畿大和に移動したというような事件であったならば、それはそれで、一応の辻褄は合う?!

ましてや、通説のように、初めから九州倭国との関係は考えず（無視して?）、近江・越の「継体」が、「記紀」が示すような経緯で大和に入り（「王権」を獲得?し）、その後、反抗的な?筑紫の豪族「筑紫君磐井」を、「新羅」との関係で成敗し（戦利が、確か「糟屋屯倉」一つの献上?!）、それによって「全国統一?」も、ほぼ完成したというような経緯であれば、それこそ、これほどまでに頭を悩ますようなことにはならない?!

けれども、一つには、「九州（倭国）年号」（の創始元号）に「継体」というものがあり、一方で、その「磐井の乱」の顛末等を、まじめに?検討すれば、とても上記のような事態は考えられず、北部九州に、もう一人の「継体」（という「元号」に関わりをもつ人物?）の勢力がいたことは間違いない?!

しかも、その勢力（本体?）が、その後も、九州倭国を統治しており（600年、隋に遣使した、有名な「日出処天子=天足彦?」も、そこの大王である!）、例の「白村江の戦い（663年）」の主戦部隊も、実は、そこの部隊（←筑紫君薩野馬?）であった（兼川晋氏）?!

ただし、その北部九州の「継体」と目される?人物（百済仇台系王族「昆支-

んき」→「旨王」?)は、その後、本国(温祇系余氏)に呼び寄せられ、彼の地で亡くなったようでもあるので(兼川晋氏)、二人の人物の「継体話」では済まされない部分もある?!

そしてまた、一方で、その「昆支こんき」(→「旨王」?)という人物が、弟「軍君(男弟王)」とともに近畿(河内)に居住(進出?)し、前者が「応神」、後者が「継体」となっている(「石渡信一郎氏」)というようなことであれば(その廟が、前者が「菅田御廟山古墳」、後者が「大山陵古墳(伝仁徳陵)」?!)、そこでも、百済の王族が関わっていたこととなり(人質?として「倭国」に送られていた!)、これらの百済勢力が、どのように、その「二人の継体説」とつながってくるのか、その辺りも、当然視野に入れていかなければならない?!

要するに、ここに改めて、「二人の継体説」の真偽?、あるいは、その内実が問われてくるのであるが、それは、その二人の「継体」の真相が、果たしてどのようなものであったのかという、まことに複雑な難問(課題)を、改めて、我々に提示してくるということでもある?!

しかも、それは、「応神」や、その母「神功皇后(息長帯姫)」、さらには「武内宿禰」や「住吉大神」、そして何よりも「天日矛(ツヌガアラシト?!)」との関係を、その真実の中から見つけ出していかなければならないということでもある?!また、例の「倭の五王」(425~478年あたり)との関係もある?!とてつもなく困難な所業とならざるを得ないのも、当然といえば当然なのである?!

とは言え、そこに、「記紀」の作為(「藤原氏」や「秦氏」の思惑?)、すなわち「二人の『継体』の創出?」、そして、「九州から始まる『百済系勢力』の近畿移動(進出)の隠蔽?」の事実があるとなれば、私の「二つの倭国並立説?」も、改めて脚光を浴びるものとなってくる?!

大きくは、西側(北部九州)の動きと東側(近畿大和)の動きが、いかに「一本の束」として描けるかということであるが、その突破口(接点?)は、再度繰り返すように、「記紀」が最も敬意を払いながらも、一方で、その真実を可能な限り隠蔽しようとしている?、第15代天皇「応神」(4世紀末の百済残国兄王・藤→藤大臣?)にあることは言うまでもないということである?!

(4)かの「一元化」の過程に、新たな?「旧伽耶・新羅勢力」が入り込んでいる?!

①そう捉えれば、もうほとんどの?矛盾、不整合が解消される?!それは、何故か?!

ということで、(3)において、「筑紫倭国と大和倭国(+豊国倭国→日本国)の一元化」の事実、そして、特に第26代天皇「継体」に着目して、そこにおける『百済系勢力』の進出・政権の獲得?の真相?について述べてみたわけであるが(ただし、大枠でであるが?)、残念ながら、その過程における「神功皇后」

や「武内宿禰」等との関係については、今回もまた？、進展ある真相解明には至れなかった?!紙幅の関係も、もちろんあるが、実は、これについては、以前から？逡巡している（最終決断が出来ない？）ことがあるのである！

改めて、それは何かというと、その鍵を握っている（はずの?）「応神」が、実は、新たな?「旧伽耶・新羅勢力」の誰かということも、一方で、かなりの可能性を有しているのではないかということである?!

その主たる理由は、彼が、例の「宇佐神宮」の主祭神?である「八幡神」とされていること、そして、その「八幡神」が、これもまた実は、新羅（旧「辰韓」・「弁韓」?）の信仰神ではないかということである?!つまり、それは、かの「秦王国（豊前香春岳周辺）」に居住していた「新羅系渡来人←辰（秦）韓人?」、具体的には「息長氏」や「額賀^{つめ}が氏」、さらには「秦氏」あるいは「辛（韓?）島氏」（こちらの方が直接的!→宇佐神宮禰宜職!）がもたらした信仰であると思われるからである?!

それ故に、もし、そうであれば、他ならぬ「応神」は、そちら（新羅系）の誰かとも考えられるのであり、しかも、その「応神」の母親が、他ならぬ新羅系?の「神功皇后」（息長帯姫←辛国息長大姫大目命?）ということであれば、まさしく彼は、「新羅系」の天皇だということにもなるのである?!

したがって、上記の「秦王国」が、後の「豊国倭国」に移行し、ここで言う「筑紫倭国と大和倭国（+豊国倭国→日本国）の一元化」に関わっているのであれば、まさにそれはそれで、相応の整合性が得られることになるということでもあるのである?!しかしながら、そうなると、明らかに、これまで述べてきたような「百済系勢力（王族）」の移動・進出の話とは違った動き・流れが、そこにはあったということになり、その解釈が、本当に困ったことになるのである!

一体、どのように受け止めれば、それらの矛盾・不整合はなくなるのであろうか?!とは言え、これについては、一方で、例の「武内宿禰」あるいは「天日矛（ツヌガアラシト?!）」のことが気になっていたところであり、そのこの部分の解明が進めば、その矛盾・不整合の原因（からくり?）が明確となってくるということでもある?!

そこで、それに関わって?、現時点ではっきりしていることは、そこに、新たな?「旧伽耶・新羅勢力」（多分?「多羅」「高霊」あるいは「月氏国→辰王国」勢力?）が加わっているということである?!

すなわち、「記紀」では、「応神」期前後に、「天日矛」や「ツヌガアラシト」、さらには「弓月君（融通王）」や「阿知臣・都加臣」等の来日（渡来）話を数多く入れているわけであるが（前者の「天日矛」や「ツヌガアラシト」が、まさに「武内宿禰」や「住吉大神」等につながり、後者の「弓月君（融通王）」や「阿知臣・都加

臣」が、「秦氏」や「(東)漢氏」につながっていくのであるが!),彼らが、ここで言う「旧伽耶・新羅勢力」ということである?!

ということは、それらのことを、如何に受け止め、後の?「百済勢力」が、それらと如何に関わっていった(乗っ取っていった?)かを明確にしていくことが、その矛盾・不整合解決の道となるということである?!

②「筑紫倭国と大和倭国(+豊国倭国→日本国)の一元化」の動き・流れから、その真相?を追っていくと?!

そこで、以下、(3)の続きともなるが、改めて、件の「筑紫倭国と大和倭国(+豊国倭国→日本国)の一元化」の動き・流れから、それらの具体的な真相(事実?)を追っていくと、まずは、西側(北部九州)の動きであるが、例の「台与」以降、歴史の闇に消えていった?「邪馬台国」のその後(3世紀後半以降)はともかく、4世紀後半(364年)には、「貴(基肆→木・紀?)国」の存在が示されている?!

通説?では、それを、「(近畿大和)倭国」の尊称として捉え、北部九州(肥前)に出現していた新たな(別な)国?というようなことは、つゆも考えていないようであるが、「大善寺玉垂宮」を始めとする近辺(肥前・筑後)の状況(遺跡・伝承等)は、朝鮮半島南部、そして百済の勢力の進出を物語っている?!しかも、そこに、「応神」の母とされる「神功皇后」や「武内宿禰」のことを示す遺物・伝承等も多々あるのである?!

一方、東側(近畿大和)の動きであるが、こちらにも確実に、朝鮮半島南部、そして百済の勢力の進出を物語っている事物・伝承があるのである!

例えば、「百済系文物」の出現(百済系「須恵器」等)、さらには、河内潟?(大阪平野)の大掛かりな灌漑・治水及び、そのための技術の導入(「狭山人工池」、大堤の築造等)等が、その証拠であるが、これらが、まったく、上記のような西側(北部九州)の動きと無関係に行われたということは、地理関係的にも考えられず、一連の動き・流れ(同じ勢力・部族の移動・進出?)であったということの方が、極めて自然である?!

しかも、それらの動きを、かの有名な「武」の上表文(478年)と重ね合わせれば(祖先達の「東へ、西へ、そして北への奔走・苦労話→版図の拡大や移動・進出の様相?!)),彼らが、まさに「百済系勢力」の移動・進出→政権の獲得?を意味していることは、容易に考えられ得ることである?!

ただし、そこには、一つの?重要な真実が、一方では隠されてもいる?!それが、まさに「神功皇后」や「武内宿禰」等のことである?!端的に言うと(まだ類推の域を超えないが?),「九州倭国」にしろ、「近畿大和倭国」にしろ、「邪馬台国」以降、あるいは、最初の「纏向政権」以降、それぞれの地域において、新たな(別な?)勢力・部族の渡来が続き、彼らの各地への移動・進出によっ

て、まさに「全国的規模で」、著しい混乱や新秩序の形成があり（だからこそ？中国への遣使等もしなかった？出来なかった？）、いわゆる「空白の4世紀」、さらには「謎の5世紀」とされるような状況が続いたということである？！

すなわち、そこでは、まずは、「天日矛」や「ツヌガアラシト」、あるいは「弓月君（融通王）」や「阿知臣・都加臣」等の来日（渡来）話としてあるように、その後「統一新羅」となっていく「旧伽耶／弁韓（辰）」地域や「辰韓→新羅」地域から、半島情勢の不安・危険（「高句麗」の南下策等による！）や政治的不満を抱いた人々が、大挙して列島各地に移動してきた？！

彼らは、逸早く列島に移り住んでいた同族（多分「鍛冶・鉾山」関係の勢力・部族？その集積地が北部九州豊前地域！）を頼ったり、同化していったりした？！その中で、北西部（肥前）に移動・進出してきたのが、おそらく「多羅系」の人々であり（→葛城諸族）、その象徴？が「神功皇后」「武内宿禰」であった（364年？「木・紀・基肆国→貴国」？）？！

その後、百済（←馬韓）の方からも、同じように（この場合は、特に「高句麗」による「亡国」の憂き目に遭った「本宗家沸流系百済」→第一次「百済滅亡」396年？）、列島各地に人々が渡来・進出してきた？！その百済系勢力の中心が、「応神」のモデルと目される「残国兄王→藤→藤大臣？」であり、おそらく「神功皇后」「武内宿禰」勢力がつくった「木・紀・基肆国」を乗っ取り、そこを拠点として全国展開していった？！

③ とんでもなく「大胆不敵な？」着想が、そこに生まれた？！「応神」は、「百済系勢力」と「新羅系（旧伽耶系？）勢力」の「複合王（仮構）」である？！

まだまだ精緻な接近と言い難いが、とにかく、上記二つの勢力・部族の渡来・進出の事実を、いかに矛盾・不整合なく受け入れられるかということであるが、このことは、他ならぬ、「記紀」を編纂した「持統・藤原政権」にとっても、かなりの難題？であったことであろう？！何故なら、彼らは、揺るがぬ事実として、先発？の「旧伽耶・新羅勢力」から政権（王権？）を奪取し（しかも、巧妙かつ悪辣な？手段を使って？）、その基盤の上に立って頂点を極めていたからである？！

そこで考えたのが、その「旧伽耶・新羅勢力」と自らの「百済勢力」を複合させた？、新たな（事実上の？）「始祖王」の案出であり、その始祖王から、現在（当時）までの皇統譜が、曲がりなりにも一連のものであったという虚構の創出であった？！その鍵となる結節点（人物関係）が、まさに「神功皇后」と「応神」の親子関係ということになる？！

しかも、その妙案？には、おそらく「息長氏」や「秦氏」も、秘かに同意していたものと思われる？！否、ひょっとしたら、それは、ある種の共存共栄？を求める「秦氏」の入れ知恵？だったのかもしれない？！そのように演出？すれば、

どちらの勢力・氏族の顔も立つからである?!

ということで、「記紀編纂側（百済側）」は、「応神」という架空の天皇、そして、「実質的な始祖王」を創出することによって、事実上は、「新羅（旧伽耶?）勢力」の国であった「秦王国→（「貴ノ木ノ基肆国」→）豊国倭国→大和倭国」の政権（皇統?）を奪取していったことを、後から来た「百済系勢力（王族）」（藤→藤大臣）が、その「応神」という天皇にすり替わるという「からくり?」によって、辻褄を合せ（隠蔽し?）ようとしたということである?! そう考えたら、件の「私の逡巡?」も、大いに解決出来るということでもある?!

要は、「応神」は、ある時期（4世紀前半?）の「百済系勢力」と「新羅（旧伽耶?）勢力」との、ある意味妥協?の産物として生み出されたということであるが、しかし、それは、史実としては、まさにそういう状況であったということでもある?!

だが、それは、物語的には複合され得ても、実際には、それら二つの勢力は、様々な動き・流れをつくり、それらが、それぞれの事績、伝承として、その痕跡、事物を残していることは言うまでもない?! だから、その解釈が難しいのもある?! ちなみに、それに関わっては、ある絶妙な?「材料（試薬?）」がある?! それは、例の「神功皇后の新羅征伐?」の逸話であるが（実際に、そうしたものがあつたかどうかは疑わしい?）、彼女が、何故その時に、お腹にいる「応神（胎中天皇）」と呼ばれる所以である!）を連れて新羅に向かったのか?

普通なら、そんな身重の体（臨月）で、しかも、下腹部に石を巻いて（出産を遅らせて!）まで海外遠征に行くはずもない! その必然性や火急性も、まったくくない?! であれば、これは、生まれてくる?「応神」が、新羅（の神）と関わりのある人物だということを、寓話的に示そうとしたものである?! ということである?!

しかも、その遠征は、「神功皇后」の神懸かり的な行動（活躍?）で、敵国?「新羅」を降参させたことになっているが、「記紀」の立場（百済側）からすれば、「新羅」は、自国を滅ぼした張本人なので、たとえ「物語」であっても（それだからこそなおさら?）、その恨み、鬱憤を晴らそうとしたとも考えられる（考え過ぎかもしれないが、かなりの蓋然性はある?）?!

その証拠?として、「住吉大神」から神託を得たという、「金銀財宝の国・新羅の成敗」を行つたからといって、実質的には、その成果・見返りはまったくなかった?! これもまた、誠に不思議なことではないか?!

(5)「倭の五王」（特に、その「爵号／軍号」）に見る、百済、新羅、伽耶（任那?）との関係?!

①普通では考えられない?他国（海の向こう）の「軍事支配権?」の要求?!

次も、これまで述べてきたことと直結すると思われるが、例の「倭の五王」

(讃・珍・済・興・武)の正体(血筋・皇統?)と、その位置づけについてである?!

と言うのも、彼らは、4世紀末から、中国の史書(『宋書』等)に登場する(395～515年?)実在の王達であるが、どこに居て(皇都?を置いて)、どこの王族・勢力に属するのかは、実はまだ、明確に特定されているわけではないということである(ちなみに、皇都?については、私の場合は、件の「(筑紫)倭国」と考えている!だが、彼らの活躍(居住)の場所が、そこに限定されるわけでは決していない!)?!

とにかく、通説では、彼らは、もちろん?(近畿大和の)倭国王で、件の「応神」または「仁徳」から始まる、いわゆる「河内王朝」の諸天皇に比定されているが、例えば、「記紀」に示されている、それらの諸天皇の即位年とか、死亡年、あるいは親子関係等とかが、「倭の五王」とは、かなりの?不整合なのである?!

なかでも、第21代天皇「雄略」は、その「倭の五王」最後の「武」とされているが(時代的に近似している?)、その治績・行状等が、『宋書』に示されている「武」とは、ほとんど?かけ離れているのである(しかし、彼の「大泊瀬幼武おおはつせわかたけ尊」という名が、その「武」に相応するという根拠?で、あたかも定説のように比定されている?)?!

とは言え、ここでは、それらの「天皇」と「倭の五王」との、改めての同定作業を考えているわけではない(材料的にも、もちろん能力的にも無理である!)?!

しかし、一つだけ、今の私にも挑戦?出来そうなことは、かの「倭の五王」が、「宋」等(中国南朝系)に対して行った除正(「爵号/軍号」の賜与)の要求と、それに対して、「宋」等が行った、実際の「除正」の事実を見つめ直し?、その時の「倭(王達)」が、「宋」等にどのように見られて(評価されて)いたのか?そしてまた、そこにおいて、「倭(王達)」が、隣国?、すなわち「百済」「新羅」「伽耶(加羅)」等の諸国・地域を、どのように見ていたのか?それらを、再検討(確認?)することである?!

換言すれば、そこでは、彼らの「爵号/軍号」が、双方で、どのように押し問答?されていたかということである!

ただし、その前に、そもそも海を隔てた島国「倭国→日本」が、どうして、そのような、別の主権国家(地域)?である、(海の向こうの!)半島諸国の「軍事支配権?」までをも要求できたのかという、まさに普通では考えられない?、単純な(素朴な?)疑問も、まずは確認しておく必要があるであろう?!

それについては、当時の「倭国」が強大であり、たとえ大海を挟んでいても、それぞれの国・地域に大きな影響力をもっていたので、そのこと自体は不自然ではない(当然のこと?)と思われてきたようでもあるが、自国及び、際どい隣

接立地にある国ならともかく、「高句麗」以外の国・地域全体を、その対象に要求する（ことが出来る！）ということは、よほどの自信（過信→奢り？）か、あるいは、それなりの根拠（歴史？）がなければあり得ないわけである？！

しかも、その根拠（歴史？）にしても、「自称」（主張）は出来ても（優遇してもらっているという？、「朝貢国（冊封国？）」としての甘えや演技？が、そこに入り込んでいたのかもしれないが？）、かの「中華帝国？（「宋」等）」が、何の根拠（事実、あるいは思惑、メリット？）もなしに、それに応えるはずもない？！

実際、「百済」に関しては、そのことははっきりしている！すなわち、それについては、当時の「倭国」よりも先に、その「百済」（この場合は、遼東？の「仇台系百済」！）が冊封関係を結んでいたの（→「鎮東將軍・楽浪太守」）、「（中華帝国？）宋」側も、そうやすやすと、「倭国」の主張（要求）を受け入れるわけにはいかなかったというようなことである（←兼川晋氏）？！

② 改めて、結局は認められなかった「百済」への「軍事支配権？」?!そこには、どのような経緯があったのか？！

ということで、「爵号」はともかく、他の諸国・地域への「軍事支配権？（軍号）」が、どの時期（王）でも、一応は、主張通りに認められているようではあるが、まずは、こと「百済」に関しては、最初（の「讃」）から要求はしてはいても（倭百済新羅任那秦韓慕韓六国諸軍事・安東大將軍？）、結局は、最後の「武」まで、完全に拒否されている（使持節・都督倭百済新羅任那加羅秦韓慕韓七国諸軍事・安東大將軍倭国王→「倭新羅…慕韓六国」）ということである！

ただし、その「爵号（位）」は、要求のしつこさもあってか？、それなりに上げられてはいる！とりわけ、最後の「武」の「爵号（位）」（使持節・都督倭新羅任那加羅秦韓慕韓六国諸軍事・安東大將軍）は、かなりのものであった！

だが、いずれにしても、そこには、「互いにとって」一つだけ、おそらく扱いのレベル（評価の観点？）が違う「百済」があったということだけは、多分間違いないであろう？！

これは、見方を変えれば、当時の「倭国（王達）」側が、「百済」に対して強硬かつ執拗に（無視 or 拒絶されることが分かっているが？）、その軍事支配権？を主張し続けてきたということであり、そこには、やはり「何らかの確たる根拠（事実）」があった！ということしか考えられないのである？！

「百済系倭国（王達）」の出現？を、まったく考えていない人達には、こんな突拍子もない疑問？など出て来るはずもないであろうが、今の私からすれば、その間の人物比定（天皇同定）と同じように（否、むしろそれ以上に？）、この問題は大きいものとなるのである？！それが、どういうことであったのかということが、改めて明確にされる必要があるということである？！

結論から言えば、それは、これまで述べてきたような百済勢力（王族→宗家沸

流系余氏)の倭国進出(奪取?)、そしてまた、その後の、新たな?「百済系倭国」の展開(温祇系余氏→仇台系余(→牟)氏)ということがあったわけであるが、時の「倭の五王(達)」は、まさに、その百済系倭国の創始者達であり、その流れ・関係を根拠(楯?)に、「本国?百済」の軍事支配権?を主張し続けたということである(ある意味、そうであれば当然かもしれない?)?!

このように考えれば(実際、これ以外の根拠はないであろう?)、ここで言う「倭の五王」と「百済」、そして「新羅」「伽耶(任那?)」等との関係も、改めて見えてくるであろう?!

しかるに、「百済」との関係については、これまでも縷々述べてきたので、ここでは、残り?の諸国・地域についても、改めて言及しておきたい!繰り返すように、ここでも、何の根拠(事実?)もなく、その国・地域の「軍事支配権?」を要求するとは考えられず?、しかも、この場合は、それが、宗主国(「(中華帝国?)宋」)にも承認されているということでもあるので、やはり、そのための経緯(事実)や力関係があったということではある?!

例えば、「新羅」は、もともと「辰(秦)韓」の出(一国)であり、「神功皇后」や「武内宿禰」等のことを持ち出すまでもなく、「豊国倭国(豊前)」の人々の故地であり、「天日矛(ツヌガアラシト?)」の出発地でもあった!また、「秦氏」や「漢氏」のような渡来系氏族の、元居た「母国?」でもあった!

さらに、「任那」や「加羅(伽耶)」においては、初期大和王権(饒速日→物部?→「崇神」勢力!)の人々の故地でもあり、「魏志倭人伝」にもあるように、もともとそれらは、「(筑紫)倭国」の一部(とりわけ「狗邪韓国(金官伽耶国)」)を成していた国・地域である?!

「慕韓」については、それは「馬韓」であり、「百済」本国はともかく、その、その他の国・地域は、同じ「百済系」の同族(仲間?)であったことは言うまでもない?!

③ ここからも、「倭国→日本国」は、朝鮮半島南部の諸勢力の渡来によって成就されたことが分かる?!

ところで、以上のように、これらの国・地域の軍事支配権?を、「倭の五王(達)」が主張し、それを、「(中華帝国?)宋」等が認めたことは、ある意味?自然の成り行きでもあったということであるが、そうは言っても、ただ単に、それらの国・地域と関わりがあった(故地あるいは由縁があった?)ということだけでは、事はそう簡単にはいかないであろう?!

つまり、その「倭の五王(達)」には、それらの国・地域の軍事支配権?を、言わば「正当に?(あくまでも自分達の方からすれば!)」主張できる何か(根拠)があったということである?!

もちろん、それが、具体的に何であったのかという証明?は、今の私には到

底出来ないが、それを、例の「武」が、「宋」への上表文で奏上したという、「封国は偏遠にして藩を外に作す。昔より祖禰^{そでい}躬ら甲冑を擐^はつらぬき、山川を跋涉し寧処に違^{いとま}あらず。東に毛人を征すること五十五国、西に衆夷を服すること六十六国、渡りて海北を平ぐること九十五国…」(兼川晋氏)という史実？と結びつけて、その類推を行うことは出来る？!

ただし、ここでも、残念ながら、それらの国々の具体が判明しているわけではない?!しかし、少なくとも、その「渡りて海北を平ぐること九十五国…」は、爵号／軍号に示されている「新羅任那加羅秦韓慕韓」の国々・地域であったろうことは、想像に難くなく、しかも、「平ぐること」ということであれば、その国々・地域を、たとえ一時的にしろ、支配（占領）し、その領属を、内外に示したことがあるということでもある?!

このように、ここで述べてきている「百済系王族（勢力）」による「倭国→日本国」の成就是、上記のような朝鮮半島南部の国々・地域を抱き込んでなされたものであることが分かる？わけであるが、それらの史実？が、すべて時の政権「倭の五王（達）」が、短期間に、しかも一挙に為したのではなく、それまでの、その時々々の勢力・氏族の活躍（政権）を、言わば「包括的に」示した（誇示した）ものと考えの方が、ある意味？妥当ではあろう?!

何故なら、その間を示す「記紀」の記述が、そうした輝かしい？歴史（実績？）を有する祖先と同じ「百済系勢力（王族）」が為したものでありながら、暈したり、はぐらかしたりしている部分が多いからである?!

ならば、何故、「武」が、そのような、ある意味の「大言壮語？」を、「宋」に対して為したのかであるが、「高句麗」との度重なる戦闘・武力衝突の中で（←「好太王碑文」）、その国威（武力？）が、たとえそれほど高くはなかったにしろ（実は、彼は、ほとんど期待？はしていなかった？その証拠に、最初で最後の遣使を境にして、その後、ぶつつりと交流を断っている!）、一応は、「中華帝国？宋」に対して、助力を得ようとしたからであろう?!そのため、自国の誇示も、必要以上に？行った?!そのようにも、考えられる?!

したがって、これも、「応神」の存在（扱い？）とも関わってくるのであるが、その時に（「倭の五王」時代）、「新羅系（旧伽耶勢力を含む!）」と「百済系」が、当初は協力・和合したが、その後離反の形が出来上がり（最初「新羅系」がリードし、その後「百済系」が、それを略奪？していった?）、実は、そのことが、「神功皇后」「武内宿禰」、そして「応神（そのモデル or すり替わりが、百済残国兄王／勝）」の物語？となっているのである?!

余談（遊び心？）ではあるが、件の「倭の五王」最後の「武」であるが、『宋書』？では「倭武」とも表現されている（他にも、「倭讚」とか「倭旨」「倭墮」というような人物表記もある!）?!その存在主張（実績？）と評価の高さ？を見る

と、これが、例の「ヤマトタケル（日本武尊／倭建命）」の着想（とても実在とは思われない？）につながっているとすることは、まんざら絵空事？でもないような気もする?!

また、後の「源平合戦」で見られた、「平氏が赤」（太陽神→百済?）、「源氏が白」（八幡神→新羅?）という構図は、ひょっとすると、そのルーツが、当時あった「百済」と「新羅（伽耶地域を含む!）」の関係にあるとしたら、説明がつくし、現代の「紅白合戦」という形が、本来は、その構図を引き摺っているのかもしれない?!そんなことさえ、ここでは思う次第である?!

7. 参考図及び参考文献

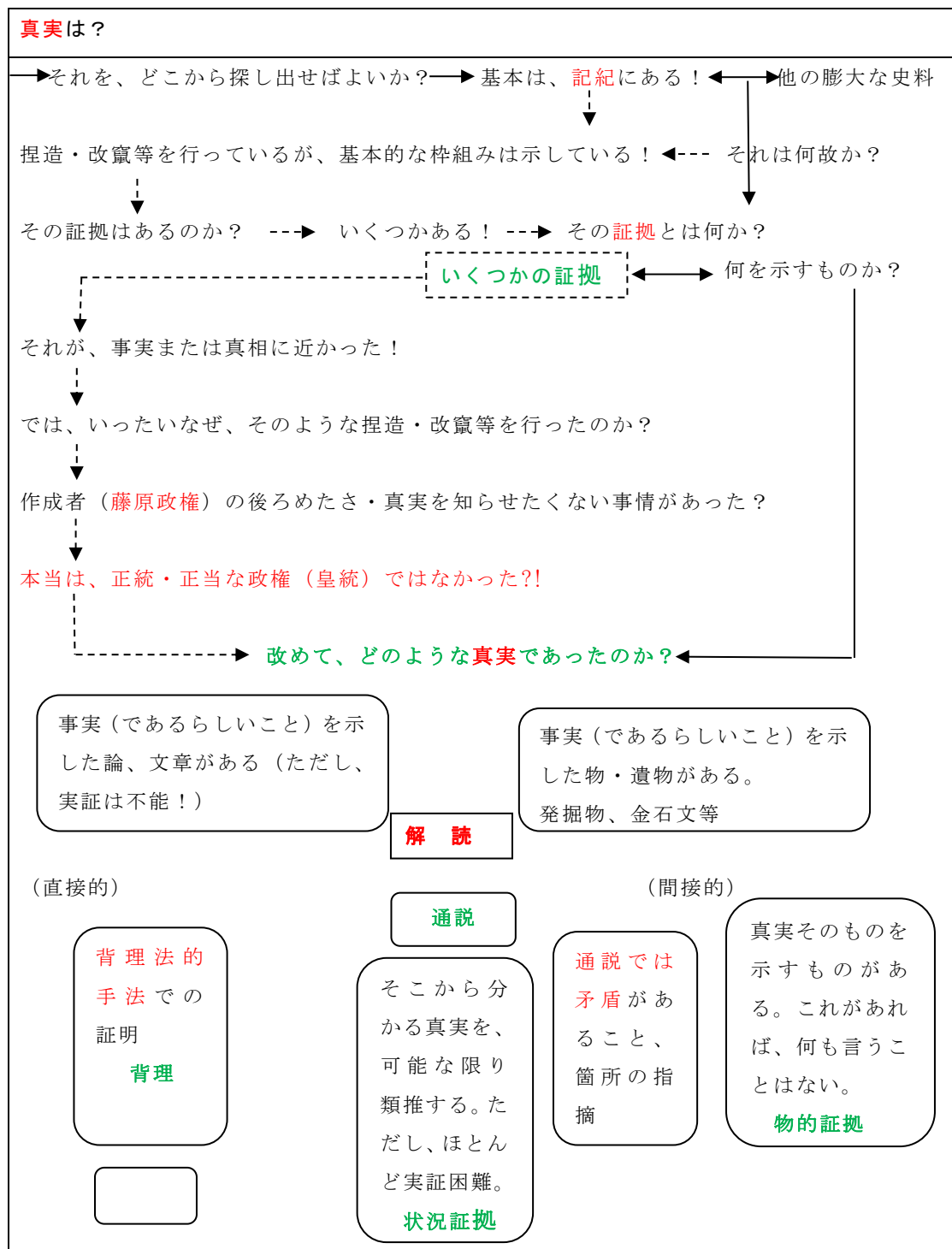


図3 古代史解明の手法と手順

<参考文献>

- ① 関裕二『新史論／書き替えられた古代史』（①～⑤）小学館、2013年～2016年

※同氏の著作は膨大であるので（掲載不能！）、ここでは近年のまとめ的な著作を代表させていただいている。

- ② 斎藤忠『あざむかれた王朝交代 日本建国の謎』／『盗まれた日本建国の謎』／『消された日本建国の謎』学研パブリッシング、2011年／2012年／2013年
- ③ 兼川 晋『百済の王統と日本の古代 <半島>と<列島>の相互越境史』不知火書房、2009年
- ④ 石井進・笠原一男・児玉幸多・笹山晴生『詳説 日本史』山川出版、1999年
- ⑤ 埴原和郎「日本人の形成」『日本列島と人類社会』（岩波講座 日本通史第1巻）岩波書店、1993年
- ⑥ 直木孝次郎「特別試論 『古事記』『日本書紀』の成立過程」『別冊歴史読本 『古事記』『日本書紀』の謎』新人物往来社、1995年
- ⑧ 林順治『応神＝ヤマトタケルは朝鮮人だった 異説日本国家の起源』河出書房新社、2009年（←石渡信一郎説に依拠）
- ⑨ 菊池秀夫『邪馬台国と狗奴国と鉄』彩流社、2010年
- ⑩ 栗本慎一郎『栗本慎一郎の全世界史-経済人類学が導いた生命論としての歴史-』技術評論社、2013年
- ⑪ 龜山勝『安曇族と徐福 弥生時代を創りあげた人たち』龍鳳書房、2016年
- ⑫ 吉留路樹『倭国ここに在り』葦書房、1991年
- ⑬ 吉田一彦『「日本書紀」の呪縛（シリーズ<本と日本史①>）』集英社、2016年
- ⑭ 正木裕「『近江朝年号』の研究」『失われた倭国年号<<大和朝廷以前>>（古田史学論集『古代に真実を求めて』第二十集）』明石書店、2017年
- ⑮ 藤井耕一郎『タケミカヅチの正体 オミ姓氏族対ムラジ姓氏族』河出書房新社、2017年
- ⑯ 宝賀寿夫『古代氏族の研究⑬天皇氏族-天孫族の来た道』青垣出版、2018年
- ⑰ 宮島正人『「倭」の神々と邪馬台国 志賀島・宗像・八女』海鳥社、2018年
- ⑱ 関裕二『古代史 不都合な真実 12の古代文書が暴く「日本書紀」の嘘』実業之日本社、2018年／『神武天皇 vs. 卑弥呼 ヤマト建国を推理する』新潮社、2018年
- ⑲ 斎藤・関野・片山・武光 他『大論争 日本人の起源』宝島社、2019年

- ⑳ 「鴨着く島」 (kamodoku.dee.cc)
- ㉑ 「『勘注系図』の研究」 (kodai.sakura.ne.jp)
- ㉒ 「倭国通史」 (www.geocities.jp)